

愛知淑徳大学大学院文化創造研究科 博士（文学）学位請求論文

# 『源氏物語』現代語訳の研究

博士後期課程三年 佐藤 由佳

指導 久保 朝孝 教授

提出 二〇二〇年一〇月八日

『源氏物語』現代語訳の研究

# 目次

序 . . . . . 1

第一部 『源氏物語』現代語訳書誌集成

凡例 . . . . . 5

第一章 〈完訳〉編 . . . . . 7

與謝野晶子 (与謝野晶子)

吉澤義則

谷崎潤一郎

窪田空穂

佐成謙太郎

玉上琢彌

円地文子

今泉忠義

おのりきぞう

秋山虔

中田武司

中井和子

瀬戸内寂聴

尾崎左永子

大塚ひかり

上野榮子

林望

荻原規子

小林千草・千草子

中野幸一

角田光代

第二章 〈全訳〉編 . . . . . 99

窪田空穂

與謝野晶子

沼澤龍雄ほか

五十嵐力

吉沢義則・加藤順三・宮田和一郎・島田退蔵

佐藤定義

第三章 〈抄訳〉編 . . . . . 108

宮田和一郎

舟橋聖一  
規工川佑輔  
瀬戸内寂聴  
岩佐美代子

#### 第四章

〈意識〉編

..... 115

吉井勇

鈴木正彦

河原萬吉・和田萬吉

長柄忠子

山口愛川

最上哲夫

島津久基

木俣修

高木卓

村山リウ

福田清人

田辺幸雄

塩田良平

田辺聖子

円地文子

瀬戸内寂聴

島村洋子

中井和子

西窪君子

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男

#### 第五章

〈翻案〉編

..... 147

吉屋信子

川口松太郎

田辺聖子

橋本治

瀬戸内寂聴

浜村淳

由良弥生

高山由紀子

林真理子

越水利江子

石井睦美

#### 第六章

〈その他〉編

..... 165

時海結衣

佐復秀樹  
毬矢まりえ・森山恵

【閲覧文献一覽】	168
残された課題	172

第二部 『源氏物語』現代語訳の比較検討―〈完訳〉を対象として―

第一章 現代語〈完訳〉比較検討の方法	174
--------------------	-----

第二章 依拠本文および訳文の特質	175
------------------	-----

與謝野晶子  
吉澤義則  
谷崎潤一郎  
窪田空穂  
佐成謙太郎  
玉上琢彌  
円地文子  
今泉忠義  
おのりきぞう  
秋山虔  
中田武司  
中井和子  
瀬戸内寂聴  
尾崎左永子  
大塚ひかり  
上野榮子  
林望  
萩原規子  
小林千草・千草子  
中野幸一  
角田光代

第三章 「桐壺」巻頭部にみる各現代語訳の評価	293
------------------------	-----

與謝野晶子  
吉澤義則  
谷崎潤一郎  
窪田空穂  
佐成謙太郎  
玉上琢彌

円地文子  
 今泉忠義  
 おのりきぞう  
 秋山虔  
 中田武司  
 中井和子  
 瀬戸内寂聴  
 尾崎左永子  
 大塚ひかり  
 上野榮子  
 林望  
 荻原規子  
 小林千草・千草子  
 中野幸一  
 角田光代

**第三部 与謝野晶子による『源氏物語』現代語訳**

**第一章 与謝野晶子による二つの現代語訳 …… 307**

第一節 『新譯源氏物語』の概要

第二節 『新新譯源氏物語』の概要

第三節 『新譯源氏物語』の意義

**第二章 『新譯源氏物語』の刊行 …… 314**

第一節 『新譯源氏物語』の出版の動機および経緯

第二節 『新譯源氏物語』の訳出文字数の量的比較

第三節 『新譯源氏物語』「下巻の二」の訳出割合増加の意味

**第三章 『新譯源氏物語』の文体の成立 …… 320**

第一節 はじめに

第二節 『新譯源氏物語』「桐壺」巻頭部の特質

第三節 同時代の文学作品との文体比較

一、比較対象

二、女性作家  
①長谷川時雨

②森しげ

三、男性作家

①永井荷風

②有島武郎

第四節 明治期の翻訳文学作品との文体比較

一、比較対象

二、女性による翻訳作品	
①若松賤子	
②瀬沼夏葉	
三、男性による翻訳作品	
①森鷗外	
②上田敏	
第五節 翻訳作品と『新譯源氏物語』の文体	
一、九人の翻訳と現代語訳と比較	
二、森鷗外と上田敏	
三、晶子の創作姿勢	
四、『新譯源氏物語』の文体	

#### 第四部 『源氏物語』現代語訳の限界と可能性―まとめに代えて―

第一章 『源氏物語』現代語訳の限界	342
第二章 『源氏物語』現代語訳の可能性	
第一節 〈試み〉の意図および方法	344
第二節 「御法」巻の現代語訳	
跋	374

※本稿中における各種資料の引用に際しては、可能な限り原典の用字および表記を尊重したが、一部の漢字については、新字体に改めざるを得なかった。



# 序

日本の古典文学を代表する『源氏物語』は、一〇〇〇年という長い期間にわたり読み継がれてきた。古く、紙は貴重品であった。その高価な紙に書写され、多くの読者を獲得しながら今に至っている作品である。一〇〇〇年もの間、人々に親しまれ、読み継がれてきた理由は何であろうか。簡潔にひと言でいってしまえば、それは「おもしろい」からだ。

しかし、生活様式ひとつをとってみても現代とは大きくかけ離れたこの物語に、なぜこんなにも人々は魅了されるのであろうか。その理由の根源に、生活様式や社会環境が違っても、「人の心」は一〇〇〇年前も現代も変わらないということがあるのではないだろうか。『源氏物語』の魅力のひとつはここにあると思う。

一〇〇〇年前と大きく変わったこともある。そのひとつは、日本語の変化である。

現代語訳といわれるものが広く流布するのは、近代に入ってからである。ここに、古典の時代（古代→近世）と近・現代との言語上の大きな懸隔を見ることが出来る。『源氏物語』の成立（一世紀初頭）以降、様々なレベルの注釈を必要としながらも、近世末に至るまで、人々は曲がりなりにもこの作品を原文で読めていたのである。平安朝の古典文学が原文で読めなくなる時代、それが近代であった。近代は、古典の現代語訳を必要としていた。そして、与謝野晶子の『新譯源氏物語』がその嚆矢であった。

それ以降、男女の別も問わず、作家や国文学研究者をはじめとしてさまざまな人々の手により、また、さまざまな意図のもと現代語訳が試みられている。さらに、『源氏物語』五十四帖を最初からすべて現代語訳するものではなく、意訳や、『源氏物語』を題材とした創作作品など、さまざまな形態により『源氏物語』の現代語化が図られている。

本論文は、明治四五年に与謝野晶子の『新譯源氏物語』が刊行されて以降、現代に至るまでの『源氏物語』現代語訳の変遷をたどり、それらの現代語訳の比較検討をおこない、それぞれの特徴を明らかにし、その問題点をあぶりだす。その結果をもとに、今後の現代語訳の在り方について実践を交えて考察することとする。

第一部では、与謝野晶子による『新譯源氏物語』以降現代に至るまでの『源氏物語』現代語訳の書誌について調査、集成した。現代語訳は、その内容により六つに分類した。

〈完訳〉編・・・原文に概ね忠実であり、同一人により五十四帖すべての帖を口語体で訳しているもの。「目次」などにおいて、五十四帖すべての帖名が掲出されていることを基本条件とする。

〈全訳〉編・・・原文に概ね忠実であり、五十四帖すべての帖を口語体で完訳しようとして試みているが、諸事情により、途中で断絶してしまったもの。または、完訳は成し遂げているが、諸事情により、五十四帖すべての訳業を単一訳者により完遂できなかったもの。もしくは、当初から複数人による分担訳業が企図されたもの。

〈抄訳〉編・・・五十四帖中の限定された帖について、原文に概ね忠実に口語体で訳しているもの。または、五十四帖中の要所と考えられる部分について、原文に概ね忠実に口語体で訳しているもの。原文を掲載し、その部分について原文に概ね忠実に口語体で訳しているものを含む。これら基準に当てはまっていれば、一部に〈意訳〉的な部分を含んでいる場合であっても〈抄訳〉として扱う。

〈意訳〉編・・・原文の一語一句にとらわれることなく、物語のあらすじをたどり、かつ作品の独自性を知り得るように、訳者の解釈と鑑賞とを自在に駆使しつつ口語体で訳したもの。ここには、正編のみ、宇治十帖のみなど、大別したその一方のものも含む。

〈翻案〉編・・・『源氏物語』を典拠とし二次的創作ながら、原作のおもかげを十分に

とどめている口語体による文学作品。

〈その他〉編・・・以上の五分類には該当しないが、『源氏物語』現代語訳を考える上で、見逃すことができないと思われる口語体による作品。

第二部では、第一部で作成した『源氏物語』現代語訳書誌集成をもとに、そこで〈完訳〉として掲出した二人の現代語訳について考察する。その際、訳者が現代語訳をするにあたって使用したであろうテキストすなわち依拠本文を可能な限り明らかにしたい。また、「桐壺」巻頭部の詳細な比較検討により、各現代語訳の特質を明らかにする。なお、「桐壺」巻頭部を対象にした理由は、冒頭の重要性和各訳者が現代語訳するにあたって自身でたてた基準に対し、一般的に最も厳密になるであろうと思われるからである。

第三部では、『新譯源氏物語』と『新新譯源氏物語』という二回の現代語訳をおこなった与謝野晶子に着目する。二回におよぶ訳業の功績は大きい。しかし、それ以上に、何といっても未だかつてだれも成し遂げていなかった口語体による『源氏物語』の現代語訳（『新譯源氏物語』の訳業を成し遂げたことにその偉大さが見出させる）。

その『新譯源氏物語』の成立事情を明確にするとともに、訳出文字数に着目し、全三巻四冊のうちの「下巻の二」の訳出文字数増加の理由を探る。さらに、前人未到の口語体による『源氏物語』現代語訳（『新譯源氏物語』）の文体が生み出された要因について、当時の文学作品の文体との比較によって考察する。

第四部では、第三部までの調査、比較検討、考察をもとに、『源氏物語』現代語訳の問題点をあぶりだし、これから先を見据えた現代語訳の可能性について考察する。続いて、その具体例として、『源氏物語』「御法」巻について自らが現代語訳を試みる。

第一部 『源氏物語』 現代語訳書誌集成

第一部は、

〈新典社研究叢書〉 331 『源氏物語 現代語訳書誌集成』

(二〇二〇年九月／ISBN 978-4-7879-4331-6) として、新典社より書籍化された。

第二部

『源氏物語』

現代語訳の比較検討

—〈完訳〉を対象として—

## 第一章 現代語〈完訳〉比較検討の方法

本項では、第一部に掲げた『源氏物語』現代語訳書誌集成」に基づき、一般読者向けに〈完訳〉された『源氏物語』の現代語訳について、それぞれの特質を明らかにする。まず「一、訳者の略歴」「二、書誌」「三、「桐壺」巻頭部」の訳文を掲げる。

その上で「四、訳文の検討」を行うが、その際は、はじめにそれぞれの訳者が典拠としたであろう依拠本文について検討することとしたい（「1、依拠本文」）。現代語訳とは言いながら、これが明示されないことが少なくなく、不明のままとなっているものも二、三にとどまらない。言うまでもなく、訳者が依拠本文について記していない場合は、その周辺資料から推察することになる。

各訳文の特質は無論全文を通して検討されるべきものであるが、本稿では比較検討箇所を、「桐壺」巻頭部」に絞り込む。その理由は、訳者が訳出基準を設け、その基準に最も忠実であろうとするのが冒頭部であると考えられるからである。訳文の特質を明らかにするにあたっては、比較の基準を『源氏物語大成』（池田亀鑑『源氏物語大成 卷一』『校異篇』昭和二十八年六月二五日 中央公論社）とし、仮に、これを原文として扱うこととする（「2、「桐壺」巻頭部の特質」）。その上で、次の点について比較することにより、その訳文の特質をあぶりだしてみたい。

- 一、文字数
- 二、文の数
- 三、漢字の使用
- 四、敬語の使用
- 五、文脈
- 六、文体
- 七、『大成』には見られず当該書のみに見られる用語・表現等の存在
- 八、『大成』にはありながら当該書に訳出されていない用語・表現等の存在
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

## 第二章 依拠本文および訳文の特質

與謝野晶子

### 一、訳者の略歴

歌人、詩人、作家、評論家。明治十一年二月七日、大阪府堺市に誕生。堺女学校補習科卒業。明治二十九年「堺敷島会歌集」に短歌を発表。「明星」にも短歌を寄稿。明治三十四年に与謝野鉄幹と結婚。六男六女をもうける。

小林天眠の依頼によりすでに「源氏物語講義」の執筆中であつたが、金尾文淵堂の金尾種次郎からの依頼で、『源氏物語』の現代語訳に取り組み『新譯源氏物語』を刊行。その後、関東大震災にみまわれ「源氏物語講義」の原稿の大半を焼失。しかし、再度現代語訳に取り組み、『新譯源氏物語』を刊行。古典作品の現代語訳には、『新譯榮華物語』、『新譯紫式部日記・新譯和泉式部日記』、『新譯徒然草』がある。

その他、歌集『みだれ髪』・『小扇』・『青海波』・『火の鳥』、詩歌集『恋衣』・『夏より秋へ』、小説『明るみへ』、童話『八つの夜』・『金魚のお使』・『うねうね川』、評論集『若き友へ』・『街頭に送る』などの作品がある。昭和十七年五月二十九日没。

### 二、書誌

『新譯源氏物語』全三卷四冊。金尾文淵堂。

「上巻」	(桐壺く乙女)	明治四五年	二月一日	四六一頁
「中巻」	(玉鬢く夕霧)	明治四五年	六月二五日	九二二頁
「下巻の一」	(御法く寄生)	大正二年	八月二一日	一三五八頁
「下巻の二」	(東屋く夢の浮橋)	大正二年一月三日		一八一九頁

『新新譯源氏物語』全六卷。金尾文淵堂。

「第一卷」	(桐壺く葵)	昭和十三年一〇月二一日		五一九頁
「第二卷」	(榊く朝顔)	昭和十三年一月二一日		四八一頁
「第三卷」	(乙女く藤のうら葉)	昭和十三年二月二一日		五二七頁
「第四卷」	(若菜上く夕霧)	昭和十四年二月一一日		五〇九頁
「第五卷」	(夕霧(二)く總角)	昭和十四年六月三〇日		五三一頁
「第六卷」	(早蕨く夢の浮橋)	昭和十四年九月二一日		六八一頁

本稿においては、同一人が複数回現代語訳している場合は、その中で代表的なものを対象とすることとしたが、与謝野晶子を例外とする。

与謝野晶子は、『新譯源氏物語』と『新新譯源氏物語』との二種の現代語訳を刊行しているが、『新譯源氏物語』については、口語体で現代語訳された最初の作品であり、今も入手可能な文庫本が刊行されている点でその意義は大きい。一方、『新新譯源氏物語』は単行本のほか、文学全集にも多く収められている点で多くの読者を獲得したであろう。また、この



二作品は本文内容が大きく異なっているのである。以上の理由により、与謝野晶子については代表的作品を一つに絞り込むことが困難であるため、二作品とも対象としてとりあげることをとする。

### 三、「桐壺」巻頭部

#### 『新譯源氏物語』

何時の時代であつたか、帝の後宮に多くの妃嬪達があつた。この中に一人陛下の勝れた寵を受けて居る人がある。この人は極めて権門の出身と云ふのでもなく、また今の地位が後宮においてさまで高いものでもなかつた。多くの女性の嫉妬がこの人の身邊に集るのは云ふまでもない。この人よりも位置の高い人はもとより、それ以下の人の嫉妬は甚しいものであつたから、この人は苦しい、悲しい日を宮中で送つて居た。その上くよくよと物思ひばかりをする結果病身にさへなつた。陛下は二十になるやならずの青年である。戀のためには百官の批難も意に介せられない、いよいよ寵愛はこの人一人に集るさまである。この人も百方嫉視の中に陛下の愛一つをたよりにして生きて居る。

#### 『新新譯源氏物語』

どの……様の御代であつたか、女御とか更衣とか云はれる後宮が大勢居た中に、最上の貴族出身ではないが深い御愛寵を得て居る人があつた。最初から自分こそはと云ふ自信と、親兄弟の勢力に恃む所があつて宮中に入つた女御達からは失敬な女として嫉まれた。その人と同等、若しくはそれより地位の低い更衣達はまして嫉妬の焰を燃やさないわけも無かつた。夜の御殿の宿直所から退る朝、續いてその人ばかりが召される夜、目に見耳に聞いて口惜しがらせた恨みのせいもあつたか身體が弱くなつ

て、心細くなつた更衣は多く實家へ下つて居がちと云ふことになる、いよいよ帝はこの人にばかり心をお引かれになると云ふ御様子で、人が何と批評をしやうともそれに御遠慮などと云ふものがお出来にならない。御聖徳を傳へる歴史の上にも暗い影の一所残るやうなことにのみなりかねない状態になつた。高官達も殿上役人達も困つて、御覺醒になるのを期しながら、當分は見ぬ顔をしてゐたいと云ふ態度をとる程の御寵愛ぶりであつた。唐の國でもこの種類の寵姫、楊家の女の出現によつて亂が醸されたなどと蔭では云はれる。今やこの女性が一天下の煩ひだとされるに至つた。馬嵬の驛がいつ再現されるかも知れぬ。その人にとつては堪へ難いやうな苦しい雰圍氣の中、唯だ深い御愛情だけを頼りにして暮してゐた。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

#### 『新譯源氏物語』

晶子は、依拠本文について明示していない。しかし、注目すべきは『新譯源氏物語 下巻の二』の「新譯源氏物語の後に」において、「自分が源氏物語に対する在来の註釈本のすべてに敬意をもっていないのはいうまでもない。中にも湖月抄の如きは寧ろ原著を誤る杜撰の書だと思つている。」と述べている点である。ここから確認できるのは、次の二点である。

◇複数の「註釈本」を読んでいる。

◇『湖月抄』（注1）は読んでいる。

神野藤昭夫氏は、平成二八年二月九日に愛知淑徳大学において「晶子源氏」誕生秘話」と題し講演を行っている。その中で「晶子は『源氏物語』とどのようにして出会つたか」について述べる際、次の文を引用し、文中の「源氏」が「絵入源氏物語」無刊記版小本（注2）であり、晶子の「出会いの書」である可能性を指摘している。

読む書物も祖母や父が昔読みました源氏とか大鏡とか云ふ類の古書を倉から出して来て読む計り、「寄合話（二）」（「トキハギ」一号 明治四二年五月）

この「絵入源氏物語」無刊記版小本は、江戸初期の版本である。よって、晶子の祖母や父が読んでいたということについて時代的にも不自然ではない。また、「絵入源氏物語」無刊記版小本はポケットタイプの版本であるから、広く庶民にも流布されていたと考えられる。これらの要素を加えることにより、神野藤氏の指摘を妥当として誤りはないのであろう。

また、神野藤氏は、同講演で『源氏物語講義』について触れる際、資料として明治四二年九月一八日消印の晶子の書簡（植田安也子・逸見久美編『天眠文庫蔵 与與謝野寛 晶子書簡集』 昭和五八年六月七日 八木書店）をあげている。その中の一部を引用する。

私など不學のものに候へど 式部のかきしものを直覺に私の感ぜしところを講義いたさむとおもひ候 式部と私との間にはあらゆる註釋書の著者もなく候 只本居宣長のみ私はみとめ居り候

この記述により、晶子が参照した複数の「註釈本」の一つは、宣長の『源氏物語玉の小櫛』（注3）であると考えられる。

以上、依拠本文については、確定し難いものの、『湖月抄』、『絵入源氏物語』無刊記版小本、『源氏物語玉の小櫛』を中心としたものであった可能性を指摘しておきたい。

### 『新新譯源氏物語』

『新新譯源氏物語』についても、晶子は依拠本文について明示していない。

近年、神野藤昭夫氏がこの件について調査し、『新新訳源氏物語』はどのようにして生まれたか―その魅力の源泉をかんがえる」と題し、堺市博物館所蔵資料調査報告書『与謝野晶子「新新訳源氏物語」桐壺の巻草稿調査報告書』に特別寄稿している。

まず、有力情報として「湯浅光雄「春宵閑話（二）晶子源氏と金尾文淵堂」『日本古書通信』（注4）をあげている。その指摘箇所は次のとおり。

その頃の先生は源氏の口訳にお忙しかった。別に客扱ひでないのが、却つて気安かった。二三の挨拶もそこそこに先生は早くも日本古典全集「源氏物語」を手に、原稿用紙上へンは流麗に走る……

次に、晶子自身が昭和二十一年一月三〇日に録音したレコードを聞き取り、符合するテキストを指摘している。

……本文は江戸時代の有力な流布本のひとつである『首書源氏物語』と呼ばれるもの。しかもそれを晶子の読むようにびったり校訂してあるテキストが見つかった。校注日本文学大系第六卷『源氏物語』上（国民図書株式会社 大正十五年／誠文堂 昭和六年普及版）である。

神野藤氏による周辺情報の調査結果から、少なくともこの二つのテキストが晶子の手元にあったことがうかがえる。

A

與謝野寛ほか編『《日本古典全集》源氏物語』全五卷（大正一五年一〇月〜昭和三年一月 日本古典全集刊行會）

B

國民圖書株式会社編『《日本文學大系》源氏物語』全二卷（大正一五年二月〜昭和二年四月）

一方、氏は『源氏物語』の全七九五首の和歌本文と符合するテキストを探ってみたが、晶子訳本文と一致するものはないとしている。

なお、氏は、現在入手可能な角川文庫『全訳源氏物語』（晶子の新新譯）「柏木」巻末が河内本と合致することをつきとめ、河内本を生かした金子元臣『定本源氏物語新解』（大正一四年〜昭和五年）の可能性を指摘する。しかし、『全訳源氏物語』とオリジナルの『新新譯源氏物語』とは本文異同がみられ、晶子ではない人物による加筆の可能性を否定できず、現在、依拠テキストについては、確定できないとせざるを得ない。

しかしながら、そもそも晶子に限定した依拠テキストがあったのだろうか。

まずは、『新新譯源氏物語』にさかのぼってみる。同（下巻の二）末尾「新新譯源氏物語の後に」に次のようにある。（総ルビであるが、ルビは省いた）

源氏物語は我國の古典の中で自分が最も愛讀した書である。正直に云へば、この小説を味解する點に就いて自分は一家の抜き難い自信を有つて居る。

（中略）・・・主として直ちに原著の精神を現代語の樂器に浮き出させようと努めた。

細心に、また大膽に努めた。必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語譯の法に由らず、原著の精神を我物として譯者の自由譯を敢てしたのである。

先に述べた通り、晶子は少女時代「祖母や父が昔読みました源氏とか大鏡とか云ふ類の古書を倉から出して来て」読んでいた。それが「絵入源氏物語」無刊記版小本」であろう。その読解は誰にも負けないものとなるほど、何度も何度も読みこんだのである。そしてついに「原著の精神を我物と」するにいたつたのであろう。

そのことを裏付ける吉田精一氏（注5）の証言がある。「私は一度二三人で同座して話をきいたが、彼女が源氏物語の文章をよく暗記しており、そこを原文のまま引用して自在をきわめているのに、おどろいたことがある。」（注6）と晶子のようすを語っている。まさに、「原著の精神を我物として」いたのみならず、原文をすら「我物として」いたのである。

吉田氏が、晶子にあった年月日については記載がない。しかし、吉田氏が東京帝国大学を卒業したのが昭和七年であることから、晶子が『新新譯源氏物語』の現代語訳の訳業にとりかかった時点（注7）以降であろう。すなわち『新新譯源氏物語』の訳業をすすめる頃の晶子の頭の中には、すでに『源氏物語』の本文があったのである。

『新新譯源氏物語』「あとがき」には、「直ぐに書き初め、書き續け、少い餘命の終らぬ間を急いだ」とあるが、神野藤氏の前掲論文においても『新新訳』は、その当初から、じっくり訳を吟味し、推敲に推敲を重ねて原稿を完成させるという贅沢なものではなかったことがわかって来る」としている。「未着手であった宇治十帖を、時間と争うように書き継い

で」(同氏)とあり、時間に追われながら短時間で仕上げたことがうかがえるのである。

これは、何を意味するのだろうか。短時間で仕上げなければならない状況下、すでに頭の中にある原文を使わないはずがない。すなわち『新譯源氏物語』の訳出作業において、特定の限定された依拠テキストはなかったといえるのではないだろうか。

そうは言いながら、ただ頭の中の原文のみで訳業をこなしたとも言いきれない。明治四四年七月二〇日に金尾文淵堂から刊行された、新聞社や雑誌社からの依頼によりその都度執筆したものを集めた、『一隅より』の一文である。

私はどちらかと云ふと、幼い時から歴史に關した書物が第一の嗜好です。其れで自然早くから日本の古文学にも親みましたが、只今では動植物の書物でも如何なる雑誌でも手当たり次第に読みます。文学物では脚本と小説、殊に森先生などの御訳しになる翻訳を読み耽ります。

晶子は、ジャンルを問わず多方面にわたる読書家であつたことがうかがえる。「愛讀した書」である『源氏物語』、また仕事として現代語訳を行っている晶子は、『源氏物語』に關連する刊行物に目を通さないわけではないであろう。古典に造詣深く研究熱心であつた晶子は、古注釈や多くのテキストをはじめ、新刊が出版されれば、必ず目を通していたのではないだろうか。よつて、先に神野藤氏が指摘した金子元臣『定本源氏物語新解』も当然に目にしていると思われる。

『新譯源氏物語』の依拠テキストは、晶子の頭の中の原文を基本としつつも、時に手元にあるテキスト類や注釈書の中から、必要箇所を適宜参照するなどして不足を補つたものと言えるのではないだろうか。

## 2、「桐壺」巻頭部の特質

### 『新譯源氏物語』(以下、『新譯』と称する)

何時の時代であつたか、帝の後宮に多くの妃嬪達があつた。この中に一人陛下の勝れた寵を受けて居る人がある。この人は極めて權門の出身と云ふのでもなく、また

今の地位が後宮においてさまで高いものでもなかつた。多くの女性の嫉妬がこの人の身邊に集るのは云ふまでもない。この人よりも位置の高い人はもとより、それ以下の

人の嫉妬は甚しいものであつたから、この人は苦しい、悲しい日を宮中で送つて居た。その上くよくよと物思ひばかりをする結果病身にさへなつた。陛下は二十になる

やならぬの青年である。戀のためには百官の批難も意に介せられない、いよいよ

寵愛は「この人一人に集るさまである。この人も百方嫉視の中に陛下の愛一つをたよりにして生きて居る。」

まず、比較の基準としての『源氏物語大成』（池田亀鑑『源氏物語大成』巻一「校異篇」昭和二年六月二五日 中央公論社）本文を、次に掲げる。今、仮にこれを原文として扱うことについては、前述したとおり。

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かந்தちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

第一章に掲げた九点について、『大成』本文と『新譯』本文との比較を行った結果は、次に掲出するとおり。以下、『源氏物語大成』は、略して『大成』と称する。

- 一、文字数  
『大成』 三八六文字  
『新譯』 二九三文字（句読点一五字を除く）
- 二、文の数  
『大成』 六文  
『新譯』 九文
- 三、漢字の使用  
『大成』 三九文字  
『新譯』 一〇一文字（漢字の占める割合三三％）
- 四、敬語の使用  
『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）  
『新譯』 なし
- 五、文脈  
『大成』 （原文のまま）  
『新譯』 入れ替えあり。
- 六、文体  
『大成』 （原文のまま）  
『新譯』 「だ」「である」調

- 七、『大成』には見られず『新譯』のみに見られる用語・表現等の存在  
『新譯』傍線部
- 八、『大成』にはありながら『新譯』に訳出されていない用語・表現等の存在  
『大成』傍線部
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在  
『新譯』波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、晶子の『新譯』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができよう。

- 一、逐語訳ではなく内容が圧縮された要約である。
- 二、原文の六つの文を九つの文に分解・再構成することにより、文意が明快。
- 三、表意文字である漢字の多用により、文意が明快。  
特に二字熟語の多用(何時・時代・後宮・妃嬪・一人・陛下・權門・出身・地位・女性・嫉妬・身邊・位置・以下・宮中・結果・病身・二十・青年・百官・批難・寵愛・百方・嫉視)は、大きな特徴と言える。
- 四、敬語の省略により、文意が通じやすい。  
原文は、主語が明示されずとも敬語により主語が明らかになるのだが、敬語を省略した一方で、『新譯』は九文中八文において主語を明示している。
- 五、文脈を前後入れ替えることにより、文意がたどりやすい。  
例えば、「いとやむことなき」にはあらぬかすくれて時めき給ありけり(『大成』)という一文について、内容を二分割し前後を入れ替え、二つの文に分けて「この中に一人陛下の勝れた寵を受けて居る人がある。この人は極めて權門の出身と云ふのでもなく、また今の地位が後宮においてさまで高いものでもなかった。」(『新譯』)とするが、これにより「寵を受けて居る人」の存在(根幹)がまず提示され、次に、その身分(枝葉)という付帯要件が後者におかれることになる。この配置により、文意が明快。
- 六、文末を常体(「だ」「である」調)で括ることにより、簡潔かつ緊張感のある文体とされている。
- 七、必要な文脈を補い、または、まったく新たな要素を加えて文意・状況を明快にしている。特に、「陛下は二十になるやならずの青年である」は、原文には全く存在せず、訳者の読みおよび考察の結果、導き出されたものである。
- 八、原文の文言の省略、または概括により、文意が通じやすい。  
大きな省略個所としては、「楊貴妃」の逸話を削除している点が挙げられる。これは、本筋には関係なく、結果のみを記述すれば、無くても文意は通じるであろう。
- 九、晶子独自の解釈による補足等が行われ、文意が通じやすい。「はしめより我はと思あかり給へる御方／＼めさましきものにおとしめそねみ給」を「多くの女性の嫉妬がこの人の身邊に集るのは云ふまでもない」と訳すことにより、「めさましき」感情が「嫉妬」であることを明快に示している。

右に見るとおり、晶子『新譯』は、原典である『源氏物語』を自家薬籠中の物として取り込み、さらに換骨奪胎し、自由闊達に(当時の)現代語に翻訳した「自由訳」であったこと

が確認できる。

それでは、晶子自身はこの現代語訳についてどのように考えていたのであろうか。『新譯源氏物語 下巻の二』末尾に、「新譯源氏物語の後に」と題する、次の述懐が収められている。

この書の譯述の態度としては、畫壇の新しい人人が前代の傑作を臨摹するのに自由摸寫を敢えてする如く、自分は現代の生活と遠ざかつて、共鳴なく、興味なく、徒に煩瑣を厭はしめるやうな細個條を省略し、主として直ちに原著の精神を現代語の樂器に浮き出させようと努めた。細心に、また大膽に努めた。必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語譯の法に由らず、原著の精神を我物として訳者の自由譯を敢えてしたのである。

晶子は、自らの現代語訳について、次の四点を方法として採用したと述べているのである。

- ・ 煩わしい細部を省略した。
- ・ 細心かつ大胆に訳した。
- ・ 作者の表現法を踏襲しない。
- ・ 逐語訳をしない。

これらをまとめて、「原著の精神を我が物とした上で訳者の自由訳を敢えてした」と言っている。『新譯』は、必ずしも原文に忠実ではないのである。

すなわち、『新譯』はいわば晶子の身体を通過した晶子だけの、言い換えるならば他に置き換えのできない、晶子独自の「自由譯」だったのである。その理由の根源が、「この小説を味解する點に就いて自分は一家の抜き難い自信を有つて居る」（前掲書）と自らが言うように、晶子自身の文学者としての強烈な個性に依拠していることは歪み得ない事実である。

### 『新新譯源氏物語』（以下、『新新譯』と称する）

どの……様の御代であつたか、女御とか更衣とか云はれる後宮が大勢居た中に、最上の貴族出身ではないが深い御愛寵を得て居る人があつた。最初から自分こそはと

云ふ自信と、親兄弟の勢力に恃む所があつて宮中に入つた女御達からは失敬な女

として嫉まれた。その人と同等、若しくはそれより地位の低い更衣達はまして嫉妬の煽

を燃やさないわけも無かつた。夜の御殿の宿直所から退る朝、續いてその人ばかりが

召される夜、目に見耳に聞いて口惜しがらせた恨みのせいもあつたか身體が弱くなつ



て、心細くなつた更衣は多く實家へ下つて居がちと云ふことになる、いよいよ帝は  
この人にばかり心をお引かれになると云ふ御様子で、人が何と批評をしやうともそれ  
に御遠慮などと云ふものがお出来にならない。御聖徳を傳へる歴史の上にも暗い影の  
一所残るやうなこともなりかねない状態になつた。高官達も殿上役人達も困つて、  
御覺醒になるのを期しながら、當分は見ぬ顔をしてゐたいと云ふ態度をとる程の御寵  
愛ぶりであつた。唐の國でもこの種類の寵姫、楊家の女の出現によつて亂が醸された  
などと蔭では云はれる。今やこの女性が一天下の煩ひだとされるに至つた。馬嵬の驛  
がいつ再現されるかも知れぬ。その人にとつては堪へ難いやうな苦しい雰圍氣の中  
も、唯だ深い御愛情だけを頼りにして暮してゐた。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあ  
らぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさまし  
きものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからす  
あさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけ  
むいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物  
におもほして人のそしりをもえはくからせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてな  
し也かたちちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなり  
もろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれどやう／＼あめのし  
たにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなり  
ゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみに  
てましらひ給

#### 一、文字数

『大成』

三八六文字

『新新譯』

五二〇文字（句読点・記号二五字を除く）

#### 二、文の数

『大成』

六文

『新新譯』

一〇文

#### 三、漢字の使用

- 『大成』 三九文字
- 『新新譯』 一九八文字（漢字の占める割合三八%）
- 四、敬語の使用
  - 『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）
  - 『新新譯』 一〇箇所
- 五、文脈
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『新新譯』 入れ替えなし。
- 六、文体
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『新新譯』 「だ」「である」調
- 七、『大成』には見られず『新新譯』のみに見られる用語・表現等の存在
  - 『新新譯』 傍線部
- 八、『大成』にはありながら『新新譯』に訳出されていない用語・表現等の存在
  - 『大成』 傍線部
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在
  - 『新新譯』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『新新譯』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、逐語訳であり、それ以上の内容も含まれている。
- 二、表意文字である漢字の多用により、意味の伝達を容易にしている。特に二字熟語の多用（御代・女御・更衣・後宮・大勢・最上・貴族・出身・愛寵・最初・自分・兄弟・勢力・宮中・失敬・同等・地位・嫉妬・御殿・宿直・身體・實家・様子・批評・遠慮・聖徳・歴史・一所・高官・殿上・役人・覚醒・當分・態度・寵愛・種類・寵姫・楊家・出現・女性・天下・馬嵬・再現・愛情）は、大きな特徴と言える。
- 三、昭和一三年の出版ということで、戦時中であり、天皇家に配慮したため伏字を採用するという時代背景がうかがえる。
- 四、「嫉妬の焰」、「目に見耳に聞」く、「馬嵬の驛」などの慣用句的表現を用いている。慣用句的表現や言い回しは、視覚的効果もあり読者の理解を助けると同時に、リズムミカルな文章になる。
- 五、『新新譯』のみに見られる用語・表現等については、その用途についておおまかに二つに分類することができる。一つは、「更衣は」「帝は」など、主語を補っているほか、「この人にはかり」「この女性が」「その人にとつては」など、その行為者の特定のための補足として加筆しているもの。二つ目は、「とか云はれる後宮」「親兄弟の勢力に恃む所があつて宮中に入った」「寵姫、楊家の女の出現によつて」など、原文だけでは、読者の理解が難しいと思われる部分についての補足説明をし、読者の理解を助ける内容となっている。
- 六、「御もてなし也」のみであり、これは、続く次の文の「御おほえなり」と重複する語句といつても過言ではなく、重複部分を削除し、内容を変えることなくすっきり

とまとまった文章になっている。

七、具体的内容を訳者の解釈や考察により説明することにより、近代の読者にとってわかりやすい内容としている。「やむことなきは」を簡潔に「貴族出身」と表現することにより、読者は具体的イメージを付けやすくなったであろう。

「やすからず」とは、どういう心情なのかを「嫉妬」という近代の言葉に置き換え、「嫉妬の焰を燃や」すという慣用句的表現を用いて具体的に説明している。「人の心をのみうこか」すという、その「人の心」の状態を具体的にどんな行為によるのかを「目に見耳に聞」くという慣用句的表現で説明している。「御心」が具体的に、帝の更衣に対する「愛情」であることを説明している。以上のように、登場人物における具体的に表現されていない心情などを具体的に訳者の解釈で表現している。

また、「女御更衣あまたさふらひ給ける」場所とは、当時はどこであったかを「後宮」と説明したり、「はしめより我はと思あかり給へる」という女御たちほどのような状況下で今ここにいるのかを「親兄弟の勢力に恃む所があつて宮中に入つた」と説明を加えている。また、「あさゆふの宮つかへ」とは、具体的にどんな行動であるかを説明し、当時の生活様式について文中で解説を加えている。

さらに、『源氏物語』成立当時の読者にとっては、「もろこし」で起こった「かゝること」といえば、誰もが連想できたであろうことだが、すぐには理解できない読者にむけて「寵姫、楊家の女の出現」と具体的に説明している。同様に、「(楊貴妃の)ためし」の内容を、乱により楊貴妃が殺害されるという顛末を迎えることとなる「馬嵬の驛」という簡潔な表現を用い、具体的に説明している。

以上の結果から、『新新譯』は、原文に忠実な訳出を心がけつつ、生活環境、社会的な変化により、理解が難しいであろう箇所について、訳者の解釈や考察に基づき本文中に具体的な説明を織り込んでいく。また、心情についてもより具体的に読者がイメージできるように、漢語(二字熟語)表現を多用し、簡潔で明確に表現していると言える。さらに、適宜、主語を加えることにより、内容が明確となっている。これら主語や補足説明を盛り込んだことにより訳文は、大幅に増加したと言えるであろう。

そのほか、帝についてのみ敬語表現を用いていることも特徴の一つである。主語の加筆に加え、敬語を帝のみを使用することにより、登場人物の言動を明確にさせることができよう。敬語表現の複雑さを解決させ、一般読者に理解しやすい、読み進めやすい訳文となった。また、二字熟語や慣用句的表現を用いることにより、視覚的にも読みやすくなったと言える。なお、刊行時の政情により「どの……様」と伏字があることも特徴のひとつである。

注1『源氏物語』の注釈書。六〇巻六〇冊。北村季吟著。延宝元年(一六七三年)冬至日成立(自跋)。延宝三年刊行。青表紙本系本文全文を掲げ、頭注欄には諸注を簡潔にまとめ、傍注は人物の区別・会話主・草子地・文意・語意等を明示して読解の便に供する。(大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』平成一〇年六月一〇日 明治書院 による。)

注2…寛文(一六六一〜一六七三年)頃刊無刊記、絵入り「源氏物語」(小本)。各巻に三五図、五四巻で全二二六図の挿絵がある。蒔絵師で歌人の山本春正が、俳諧で名高い松

永貞徳の教えを受けながら編集、読解を助けるために源氏物語全文に初めて句読点・濁点・振り仮名・簡単な傍注を付けた書。本文表記は、二〇年後の『湖月抄』にそのまま採用される。

以上は、清水婦久子「源氏物語の大衆化と絵入り版本」（鈴木重三 校注『修紫田舎源氏 下』平成七年二月八日 岩波書店 月報六三 第八九巻付録）による。なお、清水氏は同論文の中で、この版本が「与謝野晶子の愛読書」であるとしている。

注3…『源氏物語』の注釈書。九巻。本居宣長著。寛政八年成立。寛政一一年刊行。『湖月抄』を底本にとる。（注1に同じ）

注4…『日本古書通信 第39巻第2号通巻535号復刊第358号』（昭和四九年二月一五日発行 日本古書通信社）

注5…国文学者。大妻女子大学名誉教授。明治四一年一月一二日、東京市に誕生。昭和七年東京帝国大学国文科卒業。二松學舎専門学校、中央大学、東京教育大学、ミシガン大学、東京大学などで教鞭をとる。昭和二三年に、日本近代文学会を創立。昭和五四年、勲二等瑞宝章。昭和五八年、日本学士院会員。昭和五九年六月九日没。

注6…『源氏物語鑑賞のさまざま』（円地文子『源氏物語 卷三』 卷三月報 昭和四七年一月二五日 新潮社）

注7…『新新譯源氏物語』の「あとがき」によれば、執筆開始を「今から七年前の秋」とする。神野藤氏によると出版事情などから「晶子が『新新訳』に着手するのは、従来の七年秋ではなく、昭和八年秋とみた方が妥当である」（前掲論文『新新訳源氏物語』はどのようにして生まれたか―その魅力の源泉をかんがえる）とする。

## 吉澤義則

### 一、訳者の略歴

国語学者、国文学者。歌人、書家でもある。文学博士。明治九年八月二二日、愛知県に誕生。東京帝国大学国文科を卒業。京都帝国大学名誉教授。国語学では、訓点・文体史の研究をおこない、『国語説鈴』、『国語学史概説』などの著書がある。国文学者としては、『源氏物語』のほか、和歌の研究などで成果をあげている。昭和八年、勲二等瑞宝章。昭和二九年一月五日没。

### 二、書誌

#### 『源氏ものかたり』全六巻。王朝文學叢書刊行會。

「源氏ものかたり 一」	（桐壺く花宴）	大正一四年	六月一八日	三五七頁
「源氏ものかたり 二」	（あふひく少女）	大正一四年	一月二〇日	五二四頁
「源氏物語 三」	（玉葛く眞木柱）	大正一四年	二月一八日	二八一頁
「源氏ものかたり 四」	（梅枝く竹河）	大正一五年	一〇月 六日	五九九頁
「源氏物語 うぢ十帖上」	（橋姫く寄生）	大正一三年	八月一八日	三〇九頁
「源氏物語 宇治十帖下」	（東屋く夢浮橋）	大正一三年	一月 八日	三二九頁

なお、この『源氏ものかたり』全六巻については、内表紙裏に「譯者」として「吉澤義則 加藤順三 春日政治 吉川理吉 能勢朝次 有川武彦 木枝増一 宮田和一郎 島田退蔵 鈴鹿三七」と列挙されているが、奥付には「著作者 吉澤義則」と単独で記載がある。この叢書の出版ののち、二度にわたって単行本として出版され（注1）、その奥付にも吉澤義則単独での記載があるためここでは、単独訳者吉澤義則として扱うこととする。

### 三、「桐壺」巻頭部

御代はいつであつたか――

九重の奥深く、うら若い帝みかどを中心に、あまたの女御や更衣が花やかに暮して居られた時の事である。

その中に、すぐれた家柄の出ではないが、寵遇ならびなきひとりの麗人があつた。――世には桐壺の更衣とよんでゐた――。

いづこも同じ女子のならひ、素より門地才貌を恃んで、我こそはと高くとまつてゐた妃きさきたちは、この更衣を目の敵かたきにして、譏りもし妬みもした。

まして同輩やそれ以下の婦人の心の底には、穏かならぬしき波が立ちさわぐのであつた。かうした譯で、朝夕の忙しい宮仕の間にも、人に氣をもませ、身に負ふ恨みの積りつもつてか、更衣の持病は日にまして重つていつて、心細き思ひに實家ざとで暮す日が多くなつた。さうなると生憎あやにくな帝の御愛着は愈々募るばかりで、陰口などにはお厭ひなくなつた。果ては後々までの話柄ともなりかねまじき御待遇おとりなしである。

かくてはあまりのことに、上達部かんたちめや殿上人さへ、にべもなう目をそらして、見るに見かねるほどの有様であつた。

唐土もろこしにも、上御一人かみごの御心得違ひから、不祥事を引起したためしもあると、誰いふとなしに、天下の人心にも次第に暗い影がさして、よからぬ噂もひろまるまゝに、終にはあの楊貴妃の場合のやうになりさうにもなり行くにつけ、更衣には、辛さの増すばかりであるが、たゞ身にあまる聖恩の辱さを、一本の杖ひとことも柱ともすがりついて、味氣ないその日を送つてゐた。

※右本文中には、適宜頭注が施されているので、次に該当する語と注を引用する。（以下同じ）

更衣―女御につぐ女官、納言参議の女から採つた。

楊貴妃―唐の玄宗の寵妃、帝がこれに惑溺した爲に安祿山の亂が起つた。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

吉澤は、依拠本文について明示していない。周辺情報から探る。吉澤は、昭和一二年から昭和一五年にかけて『對光源氏物語新釋』全六卷索引二卷（平凡社）を出版するが、その第一巻の冒頭に「本書の五大特色」を掲げている。関連部分を引用する。

本文は古来最も廣く流布した湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所蔵の河内本を以て極めて確實に對校したもので・・・

『對光源氏物語新釋』の刊行は、『源氏ものかたり』の刊行から遅れること約一二年であるが、この記述を遡及する事ことにより、『源氏ものかたり』も『湖月抄』を基本とし、『尾州家河内本』を参看したとみなすことも可能ではあろう。しかし、直接の言及がないので確定はし難い。

『湖月抄』を中心とするものであった可能性がある、とすることに定める。

##### 2、『源氏ものかたり』（以下、『吉澤訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

御代はいつであつたか――

九重の奥深く、うら若い帝を中心みむすに、あまたの女御や更衣が花やかに暮して居られた時の事である。

その中に、すぐれた家柄の出ではないが、寵遇ならびなきひとりの麗人があつた。――世には桐壺の更衣とよんでゐた――。

いづこも同じ女子のならひ、素より門地才貌を恃んで、我こそはと高くとまつてゐた妃めかけたちは、この更衣を目の敵かたみにして、譏りもし妬みもした。

まして同輩やそれ以下の婦人の心の底には、穩かならぬしき波が立ちさわぐのであつた。かうした譯で、朝夕の忙しい宮仕の間にも、人に氣をもませ、身に負ふ恨みの積りつもつてか、更衣の持病は日にまして重つていつて、心細き思ひに實家まことで暮す日が多く

なつた。さうなると生憎あやしくな帝の御愛着は愈々募るばかりで、陰口などにはお厭ひなく、

果ては後々までの話柄ともなりかねまじき御待遇おとりなしである。

かくてはあまりのことに、上達部かんだちめや殿上人さへ、にべもなう目をそらして、見るに見かねるほどの有様であつた。

唐土もろこしにも、上御一人の御心得違ひから不祥事ふしやうじを引起したためしもあると、誰いふとな

しに、天下の人心にも次第に暗い影がさして、よからぬ噂もひろまるまゝに、終にはあの楊貴妃の場合のやうになりさうにもなり行くにつけ、更衣には、辛さの増すばかりであるが、たゞ身にあまる聖恩の辱さを、一本の杖とも柱ともすがりついて、味氣ないその日を送つてみた。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえはゝからせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数

『大成』 三八六文字

『吉澤訳』 五二八文字（句読点・記号四五字を除く）

#### 二、文の数

『大成』 六文

『吉澤訳』 一〇文

#### 三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『吉澤訳』 一六七文字（漢字の占める割合三二％）

#### 四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『吉澤訳』 六箇所

#### 五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『吉澤訳』 入れ替えあり。

#### 六、文体

『大成』 （原文のまま）

『吉澤訳』 「だ」「である」調

#### 七、『大成』には見られず『吉澤訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『吉澤訳』 傍線部

#### 八、『大成』にはありながら『吉澤訳』に訳出されていない用語・表現等の存在なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在  
『吉澤訳』波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『吉澤訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、文字数は原文より多い。記号の使用もあり、「――」を三箇所使用している。「――」の使用箇所を見ると、「いつ」「だれが」の部分に使用されている。読者にとって「いつ」「だれが」は重要な部分であり、また、読み進めるにあたって「――」があることにより、「間」をとることができる。
- 二、文の数が多く、段落も多く取っている。
- 三、敬語は、「帝」には使用しているが、「更衣」には使用していない。
- 四、主語を補っている。
- 五、四字熟語等漢字が目立つ。
- 六、「だ」「である」調を用いる。
- 七、「一本の杖とも柱とも」など慣用句的表現を用いる。
- 八、主語の添加以外の加筆や本文に即しながら独自の解釈を施す部分が多くある。

吉澤による現代語訳には、冒頭に大きな特徴をみることができる。それは、冒頭において今から始まるこの物語の設定を説明していることである。

原文においては、「いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけり」とある。ここから、①時、②場所、③登場人物、という物語の設定を抽出してみる。

- ①「いつれの御時」
  - ②文意から後宮であることは想像がつくが、語句としての抽出はできない。
  - ③「女御更衣あまたさふらひ給ける」により、複数の女御と更衣がいることがわかる。「時めき給あり」によって、帝の寵愛をうけている女性がいることがわかる。よって、登場人物は帝と女性および複数の女御と更衣となる。
- 『吉澤訳』においては、「御代は」から「更衣とよんでゐた――」。までが、該当部分となり、同様に抽出してみる。

①、「御代はいつであつたか――九重の奥深く、うら若い帝を中心に、あまたの女御や更衣が花やかに暮らして居られた時の事」

②「九重の奥深く」

③「うら若い帝」、「女御」、「更衣」、「桐壺の更衣」

①から、いつの御代か不明確ではあるが、『吉澤訳』においては、「時の事」という語句を用いる事によって、読者がイメージしやすいよう工夫されている。同様、「九重の奥深く」により、より後宮であることを理解しやすい。③については、「帝」が若いということの補足説明がある。また、原文においてはのちに、「御つほねはきりつほ也」(『大成』冒頭より一〇八六字目)の文があり、そこでやっと「時めき給」女性が桐壺に住む女性であることが特定される。『吉澤訳』においては、その一文を冒頭ですでに訳出している。「いつ」「どこ」「だれが」が、冒頭ですでに明確に示されることにより、読者の理解を円滑にしている。また、「かうした譯で」「果ては」「かくてはあまりのことに」など、前後の文を円滑に



接続させる語句を加えている。

「花やかに」「麗人」「いづこも同じ女子のならひ」「忙しい」「誰といふことなしに」「一本の杖とも柱とも」「味氣ない」など、吉澤の解釈による語句が加えられている。これにより、読者は具体的なイメージをつけることができる。また、「心の底には、穏かならぬしき波が立ちさわぐのであった」「さうなると生憎な帝の御愛着は愈々募るばかりで」「上御一人の御心得違ひから、不祥事を引き起したためしもあると」など、本文に即しながら独自の解釈による内容や心情の説明を加えることにより、文意が明確になる。

『吉澤訳』には、以上のような特質が見出せる。そのほか、頭注を付けている点も特徴といえよう。

『吉澤訳』の最大の特質は、早々に「桐壺の更衣」という呼称を出した点にある。「いつ」「どこで」「だれが」を明確にし、各所において具体的なイメージを読者が持てるよう内容説明や心情を加筆した現代語訳と言えるであろう。

注1…単行本は、『逐語全譯 源氏物語』全六卷（昭和三年八月三十一日 文献書院）および『逐語 源氏物語 全譯』全六卷（昭和十二年九月一日 日本文學社）

## 谷崎潤一郎

### 一、訳者の略歴

小説家。明治一九年七月三〇日に東京市に誕生。小学校高等科時代より文学に目覚め、明治四一年に東京帝国大学国文科に入学するころには、すでに小説家を志望していた。明治四三年一月に『刺青』、明治四三年二月に『麒麟』を発表。代表作には、『痴人の愛』、『春琴抄』、『細雪』などがある。昭和一〇年ごろから『源氏物語』の現代語訳にとりかかり、合計三回現代語訳を刊行する。それらは一般に、旧訳、新訳、新々訳とよばれる。昭和二四年、第八回文化勲章。昭和四〇年七月三〇日没。

### 二、書誌

『新々訳源氏物語』全一〇巻・別巻一卷。中央公論社。

「巻一」	（桐壺く若紫）	昭和三九年一月二五日	一九八頁
「巻二」	（未摘花く花散里）	昭和四〇年一月二〇日	一九七頁
「巻三」	（須磨く松風）	昭和四〇年二月二〇日	二一五頁
「巻四」	（薄雲く胡蝶）	昭和四〇年三月二〇日	一九七頁
「巻五」	（蛩く藤裏葉）	昭和四〇年四月二〇日	二二〇頁
「巻六」	（若菜上・若菜下）	昭和四〇年五月二〇日	二〇九頁
「巻七」	（柏木く匂宮）	昭和四〇年六月二〇日	二二六頁
「巻八」	（紅梅く総角）	昭和四〇年七月二〇日	二四六頁

「巻九」 (早蕨く東屋)

昭和四〇年 八月二〇日 一九四頁

「巻十」 (浮舟く夢浮橋)

昭和四〇年 九月二〇日 一三七頁

「別巻一」 (隆能源氏物語絵巻・年立図表・人物略説・人名名寄・主要人物官位年齢一覽)

昭和四〇年一〇月二〇日 一二七頁

### 三、「桐壺」巻頭部

何という帝の御代のことでしたか、女御や更衣が大勢伺候していました中に、たいして重い身分ではなくて、誰よりも時めいている方がありました。最初から自分こそはと思いついておん方は、心外なことに思つて蔑んだり嫉んだりします。その人と同じくらしい身分、またはそれより低い地位の更衣たちは、まして気が気ではありません。そんなことから、朝夕の宮仕えにつけても、朋輩方の感情を一途に害したり、恨みを買つたりしましたのが積り積つたせいででしょうか、ひどく病身になつて行つて、何となく心細そうに、ともすると里へ退つて暮すようになりましたが、帝はいよいよたまらなくいとしいものに思召して、人の非難をもお構いにならず、世の語り草にもなりそうな扱いをなさいます。公卿や殿上人なども不愛想に顔を背けるといふ風で、まことに見る眼も眩い御寵愛なのです。世間でも追い追ひ苦々しく思い、気に病み出して、唐土でもこういうことから世が乱れ、不吉な事件が起こつたものですなどと取り沙汰をし、楊貴妃の例なども引合いに出しかねないようになつて行きますので、更衣はひとしお辛いことが多いのですけれども、有難いおん情の世に類もなく深いのを頼みに存じ上げながら、御殿勤めをしておられます。

女御・・・皇后、中宮に次ぐ妃

更衣・・・女御に次ぐ妃

楊貴妃・・・唐の玄宗皇帝の寵姫。玄宗がその愛に溺れたために安祿山の乱が生じた

なお、谷崎潤一郎には、「旧訳」「新訳」「新々訳」とよばれる三つの現代語訳がある。本稿では、「新々訳」として刊行された『潤一郎新々訳 源氏物語』を調査対象とした。「旧訳」「新訳」の出版を経て昭和四一年から出版された『潤一郎新々訳 源氏物語』は、新仮名遣いに変更された点に大きな特徴を持つ。その結果、現在まで読み継がれ、今もなお文庫本としての刊行が続いている。谷崎自身にとつても「谷崎源氏」の集大成といえるであろうこと

から、「新々訳」を代表作として取り上げる。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文について、やはり谷崎も明示していない。そこで、周辺情報から探ることとする。依拠本文を推察するための二つ目の資料は、昭和四〇年六月二〇日に出版された『新々訳源氏物語』に付された「挿絵入豪華版 卷七付録」である。学習院大学教授松尾聰氏が「源氏物語の本文」と題し記している。これは、花散里の巻の一部において「尾州家河内本」及び「前田元侯爵家蔵藤原定家筆青表紙本」を引用し、『新々訳源氏物語』と比較できるようにし、解説を付しているものである。その該当部分を引用する。

河内本は、親行によつて多数の本を比べて苦心の末作り上げられたものだけれど、結果としては、どうやら紫式部の原作本文より遠のいてしまったものようであり、当時傳來の、恐らく由緒正しい一本を丁寧厳密な態度でそのまま写した定家の青表紙本の方が、原作本文にいちじるしく近いものを、現在に残してくれた、ということになるようである。こうして、現在のわれわれは、青表紙本系統の伝本のうちの最も素性のよいと思われる本文を吟味採用して、源氏物語を鑑賞しようとしているのである。谷崎さんの拠られた本文もちろんそれなのである。

二つ目の資料は、谷崎自身が『源氏物語』を初めて読んだことについてふれている「にくまれ口」の文章である。これは、昭和四〇年九月に発行された『婦人公論』に掲載された文章である（注1）。

私が初めて源氏を読んだのは中学校の四、五年生頃、まだ与謝野夫人の現代語訳も出ていなかった時分ではなかったかと思うが、それでも分からないながら「湖月抄」の注釈を頼りにして読んだ。勿論最初は終りまで通読する根気はなかった。何度か通読しようとしては途中で放擲し、ようやく兎も角も読み終えることが出来たのは一高時代であったと記憶する。

また、「にくまれ口」には次のような文章もある。

物のあわれということを主にして書いた読み物であるから、儒学者の言うような是非善悪の区別をもって臨むのは間違いである、物語の中の人物の善し悪しは自ら別で、儒者心をもって測つてはいけない、という本居翁の説は卓見であるとは思ふ。

（中略）

昔からあの物語に及ぶものはない、あの物語ばかりは読む度毎に新しい感じがして、読む度毎に感心するという本居翁の賛辞に私も全く同感である。

これにより、谷崎が次の二つの注釈書を読んでいたことは確実である。

- ・北村季吟『湖月抄』（注2）
- ・本居宣長『源氏物語玉の小櫛』（注3）

『湖月抄』については、青表紙本系統の本文が採用されているといわれている。また、『源氏物語玉の小櫛』については『湖月抄』を底本としてしているとされている。このことは、松尾聰氏の説明とも符合する。

なお、「旧訳」についてではあるが、河添房江氏は、「現代語訳と近代文学―与謝野晶子と谷崎潤一郎の場合―」（注4）の中で、「旧訳」の依拠本文について次のように触れている。

テキストには山田孝雄の勧めもあり『湖月抄』を使用し、注釈書は『岷江入楚』（注5）を使用した点、諸訳を参照した点なども、晶子と大きく異なっている。

以上の資料から推察するに、基本とした依拠本文を『湖月抄』とすることに、大きな誤りはないであろう。

## 2、『新々訳源氏物語』（以下、『新々訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

何という帝みかどの御代みよのことでしたか、女御にようごや更衣こういが大勢しこう伺候しこうしていました中に、たいして重い身分ではなくて、誰だれよりも時めいている方がありました。最初から自分こそはと思いついていたおん方は、心外こころはずなことに思つて蔑あはんだり嫉ねたんだりします。その人と同じくらしい身分、またはそれより低い地位の更衣こういたちは、まして気が気ではありません。そんなことから、朝夕の宮仕えにつけても、朋輩ほうばい方の感情かんじょうを一途いちずに害いたしたり、恨みを買つたりしましたのが積り積つたせいでしょうか、ひどく病身びやみになつて行つて、何となく心細こころこわそうに、ともすると里さとへ退ひつて暮すようになりましたが、帝はいよいよたまらなくいとしいものに思おぼひ召めして、人の非難ひなんをもお構かまいにならず、世の語り草にもなりそうな扱あつかいをなさいます。公卿くけいや殿上人てんじょうびとなども不愛想ふあいさうに顔おもてを背そむけるという風で、まことに見る眼まなこも眩まぼゆい御寵愛ごちゆうあいなのです。世間よこしまでも追い追おい苦くる々々しく思おもひ、氣きに病びやみ出して、唐土たうどでもこういうことから世よが乱みだれ、不吉ふきつな事件じけんが起こつたものですねなどと取り沙汰さたをし、楊貴妃ようききの例れいなども引合ひきあひに出いしかねないようになつて行きますので、更衣こういはひとしお辛いつらいことが多いのですけれども、有難ありがたいおん情なさけの世よに類たぐひもなく深いのを頼たのみに存ぞんじ上げながら、御殿勤ごてんごんめをしておられます。

## 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえはゝからせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

一、文字数

『大成』 三八六文字

『新々訳』 四九四文字（句読点二九字を除く）

二、文の数

『大成』 六文

『新々訳』 六文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『新々訳』 一四二文字（漢字の占める割合二九％）

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『新々訳』 八箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『新々訳』 入れ替えあり。

六、文体

『大成』 （原文のまま）

『新々訳』 「です」「ます」調

七、『大成』には見られず『新々訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『新々訳』 傍線部

八、『大成』にはありながら『新々訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『新々訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『新々訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

一、主語を補うなどにより、文字数は多くなっている。そのほか補足としての語句は、次のようなものがある。

- ・ 接続詞・句を補う「または」「そんなことから」。
  - ・ 文の接続を円滑にする句を補う「ともすると」「という風で」。
  - ・ 内容をさらに具体的に示す語を補う「その人と」「深いのを」。
- 二、文の数は、原文と同じである。
  - 三、敬語は適宜使用されているが、原文より少ない。
  - 四、原文の文脈「もろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて」を、「世間でも追い追い苦々しく思い、氣に病み出して、唐土でもこういうことから世が乱れ、不吉な事件が起こったものですなどと取り沙汰をし」と入れ替えている。
  - 五、「です」「ます」調である。
  - 六、原文の取りこぼしはない。

以上のことから、『新々訳』は①主語を補うこと、②接続語を補うこと、③語句を補うこと、④文脈を入れ替えることなどにより、より明確かつ具体的で、文脈の流れが追いやすく、曖昧さの少ない分かりやすい訳文となっている。一言でいうならば、読みやすさを追求した訳文であると言えるであろう。しかも、原文の文の数を変えずに、である。これが、まず第一の特長である。

次に、谷崎は、文末を「です」「ます」調としている。これも大きな特質であろう。「新々訳源氏物語序」には、「……この作品は平安朝の上流の女性が作った写真小説であるという点に最も重きをおいて訳した。現代人に分からせることは大切であるが、そのために丁寧に意訳を試みて平安朝の氣分を壊すことをしなかった。」と記している。「です」「ます」調の採用は、「平安朝の氣分を壊さない方法のひとつと考えられる。

そもそも、平安時代において、物語を享受する方法としては、音読が基本であった。谷崎は音読を意識することにより「平安朝の氣分」をさらに高めることができるという考えにたどり着いたために、初めて「です」「ます」調を採用したのではないだろうか。谷崎は、『文章読本』（注6）に次のようにも記している。

文章を綴る場合に、まずその文句を実際に声に出して暗唱し、それがすらすらと云えるかどうかを試してみることが必要でありまして、もしすらすらと云えないようなら、讀者の頭に這入りにくい悪文であると極めてしまっても、間違いありません。

谷崎は、自身の書いた文章を声に出して確認をしていたようである。このことから、「すらすら／＼読める文章にするため、接続詞を加えたり、センテンスの入れ替えをしたのではないだろうか。

推測に過ぎないが、自身の文章を音読しているうちに、「平安朝の氣分」を出す方法として「です」「ます」調にたどり着いたと言えなくもないのではないだろうか。

さらに、原文との比較において、訳出されていないものはないという結果になったが、これは、谷崎自身が、「少なくとも、原文にある字句で訳文の方にそれに該当する部分がない、というようなことはないように、全くないというわけには行かぬが、なるだけそれを避けるようにし」と「新々訳源氏物語序」に記すとおりである。これをもって、第三の特長とする。

なお、先にも引用した「新々訳源氏物語序」には、三度目の訳業となった本書について、その動機や訳出にあたって心がけたことを記している。谷崎自身の考えはどうかであったの

だろうか。

しかるに先般、中央公論社が「日本の文学」の第一回として私の作品集を出版するに当たり、枉げて仮名遣いを新仮名にすることを承諾してくれと言われて、ついに私は節を屈することになった。それが今回源氏の新々訳を思いたつに至った事の起りである。

(中略)

谷崎源氏が依然として旧態を墨守し、そのために若い読者層から疎んぜられているとすれば、翻訳者の私はやはり寂しい。私とすれば一人でも多くの人に谷崎源氏を読んでもらいたいのが本心である。それでなければせつかくの仕事の意義がない。

谷崎は、出版社側から「新仮名遣い」にしたい旨を提案されたことをきっかけとし、「一人でも多くの人に谷崎源氏を読んでもらいたい」との「本心」から「新々訳」を出版しようと思ったのである。

続いて、「旧仮名を新仮名に直すついでに」としながら、次の三点についても谷崎が構想をたてていたことが記されている。箇条書きにて引用しながらまとめる。

- ◇「穩当を欠くと思われる解釈はつとめて書き改め、最近の専門学者たちの研究を参考にする」。
- ◇「難解な漢字はせいぜい使わないように」する。
- ◇『新訳』よりも「一層敬語を減らす」。

この三点についても谷崎自身が心がけて訳出したであろうことから、特質として付け加えることができる。

「新々訳源氏物語序」に続き、「例言」がおかれている。それは、読者に対して読み方を指示している内容となっている。その中からも、『新々訳源氏物語』の特質とみることできる点がある。以下、それを引用しながらその特質を列挙する。

- ◇「説明があつた方がいいと思われる事項には、注を」つけている。
- ◇本文中の「古い詩の文句」や「和歌の文句」の一節の引用などについては、その「出典」などを記す。
- ◇「紛らわしい人物」の呼称を、「頭注に」載せた。
- ◇「一度頭注を施した事項でも、便宜をはかって繰り返し記載する。
- ◇「和歌」を「原文のままを載せ」、「和歌の解釈を頭注として書き入れてある」。
- ◇「主人公の年齢」を「ところどころに書き入れ」た。

以上の点は、『新々訳源氏物語』の構成上の特質と言えるであろう。

注1…引用は、『谷崎潤一郎全集 第二十四卷』（平成二八年三月一〇日 中央公論新社）による。

注2…『源氏物語』の注釈書。六〇巻六〇冊。北村季吟著。延宝元年冬至日成立（自跋）。延宝三年刊行。青表紙本系本文全文を掲げ、頭注欄には諸注を簡潔にまとめ、傍注は

人物の区別・会話主・草子地・文意・語意等を明示して読解の便に供する。」(大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』(平成一〇年六月一〇日 明治書院)による。)

注3…『源氏物語』の注釈書。九卷。本居宣長著。寛政八年(二七九六)成立。寛政十一年(二七九九)刊行。『湖月抄』を底本にとる。(注2も同じ)

注4…河添房江編『講座源氏物語研究』第十二巻 源氏物語の現代語訳と翻訳(平成二〇年六月二〇日 おうふう)。

注5…『源氏物語』注釈書。五五巻。中院通勝著。慶長三年(二五九八)成立。細川幽斎の勸奨を受けた通勝が、古来の『源氏物語』註釈を一覧すべく、一〇年の歳月を費やして完成した書。(注2に同じ)

注6…谷崎潤一郎『文章読本』(昭和四九年一月二五日 中央公論社)

### 窪田空穂

#### 一、訳者の略歴

歌人、国文学者。明治一〇年六月八日、長野県に誕生。東京専門学校文学科を卒業。新聞、雑誌の記者や編集者などを経て、早稲田大学文学部教授。明治三十三年に雑誌『文庫』に短歌を投稿。与謝野鉄幹に認められ『明星』にも参加。しかし一年足らずで、与謝野夫婦に共鳴できず退会。その後の編集者時代に自然主義文学に影響を受け、また国文学への関心も深める。歌集『清明の節』、『万葉集評釈』などの著書がある。昭和三十三年に文化功労者。長男は、歌人の窪田章一郎。昭和四二年四月一二日没。

#### 二、書誌

#### 『現代語譯 源氏物語』全八巻。改造社。

「第一巻」	(桐壺く末摘花)	昭和二二年	五月二〇日	三〇八頁
「第二巻」	(紅葉賀く明石)	昭和二二年	八月三〇日	三〇一頁
「第三巻」	(濔標く玉鬘)	昭和二二年	十一月五日	三一八頁
「第四巻」	(初音く梅枝)	昭和二三年	二月二七日	二六九頁
「第五巻」	(藤裏葉く若菜下)	昭和二三年	七月三〇日	二六四頁
「第六巻」	(柏木く竹河)	昭和二三年	十一月三〇日	三〇八頁
「第七巻」	(橋姫く宿木)	昭和二四年	六月一〇日	三〇五頁
「第八巻」	(東屋く夢浮橋)	昭和二四年	七月三〇日	二九二頁

#### 三、「桐壺」巻頭部

何の帝の御代のことであつたらうか、女御や更衣の多くが御仕へ申し上げてみ

られた中に、ひどく高い家筋の出ではない方で、ぬき出て御寵愛を蒙つてゐられる方が



あつた。入内の當初から、自分こそは第一の者と思ひあがつてみられた御方方は、呆れるばかりのことにして、その御方を謗つたり、嫉妬なされたりする。その御方と同じ位階、下の位階の更衣達は、一層の不安なことである。更衣は、朝夕の宮仕をするにつけても、御方に氣を揉ませ、恨を受けたのが積つた故でもあらうか、ひどく病弱な身となつて来て、心細さうにして、里に引き退りがちにしてゐるのを、帝には益益か  
はゆいものに思召されて、今は世の人人の謗りも御斟酌ができず、世間の話の種にもなりさうな御扱ひぶりである。公卿や殿上人なども、そつ氣なく目角を立てて見つけて、「まことに目に餘る御寵愛といふものです。唐土でもかうしたことが原因で、世の中が亂れて大事ともなつたのです」といひ合ひ、次第に世間一帯の困り者となつて来て、楊貴妃の例までも引き出しさうになつて来ると、更衣はまことに辛い事が多くなつて来たけれども、帝の類ひのなく忝いお心持を頼みとして、後宮の交りをしてをられる。

(後注)

(註一) 皇后中宮に次ぐ御妃。三位。

(註二) 女御に次ぐ御妃。四位、五位。桐壺の女御は四位である。

(註三) 宮仕する人の實家。

(註四) 上達部。三位以上の役人。参議は四位もいふ。

(註五) 上人。昇殿を許された四位五位の役人。藏人は六位もいふ。

(註六) 唐の玄宗皇帝の寵妃。これを寵愛して安祿山の亂を招いた。白氏文集中の長恨歌にうたはれてゐる。なほこの巻は長恨歌の言葉を採つた所が多い。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

窪田もやはり、依拠本文について明示していない。

「くだものいそぎ」とは何か(注1)と題する渡瀬淳子氏の論文に興味深い記述がある。

戦後の窪田空穂による現代語訳でも

・・・尼君の方から菓物を参らせた。箱の蓋に、紅葉や葛などを祈って敷いて、面白く取り混ぜて、敷いてある紙に、不器用に書いてある物が、隈もない月の光でふと見えるので、君の目を留めて御覧になつてゐるのは、菓物に心を取られてゐるや

うに見えることであつた。『現代語訳 源氏物語』八巻 改造社 一九四九年）となつてゐる。こうした、「いそぎ」の意味を中世源氏注以来の「果物に心を入れる（心引かれる、気を取られる）」としてゐる『湖月抄』踏襲型の注に対して、近代の作家たちの訳はほとんどが「急ぐこと」の意味で解釈している。……

ここから、『湖月抄』の可能性が浮上する。

## 2、『現代語訳 源氏物語』（以下、『窪田訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

何の帝の御代のことであつたらうか、女御や更衣の多くが御仕へ申し上げてゐられた中に、ひどく高い家筋の出ではない方で、ぬき出て御寵愛を蒙つてゐられる方があつた。入内の當初から、自分こそは第一の者と思ひあがつてゐられた御方は、呆れるばかりのことにして、その御方を誘つたり、嫉妬なされたりする。その御方と同じ位階、下の位階の更衣達は、一層の不安なことである。更衣は、朝夕の宮仕をするにつけても、御方に氣を揉ませ、恨を受けたのが積つた故でもあらうか、ひどく病弱な身となつて来て、心細さうにして、里に引き退りがちにしているのを、帝には益益かはゆいものに思召されて、今は世の人人の誇りも御斟酌ができず、世間の話の種にもなりさうな御扱ひぶりである。公卿や殿上人なども、そつ氣なく目角を立てて見つづけて、「まことに目に餘る御寵愛といふものです。唐土でもかうしたことが原因で、世の中が亂れて大事ともなつたのです」といひ合ひ、次第に世間一帯の困り者となつて来て、楊貴妃の例までも引き出しさうになつて来ると、更衣はまことに辛い事が多くなつて来たけれども、帝の類ひのなく忝いお心持を頼みとして、後宮の交りをしてをられる。

## 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてな

し也かんとちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなり  
もろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやうくあめのし  
たにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなり  
ゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみに  
てましらひ給

一、文字数

『大成』 三八六文字

『窪田訳』 四六五文字（句読点・記号三四字を除く）

二、文の数

『大成』 六文

『窪田訳』 六文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『窪田訳』 一五八文字（漢字の占める割合三四％）

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『窪田訳』 一七箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『窪田訳』 入れ替えあり。

六、文体

『大成』 （原文のまま）

『窪田訳』 「だ」「である」調

七、『大成』には見られず『窪田訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『窪田訳』 傍線部

八、『大成』にはありながら『窪田訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『窪田訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『窪田訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができます。

一、内容を説明する文言や主語を補っていることにより、文字数は増加している。

二、文の数は同じである。

三、二字熟語をはじめとして漢字の割合は多い。

四、敬語は、原文より多い。

五、文脈を入れ替えている。「御心はへのたくひなきを」を「類ひのなく忝いお心持を」としている。

六、文末を「だ」「である」で括っている。

七、原文の取りこぼしはなく、逐語訳的である。

八、鍵括弧を使用している。会話を用的、「公卿や殿上人なども、そつ氣なく目角を立てて見つづけて、「まことに目に餘る御寵愛といふものです。唐土でもかうしたことが原因で、世の中が亂れて大事ともなつたのです」といひ合ひ、」としている。

九、歴史的仮名遣い（注2）を採用。

以上のような特質が見出せる。

『窪田訳』は、原文を取りこぼすことなく、文の数も同じである。「例言」において「・・・本書は努めて逐語譯にしようとした。」と記している点からも逐語訳であると言つてよいであらう。

ただし、『窪田訳』のみに見られる用語・表現が数か所ある。「入内の」「しゅだいの第一の者」「更衣は、（朝夕の宮仕を）」「帝には」「今は」「更衣は（まことに辛い）」「帝の」「後宮の」である。具体的に見ていくこととする。

- ・「入内の」は、「はじめより」の内容を説明している。
- ・「第一の者」の添加によって、「思あかり」の内容をより具体的にしている。
- ・「更衣は、（朝夕の宮仕を）」「更衣は（まことに辛い）」は、主語を補っている。
- ・「今は」は、前後の文章をスムーズにつなぐと同時に、より現実感を出す文章となっている。
- ・「帝には」「帝の」「後宮の」は、だれのどこのという内容を具体的にし、理解を助けている。

これらについては、内容をより具体的にするために補われたものと言えよう。

なお、「まことに目に餘る御寵愛といふものです。唐土でもかうしたことが原因で、世の中が亂れて大事ともなつたのです」という会話を採用したことも、長く回りくどい文章を明快にしたであらう。

『窪田訳』は、書名からもわかるように、昭和二年一月一日、内閣告示により新仮名遣いに変更されたにも関わらず、昭和二年五月二〇日に第一巻が歴史的仮名遣いにより刊行されている。刊行当時の成人読者層にとってはかえって読みやすかった可能性はある。

しかしここで、「あはれなる物」を「かはゆいもの」と訳出している点に注目したい。「あはれなり」は、「平安時代以後は、多く悲しみやしみじみした感情あるいは仏の慈悲を表わす」（注3）とされており、かわいそうなどという語を当てるのが自然ではないだろうか。ところが、「かはゆい」自体が、「かはゆし」という古語なのである。「①恥ずかしさなどで顔がほてる感じだ。②見るに忍びない。見るに耐えない。③かわいそうで見えられない。不愆だ。④つらい。⑤可憐だ。かわいい。」（注4）などの意味を持つ。現代におけるかわい、かわいそうという両方の意味を持ちあわせる語であり、正に「あはれなる物」にはぴたりと当てはまる訳である。これも出版間もない成人読者層には理解できたことかもしれない。しかし、現代の私たちにはすでにこの理解が難しい。また、原文「御方／＼」を「御方方」としている。これを一般読者はどう理解するであろうか。研究者であったからこそ窪田にとつて「かはゆし」や「御方方」は、古語とは感じられなかったかもしれない。

「例言」には、「本書は、これを一般に読みやすい物としようとして、現代語譯を試みたものである。」ともある。窪田の現代語訳の第一の特質は逐語訳であること、その上で、極力加筆を控えながら、最低限の主語などを補い、文意をとりやすくしていることは確かであ

る。ただし、刊行から七三年後の私たちにとっては、「一般に読みやすい物」ではないのかもしれない。

なお、構成上の特質として、後注を付している点を付言しておく。

注1…渡瀬淳子「くだものいそぎ」とは何か（北九州市立大学文学部比較文学科編『北九州市立大学 文学部紀要 第八四号』二〇一五年）

注2…昭和二十一年一月一六日、内閣告示により、現代語をかなで書き表す場合の準則として、歴史的仮名遣いから新仮名遣いに変更されている。

注3…大野晋ほか編『岩波 古語辞典 補訂版』（平成二年二月八日 岩波書店）より、引用。

注4…注3に同じ。

### 佐成謙太郎

#### 一、訳者の略歴

国文学者、能楽研究家。明治二十三年五月二三日、滋賀県に誕生。京都帝国大学文学部卒業。女子学習院教授、大東文化大学教授、鎌倉女学院理事長。謡曲の研究を中心に中古・中世文学が専門。著書には、『謡曲大観』（全七巻）、『増鏡通釈』などがある。昭和四十一年三月四日没。

#### 二、書誌

##### 『對訳源氏物語』全八巻。明治書院。

「第一」	（桐壺く花宴）	昭和二十六年	七月二五日	二九七頁
「第二」	（葵く松風）	昭和二十六年	一〇月五日	六三二頁
「第三」	（薄雲く藤袴）	昭和二十六年	二月一〇日	九六四頁
「第四」	（真木柱く若菜下）	昭和二十七年	四月二五日	一二九二頁
「第五」	（柏木く竹河）	昭和二十七年	七月五日	一五九一頁
「第六」	（橋姫く宿木）	昭和二十七年	九月二五日	一九一四頁
「第七」	（東屋く夢浮橋）	昭和二十七年	二月二〇日	二二三七頁
「別巻」	（総説・風俗概説・風俗図録・人名辞典・系図・年表）	昭和二十八年	八月一〇日	二九一頁

#### 三、「桐壺」巻頭部

どなたの御代みよであつたか、（ある帝みかど——かりに桐壺院と申しあげる帝の御時）女御や

更衣が大勢お側仕そばづかえをしていらつしやつた中に、特に高貴な家がらというほどではな

い方で、格別に帝の御寵愛の深い方があった。前前から（実家の家がらからいっても）

自分こそはと、御自信の強い気位の高い方は、（あんな低い家がらの女が）あきれたものだとなしもし、また（そのあまりな御寵愛を）ねたましくもお思いになった。まして、この更衣と同じ程度や、それよりも低い家がらの更衣たちは、（とても競争がでない）心がいらいらする。こうして、この更衣が、朝な夕な絶えずお側勤めをするにつけても、こうした方々の心をいらだたせて、その恨みをわが身におうのが積み積つたためであろうか、大層病気がちになって行き、心ぼそいようすで、里方にさがりがちであるのを、帝はまた、いよいよ手ばなしがたい、かわいいものにお思いなって、人が非難するのにかまっておいでになれない、どうかすると、ひどい偏愛の例として引合いに出されそうな御寵愛ぶりである。（それで、女官ばかりでなく）公卿や殿上人なども、不快な感じで目をそらして、

「ほんとは、まともに見ていられないような、えらい御寵愛だ。中国でも、こういう偏愛が原因となって、天下が乱れ、恐ろしい事件が起つたのだ」という有様で、次第に広い世間でも、にがにがしく非難して、人人のどうしようもない、こまった問題となつて、ついには（かの唐の玄宗が偏愛した）楊貴妃の場合のような（帝のお身の上にもかかわる）大事件が起りそうになつて行くにつけて、更衣には、強くあたられる、いやな事がたくさんあるが、帝のこの上もないありがたい御寵愛を（ただ一つの）力頼みとして、（女官たちとのつきあいのうるさい）宮中生活をしておられるのであった。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文は、「まえがき」に「原文の底本には、流布本（青表紙本）の中の善本と認められている『首書源氏物語』を選び、湖月抄本その他の諸本によって修補しました。」と記す。

##### 2、『對訳源氏物語』（以下、『對訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

どなたの御代であったか、（ある帝——かりに桐壺院と申しあげる帝の御時）女御や更衣が大勢お側仕えをしていらつしやつた中に、特に高貴な家がらというほどではない方で、格別に帝の御寵愛の深い方があった。前前から（実家の家がらからいっても）

自分こそはと、御自信の強い気位の高い方は、（あんな低い家がらの女が）あきれたものだとなしもし、また（そのあまりな御寵愛を）ねたましくもお思いになった。まして、この更衣と同じ程度や、それよりも低い家がらの更衣たちは、（とても競争がで

きないと)心がいらいらする。こうして、この更衣が、朝な夕な絶えずお側勤めをするにつけても、こうした方方の心をいらだたせて、その恨みをわが身におうのが積り積つたためであろうか、大層病気がちになって行き、心ぼそいようすで、里方きじかたにさがりがちであるのを、帝はまた、いよいよ手ばなしがたい、かわいいものにお思いついて、人人が非難するのにかまっておいでになれない、どうかすると、ひどい偏愛の例として引合くぎよういに出されそうてんじちうびとな御寵愛ぶりである。(それで、女官ばかりでなく)公卿や殿上人きんじちうびとなども、不快な感じで目をそらして、

「ほんとは、まともに見てられないような、えらい御寵愛だ。中国でも、こういう偏愛が原因となって、天下が乱れ、恐ろしい事件が起つたのだ」という有様で、次第に広い世間でも、にがにがしく非難して、人人のどうしようもない、こまった問題となつて、ついには(かの唐の玄宗が偏愛した)楊貴妃の場合のような(帝のお身の上)にもかかわる)大事件が起りそうになつて行くにつけて、更衣には、強くあたられる、いやな事がたくさんあるが、帝のこの上もないありがたい御寵愛を(ただ一つの)力頼みとして、(女官たちとのつきあいのうるさい)宮中生活をしておられるのであった。

## 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

### 一、文字数

『大成』 三八六文字

『対訳』 六八〇文字 (句読点・記号七〇字を除く)

### 二、文の数

『大成』 六文

『対訳』 五文

### 三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『対訳』 一八二文字 (漢字の占める割合二六%)

### 四、敬語の使用

『大成』 一二箇所 (尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5)

『對訳』 二二箇所

五、文脈

『大成』 (原文のまま)

『對訳』 入れ替えなし。

六、文体

『大成』 (原文のまま)

『對訳』 「だ」「である」調

七、『大成』には見られず『對訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『對訳』傍線部

八、『大成』にはありながら『對訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『對訳』波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『對訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができよう。

- 一、「( )」を一〇箇所使用している。それらは、『大成』には見られず『對訳』のみに見られる用語・表現等である。さらに、接続詞や主語を補っているため大幅に文字数が増加している。
- 二、文字数の割に漢字は少ない。
- 三、敬語が多い。
- 四、原文より文の数が少ない。
- 五、会話文を採用している。

以上のような特質が見出せる。佐成は、「まえがき」にこの現代語訳の特質を記す。引用しながら、箇条書きにて示す。

- ◇「一字一句をも損じないように注意して、現代語に復現しようと試みた」。
- ◇「口語訳を読みながら、そのもの足りない所を原文に求めたり、原文を読んで、わかりにくい所を口語訳で了解したり」できるよう「対訳」の形式をとった。
- ◇「( )」は、作中人物の詞」。
- ◇「( )」(太い括弧)は、その談話中の挿話の詞または引用文のしるし」。
- ◇『』』は、「作中人物の心中の独語風の( )」ことば。
- ◇「( )」は、「訳者が原文以外に文意を補ったもの」。

以上のうち、最大の特質と言えるものは、「訳者が原文以外に文意を補った」とする「( )」の記述である。その意図について訳者は、同「まえがき」で、「これは一つには訳文の責任をあきらかにし、一つには読者の理解を助けようとしたもの」としている。「一字一句をも損じないように注意して、現代語に復現しようと試みた」訳者であるからこそ、逆に、自身が加筆した部分について読者がわかりやすいように配慮し、工夫した結果であろう。「( )」の内容があることによって、読者は、内容理解がすすむ。また、その前後の語句とのつながりが自然であるため、文章としての違和感もないため、読み進めやすい。注として後記あるいは、脚注・頭注などを付す場合は、本文より目を離すことになる。しかし、「( )」であれば、そのまま読み進められるため、読者にとっては有益であろう。



訳者はこのような方法を取り入れたものの、厳密に言々と、「( )」なしで加筆している箇所がある。「この更衣と」、「こうして、この更衣が」、「こうして」、「帝はまた」、「広い」、「更衣には」、「帝の」である。「広い」以外は、接続詞や主語の補いである。「広い」は、「広い世間」という一種の慣用句表現といつてよいのではないだろうか。

引用部分内の「作中人物の詞」として会話文でくぐられた箇所原文出处は、「いとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれ」である。原文では、二文である。しかし、会話文を採用したことにより、一文となり、『大成』が六文であるところ、一文少ない五文となった。基本的には文の数においても忠実に訳されているといっても差し支えないであろう。

原文において「世の」とあるところを「ひどい偏愛」と訳出している点、同じく「かゝること」を「こういう偏愛」と訳出している点は、に注目したい。原文において、どちらも具体的な内容は示されていない。よって、具体的な内容を示すために訳者による考察の結果の訳出であろう。

関連して、原文の「楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくに」を「かの唐の玄宗が偏愛した」楊貴妃の場合のような（帝のお身の上にもかかわる）大事件が起りそうになって行くにつけて、「と訳出している。この部分についても内容をより具体的に示す訳出方法であるとと言える。

「偏愛」という語を採用して現代語訳している点は、訳者が研究者であり、平安の宮廷における一夫多妻制について十分な理解の上での採用ではないだろうか。つまり、宮廷においての一夫多妻制の平穏な維持のためには、帝自身の自由意思は厳禁であったと思われる。また、「偏愛」ならびに「帝のお身の上にもかかわる」大事件」との訳出からは、原文よりさらに「帝」の立場重視の視点にたった文章になっている。これらのことから、どちらかというとな男性社会重視の視点からの訳文と言えるのではないだろうか。

なお、形式的な特質として、各巻頭にその巻の略解を施し、原文を上部、訳文を下部に大きく記している点があげられる。

### 玉上琢彌

#### 一、訳者の略歴

国文学者。文学博士。大正四年三月二十四日、東京に誕生。京都帝国大学国文科卒業。大阪女子大学名誉教授。大谷女子大学教授。『源氏物語』の研究者。谷崎潤一郎『新訳源氏物語』の監修者でもある。著書には、『物語文学』、『源氏物語音読論』などがある。平成八年八月三〇日没。

#### 二、書誌

『源氏物語』全一〇巻。角川書店。

「第一巻」 (桐壺く若紫)

昭和三九年 五月一八日 三八〇頁

「第二巻」 (末摘花く花散里)

昭和四〇年 二月二五日 三九〇頁

「第三卷」	(須磨く松風)	昭和四一年	二月二五日	四一二頁
「第四卷」	(薄雲く胡蝶)	昭和四三年	二月二〇日	三七五頁
「第五卷」	(螢く藤裏葉)	昭和四四年	五月三〇日	四〇二頁
「第六卷」	(若菜上・若菜下)	昭和四五年	一〇月一〇日	四〇三頁
「第七卷」	(柏木く雲隠)	昭和四六年	六月二〇日	三九二頁
「第八卷」	(匂兵部卿く総角)	昭和四七年	六月一五日	五〇一頁
「第九卷」	(早蕨く東屋)	昭和四七年	七月三〇日	三七四頁
「第十卷」	(浮舟く夢浮橋)	昭和五〇年	一月一〇日	四七二頁

### 三、「桐壺」巻頭部

どなたさまの御代であつたか、女御や更衣が大勢お仕えなさつていた中に、たいして重い身分ではなくて、それでいてご寵愛のめだつ方があつた。

入内当初から自分こそはと氣負つておいでなさつた女御がたは、目にあまる者として、蔑んだり嫉んだりなさる。同じ格、あるいは、さらに低い更衣たちは、女御がた以上に氣が氣ではない。朝晩のお勤めにつけても、皆に氣をもませ、恨みを受ける事が、積み積つたせいだつたらうか、ひどく病弱になつてしまい、どこか頼りなげに里さがりが続くのだが、主上はますますたまらなく不憫な者とお思いで、誰の非難をもお構いあそばすお心もなく、のちのちの例にもなると思われるほどの、あそばされようである。

上達部や殿上人、その他の者までが横目でにらむありさま、実に見ていられないご寵愛ぶりである。「大陸でも、こんな原因でもつて、国も乱れ、困つたこともあつたのだ」

と、しだいに、国中でも、いやなことに、皆の苦勞の種となつて、楊貴妃の例まで引合いにししかねないほどになつてゆくので、たまらない思いがする事が多いけれども、恐れ多いご愛情の、またとないほどのなを、頼みにして、後宮生活を続けていられる。

### 四、訳文の検討

#### 1、依拠本文

玉上は、「凡例」に次のように述べている。

底本は、定家自筆本の存する巻はこれを用い、存しない巻で明融摸本の存する巻はこれを用い、その他は、池田亀鑑博士の「源氏物語大成」の底本である飛鳥井雅康筆本を用いる。

以上のことから、依拠本文は、「定家自筆本」(花散里・柏木・行幸・早蕨)を筆頭とし、「明融摸本」(桐壺・帚木・花宴・花散里・若菜上・若菜下・柏木・橋姫・浮舟)「飛鳥井雅康筆本」(いわゆる大島本)であり、青表紙本で一貫している。

## 2、『源氏物語』(以下、『玉上詠』と称する)の「桐壺」巻頭部の特質

どなたさまの御代であつたか、女御や更衣が大勢お仕えなさっていた中に、たいして重い身分ではなくて、それでいてご寵愛のめだつ方があつた。

入内当初から自分こそはと氣負つておいでなさつた女御がたは、目にあまる者として、蔑んだり嫉んだりなさる。同じ格、あるいは、さらに低い更衣たちは、女御がた以上に氣が氣ではない。朝晩のお勤めにつけても、皆に氣をもませ、恨みを受ける事が、積り積つたせいだつたらうか、ひどく病弱になつてしまい、どこか頼りなげに里さがりが続くのだが、主上はますますたまらなく不憫な者とお思ひで、誰の非難をもお構ひあそばすお心もなく、のちのちの例にもなると思われるほどの、あそばされようである。上達部や殿上人、その他の者までが横目でにらむありさま、実に見ていられないご寵愛ぶりである。「大陸でも、こんな原因でもつて、国も乱れ、困つたこともあつたのだ」と、しだいに、国中でも、いやなこと、皆の苦勞の種となつて、楊貴妃の例まで引合ひに出しかねないほどになつてゆくので、たまらない思ひがする事が多いけれども、恐れ多いご愛情の、またとないほどなのを、頼みにして、後宮生活を続けていられる。

## 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんだちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

## 一、文字数

- 『大成』 三八六文字
- 『玉上訳』 四五二文字（句読点・記号四〇字を除く）
- 二、文の数
  - 『大成』 六文
  - 『玉上訳』 六文
- 三、漢字の使用
  - 『大成』 三九文字
  - 『玉上訳』 一一六文字（漢字の占める割合二五％）
- 四、敬語の使用
  - 『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）
  - 『玉上訳』 一七箇所
- 五、文脈
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『玉上訳』 入れ替えなし。
- 六、文体
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『玉上訳』 「だ」「である」調
- 七、『大成』には見られず『玉上訳』のみに見られる用語・表現等の存在
  - 『玉上訳』 傍線部
- 八、『大成』にはありながら『玉上訳』に訳出されていない用語・表現等の存在なし
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在
  - 『玉上訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『玉上訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、文の数は同じである。
- 二、敬語は、原文より多い。
- 三、文脈の入れ替えも、訳出されていない用語・表現等もない。
- 四、会話を採用している。「もろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとほしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給」という極めて長い文章を、「大陸でも、こんな原因でもって、国も乱れ、困ったこともあったのだ」とし、文の数を変えることなく分かりやすい文章としている。
- 五、『玉上訳』のみに見られる用語・表現等は、「入内」「あるいは」「女御がた以上に」「主上は」以上、五箇所である。
- 六、「主上は」と一箇所のみ主語を補っている。
- 七、本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等は、二箇所である。「（かんたちめうへ人）なども」を、「その他の者までが」とする。つまり、「など」を「かんたちめうへ人」以外の者であると解釈している。「もろこし」を「大陸」とし、あえてル

ビを「あちら」とふっている。「大陸」は中国を指す言葉であるが、「たいりく」と読ませず、「あちら」と読ませている。

以上のような特質が見出せる。玉上は、「凡例」に次のように記す。

訳文は、独立して読めるように注意したが、原文から離れすぎないように注意した。読者が原文を味わわんことを望むからである。

文字数はさほど多くなく、『玉上訳』のみに見られる用語・表現等も同様である。「原文から離れすぎない」、原文に厳密な訳出であると言えよう。もともと原文には主語がなく、その点においても原文に極めて忠実である。分かりやすさを追求すると主語を加えがちになるが、「読者」に「原文を味わわんことを望む」ことに重きをおいた結果であろう。

このように原文に忠実な『玉上訳』であるが、原文との大きな相違点は、直接話法を用いて訳出している点である。それについて同「凡例」に記す。

・・・会話には「」を付して話者の名を括弧内に小字で記した。作中人物の心を述べた文にも「」を付したことがある。すべて分かりやすくすることを主旨とし、必ずしも統一を計らず、煩雑になることを避けた。

読者に原文を味わってもらうことを第一とし、省略をすることなく、文の数も変えることなく、少ない加筆（語句の補い）によって訳出された現代語訳と言ってよいだろう。

ただ、これが実現できたのは、本書の形式に起因するのではないだろうか。本書は、前半部分に『源氏物語』本文および脚注をおき、後半部分に現代語訳をおいているのである。例えば、「女御」「更衣」などは、現代の一般読者には理解できない言葉である。前半部分があるからこそ、それらについて訳文中に織り込んで説明することもなく、注などをつける必要はない。最小限の加筆（語句の補い）での訳出を可能にしたのは、前半部分があることが前提となる。

また本書は、訳文に小見出しを適宜付すという形式的な特質を持つ。

## 円地文子

### 一、訳者の略歴

作家、劇作家。明治三八年一〇月二日、国語学者である上田万年の二女として東京都に誕生。日本女子大学付属高等女学校中退。その後、劇作家として『晩春騒夜』などの戯曲を書く。新聞記者であった円地与四松と結婚。一女（素子）をもうける。昭和一〇年、戯曲集『惜春』を刊行後に小説家に転じる。

昭和二八年に『ひもじい月日』で第六回女流文学賞を受賞。代表作に『女坂』、『朱を奪うもの』、『なまみこ物語』、『遊魂』などがある。また、平安・江戸文学に造詣が深く、『雨月物語』や『竹取物語』の現代語訳なども行っている。昭和五四年、文化功労者。昭和六〇年、

文化勲章。昭和六一年一月一四日没。

## 二、書誌

『源氏物語』全五卷。新潮社（新潮文庫）。

「卷一」	（桐壺〜花散里）	昭和五五年	二月二五日	五〇五頁
「卷二」	（須磨〜胡蝶）	昭和五五年	二月二五日	四九一頁
「卷三」	（蛩〜若菜下）	昭和五五年	三月二五日	四七九頁
「卷四」	（柏木〜総角）	昭和五五年	三月二五日	五二五頁
「卷五」	（早蕨〜夢浮橋）	昭和五五年	四月二五日	四七七頁

## 三、「桐壺」巻頭部

いつの御代のことであつたか、女御更衣たちが数多く御所にあがっていられる中に、さして高貴な身分というではなくて、帝の御寵愛を一身に鍾めているひとがあつた。

はじめから、われこそはと心驕りしていられる方々からは、身のほど知らぬ女よと爪はじきして妬まれるし、そのひとと同じくらい、またはそれより一段下つた身分の更衣たちにすれば、まして気のもめることひとかたではない。朝夕の宮仕えにつけても、始終そういう女人たちの胸をかき乱し、その度に恨みを負うことの積りつもつたためでもあつたらうか、だんだん病いがちになってゆき、何となく心細そうにもすれば里下の度重なるのを、帝はやるせないまでに不憫なものと思召され、いよいよいとしさの増さる御様子で、人の批難など一切気にかけてやうともなさらない。まったく後の世の語り草にもなりそうな目に立つ御慈しみ方なのであつた。

上達部や殿上人なども、次第にこの話になると不服らしく眼をそらすようになって、「いや、まったく、眩しいような御寵愛ぶりですな」

「左様、唐土でも、こういう女の間違いから事が起つて、ついには天下の乱れとなるよ  
うな、よろしからぬことがあります」

などと噂し合つた。世間でもだんだんこれを困つたことに取り沙汰して、玄宗皇帝が楊貴妃の色香に溺れて、国を傾けた例などまで引かれるようになってくると、当の更衣の身にすれば、聞きづらく、居たたまれない思いのすることばりであるが、唯一つ、

帝の御愛情の世に類たくいなまで深く濃こまやかなのを頼みの綱として、表面はこの上なくみやびやかに見える後宮の女人たちの間に立ち交って宮仕えの日々を送っていた。

なお、円地は、現代語訳単行本として昭和四七年に『源氏物語』全一〇巻を刊行した。その後、文庫刊行にあたり「よりよい訳としたいために一二年を費して、細部の改訂を行った」（「口語訳源氏物語の文庫発刊によせて」）のである。よって、「円地源氏」の集大成として昭和五五年に刊行された文庫本を検討対象とした。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文について、円地もまた明示していない。そこで周辺情報から探っていく。依拠本文を推察するため、まず円地が親しんだり、読んだりした『源氏物語』の関連書籍について順を提示していく。

「清・紫二女を語る女流作家の座談会」（『むらさき 第三巻第五号』むらさき出版部 昭和十一年五月）（注1）において、「源氏を読みはじめた時」と題し、次のように話している。

**円地** 私は種彦の田舎源氏といふものがございましたので、祖母がよく聴かせて呉れました。小さい時分にそれを聴かせて呉れましたので、女学校に行かない時分に知って居りました。

『作家の自伝』七二 円地文子』においては、次のように自身で記している。

小学校へ行く前ぐらいから父方の祖母が、柳亭種彦「修紫田舎源氏」（文化文政期）の草双紙を読んでいてよくその話をしてくれた。

『《わたしの古典》円地文子の源氏物語 巻一』のはじめには、「わたしと『源氏物語』と題し、次のように記している。

父方の祖母が滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』や柳亭種彦の『修紫田舎源氏』の愛読者であったので、私は五つぐらいの頃からそういう江戸文学のフィクションに満ちた物語を聞かされて育った。その『田舎源氏』が『源氏物語』の一種のアダプテーションであることを知り、それをきっかけに『源氏物語』を読み始めたのは小学校の高学年の頃であったろうか。祖母の話してくれた下敷きがあったお陰でどうやら読み続けることができたし、やがて何度となく読み返すうちに、いつしか、『源氏』に登場する女たちの素性、生い立ち、性質をよくのみこんでいるほどの愛読者になっていた。

以上の三つの資料から、円地は小学校の入学以前に柳亭種彦『修紫田舎源氏』に親しんでいたことが伺える。

また、円地の娘である富家素子氏は、著書『童女のごとく（母 円地文子のあしあと）』

(注2)において、母円地文子について記している。その中に「絵本代わりの『源氏物語』(祖母仕込みの古典)」と題し、次のようなエピソードを記している。

歌人の佐々木信綱さんは、よく祖父の所に見えていたお客の一人である。祖父の暮の相手だったようだが、ある時、祖父と話をしていると、隣の部屋から『源氏物語』を読んでいる声がするので、

「どなたが読んでいらっしゃるのです」と尋ねると、

「あれは、末娘の文子がお手伝いに読ませているのですよ」

と祖父が言ったので、佐々木さんは驚かれたそうである。何しろ母は、当時まだ小学校にもいっていなかったのだから。・・・これなど、曾祖母からいろんな知識を自然に授かっていた母にしてみれば、絵本を読んで貰っているくらい感覚だったのだろうと思う。私も、物心ついた時から、母がいつも有朋堂文庫の『源氏物語』を手近に置き、夜は寢床に持ち込んでいることが多かったので、隣に寝ている私は、手に取ってばらばら捲っていたから、あの墨で書いたような小さな人の「ごちゃごちゃ書かれた挿絵はお馴染みだし、・・・」

この引用からは、お手伝いに読ませていたという『源氏物語』が何であったかは不明である。しかし、他の資料と照らし合わせ、年齢も併せて考えるならば、柳亭種彦『修紫田舎源氏』であろう。

このように、円地は小学校入学前から古典に興味をもち、古典を読み解く力を身に付けていたと言える。こうしてエピソードがたくさん残っていることも、円地にとって柳亭種彦『修紫田舎源氏』が大きな影響を与えたものであることに違いない。

では、先にあげた「わたしと『源氏物語』」の引用部分にある「小学校の高学年の頃」から「何度となく読み返」していたという『源氏物語』は何であったのだろうか。それについては、『作家の自伝』七二「円地文子」において、次のように自身で記している。

・・・小学校へ行くようになってからは自分でも有朋堂文庫の「田舎源氏」を読み出していたので、それが後に「源氏」と親しくなる恰好の縁になった。

「源氏物語」自身も小学校の終り頃からやはり有朋堂文庫で読み出して、四冊あるのをみんな上げてしまった。勿論、初めのうちは主格がはつきり書かれていないために、どこまでが源氏の言葉でどこからが女の言葉かわからないようなところがあった、それで大分まごついたけれど、どうやら読み進んで、「須磨帰り」も通りこし最後まで読み切った。その時分にはもう読みづらいいということはなく、あの文体にすっかりとけ込んでしまっていた様である。それ以来特別に注釈を読みながら「源氏」に親しんだことはなかった。ただ、「読書百遍意自ずから通ず」という様に本文をよく読んでいるうちに、自然に自分の読み方ができて、結構それで意味が通るのである。病気をしている時など、少し快くなってくると、枕の側に「源氏」を置いて読んでみることがよくあった。つまり私は作中に書かれた人達とひどく懇意になっていたのである。

（二）から、次の四点が読み取れる。



- ◇ 小学校入学後有朋堂文庫の『修紫田舎源氏』を読んだ。
- ◇ 小学校の終り頃から有朋堂文庫の『源氏物語』を読んだ。
- ◇ 注釈書は読んでいない。
- ◇ 枕元に『源氏物語』を置いて読んでいた。

では、枕元に置いていたという『源氏物語』は何であったのであろうか。円地の娘である富家素子氏の著書『母・円地文子』（注3）の中に「一人娘の誕生」と題した、次のくだりがある。

・・・一緒に寝ていた母の枕元にはいつも有朋堂文庫の源氏物語があつて、・・・

前出のものと合わせ富家素子氏の著書二冊の引用から、円地が枕元に置いていた『源氏物語』は有朋堂文庫のものであろうと考えられる。

では、その他に円地が現代語訳に取り組むまでと、取り組むにあたって読んだ書籍や依拠した本文はどうであらうか。それについては、「つきせぬ魅力」（注4）と題し、円地文子と丸谷才一の対談において、丸谷氏に「円地さんと『源氏物語』の関係」について質問され、次のように語っている。

**円地**・・・そもそもは父方の祖母が一種の語部みたいな人で江戸文学をよく読んでいて、学校に行かない子どもの頃によく話してくれたわけね。その中に柳亭種彦『修紫田舎源氏』があつたんです。絵表紙が色絵で、中は線だけで描いてある三世豊国の絵が綺麗で、見ながら話をきいたんです・・・『田舎源氏』は江戸時代の文化文政期の女たちの見るものですから、程度の高いものじゃありません・・・だから内容とするとつまらない。文章も大してよくない。『源氏』とは段が違います、結構ガイドナスとしておもしろかったから『源氏』に入る時は楽でした。小学校時分、父が監修してたのか家にくる有朋堂文庫を、これが本当の紫式部の『源氏物語』なのかと見てたんです。

（中略）

**円地** そんなことで読みついて、初めは主語がないから誰が喋ってるのか分からなくて参ったんですが、何やら取りついて「須磨」あたりまでも途切れもせず・・・でも半ば以後のよさが分つたのは二十代になってからでしょうね。初めは「須磨」「明石」までがおもしろかったですね。

（中略）

**円地** 私は口語訳する時には、自分の良い加減な読みでは困るから玉上琢弥さんの『源氏物語評釈』なんか読みましたが、長く読んでいるから、当たっていることの方が多ござんしたね。『源氏』には四百何人が登場するようですが、式部卿宮とか兵部卿宮とか二人も違つた人がでてくるのを全部知ってますよ。舟橋聖一さんが歌舞伎になすつた時に、これはどの式部卿宮なんて教えてあげました。

やはり、円地自身が語る中において、幼少期の『修紫田舎源氏』、そして有朋堂文庫『源氏物語』を読んだことが語られている。

そして注目すべきは、口語訳に取りかかるにあたって、玉上琢彌の『源氏物語評釈』を読んだという点である。

この点について円地は、訳業にあたり初めて『源氏物語』のオーソドックスな勉強をはじめ、その補導にあたったのが玉上琢彌であったことを「序」に記している。

私はこの訳業をはじめることが決まってから、初めて『源氏物語』のオーソドックスな勉強を始めた。その補導に当って下さったのは、『源氏物語評釈』の著者玉上琢彌博士であったが、玉上博士は、学問としての『源氏』に捉われずに自由に訳すことをすすめて下さったので、私は二種の利を同時に得る結果になった。

玉上琢彌は、『源氏物語』の研究について」と題し、『源氏物語評釈』(注5)の「概説」に次のように記している。

翻刻書では、有朋堂文庫本(四冊、最良である)、校註日本文学大系本(二冊、忍草葦草つき)、岩波文庫本(五冊、漢字を多くあてる)等いろいろあるが、『首書源氏物語』(延宝元年刊、今泉忠義博士の翻刻がある)を底本にするものが多い。

ここで玉上は、有朋堂文庫本を「最良」と記している。補導役であった玉上が、有朋堂文庫本の『源氏物語』を翻刻本として「最良」と述べている点からしても、訳業をするにあたって、新たに依拠本文として何らかのものを手元においたとは考えにくいのではないだろうか。また、円地は玉上の『源氏物語評釈』を読んでみて、自身の読み方に間違いがないと語っている。この点からしても、円地の訳業に際して、新たなものを依拠本文として手元において訳業を行なったのではなく、自身が読み続け、自身の頭の中にあった『源氏物語』を頼りに筆をすすめたのではないだろうか。

次に、訳業をするにあたって参考にしたものとして、自身の著書『源氏物語私見』に「仮名文の文体」と題し記している部分を引用する。

今度訳しているときに、参考に色々な学者の講義や注釈を見たが、明治大正期の五十嵐力博士や吉沢義則博士の注解に存外砕けた言葉がつかってあって味わいがあつたし、折口信夫博士の「玉鬘」から「藤裏葉」に及ぶ講義のノートや座談会の記事も、独特の見解があつて有益であつた。・・・谷崎潤一郎、与謝野晶子、窪田空穂という方々の訳を見ても当然そうなっているし、わかりにくいところは避けて通っているところもある。

ここから、円地が参考にした書をまとめると次のようになる。

- ・五十嵐力『昭和完訳源氏物語』(注6)
- ・吉沢義則『全譯王朝文學叢書』源氏物語』(注7)
- ・折口信夫「源氏物語全講会(昭和三年から、慶応義塾大学の国文学研究会の後援によって、公開講座として行われたもの)での講義の「玉鬘」から「藤裏葉」までのノート」(注8) および、「座談会「源氏物語研究」」(注9)
- ・谷崎潤一郎『源氏物語』(旧訳)、『源氏物語』(新訳)、『新々訳源氏物語』(注10)
- ・与謝野晶子『新譯源氏物語』『新新譯源氏物語』(注11)
- ・窪田空穂『現代語譯源氏物語』(注12)

以上が、円地が参考にしたであろうと思われる書籍である。これらはすべて現代語訳、または口語訳と言われるものである。円地自身が訳業をするに差しあたって、参考までにしたのである。ここからも、やはり訳業に取り組むときに、手元においた依拠本文はないと考えられる。あえて、依拠本文というならば、有朋堂文庫本『源氏物語』というべきだろうか。

## 2、『源氏物語』（以下、『円地訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

いつの御代のことであったか、女御更衣たちが数多く御所にあがっていられる中に、さして高貴な身分というではなくて、帝の御寵愛を一身に鍾めているひとがあった。

はじめから、われこそはと心驕りしていられる方々からは、身のほど知らぬ女よと爪はじきして妬まれるし、そのひとと同じくらい、またはそれより一段下った身分の更衣たちにすれば、まして気のもめることひとかたではない。朝夕の宮仕えにつけても、始終そういう女人たちの胸をかき乱し、その度に恨みを負うことの積りつもったためでもあったろうか、だんだん病いがちになってゆき、何となく心細そうにともすれば里下の度重なるのを、帝はやるせないまでに不憫なものと思召され、いよいよいとしさの増さる御様子で、人の批難など一切気にかかけようともなさらない。まったく後の世の語り草にもなりそうな目に立つ御慈しみ方なのであった。

上達部や殿上人なども、次第にこの話になると不服らしく眼をそらすようになって、「いや、まったく、眩しいような御寵愛ぶりですな」

「左様、唐土でも、こういう女の間違いから事が起って、ついには天下の乱れとなるよ  
うな、よろしからぬことがあります」

などと噂し合った。世間でもだんだんこれを困ったことに取り沙汰して、玄宗皇帝が楊貴妃の色香に溺れて、国を傾けた例などまで引かれるようになってくると、当の更衣の身にすれば、聞きづらく、居たたまれない思いのすることばかりであるが、唯一つ、帝の御愛情の世に類いなきまで深く濃やかなのを頼みの綱として、表面はこの上なくみやびやかに見える後宮の女人たちの間に立ち交って宮仕えの日々を送っていた。

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからすあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かたちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

一、文字数

『大成』 三八六文字

『円地訳』 六四〇文字（句読点・記号四一字を除く）

二、文の数

『大成』 六文

『円地訳』 六文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『円地訳』 一七一文字（漢字の占める割合二七％）

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『円地訳』 一一箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『円地訳』 入れ替えなし。

六、文体

『大成』 （原文のまま）

『円地訳』 「だ」「である」調

七、『大成』には見られず『円地訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『円地訳』 傍線部

八、『大成』にはありながら『円地訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『円地訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『円地訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、加筆により文字数は多い。
- 二、会話文の採用。

- 三、文の数は同じ。
- 四、敬語の数に大差はない。ただし、敬語部分を必ずしも敬語で訳出しているわけではない。
- 五、『円地訳』のみに見られる用語・表現等が多い。
- 六、心情を説明するなど、独自の解釈を施す用語・表現等が多い。
- 七、「いよ／＼」「やう／＼」などの畳語について、文章中における位置を変えている。

『円地訳』のみに見られる用語・表現等も多く、語句の入れ替えや、直接話法を用いるなど、本文に即しながらも自由に訳出している点が大きな特質である。「序」において円地自身訳業の意図および方針について記している。

自分の心で読みとった『源氏物語』を現代の読者に出来るだけ気難しくない言葉で語りかけたい願望が私にはあった。一つは自分の曲げられない意志であったが、今一つは本文への渡りのよい掛け橋にしようという気持ちだったかも知れない。そうしてその二つのことを同時にやり遂げるために、今度の訳には、和歌の極く簡単な意訳を頁の端に入れただけで、頭注を一切施さなかった。古典という重苦しい衣装を取り捨てて、並みの小説を読むような気持で、読者にこの本のページを繰ってほしかったのである。

意味の重なりあって煩わしい引き歌は省いたものもあるし、原文に引用されている故事の解説も大方訳文の中に織り込んでしまった。催馬楽、朗詠なども本文にはほんの一節だけ載っているのを何節も歌わせたりしている。

そういうことのほかに、桐壺の更衣、光源氏、藤壺の宮、六条の御息所、空蝉などの内部に立ち入って、本文では美しい紗膜のうちに朧ろに霧りかすんでいる部分に照明を与えているのは、私自身が『源氏』を読んでいるうちに自然にそこまでふくらんでいかなければならなかった止むを得ない膨張なのであって、こうした加筆を古典に対する礼を失した態度と見る読者もあるかも知れない。しかし、私は、奇を衒ったり、原作を歪曲したりするためにこの加筆を行なったのではない。『源氏』を読んでいる間に、それらの部分来ると、いつも憑かれたように自分のうちに湧き立ち、溢れたぎり、やがて静かに原文の中に吸収されてゆく情感をそのまま言葉に移して溶かし入れなければいけないままにそうしたのである。その点、私にとっては、この現代語訳は、加筆の部分をも含めて、原作への純粹な愛の表現であることに何の後ろめたさも感じない。(傍線および太字は、佐藤による。)

以上のことから、特質と思われる部分を簡条書きで抜き出す。

- ◇頭注をつけていない(注13)。
- ◇「引き歌」の中には、省いたものがある。
- ◇原文に引用されている「故事」について、その解説を訳文の中に織り込んでいる。
- ◇「催馬楽」、「朗詠」などであることがわかるように、訳文では、何度も繰り返している(注14)。
- ◇原文にはない加筆をしている。

加筆部分が特質と言える『円地訳』であるが、その加筆についておおまかに分類する。

◇主語を補う。

「帝は」

◇行為の主体を補う。

「帝の」(一箇所)

◇接続詞

「または」

◇前の文や語句を受けるなど補助的な役割を担う。

「ともすれば」「いや」「左様」「など」

◇内容や語句の説明的に補う。

「御所に」「目に立つ」「女の間違いから」「噂し合った」「玄宗皇帝が(楊貴妃の)色香に溺れて、国を傾けた」「(頼みの)綱」「表面はこの上なくみやびやかに見える」

◇心情を説明する。

「いとしさの増さる御様子で」「当の更衣の身にすれば、聞きづらく、」

◇前後に接続する語を強調する。

「一段」「すれば」「ひとかた」「その度」「まったく」「ついには」「唯一つ」

これらの加筆の多くは、内容・語句および心情の説明と前後に接続する語を強調するもので占められている。前者は頭注などを施す必要がなくなることである。後者は、文章にめりはりがつき、場合によっては臨場感を与える効果につながる。

次に、円地の訳業において、見逃せないのは敬語の処理の仕方である。原文において敬語表現が使われているにもかかわらず、敬語として訳出しているものと、敬語として訳出していないところがあるのである。これに関連して、「序」において次のように円地は記している。

・・・原文のままでは得ていたものは、多分、言葉の響き合い、触れ合い、流れという微妙な美しさだけだったであろうということである。『源氏』の文章の仮名書きの名手の筆のような流線形の美は、現在の日本語では到底伝えられないし、無理に伝えようとすれば、逆な結果を生むことを私はこの訳文の試作時代に痛感した。そして、敢えてその勁さと柔らかさを兼ねた流線形の美を現代訳の文章から削ぎ捨てていった。

すなわち、円地は平安時代の文章を現代の日本語に当てはめることの限界を感じていたのである。その部分を敢えてそぎ落とし、訳出に取り組んだと言えよう。敬語表現にこだわることなく、無理に平安朝の雰囲気を出すことに重きを置かず、訳業をすすめていったのである。この点に関し、谷崎潤一郎が敬語にこだわり、平安朝の雰囲気を出すため努力した点に真っ向から反するのである。円地は、『作家の自伝』七二「円地文子」(注15)において、「谷崎先生の存命中は、私は手を染める気にはならなかった。訳したいという気持ちはあっても、礼儀として遠慮すべきだと思っていたのである。」と記している。谷崎潤一郎へのこの「遠慮」は、自身の『源氏物語』の訳業に取り組む姿勢との違いから「遠慮」していたとも推測できるのではないだろうか。いずれにしても、円地の『源氏物語』は、忠実な翻訳ではなく、円地自身が言っているように、『源氏物語』原作への「掛け橋」的なものと言えるのではないだろうか。

直接話法を用いた点については、本来、間接話法であったものを直接話法にすることによ

り、臨場感を味わえる。また、直接話法があることにより主語も明確になり、現代の小説を読むよう円滑に読み進められる。「序」においては「並みの小説を読むような気持で、読者にこの本のページを繰ってほしかったのである」とも記しており、直接話法をもちいたことは、「小説」のようにするためのひとつの手法であったのではないだろうか。

以上のことから、加筆を積極的に行ったことならびに小説風にして現代語訳しているという特質が確認できる。

注1：秋山虔『《批評集成・源氏物語》第五卷 戦時下篇』（平成二十一年五月二五日 ゆまに書房）

注2：『童女のこゝろく（母 円地文子のあしあと）』（平成元年一月二〇日 海竜社）

注3：『母・円地文子』（平成元年三月二〇日 新潮社）

注4：円地文子ほか『古典再入門』（昭和五十六年五月一日 鎌倉書房）

注5：玉上琢彌『源氏物語評釈 第一巻』（昭和三十九年一〇月三〇日 角川書店）

注6：執筆中に死去したため、未完成に終わっている。一巻および二巻は昭和二三年から昭和二五年にかけて出版されている。

注7：『本編』四巻。「宇治十帖」二巻からなる全六巻。吉澤義則ほか九人が訳者として名を連ねている。大正一三年から大正一五年にかけて、王朝文学叢書刊行会から出版された。なお、吉澤義則の著書には『對校 源氏物語新釈』もあるが、ここにあげた他の書籍がすべて現代語訳または口語訳であることからして、円地の参考書としては『全譯王朝文学叢書』が妥当かと思われる。

注8：折口博士記念古代研究所編『《折口信夫全集》ノート編 第十四巻』の「あとがき」をまとめたものである。

注9：折口博士記念古代研究所編『《折口信夫全集》ノート編 第十五巻』の「あとがき」においてこの座談会は雑誌「三田文学」の、昭和二六年九月、一〇月号に掲載されたものであると記されている。出席者については、折口信夫、小島政二郎、池田弥三郎、奥野信太郎、木々高太郎、以上五人であることが明記されている。

注10：「旧訳」とよばれる『源氏物語』は全二六巻。昭和一四年一月から昭和一六年七月にかけて出版された。「新訳」とよばれる『源氏物語』は全一二冊。昭和二六年五月から二九年一二月にかけて出版された。「新々訳」とよばれる『新々訳源氏物語』は全一一巻。昭和三九年一月から昭和四〇年一〇月にかけて出版された。出版社は、いずれも中央公論社。

注11：『新譯源氏物語』は全三巻四冊。明治四五年二月から大正二年一一月にかけて出版された。『新新譯源氏物語』は全六巻。昭和一三年一〇月から昭和一四年九月にかけて出版された。出版社は、いずれも金尾文淵堂。

注12：全八巻。昭和二二年五月から昭和二四年七月にかけて改造社より出版された。

注13：頭注は施していないが、和歌については、本文中に原文を載せ、ページの最後に青い文字で小さく現代語訳されている。

注14：一例をあげる。112では、比較対象として、『《新編日本古典文学全集》源氏物語』を用いた。

（阿部秋生ほか校注・訳『《新編日本古典文学全集》源氏物語 ①』、「若紫」巻、一二二―一二三頁）

……弁の君、扇はかなううち鳴らして、「豊浦の寺の西なるや」とうたふ。  
(円地文子『源氏物語 卷一』、「若紫」卷、二六九頁)

……弁の君は扇を軽く打ち鳴らして拍子をとりながら、

「豊浦の寺の西なるや、

榎の葉井に白玉しづくや、ま白しづくや、

おしとんど、おしとんど」

と催馬楽の葛城をよい声で節面白く謡われる。

なお、〈円地〉『源氏物語』において、「催馬楽」、「朗詠」の部分すべてが、このような形式をとっているのではないということをつけ加えておく。

注 15: 円地文子『作家の自伝』七二 円地文子』(平成一〇年四月二五日 日本図書センター)

### 今泉忠義

#### 一、訳者の略歴

国語学者。文学博士。明治三十三年七月一七日、愛知県に誕生。國學院大學文学部を卒業。國學院大學名誉教授。三矢重松、折口信夫に学ぶ。『国語発達史大要』、『国語史概説』、『現代語の性格』、『日葡辞書の研究』などの著書がある。昭和五十一年一月五日没。

#### 二、書誌

#### 『源氏物語 現代語訳』全一〇巻。桜楓社。

「一」	(桐壺く若紫)	昭和四九年一〇月二五日	二〇五頁
「二」	(末摘花く花散里)	昭和四九年一月二五日	一九七頁
「三」	(須磨く絵合)	昭和四九年一月二五日	一九七頁
「四」	(松風く初音)	昭和五〇年一月二五日	二〇四頁
「五」	(胡蝶く藤裏葉)	昭和五〇年二月二五日	二三九頁
「六」	(若菜上く柏木)	昭和五〇年四月二五日	二四六頁
「七」	(横笛く竹河)	昭和五〇年五月二五日	二四四頁
「八」	(橋姫く総角)	昭和五〇年七月二五日	一八一頁
「九」	(早蕨く東屋)	昭和五〇年八月二五日	一九〇頁
「一〇」	(浮舟く夢浮橋)	昭和五〇年十月二五日	二六一頁

#### 三、「桐壺」巻頭部

どの帝の御代だったか、女御とか更衣とか、お后が大勢お仕へ申しあげていらした中に、特に重々しい身分ではないお方で、格別に御寵愛を蒙っていらつしやるお方(桐壺更衣)があつたさうだ。御入内の初めから、自分こそはと氣位の高くていらつしやるお



后方（特に女御など）は、目障りな奴が現れたもんだと、蔑さげすんだり嫉いんだりしていらつしやる。が、更衣と同じ身分の、あるいはそれよりも低い身分の更衣方は、女御方以上に尚更気が気でない。桐壺の更衣は、明ければ退下、暮ればまた参上とお側仕へをするにつけても、他のお后方の心をやきもきさせたので、さうした方々の恨みを受けることが積り積つたためだったのだらうか、ひどく病氣勝ちになつて行つて、何となく心細い気持で、お里さかに下つてゐることが多いので、帝は物足りないお気持ちで、これまで以上にかはゆくてかはゆくてたまらなくお思ひで、誰が何とけなしても、とても気兼ねをなさることもおできにならないくらゐ、かうしたことでのひとつの実例ともなりさうなお扱ひぶりだ。お后方ばかりか、公卿や殿上人なども、これではあんまりだと、目をそらしそらしするほど、それはそれは、まともには見てもゐられないくらゐ、大変な御寵愛を蒙つてをられるお方ではある。唐土でもかういふことが原因となつて、国も乱れ、とんでもないことにもなつたんだと、だんだん世間の人もおもしろくない気がして、誰もこれをどう扱つたらいいのか、もてあましの種にもなつて来、結局はあの玄宗皇帝を溺れさせた楊貴妃の例も引合ひに出さないではゐられなくなつて行くので、更衣にとつてはどうにも恰好のわるいことが多いのだけれども、とにかく帝のまたとないほどのありがたい御寵愛を唯一の頼みどころとしてお后の生活をつづけてをられる。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

今泉は、「はしがき」に次のように記す。

この現代語訳は、青表紙系の版本中では最善本と称せられる首書源氏物語の本文に拠つた。

よつて、依拠本文は、『首書源氏物語』であることが明らかである。また、同「はしがき」には、次のような文言がある。

大正の頃によくもあれほど精緻な域にまで達しておられたと思われる三矢重松先生の御講義、つづいて眼光紙背に徹するといった折口信夫先生の御講義を聞かせていただいた筆者には、両先生の口真似みたいな口調が随所に現れる。ありがたくももったいないこととも思われる。それに、古くは萬水一露・首書・湖月抄に玉の小櫛など、新しくは有朋堂文庫本・吉沢義則博士の新釈以来の諸家のお説をいただいたところも多いのだが、その都度ことわることはできなかつた。

三矢重松および折口信夫の講義を参考とし、次の注釈書を参照したことがわかる。

・能登永閑『萬水一露』（天正三年（一五七五）刊行か？）

- ・北村季吟『湖月抄』（延宝三年（一六七三）刊行）
- ・本居宣長『源氏物語玉の小櫛』（寛政十一年（一七九九）刊行）
- ・三浦理・塚本哲三編『有朋堂文庫』源氏物語』（大正三年（一九一四）〜大正六年（一九一七）有朋堂）
- ・吉澤義則『對校源氏物語新釋』（昭和十二年（一九三七）〜十五年（一九四〇）平凡社）

2、『源氏物語 現代語訳』（以下、『今泉訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

どの帝の御代だったか、女御とか更衣とか、お后が大勢お仕へ申しあげていらした中に、特に重々しい身分ではないお方で、格別に御寵愛を蒙つていらつしやるお方（桐壺更衣）があつたさうだ。御入内の初めから、自分こそはと気位の高くていらつしやるお后方（特に女御など）は、目障りな奴が現れたもんだと、蔑<sup>さげす</sup>んだり嫉<sup>さげす</sup>んだりしていらつしやる。が、更衣と同じ身分の、あるいはそれよりも低い身分の更衣方は、女御方以上に尚更気が気でない。桐壺の更衣は、明ければ退下、暮ればまた参上とお側仕へをするにつけても、他のお后方の心をやきもきさせたので、さうした方々の恨みを受けることが積り積つたためだったのだらうか、ひどく病氣勝ちになつて行つて、何となく心細い気持で、お里に下<sup>さ</sup>つてゐることが多いので、帝は物足りないお気持ちで、これまで以上にかはゆくてかはゆくてたまらなくお思ひで、誰が何とけなしても、とても気兼ねをなさることもおできにならないくらゐ、かうしたことでのひとつの実例ともなりさうなお扱ひぶりだ。お后方ばかりか、公卿や殿上人なども、これではあんまりだと、目をそらしそらしするほど、それはそれは、まともには見てもゐられないくらゐ、大變な御寵愛を蒙つてをられるお方ではある。唐土でもかういふことが原因となつて、国も乱れ、とんでもないことにもなつたんだと、だんだん世間の人もおもしろくない気がして、誰もこれをどう扱つたらいいのか、もてあましの種にもなつて来、結局はあの玄宗皇帝を溺れさせた楊貴妃の例も引合ひに出さないではゐられなくなつて行くので、更衣にとつては、どうにも恰好のわるいことが多いのだけれども、とにかく帝のまたとないほどのありがたい御寵愛を唯一の頼みどころとして、お后<sup>きさ</sup>の生活をつづけてをられる。

『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かたちちめうへ人なともあいななくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなり

ゆくにくいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

- 一、文字数  
『大成』 三八六文字  
『今泉訳』 六八九文字（句読点・記号四六字を除く）
- 二、文の数  
『大成』 六文  
『今泉訳』 六文
- 三、漢字の使用  
『大成』 三九文字  
『今泉訳』 一七九文字（漢字の占める割合二六％）
- 四、敬語の使用  
『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）  
『今泉訳』 二九箇所
- 五、文脈  
『大成』 （原文のまま）  
『今泉訳』 入れ替えなし。
- 六、文体  
『大成』 （原文のまま）  
『今泉訳』 「だ」「である」調
- 七、『大成』には見られず『今泉訳』のみに見られる用語・表現等の存在  
『今泉訳』傍線部
- 八、『大成』にはありながら『今泉訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在  
『今泉訳』波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『今泉訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、主語などの加筆のほか、補足説明などが多いことから、文字数が非常に多い。
- 二、敬語が多い。
- 三、『今泉訳』のみに見られる用語・表現等が非常に多い。
- 四、訳文に（ ）を用い、加筆部分を明瞭に示している。
- 五、「さうだ」「とか」「もんだ」「なつたんだ」など、話し言葉の採用。
- 六、女主人公の呼び名を「桐壺の更衣」と明言している。
- 七、畳語が多い。「かはゆくてかはゆくて」「そらしそらし」「それはそれは」。
- 八、独自の解釈による訳出。「人の御おほえなり」の主体を帝から更衣に変更して訳出している。
- 九、歴史的仮名遣いを採用（注1）。

以上のような特質が見出せる。文章量が大幅に増加したことについては、原文にはない加筆の部分が多いことに起因していると考えられる。加筆部分については、( ) を用いているが、それ以外にも見られる。加筆部分について、以下に大まかに分類する。

◇具体的内容の説明や前後の語句についての補足的説明。

・「とか」「とか」を加筆している。当時の宮廷における天皇の夫人は、女御と更衣だけではないため、続く「お后が」の内容の一例とした表現になっている。  
・括弧書きにて「(桐壺更衣)」を加筆している。冒頭部分にて、ここで登場する更衣が桐壺と呼ばれる更衣であると読者に早々と知らせている。読者にとっては、登場人物名がだされたほうが、読み進めやすい。しかし、原文に忠実ではない。原作者は、意図をもって、ここでは人物名をあげていない可能性が考えられる。

・「御入内の」を加筆することによって、何の「はしめより」なのか、読者の理解を助け読み進めやすくなっている。

・「御方く」を「お后」と訳出し、「(特に女御など)」としたのは、「それより下らうの更衣たち」と、後に続く文章から、ここでは女御が該当するであろうという読み込みによる加筆である。

・「が、更衣と」は、「が、」という前の文からのつながりをもたせた語を入れることにより、一連の内容であることが理解される。「更衣と」とすることにより、「おなしほと」を具体的になにと同じなのか、理解を助けている。

・「女御方以上に」は、前の文をうけて誰がということを具体的に説明するための加筆。

・「他の」は、「人の」という一般的な幅広く訳出できる語句を具体化して明確に示している。

・「さうした方々の」は、誰の「うらみ」かを具体的に示している。

・「誰もこれをどう扱つたらいいのか、」は、「人のもてなやみくさ」の内容を具体的に説明している。

・「結局はあの玄宗皇帝を溺れさせた」は、「楊貴妃のためし」の内容を解説している。

・「帝の」は、「かたしけなき御心はへ」の主体を説明している。

◇内容等を強調する表現。

・「たまらなく」は、帝の思いを強調している。

・「お后ばかりか」は、前述の「お后」たちの話を受けている。よって、今の宮廷のありさまをより強調することとなる。

・「それはそれは」は、「まともには見てもあられない」状況をおおげさな表現で強調している。

・「とにかく」は、今まで語ってきたいくつかの(不都合な)状況をひとまとめにしている表現で、それらがあってもそれ以上に帝の思いが強いことを強調している。

・「唯一の」は、「頼みどころ」をより強調するものとなっている。

◇主語を補う。

・「お后が」は、何が「さぶらひ給ける」のかの説明として加筆している。

- ・「桐壺の更衣は、」は、主語を補っている。
- ・「帝は」は主語を補っている。
- ・「更衣にとつては」は、「いとほしたなきことおほかれと」の主体を具体的に示している。

◇会話調の表現。

- ・「さうだ」という、会話調の表現を加筆することにより、物語の語り出し風になっている。物語のありかたの伝統を表現している。
- ・「が現れたもんだ」という、会話調の表現を加筆することにより、「おとしめそねみ給」をより読者に印象付ける効果がある。

今泉自身の考え方は、どうであつたのであろうか。「はしがき」から引用する。

できるだけ原文に即した現代語譯をと努めたのだけれども、御承知のやうに、現代の口語は原文よりも丁寧語が多く、逆に謙遜表現は今にもなくなりさうなくならぬ少ないのだから、そこにずれの出るのも仕方ないことだらう。例へば、「あなづられ奉る」を「馬鹿におせられ申しあげる」とでもしてみたら、それが現代語かといはれるだらうが、これは、現代語にうつしたなら、こんなにもなるだらうといふところを見せたに過ぎない。こんな現代語譯があつてもいいのではないだらうか。

「原文に即した現代語譯」をめざしたことがうかがえる。

そもそも『源氏物語』は、女房による語りという形態である。そのことからすると、「女御とか更衣とか」「いらした」「さうだ」「現れたもんだ」「が、更衣と」「気が気でない」「やきもき」「かはゆくてかはゆくて」「そらしそらし」「それはそれは」「とんでもないことになつたんだ」「いいのか」などは、語りを意識した表現といつてよいのではないだらうか。しかしながら、「現れたもんだ」とんでもないことになつたんだ」など、会話文に見られる部分ではあるものの、女性の語りの口調としてはやや乱暴な感があり、いささか砕け過ぎているとも思われる。

『今泉訳』は、今泉独自の考察による加筆や独自の言い回し表現を採用した訳出方法であると言えよう。また、歴史的仮名遣いでの刊行も特質のひとつとしてあげられる。

構成上の特質としては、「絵入源氏物語」の絵を採用している点が挙げられる。それについて「はしがき」に次のように記している。

讀者の目を休めるための思ひ、江戸初期に刊行された繪入源氏物語の卷々のすべての繪を挿繪がはりに入れることにした。

これについては、訳者のいうとおり、文字ばかり続くのを避け、読み進めやすいよう「目を休めるため」の、読者への配慮であろう。

推測にすぎないが、今泉はこれを、『源氏物語』が描かれた当時の物語の享受の方法に近づけるため試みたのではないだらうか。絵をみながら語りを聴くという当時の享受法を少しでも現代の読者に味わってもらいたかつたのではないだらうか。

注1…後年、講談社学術文庫より刊行となる文庫本は、現代仮名遣いに改められている。

おのりきぞう

一、訳者の略歴

大正五年、静岡県に誕生。立正大学高等師範科卒業。大岡博主宰歌誌「菩提樹」入社。高等学校にて教職につく。カナモジカイ会員。紫式部学会員。(注1)

二、書誌

『源氏物語』全一〇巻。古川書房。

「(一)」	(きりつぼくわかむらさき)	昭和五三年二月一日	二六二頁
「(二)」	(すゑつむはなはなちるさと)	昭和五四年一月一日	二四三頁
「(三)」	(すまゝまつかぜ)	昭和五四年四月一日	二六五頁
「(四)」	(うすぐもゝこてふ)	昭和五四年七月一日	二五四頁
「(五)」	(ほたるゝふぢのうらは)	昭和五四年九月三日	二六三頁
「(六)」	(わかな 上くわかな 下)	昭和五五年一月三十一日	二四四頁
「(七)」	(かしはぎゝまぼろし)	昭和五五年六月一日	二五〇頁
「(八)」	(にほふみやゝあげまき)	昭和五五年一月一日	三〇六頁
「(九)」	(さわらびゝあづまや)	昭和五五年二月一日	二二二頁
「(十)」	(うきふねゝゆめのうきはし)	昭和五六年五月一日	二八三頁

三、「桐壺」巻頭部

いづれの帝みかどの時ときでございましたか、女御にようごや更衣こうい 大ぜいのかたがたの中で、さして重々しんじやうしくもない家の お娘おむすめが、帝から たいへん だいじにされておりました。はじめから われこそ、と 思いあがっていたかたがたは、「そんな なまいきな。」と、さげすんだり ねたんだり、まして おなじぐらい、あるいは、それより下の更衣こういのかたがたは、おだやかではありません。

ほんの朝夕あすけの宮仕みやつかいえにしろ、人の気きばかりもませ、そのうらみが 積り積たまりつたと言うのでしょうか、ひどく病弱びじやくになって、心細こころこまげに、里さとにさがりがちです。帝は、いよいよ かわいそうに思い、世人よじんのそしりも気きにかけず、世間よじんのたとえ話はなしにもなるほどに かわいがるのでした。上達部かんだちぶ・殿上人てんじやうびとなども、目をそむけるほどでした。中国でも こうしたことがもとで、国くにが乱れたのだ、と、だんだん 国中くにぢゆうの人びとの心配しんぱいの種くさねになつて、ようきひの 話はなしなども 引きだされるようなことになってゆくのでした。したが、それに つけても、ひどく ていさいの悪いできごとが たくさんございました。しかし、たぐいのない ありがたい 帝みかどのお心にすがって、更衣こういは 宮仕みやつかいえを続けていきました。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

おのの『源氏物語（一）』の「あとがき」は、次のように記す。

この本の テキストは、池田亀鑑校註 源氏物語 七さつ本 日本古典全書 朝日新聞社刊です。そのほか、山岸徳平校註 源氏物語 五さつ 日本文学大系 岩波書店刊行、阿部秋生 秋山虔 今井源衛 校註、訳 六さつ 日本文学全集 小学館 刊の、ごやつかいになりました。

右により、おのの依拠したテキストは、池田亀鑑校註『日本古典全書』源氏物語』全七卷（昭和二十一年二月 朝日新聞社）であることが分かる。

また、参照したとされる書籍は、次のとおり。

- ・山岸徳平校註『日本古典文学大系』源氏物語』全五卷（昭和三十三年一月）昭和三八年四月 岩波書店
- ・阿部秋生ほか校註・訳『日本古典文学全集』源氏物語』全六卷（昭和四五年一月）昭和五一年二月 小学館

##### 2、『源氏物語』（以下、『おの訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

いづれの帝みかどの時ときでございましたか、女御にようごや更衣こうい 大ぜいのかたがたの中で、さして重々おもおもしくもない家の お娘おむすめが、帝みかどから たいへん だいじにされておりました。はじめから われこそ、と 思いあがっていたかたがたは、「そんな なまいきな。」と、さげすんだり ねたんだり、まして おなじぐらい、あるいは、それより下の更衣こういのかたがたは、おだやかではありません。

ほんの朝夕あすけの宮仕みやつかいえにしる、人の気ばかりもませ、そのうらみが 積り積つたと言うのでしょうか、ひどく病弱びじやくになって、心細こころこまげに、里にさがりがちです。帝みかどは、いよいよ かわいそうに思い、世人よじんのそしりも気きにかけず、世間のたとえ話たとえばなしにもなるほどに かわいがるのでした。上達部かんたちめ・殿上人てんじょうびとなども、目をそむけるほどでした。中国でも こうしたことがもとで、国が乱れたのだ、と、だんだん 国中こくちゆうの人びとの心配しんぱいの種くさねになつて、ようきひの 話わなしなども 引きだされるようなことになってゆくのですが、それに つけても、ひどく ていさいの悪いできごとが たくさんございました。しかし、たぐいのない ありがたい 帝みかどのお心にすがって、更衣こういは 宮仕みやつかいえを続けていました。

#### 『源氏物語大成』

いつれの御時ごときにか女御更衣にようごこういあまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我われはと思あかり給へる御方ごなたくめさまし

きものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからすあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえはゝからせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かந்தちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

一、文字数

『大成』 三八六文字

二、文の数 『おの訳』 四二〇文字（句読点・記号三七字を除く）

『大成』 六文

『おの訳』 六文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『おの訳』 六六文字（漢字の占める割合一五％）

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『おの訳』 七箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『おの訳』 入れ替えなし。

六、文体

『大成』 （原文のまま）

『おの訳』 「です」「ます」調

七、『大成』には見られず『おの訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『おの訳』 傍線部

八、『大成』にはありながら『おの訳』に訳出されていない用語・表現等の存在

『大成』 傍線部

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『おの訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『おの訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、主語や接続詞を補うほか、常用漢字を用いることが可能な箇所には、あえてひらがなを採用しているため文字数の増加がみられる。
- 二、文の数は同じであるが、一般的に区切られる箇所とは異なる。
- 三、漢字の占める割合は小さい。
- 四、敬語は少ない。「すくれて時めき給ありけり」の帝の行為に対する敬語が訳出され



ていない。「世のためしにもなりぬへき御もてなし也」を、「帝」を主語としながら、敬語で訳出してはいない。

五、「です」「ます」調を採用。

六、会話文の採用。

七、語句と語句の間にスペースをとっている。

八、「いとまはゆき人の御おほえなり」を訳出してはいない。

九、「さして重々しくもない家の お娘が、帝から たいへん だいにされておりました」「かわいがるのでした」など、帝の更衣に対する扱いについて極めて平易な語句を用い、独自の解釈を施す表現をしている。

これらについて、おの自身の考えはどのようなものであったのだろうか。おのは、「あとがき」に、訳出の趣旨や姿勢を記している。

この源氏物語を 若い人に ぜひ読んでもらいたい、そう思つて この本を 書きました。中学生や高校生にも、現代小説を読むように、親しく 気やすく 読んでもらいたい。今まで、いくつか 源氏物語の 現代語訳は ありますが、これが この本の とくちよう、言えましよう。

(中略)

・・・この、ほんやくも、そうした物語ほんらいの、耳で聞くだけで わかる、やさしい 話しことばで、と、思い、漢語、漢字は、できるかぎり させました。どはずれた 言いかたをすれば、「かな」だけで わかる文章をと 試みました。・・・原典の持つ、リズム、味 が、それによって ほんの わずかでも 再現できたら、と、なぐさめて います。

『おの訳』は、「ようきひ」など固有名詞も仮名書きにしており、「漢語」「漢字」をできるだけ避け、「かわいがる」など「やさしい話しことば」で訳出されている。原典の「リズム」や「味」の再現をめざしながら「現代小説」を読むように読んでもらいたいとした結果、「です・ます」調を採用し、また音読を基本とした平安朝の物語の享受方法を再現するためスペースをおくことになったのであろう。

かな文字を意識し、音読を念頭におくという明確な訳出基準による、おの独自の現代語訳である。

また、和歌の処理について、同「あとがき」に次のように記す。

・・・散文と和歌が、時に からみ合い、時に とけ合い、自然と人間、ことと心を やわらかに もやのように、つつんでいます。平安朝的というか、絵巻物語的というか、この物語 どくとくの ふんい気を かもし出しています。しかし、こうした味わいは、とても 訳せません。和歌を、わざわざ 三行がきに しました。わかりやすくしたつもりです。おおよその意味を 本文に 入れこめました。原典には ないことです。

和歌を原文のまま、三行書きにし、意味を本文に織り込むとした点も、おのの現代語訳の特質でひとつと言えよう。

注1…訳者の略歴については、おのりきぞう『源氏物語』（昭和五三年一月二〇日 古川書房）より抜粋した。

## 秋山虔

### 一、訳者の略歴

国文学者。大正一三年一月二三日、岡山県に誕生。東京帝国大学大学院国文科修了。東京大学名誉教授。『源氏物語』をはじめ、平安朝文学の研究で特段の成果をあげている。『源氏物語の世界』、『王朝の文学空間』、『源氏物語の女性たち』など、著書多数。平成元年、紫綬褒章受章。平成一三年、文化功労者、勲二等瑞宝章。平成二十七年一月一八日没。

### 二、書誌

#### 『源氏物語』全一〇巻。小学館。（注1）

〔一〕	（桐壺く若紫）	昭和五八年	一月三一日	四六六頁
〔二〕	（末摘花く花散里）	昭和五八年	一〇月三一日	四〇六頁
〔三〕	（須磨く絵合）	昭和五九年	五月三一日	三八二頁
〔四〕	（松風く胡蝶）	昭和六〇年	二月二八日	四五〇頁
〔五〕	（蛩く藤裏葉）	昭和六〇年	七月三一日	四三〇頁
〔六〕	（若菜上・若菜下）	昭和六一年	七月三一日	四二二頁
〔七〕	（柏木く幻）	昭和六二年	五月三一日	四一七頁
〔八〕	（匂宮く総角）	昭和六二年	一〇月三一日	五〇九頁
〔九〕	（早蕨く東屋）	昭和六三年	四月三〇日	三八九頁
〔十〕	（浮舟く夢浮橋）	昭和六三年	一〇月三一日	四九一頁

### 三、「桐壺」巻頭部

どの帝みかどの御代みよであつたか、女御にようじや更衣こういが何人もお仕えしておられた中に、たいして重々しい家柄ではない方で、格別に帝のご寵愛ちようあいをこうむっていらつしやる方があつた。宮仕えの初めから、我こそはと自負しておられた女御がたは、この方を、目に余る者とさげすんだり憎んだりなさる。同じ身分、またはそれより低い地位の更衣たちは、女御がたにもまして気持がおさまらない。朝夕の宮仕えにつけても、そうした人々の胸をかきたてるばかりで、恨みを受けることが積り積つたためだったろうか、まったく病がちの身となり、どことなく頼りなげな様子で里下がりも度重なるのを、帝はいよいよたま

らなく不憫な者とおぼしめされて、他人の非難に気がねなざる余裕さえもなく、これでは世間の語りぐさとならずにはすまぬもてなされようである。上達部、殿上人なども、あらずもがなに、目をそむけそむけして、まったく正視にたえぬご寵愛ぶりである。唐土でも、こうしたことがもとになって、世の中も乱れ、不都合な事態にもなったものだと、しだいに世間一般でも、情けないことと、人々のもてあましの種になって、はては、楊貴妃の例までも引合いに出しかねぬなりゆきなので、更衣は、まことにいたたまれないことが多いけれども、畏れ多い帝のまたとないお情けを頼りにして宮仕えをしていらつしやる。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文については、「凡例」に次のようにある。

一、本書の本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（平安博物館所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したものである。河内本・別本の本文は参考として掲げるにとどめた。

右により、依拠本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本を中心とした青表紙本であることが明らかである。

##### 2、『源氏物語』（以下、『秋山訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

どの帝の御代であったか、女御や更衣が何人もお仕えしておられた中に、たいして重々しい家柄ではない方で、格別に帝のご寵愛をこうむっていらつしやる方があった。宮仕えの初めから、我こそはと自負しておられた女御がたは、この方を、目に余る者とさげすんだり憎んだりなさる。同じ身分、またはそれより低い地位の更衣たちは、女御がたにもまして気持がおさまらない。朝夕の宮仕えにつけても、そうした人々の胸をかきたてるばかりで、恨みを受けることが積り積ったためだったろうか、まったく病がちな身となり、どことなく頼りなげな様子で里下がりも度重なるのを、帝はいよいよたまらなく不憫な者とおぼしめされて、他人の非難に気がねなざる余裕さえもなく、これで

は世間の語りぐさとならずにはすまぬもてなされようである。上達部、殿上人なども、あらずもがなに、目をそむけそむけして、まったく正視にたえぬご寵愛ぶりである。唐土でも、こうしたことがもとになって、世の中も乱れ、不都合な事態にもなったものだ。と、しだいに世間一般でも、情けないことと、人々のもてあましの種になって、はては、楊貴妃の例までも引合いに出しかねぬなりゆきなので、更衣は、まことにいたたまれないことが多いけれども、畏れ多い帝のまたとないお情けを頼りにして宮仕えをしていらつしやる。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみようこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数

『大成』 三八六文字

『秋山訳』 五一六文字（句読点三六字を除く）

#### 二、文の数

『大成』 六文

『秋山訳』 六文

#### 三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『秋山訳』 一二七文字（漢字の占める割合二五％）

#### 四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『秋山訳』 一七箇所

#### 五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『秋山訳』 入れ替えなし。

#### 六、文体

『大成』 (原文のまま)

『秋山訳』 「だ」「である」調

七、『大成』には見られず『秋山訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『秋山訳』傍線部

八、『大成』にはありながら『秋山訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在  
なし

右に掲げた九点それぞれの相違から、『秋山訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができよう。

- 一、若干の内容補足や主語および接続詞を加筆しているため、文字数は多くなっている。
- 二、文の数は同じである。
- 三、漢字は多い。
- 四、敬語は多い。
- 五、「だ」「である」調である。
- 六、文脈の入れ替えもなく、訳出されていない用語・表現等もない点から、逐語訳的である。

『秋山訳』のみに見られる用語一三箇所について検討する。

◇主語を補う。

「帝は」「更衣は」

◇行為の主体を補う。

「帝の」(二箇所)

◇接続詞を補う。

「または」

◇内容を補足する。

「宮仕え」「この方を」「身分」「女御がたにも」「はては」

◇(前の文を受ける語として)文と文や語句をつなぐために補う。

「そうした」「これでは」

主語を補ってはいえるものの、必ずしもすべてではなく、内容を補足する語についても、大きく逸脱することなく、解説というほどの長さでもない。最小限の語句を加筆した現代語訳と言えよう。

また、「めをそはめつゝ」を「目をそむけそむけして」とし、「つゝ」を厳密に訳出している。この点からも、原文に忠実な現代語訳と言える。

敬語についても原文における敬語部分については、敬語として訳出されている。ただし、「おぼしめされて」が現代で一般的に使用される言葉であるかについては疑問も残る。「おぼしめされて」自体が、古語と云えるのではないだろうか。

このほか、形式的な特質としては、本書前半部に原文と脚注をおき、後半部分に通読できる現代語訳本文を置いている。原文を置くという形式から、専門書に近いと言える。参考までに、平成六年三月一日に小学館より刊行されることとなる『新編 日本古典文学全集』

源氏物語①』（注2）の訳文を掲出する。

『《新編 日本古典文学全集》源氏物語①』の該当部分を引用し（注3）、相違点について傍線を施す。

帝はどなたの御代であつたか、女御や更衣が大勢お仕えしておられた中に、最高の身分とはいえぬお方で、格別に帝のご寵愛をこうむつていらつしやるお方があつた。宮仕への初めから、我こそはと自負しておられた女御がたは、このお方を、目に余る者とさげすんだり憎んだりなさる。同じ身分、またはそれより低い地位の更衣たちは、女御がたにもまして気持がおさまらない。朝夕の宮仕えにつけても、そうした人々の胸をかきたてるばかりで、恨みを受けることが積り積つたためだつたらうか、まつたく病がちの身となり、どことなく頼りなげな様子で里下がりも度重なるのを、帝はいよいよたまらなく不憫な者とおぼしめされて、他人の非難に気がねなさる余裕さえもなく、これでは世間の語りぐさとならずにはすまぬもてなされようである。上達部、殿上人なども、あらずもがなに、目をそむけそむけして、まつたく正視にたえぬご寵愛ぶりである。唐土でも、こうしたことがもつて、世の中も乱れ、不都合な事態にもなつたものだ、しだいに世間の人々の間でも、にがにがしくもてあましぐさになり、はては、楊貴妃の例までも引合いに出しかねぬなりゆきであるから、更衣は、まつたくいたたまれないことが多いけれども、畏れ多い帝のまたとないお情けを頼りにしてお宮仕え（を）していらつしやる。

『秋山訳』は、研究者らしい一語一句に厳格な逐語訳であるという特質をもつ。

注1…この『源氏物語』は、『完訳 日本の古典』全六〇巻（小学館）の「第十四巻」から「第二十三巻」である。「校注・訳者」は、阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男である。ただし、「凡例」において「現代語訳は秋山虔が執筆した」と明記されているため、単独訳者であるとして取り扱うこととした。

注2…阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男『《新編 日本古典文学全集》源氏物語①』（平成六年三月一日 小学館）

注3…ルビについては、省略した。

## 中田武司

### 一、訳者の略歴

国文学者。文学博士。昭和九年、岐阜県高山市に誕生。昭和三四年、國學院大學大学院文学研究科修士課程修了。専修大学名誉教授。著書には、『王朝歌物語の研究と新資料』、『泉州本伊勢物語の研究』などがある。武田祐吉博士記念賞受賞。

### 二、書誌

三、「桐壺」巻頭部

どの帝の御代であつたか、天皇の妃とかこれに次ぐ更衣とかが大勢お仕え申しあげておいでのなかに、それほど身分の高い家柄ではなくて、だれよりも特別にご寵愛をうけておられるお方があつた。入内の最初から、自分こそはと自負していらつしやる妃や更衣たちは、目障りな人とさげすんだり妬んだりしておられる。同じ身分やあるいはそれよりも低い身分の更衣たちは、なおさら心が穏やかではない。朝夕の宮仕えに関しても、他の妃たちの気持をむやみといらだたせ、その恨みを受け、それが積もり積もつたせいであろうか、めつきり病気がちになつてゆき、何となく心細げで、実家へ下がりがちであつたので、帝はますます満足することなく、いい人だと思ひになられて、他人のけなしなどに関しても何も遠慮なさることもなく、世間の語り草にもなりそうにご寵愛である。上達部や殿上人などにいたるまでも、あんまりだと、目に角をたて角をたてして、とても見ていられないほどのご寵愛ぶりである。唐土でもこうしたことが原因となつて、世の中も乱れ、国政が悪くなつたのだと、次第次第に世間でも面白くないことだと、人の苦の種となつて来て、楊貴妃の例までも引き合いに出されそうになつてゆくため、更衣には随分とつまらないことが多いのだけれども、帝の恐れ多いご寵愛がこのうえもないのを頼みの綱として、宮仕えの生活を送つておいでになられる。

四、訳文の検討

1、依拠本文

依拠本文については、「あとがき」に次のように記されている。

・・・源氏物語の原文は、どれを底本とするかには多くの問題もあるが、青表紙本系統の善本を本文とする、石田讓二・清水好子両氏校訂の「日本古典集成」（新潮社）を中軸に、「日本古典文学大系」本や「日本古典全集」などを参考にした。

ここから、中田が依拠したテキストは、石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語』全七巻（昭和五年六月～昭和五八年一月 新潮社）を中心としたものであることが分かる。また、ここに記されている「日本古典文学大系」とは、山岸徳平校注『日本文学大系』源氏物語』全五巻（昭和三三年一月～昭和三八年四月 岩波書店）。ただし、「日本古典全集」については、列挙されている他の全集本の傾向や出版年代からして、與謝野寛ほか編『日本古典全集』源氏物語』全五巻（大正一五年一〇月～昭和三年一月 日本

古典全集刊行會)ではなく、阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語』全六卷(昭和四五年一月  
昭和五一年二月 小学館)と推察する。

## 2、『源氏物語』(以下、『中田訳』と称する)の「桐壺」巻頭部の特質

どの帝の御代であつたか、天皇の妃とかこれに次ぐ更衣とかが大勢お仕え申しあげ  
ておいでのなかに、それほど身分の高い家柄ではなくて、だれよりも特別にご寵愛をう  
けておられるお方があつた。入内の最初から、自分こそはと自負していらつしやる妃や  
更衣たちは、目障りな人とさげすんだり妬んだりしておられる。同じ身分やあるいは  
それよりも低い身分の更衣たちは、なおさら心が穏やかではない。朝夕の宮仕えに関し  
ても、他の妃たちの気持をむやみといらだたせ、その恨みを受け、それが積もり積もつ  
たせいであろうか、めっきり病気がちになつてゆき、何となく心細げで、実家へ下がり  
がちであつたので、帝はますます満足することなく、いらい人だと思ひになられて、  
他人のけなしなどに関しても何も遠慮なさることもなく、世間の語り草にもなりそう  
なご寵愛である。上達部や殿上人などにいたるまでも、あんまりだと、目に角をたて角  
をたてして、とても見ていられないほどのご寵愛ぶりである。唐土でもこうしたことが  
原因となつて、世の中も乱れ、国政が悪くなったのだと、次第次第に世間でも面白くな  
いことだと、人の苦の種となつて来て、楊貴妃の例までも引き合いに出されそうになつ  
てゆくため、更衣には随分とつまらないことが多いのだけれども、帝の恐れ多いご寵愛  
がこのうえもないのを頼みの綱として、宮仕えの生活を送つておいでになられる。

## 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあ  
らぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさまし  
きものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからず  
あさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけ  
むいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物  
におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてな  
し也かんとちめうへ人なともあいななくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなり  
もろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのし  
たにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなり  
ゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみに  
てましらひ給

### 一、文字数

#### 『大成』

三八六文字



『中田訳』 五四八文字（句読点三二字を除く）

二、文の数

『大成』 六文

『中田訳』 六文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『中田訳』 一四四文字（漢字の占める割合二六％）

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『中田訳』 一六箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『中田訳』 入れ替えなし。

六、文体

『大成』 （原文のまま）

『中田訳』 「だ」「である」調

七、『大成』には見られず『中田訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『中田訳』 傍線部

八、『大成』にはありながら『中田訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『中田訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『中田訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

一、補足的な語句や女性の身分についての説明が文中に織り込まれているため、文字数は多い。

二、文の数は同じ。

三、二重敬語があるため、敬語は増加している。

四、「目に角をたて」「頼みの綱」など慣用句的表現を用いる。

五、「あんまりだ」という話し言葉を採用。

ここで、『中田訳』のみに見られる用語九箇所について検討する。

◇主語を補う。

「帝は」

◇行為の主体を補う。

「更衣には」「帝の」（二箇所）

◇接続詞を補う。

「あるいは」

◇内容を補足する。

「だれよりも」「入内の」「いたるまでも」「国政が」

主語の補いは一箇所のみであり、内容を補足する語句についても大きく内容に作用するような加筆ではない。

中田独自の解釈を施す用語・表現については、二種に分類できる。

◇慣用句的表現を用いた。

「めをそはめつゝ」↓「目に角をたて角をたて」

「たのみにて」↓「頼みの綱として」

◇女性の身分関連部分。

「女御更衣」↓「天皇の妃とかこれに次ぐ更衣とか」

「御方／＼」↓「妃や更衣たち」

「人の」↓「他の妃たち」

慣用句的表現を用いることで読者のスムーズな理解を助けるとともに、文全体がすつきりまとまりリズムカルになる。また、平安時代当時の女性の身分については、現代人には理解しがたいのだが、その説明を本文の中に織り込んでいる。文字数増加の理由の大半はこれらによるであろう。

そのほか、文字数増加の要因としては、「お仕え申し上げておいでのなかに」、「宮仕えの生活を送っておいでになられる」など、二重敬語がみられる点であろう。

文の数を減らすことなく、主語についても最低限の加筆に留めて主語のない原文を尊重した訳出となっている。また、適宜、現代の読者には理解できないであろう箇所のみ簡潔な説明を加えている。総じて、忠実に現代語訳された研究者らしい逐語訳であるが、話し言葉を使用するなど、読みやすさをも併せもつという特質が見出せよう。

## 中井和子

### 一、訳者の略歴

国文学者。昭和二年、京都府に誕生。京都大学文学部国文学科を卒業。京都府立大学名誉教授。満州にて抑留経験を持つ。帰国後、夫とともに神戸市にて診療所を開設し、その経営にも携わる。『和子の満州抑留記』、『源氏物語と仏教』、『21世紀によむ日本の古典6 源氏物語』、『源氏物語 かさねの世界』などの著書がある。平成二十二年一月二十八日没。

### 二、書誌

『現代京ことば訳 源氏物語』全三巻。大修館書店。

- |              |             |       |
|--------------|-------------|-------|
| 「一 桐壺―乙女」    | 平成 三年 六月 一日 | 六八五頁  |
| 「二 玉鬘―雲隠」    | 平成 三年 六月 一日 | 一三六四頁 |
| 「三 匂兵部卿―夢浮橋」 | 平成 三年 六月 一日 | 一九九五頁 |

### 三、「桐壺」巻頭部

どの天子さんの御代のござりましたやろか。女御によごや更衣こういが大勢侍つといやしたなかに、そないに重い身分の方ではござりまへんで、それはそれは時めいいいやすお方がござりました。

はじめから、ご自分こそはと、自惚うぬぼれをもつといやすお方々は、出すぎた女しとやと、さげすんだり嫉ねたんだりしておいでぞす。同おじなじぐらいやら、もつと下の更衣たちは、なおさら気が休まりまへん。朝晩の宮仕えのたんびに、人さんの氣イばかりもまして、恨みをうけたのがつもりもったのどっしゃるか、病気がちで、心細そうに、お里にばっかり下らありますので、余計ふびんにお思い遊ばして、人のそしりもお構いやさんと、このことが世の例ためしにもなつてしまひそうなおもてなしでござります。

上達部かんだちめや、殿上人てんじょうびとなども、どうしようものう、つい目をそむけて、「ほんまに、みたられへんようなご寵愛ぶりやなあ。唐もろこしでも、きつとこないなことがもとで乱がおこり、困ったことになつたんやがなあ」と、時がたつにつれて世の中の人も苦々しう、なやみの種にするようになり、楊貴妃ようきひの例ためしにも引かれたりして、ほんまにはしたくないことばかり多かったのどすけど、有難いご寵愛の、この上ないのだけをたよりに、殿上のおつき合いをしといやすのでござります。

(脚注)

目をそむけて・・・「京師ノ長吏之ガ為ニ目ヲ側ム」(長恨歌伝、陳鴻)

### 四、訳文の検討

#### 1、依拠本文

中井は、「序」に次のように記す。

京ことば訳に際しては、玉上琢彌著『源氏物語評釈』をはじめ、多くの方の著書を参考にさせていただいた。

これより、中井が依拠したテキストは、玉上琢彌『源氏物語評釈』全一四卷(昭和三九年一〇月)昭和四四年八月 角川書店)を中心としたものではあるが、必ずしもこれに特定できないようである。

## 2、『源氏物語』（以下、『京ことば訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

どの天子さんの御代のござりましたやろか。女御や更衣が大勢侍つといやしたなかに、そないに重い身分の方ではござりまへんで、それはそれは時めいいいやすお方がござりました。

はじめから、ご自分こそはと、自惚れをもつといやすお方々は、出すぎた女やと、さげすんだり嫉んだりしておいでです。同なじぐらいやら、もつと下の更衣たちは、なおさら気が休まりまへん。朝晩の宮仕えのたんびに、人さんの氣イばかりもまして、恨みをうけたのがつもりつもつたのどっしやるか、病気がちで、心細そうに、お里にばっかり下らはりますので、余計ふびんにお思い遊ばして、人のそしりもお構いやさんと、このことが世の例しにもなつてしまひそうなおもてなしてござります。

上達部や、殿上人なども、どうしようものう、つい目をそむけて、「ほんまに、みたられへんようなご寵愛ぶりやなあ。唐でも、きつとこないなことがもどで乱がおこり、困ったことになつたんやがなあ」と、時がたつにつれて世の中の人も苦々しう、なやみの種にするようになり、楊貴妃の例しにも引かれたりして、ほんまにはしたくないことばっかり多かつたのどすけど、有難いご寵愛の、この上ないのだけをたよりに、殿上のおつき合いをしといやすのでござります。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かたちちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれどやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数（注1）

『大成』

三八六文字

『京ことば訳』

四八三文字（句読点・記号三九字を除く）

二、文の数

『大成』

六文

『京ことば訳』

六文

三、漢字の使用

『大成』

三九文字

『京ことば訳』

八六文字（漢字の占める割合一七％）

四、敬語の使用

『大成』

一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『京ことば訳』

一八箇所

五、文脈

『大成』

（原文のまま）

『京ことば訳』

入れ替えなし。

六、文体

『大成』

（原文のまま）

『京ことば訳』

「です」「ます」調

七、『大成』には見られず『京ことば訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『京ことば訳』傍線部

八、『大成』にはありながら『京ことば訳』に訳出されていない用語・表現等の存在

『大成』傍線部

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『京ことば訳』は、全体を通して京ことばによる独自の表現法である。

右に掲げた九点それぞれの相違から、『京ことば訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができよう。

一、京ことばによる「です」「ます」調。

二、文の数は同じ。

三、会話文を採用。

四、『京ことば訳』のみに見られる用語は、「天子さんの」「このことが」「きっと」の三箇所のみ。

五、『京ことば訳』に訳出されていない用語は「いと」の一箇所のみ。

加筆された用語や、訳出されていない用語も少ない。直接話法を用いながら、全体を京ことばによる語りで表現しているからであろう。

「語り」による訳出方法により、本来の物語の姿が表現されたため、主語を補うことなく訳出できた。また、「語り」であるため漢字もさほど使用せずに表現できたのであろう。ただし、敬語については多くなっている。

中井は、「あとがき」に訳出する際の考え方や方針について記している。

・・・『源氏物語』を研究の対象にしているので、主語に欠ける、述語部分が長い『源氏物語』の表現法は、案外、京ことばの表現に近いのではないか、これは試してみるだけのことはあるのではなからうかということになった。

「桐壺」の巻を、可なりの時間をかけて訳したと思う。ところが、訳してみると、共

通語の場合には、主語を補ったり、あの長い述語の部分を、時々読点で切って終止形でおさめないと、何のことなのかわからない『源氏物語』の文章が、京ことばにおきかえると、そういうことをしなくても、そのまま大方の意味が通じるのである。……

また、同「あとがき」には、次のように記す。

……京都の人は、(中略) おかば、お釜さん、お豆さん、お目出とうさん、ご苦労さん、という具合に、無機物や観念に、おやさんをつけて、自分たちの仲間にするのもその一例だろう。……

「桐壺」冒頭掲出部分内の該当箇所は次のとおり。

「天子さん」

「お方」

「お方々」

「人さん」

「お里」

「お」や「さん」を付けることにより文字数は増加する。また、原文においては、「さと」とあるのにもかかわらず、「お」を付けたことにより、敬語表現となった。また、「ご自分」についても、同様のことが言えるであろう。

敬語として訳出されている部分で、「ござりま(す)」の多用が目立つ。この件に関して、中井は次のように記す。

……平安朝の言葉は、助動詞が豊富である。(中略) この助動詞の豊富さには、京ことばと雖も、とても太刀打ちできない。(中略) 『源氏物語』のように、華やかに多岐に言いおさめられないで、ともすれば、単純な言いおさめになってしまう。

「ござりま(す)」の多用は、中井が言う典型例であろう。

語り口調(話し言葉)に重点をおいた京ことばによる訳出は、結果、原文との大きな相違なく、文字数も大幅に増加させずに済むこととなった。

『源氏物語』を現代語訳する際、大きな問題となり、読者の理解のために補わざるを得ない主語の問題を京ことばにおいては、主語を補うことなく訳出した点はおおきな特質であろう。

注1…「同じなじ」「気い」の傍線部のカタカナ表記については、発音する際の助けとするためのものであることから文字数として数えない。

## 瀬戸内寂聴

### 一、訳者の略歴

作家、尼僧。本名は、晴美。大正十一年五月十五日、徳島市に誕生。東京女子大学国語専攻部卒業。神仏具商の家に生まれ、小学生の頃から文学に親しんでいた。大学在学中に結婚。夫の赴任地の中国に渡る。翌年、長女を出産。その後、長女を連れて帰国。夫の教え子と恋愛関係となり、夫と長女を残し、家を出る。出版社に勤めながら、小説を書く。少女小説が少女雑誌に掲載され、そのうち童話も書くようになる。昭和三十一年、処女作『痛い靴』を発表、本格的に小説家として歩み出す。昭和四八年、中尊寺にて天台宗で得度、法名を寂聴とする。翌年、京都嵯峨野に「寂庵」を結ぶ。

昭和三二年『女子大生・曲愛玲』（新潮社同人雑誌賞）、昭和三八年『夏の終わり』（女流文学賞）、平成四年『花に問え』（谷崎潤一郎賞）、平成八年『白道』（芸術選奨文部大臣賞）、平成一三年『場所』（野間文芸賞）。そのほか著書は多数。平成九年、文化功労者となる。平成一八年、文化勲章を受賞。現在も、メディアなどで活躍中。

### 二、書誌

#### 『源氏物語』全一〇巻。講談社。

「巻一」	(桐壺く若紫)	平成	八年	二月一日	二九六頁
「巻二」	(末摘花く花散里)	平成	九年	二月二五日	二九八頁
「巻三」	(須磨く松風)	平成	九年	四月二五日	三一七頁
「巻四」	(薄雲く胡蝶)	平成	九年	五月二四日	二八七頁
「巻五」	(蛭く藤裏葉)	平成	九年	七月一〇日	三一三頁
「巻六」	(若菜上・若菜下)	平成	九年	九月三日	二八九頁
「巻七」	(柏木く紅梅)	平成	九年	一〇月三〇日	三四七頁
「巻八」	(竹河く総角)	平成	九年	一二月一九日	三二三頁
「巻九」	(早蕨く東屋)	平成	一〇年	二月二七日	二八一頁
「巻十」	(浮舟く夢浮橋)	平成	一〇年	四月二日	三四四頁

### 三、「桐壺」巻頭部

いつの御代みよのことでしたか、女御にようごや更衣こういが賑々しくお仕えしておりました帝みかどの後宮こうぐに、それほど高貴な家柄の御出身ではないのに、帝に誰よりも愛されて、はなばなしく優遇ゆうぐされていらつしやる更衣がありました。

はじめから、自分こそは君寵第一にとうぬぼれておられた女御たちは心外で腹立たしく、この更衣をたいそう軽蔑けいべつしたり嫉妬しつたしたりしています。まして更衣と同じほどの身分か、それより低い地位の更衣たちは、気持のおさまりようがありません。

更衣は宮仕えの明け暮れにも、そうした妃<sup>きのみ</sup>たちの心を掻き乱し、烈しい嫉妬の恨みを受けることが積もり積もったせいなのか、次第に病<sup>やまい</sup>がちになり衰弱してゆくばかりで、何とはなく心細そうに、お里に下がって暮す日が多くなってきました。帝はそんな更衣をいよいよいらしく思われ、いとしさは一途につのるばかりで、人々のそしりなど一切お心にもかけられません。全く、世間に困った例として語り伝えられそうな、目を見はるばかりのお扱いをなさいます。

上達部<sup>かんだちめ</sup>や殿上人<sup>てんじょうびと</sup>もあまりのことに見かねて目をそむけるといふ様子で、それはもう目もまばゆいばかりの御鐘愛<sup>ごしょうあい</sup>ぶりなのです。

「唐土<sup>もちし</sup>でも、こういう後宮のことから天下が乱れ、禍々<sup>まがまが</sup>しい事件が起こったものだ」などと、しだいに世間でも取沙汰をはじめ、玄宗皇帝に寵愛されすぎたため、安禄山<sup>あんろくざん</sup>の大乱を引きおこした唐の楊貴妃の例なども、引き合いに出すありさまなので、更衣は居たたまれないほど辛いことが多くなつてゆくのでした。ただ帝のもつたいない愛情がこの上もなく深いことをひたすら頼みにして、宮仕えをつづけています。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文について瀬戸内は明示していない。依拠本文を推察するため、まずは、瀬戸内と『源氏物語』の出会いから、順をおって見ていくことにする。

瀬戸内は著書『わたしの源氏物語』(注1)の冒頭に、「出逢い」と題してこう書きだしている。

はじめて源氏物語を読んだ日を、わたしはなぜかはつきり記憶している。

今から半世紀も昔のことで、晩春の雨の土曜日の午後だった。昭和十年(一九三五)、わたしは十三歳で、その春、徳島県立の女学校に入ったばかりの一年生だった。……体育館の隣に建っている図書館に入っていた。

(中略)

「源氏物語 与謝野晶子訳」という文字が、わたしの目を引きよせた。……わたしは厚い本を開いた。

(中略)

読みやすい歯切れのいい文章に案内され、わたしは一気に源氏物語の世界に引き込まれていった。

(中略)

谷崎潤一郎訳の『源氏物語』が、中央公論社から刊行されはじめたのは、それから四



年後の昭和十四年一月からであった。

緑色の和綴じのその本を注文し、毎月本屋から届くのを楽しみにしていた。……これは戦後に新訳がされて「ございます調」に変わり、いつそう原文の感じに近くなった。

(中略)

それから更に三十三年たって、円地文子訳『源氏物語』が、新潮社から刊行されはじめた。

ここにあげられている『源氏物語』とされるものは、すべて現代語訳である。訳者名、書名、巻数を列挙する。

・与謝野晶子『新譯源氏物語』全三巻四冊(明治四五年二月〜大正二年一月 金尾文淵堂)

・谷崎潤一郎『源氏物語』全二六巻(昭和一四年一月〜昭和一六年七月中央公論社)

・谷崎潤一郎『源氏物語』全一二巻(昭和二六年五月〜昭和二九年二月 中央公論社)

・円地文子『源氏物語』全一〇巻(昭和四七年九月〜昭和四八年六月 新潮社)

瀬戸内は自身の訳業にあたって、三者の現代語訳を読みくらべながら作業したとされ、そのことを語るインタビュー記事がある(注2)。

……『与謝野源氏』『谷崎源氏』『円地源氏』と、お三人のすばらしい業績がありますから、やりはじめたら、それが山のように目の前にふさがって。だって原文は一つですからね、それを訳すのに、意味は一つでしょ、それを同じことばを使ってはいけいならないと、困ってしまうんですよね(笑)。もう、一字一字、ページごとに三つ読むんですよ(笑)。こういうふうがちがうように書かなくてはいけない、と。それでも似てくるんですよ。そうすると、編集の校閲で、全部チェックしてくるんです。これは円地さんのことば、これは小学館と。

与謝野、谷崎、円地のそれぞれの現代語訳が比較対象になっていたことが分かる。では、ここに見る「小学館」とは何を指すのであろうか。出版年から推察すると次の二つ(注3)が考えられる。

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『日本古典文学全集』源氏物語』全六巻(昭和四五年一月〜昭和五一年二月 小学館)

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『完訳 日本の古典』源氏物語』全一〇巻(昭和五九年〜平成元年 小学館)

そこで、現代語訳に重点を置くとなると、ここで言う「小学館」とは、『完訳 日本の古典』源氏物語』のことを指していると考えられる。その理由は、それぞれの書籍が目指す目的及び対象とする読者層の違いにある。ここで、それぞれの凡例で関係すると思われる箇所を抜粋する。

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『日本古典文学全集』源氏物語』

一、口語訳は、原文に即して訳し、それだけで、この物語を味わいうるようにつとめたが、同時に、本文や頭注と、相互に他を補って理解を深めることを期待しているものである。

・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『《完訳 日本の古典》源氏物語』

一、現代語訳については、次のような配慮のもとに執筆した。

1 原文に即して訳すことを原則としたが、また独立した現代文としても味わい得るように訳出につとめた。

2 そのために、必要に応じて(1)主語・述語の補充、(2)語順の変更、(3)会話・独白(モノローグ)・心内語・引用における「」の添加、(4)文中の言いさしの言葉には下に補いの言葉を付加することなどの工夫をした。

3 (省略)

4 (省略)

5 (省略)

一、解説については、以下のような方針をとった。

1 学術的な成果をふまえつつ、一般読者にもわかりやすく書き下ろした。  
2 (省略)

『《日本古典文学全集》源氏物語』は、どちらかというと専門家向けである。それに対し、『《完訳 日本の古典》源氏物語』では、「独立した現代文として」の現代語訳をめざしており、そのために多くの工夫をしている。また、「解説について」の凡例から、一般の読者を想定していることが読み取れる。『《完訳 日本の古典》源氏物語』は学術研究書というよりは、書題からもわかるように、現代語訳を主軸においた、一般の読者層をも想定した書籍である。よって、与謝野、谷崎、円地のそれぞれの現代語訳と並ぶものとなると、『《完訳 日本の古典》源氏物語』の可能性が高いと思われる。

書名や、出版社名があげられ、瀬戸内が現代語訳の作業を行うにあたって参照したと思われるものの資料は以上である。では、肝心の依拠テキストは何であったのか。

これについては、有力な参考資料がある。『《少年少女古典文学館》第五巻 源氏物語 上』(注4)の「編集の基準」である。

底本は、新潮社版新潮古典集成『源氏物語』一〜八を基準とし、適宜諸本を参照した。

これは、『《新潮日本古典集成》源氏物語』(注5)を指している。『《少年少女古典文学館》第五巻 源氏物語 上』は、平成四年に出版されているので、瀬戸内が『源氏物語』の訳業に取りかかる直前ぐらいに仕上げたものであろうと推察できる。

よって、瀬戸内が依拠したテキストは、『《新潮日本古典集成》源氏物語』の可能性が最も高いと言えるのではないか。

2、『源氏物語』(以下、『寂聴訳』と称する)の「桐壺」巻頭部の特質

いつの御代のことでしたか、女御や更衣が賑々しくお仕えしておりました帝の後宮に、それほど高貴な家柄の御出身ではないのに、帝に誰よりも愛されて、はなばなしく優遇されていらつしやる更衣がありました。

はじめから、自分こそは君寵第一にとうぬぼれておられた女御たちは心外で腹立たしく、この更衣をたいそう軽蔑したり嫉妬したりしています。まして更衣と同じほどの身分か、それより低い地位の更衣たちは、気持のおさまりようがありません。

更衣は宮仕えの明け暮れにも、そうした妃たちの心を掻き乱し、烈しい嫉妬の恨みを受けることが積もり積もったせいなのか、次第に病がちになり衰弱してゆくばかりで、何とはなく心細そうに、お里に下がって暮す日が多くなってきました。

帝はそんな更衣をいよいよいらしく思われ、いとしさは一途につのるばかりで、人々のそしりなど一切お心にもかけられません。

全く、世間に困った例として語り伝えられそうな、目を見はるばかりのお扱いをなさいます。

上達部や殿上人もあまりのことに見かねて目をそむけるといふ様子で、それはもう目もまばゆいばかりの御鐘愛ぶりなのです。

「唐土でも、こういう後宮のことから天下が乱れ、禍々しい事件が起こったものだ」などと、しだいに世間でも取沙汰をはじめ、玄宗皇帝に寵愛されすぎたため、安禄山の大乱を引きおこした唐の楊貴妃の例なども、引き合いに出すありさまなので、更衣は、居たたまれないほど辛いことが多くなつてゆくのでした。ただ帝のもつたたいない愛情がこの上もなく深いことをひたすら頼みにして、宮仕えをつづけています。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

- 一、文字数
  - 『大成』 三八六文字
  - 『寂聴訳』 六二四文字（句読点三八字を除く）
- 二、文の数
  - 『大成』 六文
  - 『寂聴訳』 九文
- 三、漢字の使用
  - 『大成』 三九文字
  - 『寂聴訳』 一七一文字（漢字の占める割合二七％）
- 四、敬語の使用
  - 『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）
  - 『寂聴訳』 一〇箇所
- 五、文脈
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『寂聴訳』 入れ替えなし。
- 六、文体
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『寂聴訳』 「です」「ます」調
- 七、『大成』には見られず『寂聴訳』のみに見られる用語・表現等の存在
  - 『寂聴訳』 傍線部
- 八、『大成』にはありながら『寂聴訳』に訳出されていない用語・表現等の存在
  - なし
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在
  - 『寂聴訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『寂聴訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができます。

- 一、『寂聴訳』のみに見られる用語・表現等が多く、文字数は増加している。
- 二、長文を分割しているため、文の数は大変多い。
- 三、四字熟語を用いるなど、漢字の割合も比較的多い。
- 四、敬語は少ない。
- 五、語句の入れ替えを含め、独自の解釈を施す用語・表現等が多い。

文字数の多さは、『寂聴訳』のみに見られる用語・表現等および独自の解釈を施す用語・表現等の多さによるものであろう。

『寂聴訳』のみに見られる用語・表現等については、おおよそ次のように分類できる。

◇主語を補う。

「更衣は」（二箇所）「帝は」

◇行為の主体を補う。

「ただ帝の」

◇内容の説明や補足。

「君寵第一に」「この更衣を」「まして更衣と」「身分か」「激しい嫉妬の」「衰弱してゆくばかりで」「そんな更衣を」「困った」「目を見はるばかりの」「後宮の」「玄宗皇帝に寵愛されすぎたため、安祿山の大乱を引き起こした唐の」「(居たたまれない)ほど辛い」「ただ帝の」

◇(前の文を受ける語として) 文と文や語句をつなぐために補う。  
「全く」「それはもう」「など」

多くは、内容の説明や補足である。また、本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等も多くみられるが、これらは、難解な部分や、現代人には理解できない当時の生活様式や社会環境を本文中に織り込んでいけると言える。よって文字数は大きく増加することとなる。

さらに、文字数の増加要因として、一つの長文をその内容により三つに分割し、それをそのまま一つずつの段落としている点があげられる。

あさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえはくからせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也

これに対応する訳文は次のとおり。

更衣は宮仕えの明け暮れにも、そうした妃たちの心を掻き乱し、烈しい嫉妬の恨みを受けることが積もり積もったせいなのか、次第に病がちになり衰弱してゆくばかりで、何とはなく心細そうに、お里に下がって暮す日が多くなってきました。

帝はそんな更衣をいよいよいらしく思われ、いとしさは一途につのるばかりで、人々のそしりなど一切お心にもかけられません。

全く、世間に困った例として語り伝えられそうな、目を見はるばかりのお扱いをなさいます。

一文を三文にし、かつ段落分けすることにより、大変読み進めやすくなった。また、その際、主語を加筆している。明快にはなるが、文字数は増加する。

原文に即しながら、内容の説明や補足をし、独自の解釈を織り込み、読み進めやすくなったという特質をもつのが『寂聴訳』なのである。

それでは、瀬戸内自身はどのような方針をたてて訳業に取り組んだのであろうか。瀬戸内は、インタビュー(注6)で次のように話している。

・・・私はとにかく現代の人に読んでもらいたいという思いがいちばん強いものですから、・・・それととにかくわかりやすいように書いて、それで最後にはおもしろいと思えば原文を読んでちょうだい、という気持ちなんです。ですからあくまで原文への橋渡しのような感じだね、とにかく国民の全部が読んでほしいという思いなんです・・・

瀬戸内は、より多くの人々に読んでもらうために、「わかりやすさ」に重点をおいたことがわかる。

また、「原文への橋渡し」とある。これは、『寂聴訳』が一方で原文通りではないことを意味しているのではないだろうか。

明快さを基本方針としたことにより、内容の説明や補足、さらには独自の解釈を加え、一文を短くし読みやすさを追求した現代語訳なのである。

注1…瀬戸内寂聴『わたしの源氏物語』（平成五年六月二五日 集英社）

注2…『源氏研究 第三号』（平成一〇年四月二〇日 翰林書房）において、「源氏物語の魅力」を語る」というテーマで、三田村雅子氏、河添房江氏、松井健児氏のインタビューに答えている。

注3…『新編日本古典文学全集』源氏物語』については出版年が平成六年であることから、訳業当初より読んでいたとは考えにくい。

注4…瀬戸内寂聴『少年少女古典文学館』第五巻 源氏物語 上』（平成四年一月一九日 講談社）

注5…石田譲二ほか校注『新潮日本古典集成』源氏物語』全八巻（昭和五十一年〜昭和六〇年 新潮社）

注6…注2に同じ。

## 尾崎左永子

### 一、訳者の略歴

歌人、作家。本名は、礎瑛子。昭和二年一月五日、東京都に誕生。東京女子大学国文科卒業。大学在学中から、佐藤佐太郎に短歌を学ぶ。また在学時、石村貞吉、松尾聡の授業をうける。卒業後、放送詩、音楽劇、作詞などを手がける。昭和四〇年から昭和四一年には、夫に従ってボストンに住む。帰国後、杉原聡門下に入る。昭和三二年歌集『さるびあ街』（第四回日本歌人クラブ推薦歌集（現…日本歌人クラブ賞）、昭和六〇年『源氏の恋文』（日本エッセイスト・クラブ賞）、昭和六三年『土曜の歌集』（ミューズ賞）、平成一一年『夕霧峠』（遼空賞）、平成二七年、『佐太郎秀歌私見』（日本歌人クラブ大賞）を受賞。歌集多数。『源氏物語』に関する著書として『源氏の薫り』、『光源氏の四季 王朝のくらし』などがある。

### 二、書誌

#### 『新訳 源氏物語』全四巻。小学館。（注1）

- 〔一〕（桐壺〜関屋） 平成 九年一〇月一〇日 二五二頁
- 〔二〕（絵合〜真木柱） 平成 九年一月一〇日 二六八頁
- 〔三〕（梅枝〜竹河） 平成 九年二月一〇日 二五四頁
- 〔四〕（橋姫〜夢浮橋） 平成一〇年 一月一〇日 二五四頁

### 三、「桐壺」巻頭部

むかし、どの帝の御代のことでありましたか、女御・更衣などたくさんのお妃がお仕えしている中に、さほどご身分の高い方ではありませんのに、ひとときわ帝のご寵愛を受けている方がいらっしやいました。はじめから身分も教養も高く、われこそはと思っておられる女御たちは、それをたいそうけしからぬことと嫉みましたし、まして同じ程度の地位の更衣たち、あるいはもつと下位にある妃たちは、心おだやかではられません。朝夕の宮仕えのうちにも、そうした妬みを受けることの多いせいか、更衣は次第に病がちになっていかれました。

父大納言はもう亡くなられ、古い家柄の出である母尼君だけが、お里の邸を守っておられましたが、ほかの女御たちのように皇族や大臣家も出身ではないこともあって、後盾は何もありません。住いのお局も、帝のお住いである清涼殿からははるかに遠い淑景舎でした。淑景舎は、中庭に桐が植えられていて、桐壺の別名がありますので、この方は桐壺更衣と呼ばれていらっしやいました。

帝は、後盾のないのがいっそうかわいそうで、人がとやかく言うのをあえて無視なされて、ほかのはなばなしい女御たちにも負けないよう、いろいろ気を配っていらっしやいました。が、それでもなお、何かと事のある時には、桐壺更衣はいつも心細い様子でした。

帝のご寵愛があまり目立ちますので、上達部や殿上人なども、楊貴妃の例もあることだからと、次第に世の乱れを心配して噂するようになりましたから、更衣はいたたまれない気持でしたけれど、帝のご愛情だけを頼りにして、宮中にお暮しになるほかはありませんでした。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

尾崎は、依拠本文について明示していない。『源氏物語』に関する尾崎の刊行本から探る。

・『源氏の恋文』（昭和五九年四月二五日 求龍堂）「あとがき」より。

なお、原文は新潮集成本によりましたが、口語訳は私自身のものを用いました。・・・

・『源氏の薫り』（昭和六一年八月二五日 求龍堂）「あとがき」より。

なお、この本は、前者『源氏の恋文』の続篇としての性格をもっていますので、併せてお読みいただければうれしいと思います。前者に倣って、原文は新潮集成本によりましたが、口語訳は私自身のものを用いました。・・・

・『光源氏の四季——王朝のくらし』（平成元年二月二〇日 朝日新聞社）「結び」より。

原文の引用は、『源氏物語』については主として『新潮日本古典集成』、『万葉集』については『新訓万葉集』（岩波文庫）、その他は『日本古典文学大系』（岩波文庫）を参考にした。

・『源氏の明り』（平成九年八月七日 求龍堂）「あとがき」より。

なお、『源氏物語』の原文は主として新潮社の「古典集成」本に拠った。

さらに、同書の末尾に「主要参考文献一覧」を掲載。そこには、次のようにある。

源氏物語 岩波日本古典文学大系版 新潮日本古典集成版 小学館日本古典文学全集版  
源氏物語大成（池田亀鑑） 中央公論社版

これらのことから、尾崎は『源氏物語』に関する著書執筆に際して、主として『新潮日本古典集成』『源氏物語』を使用していたと思われる。また、『新訳 源氏物語』および『源氏の明り』の刊行年月日が近いことから、「主要参考文献一覧」に掲げられた刊行本も併せて参考にしていただであろう。

## 2、『源氏物語』（以下、尾崎『新訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

むかし、どの帝の御代のことでありましたか、女御・更衣などたくさんのお妃がお仕えしている中に、さほどご身分の高い方ではありませんのに、ひとときわ帝のご寵愛を受けている方がいらつしやいました。はじめから身分も教養も高くて、われこそはと思っておられる女御たちは、それをたいそうけしからぬことと嫉みまし、まして同じ程度の地位の更衣たち、あるいはもっと下位にある妃たちは、心おだやかではいられません。朝夕の宮仕えのうちにも、そうした妬みを受けることの多いせいか、更衣は次



第に病がちになつていかれました。

父大納言はもう亡くなられ、古い家柄の出である母尼君だけが、お里の邸を守っておられました。ほかの女御たちのように皇族や大臣家も出身ではないこともあつて、後盾は何もありません。住いのお局も、帝のお住いである清涼殿からははるかに遠い淑景舎でした。淑景舎は、中庭に桐が植えられていて、桐壺の別名がありますので、この方は桐壺更衣と呼ばれていらつしやいました。

帝は、後盾のないのがいつそうかわいそうで、人がとやかく言うのをあえて無視なさつて、ほかのはなばなしい女御たちにも負けないよう、いろいろ気を配つていらつしやいました。が、それでもなお、何かと事のある時には、桐壺更衣はいつも心細いご様子でした。

帝のご寵愛があまり目立ちますので、上達部や殿上人なども、楊貴妃の例もあることだからと、次第に世の乱れを心配して噂するようになりましたから、更衣はいたたまれない気持ちでしたけれど、帝のご愛情だけを頼りにして、宮中にお暮しになるほかはありませんでした。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数

『大成』

三八六文字

『新訳』

六二三文字（句読点四〇字を除く）

#### 二、文の数

『大成』

六文

『新訳』

七文

#### 三、漢字の使用

- 『大成』 三九文字
- 『新訳』 一五六文字（漢字の占める割合二五％）
- 四、敬語の使用
  - 『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）
  - 『新訳』 二〇箇所
- 五、文脈
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『新訳』 入れ替えあり。
- 六、文体
  - 『大成』 （原文のまま）
  - 『新訳』 「です」「ます」調
- 七、『大成』には見られず『新訳』のみに見られる用語・表現等の存在
  - 『新訳』 傍線部
- 八、『大成』にはありながら『新訳』に訳出されていない用語・表現等の存在
  - 『大成』 傍線部
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在
  - 『新訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、尾崎『新訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、文全体の大幅な入れ替え（挿入）をしている。太字で示した部分（一六四文字）である。原文ではのちに語られる、更衣の実家の様子や、更衣が淑景舎に住まう桐壺更衣とよばれていたことを、冒頭部分に挿入している。
  - そのほか、「かんたちめうへ人などあいななくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなり」、「やう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくに」のそれぞれについて、文の前後を入れ替えている。
- 二、「おとしめ」「さとかちなるをいよいよ／＼」「あいななくめをそはめつゝ」「もろこしにもかゝることのおこりにこそ」など、訳出されていない部分がある。
- 三、独自の解釈を施す用語・表現等が多い。
- 四、「です」「ます」調を採用。
- 五、敬語が多い。（挿入部分の敬語は、六箇所）

大幅な入れ替え（挿入）部分に対する原文は、次のとおり。

父大納言はもう亡くなられ、古い家柄の出である母尼君だけが、お里の邸を守つておられました。ほかの女御たちのように皇族や大臣家も出身ではないことであつて、後盾は何もありません。

ちゝの大納言はなくなりては、北の方なんいにしへの人のよしあるにておやうちくし

さしあたりて世のおほえはなやかなる御方へにもいたうおとらすなにごとのきしきをももてなしたまひけれととりたてゝはかへしきうしろみしなれば事ある時はなをより所なく心ほそけ也

〔大成〕「桐壺」巻頭部掲出部分に続く箇所である

住いのお局も、帝のお住いである清涼殿からははるかに遠い淑景舎でした。淑景

舎は、中庭に桐が植えられていて、桐壺の別名がありますので、この方は桐壺更衣と呼ばれていらっしやいました。

御つほねはきりつほ也

〔大成〕冒頭より一〇八六字目に現れる

この部分は、尾崎独自の解釈によるいわば解説的な内容が組み込まれていると言えよう。さらに、本部分に続く箇所においても独自の解釈が見られる。帝が「あかすあはれなる物におもほし」たのは、「後盾のない」ことだと理由づけし、その「後盾のない」ことによる不利益を、帝が「いろいろ気を配っていらっしやいました」が、それでもなお、何かと事のある時」に更衣は「心ほそけ」になるとしている。具体的な説明を加える形で「ほかのはなばなしの女御たちにも負けないよう」という加筆もなされている。

尾崎は、刊行の意図および方針について「まず「読み通す」試み」と題し、「鑑賞のしおり①」に記す。

・・・『新訳源氏物語』を刊行する意図は、物語を支える「雅び」の味を損わずに、ともかく「源氏物語をらくに読み通す」ことを主眼にしたことにあります。(中略)単に筋書を追うダイジェストではなく、(1)逐語訳の部分と軽く通過する部分の濃淡をつけたこと、(2)物語口調をのこしたこと、(3)「歌物語」としての性格を消さないよう、大切な部分の歌のやりとりは「流れ」の中で読みとれる程度の解説を含めたこと、(4)敬語にできる限り配慮したこと、などに眼目を置いています。

尾崎は、「読み通す」ことに主眼をおいた。その工夫の一つが、文脈の大幅な入れ替えであった。また、平安朝の雰囲気を残しながら分かりやすい文章にするため、「逐語訳の部分と軽く通過する部分」を作った。しかし、それにより、訳出されない部分が発生したり、独自の解釈を織り込む結果となった。

また、「です・ます」調である点や、冒頭を「むかし」で始めている点は「物語口調」を採用していると言えよう。

敬語については、原文における敬語部分すべてを訳出しておらず(注2)、しかしながら、数量的には多く、この点からも独自の解釈を中心とした訳出方法であると言える。

尾崎『新訳』は、大幅に文脈を入れ替えるなど、読者が通読できるよう独自の工夫を加えた現代語訳なのである。また、独自の解釈も多くみられるという特徴も備えている。

注1…〔抄訳〕的な部分もあるが、「読み通す」ことを強く意識していること、そして「いわゆる抄訳ではなく」「逐語訳の部分と軽く通過する部分の濃淡をつけた」としていることから、〈完訳〉としてここに掲出した。

注2…「我はと思あかり給へる御方」<sup>く</sup>「あかすあはれなる物におもほして」の二箇所について敬語の訳出が見られない。

## 大塚ひかり

### 一、訳者の略歴

古典エッセイスト、フリーライター。昭和三六年二月七日、神奈川県に誕生。早稲田大学第一文学部日本史専攻卒業。大学卒業後、出版社に勤める。昭和六三年、失恋体験と失業を綴った『いつの日か別の日か―みつばちの孤独』でライターとしてデビューする。平成元年に結婚。専業主婦となり、紫式部など日本の古典の研究に励む。平成三年、『愛はひき目かぎ鼻』を刊行し、『源氏物語』を中心とした古典エッセイストとして次第にその地位を築く。『源氏の男はみんなサイテー』、『源氏物語』の身体測定、『面白いほどよくわかる源氏物語』などの著書がある。

### 二、書誌

『源氏物語』全六巻。筑摩書房（ちくま文庫）。

「第一巻 桐壺く賢木」	平成二〇年十一月一〇日	五八二頁
「第二巻 花散里く少女」	平成二〇年十二月一〇日	五二五頁
「第三巻 玉鬘く藤裏葉」	平成二二年三月一〇日	五四一頁
「第四巻 若菜上く夕霧」	平成二二年六月一〇日	六二〇頁
「第五巻 御法く早蕨」	平成二二年九月一〇日	五四五頁
「第六巻 宿木く夢浮橋」	平成二二年一月一〇日	六三九頁

### 三、「桐壺」巻頭部

いずれのミカドの御代<sup>みよ</sup>でしたか、女御・更衣<sup>こうつい</sup>があまたお仕えになっていた中に、さし  
て高貴な身分でもないのに、抜群に愛されている方がおりました。  
初めから私こそはとプライドをもっていらした方々は、

「あのような者が心外な」とバカにしたり嫉<sup>ねた</sup>んだりなさいます。同等もしくはそれ以下の身分の更衣たちはまして穏やかな気持ちではいられません。

朝夕の宮仕えにつけても、人の心を乱してばかり。人の恨みを一身に受け、それが積もり積もったせいでしょうか。その方はすっかり病弱になって、なんとなく心細そうに

して実家に下がりがちなのを、ミカドはますます「もつと会いたい」「可哀想に」というお気持ちになって、人の非難も顧みず、世の前例となつてしまいそうなほど厚遇なさいます。

上達部や殿上人なども、むやみに目をそむけるといふ、見るに堪えないご寵愛ぶり。

「唐土でもこの手のことがきつかけとなつて世も乱れ、ひどいことになったのに」と、だんだんと国中にも不満が広がつて、人の頭痛のタネになり、玄宗皇帝を惑わせ、国を混乱させた楊貴妃の例まで引き出されそうな勢いになっていくので、その方はほんといいたたまれないことが多いのですが、畏れ多いミカドのご寵愛がまたとないほど深いので、それを頼みに、後宮のおつきあいをしています。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

大塚は、「はじめに」に次のように記す。

私は小学館の日本古典文学全集の『源氏物語』を使用した。同じ小学館でも新編日本古典文学全集のものになると、文が違つていたりして、要するに、自分の判断で良しと思つたものをとるしかなく、私は使用した原典に疑問がある場合、他の活字原典を併せて見て、適切と思われるほうをとつて訳した。……

依拠したテキストは、阿部秋生ほか校注・訳『日本古典文学全集』源氏物語』全六卷（昭和四五年一月〜昭和五二年二月 小学館）と明示されている。また、参照した他の活字原典として、具体的には阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集』源氏物語』全六卷（平成六年三月〜平成十一年四月 小学館）などであろう。

##### 2、『源氏物語』（以下、『大塚訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

いずれのミカドの御代でしたか、女御・更衣があまたお仕えになつていた中に、さして高貴な身分でもないのに、抜群に愛されている方がおりました。

初めから私こそはとプライドをもつていらした方々は、

「あのような者が心外な」とバカにしたり嫉んだりなさいます。同等もしくはそれ以下の身分の更衣たちはまして穏やかな気持ちではいられません。

朝夕の官仕えにつけても、人の心を乱してばかり。人の恨みを一身に受け、それが積もり積もったせいでしょうか。その方はすっかり病弱になって、なんとなく心細そうにして実家に下がりがちなのを、ミカドはますます「もつと会いたい」「可哀想に」というお気持ちになつて、人の非難も顧みず、世の前例となつてしまひそうなほど厚遇なさいます。

上達部や殿上人なども、むやみに目をそむけるといふ、見るに堪えないご寵愛ぶり。

「唐土でもこの手のことがきつかけとなつて世も乱れ、ひどいことになつたのに」と、

だんだんと国中にも不満が広がつて、人の頭痛のタネになり、玄宗皇帝を感わせ、国を

混乱させた楊貴妃の例まで引き出されそうな勢いになつていくので、その方はほんと

にいたたまれないことが多いのですが、畏れ多いミカドのご寵愛がまたとないほど深いので、それを頼みに、後宮のおつきあいをしています。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数

『大成』 三八六文字

『大塚訳』 四九九文字（句読点・記号三七字を除く）

#### 二、文の数

『大成』 六文

『大塚訳』 七文

#### 三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『大塚訳』 一二三文字（漢字の占める割合二五％）

#### 四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

- 『大塚訳』 一〇箇所
- 五、文脈
  - 『大成』 (原文のまま)
  - 『大塚訳』 入れ替えなし。
- 六、文体
  - 『大成』 (原文のまま)
  - 『大塚訳』 「です」「ます」調
- 七、『大成』には見られず『大塚訳』のみに見られる用語・表現等の存在
  - 『大塚訳』 傍線部
- 八、『大成』にはありながら『大塚訳』に訳出されていない用語・表現等の存在
  - なし
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在
  - 『大塚訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『大塚訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、主語の補いや行為の主体を表わす語などにより、文字数はやや多くなっている。
- 二、短文が多く、文の数は多い。
- 三、敬語は少ない。
- 四、基本は、「です」「ます」調とするが、文末を「ばかり。」「ぶり。」などとしている。
- 五、会話文の採用。
- 六、カタカナを多用している。

大塚は、「はじめに」において、訳業の方針や工夫した点について記している。箇条書きにて抜粋し列挙する。

- △訳業の方針▽
    - 「原文重視の逐語訳、それでいて「分かる『源氏物語』」
    - △工夫した点▽
      - 「地の文の「敬語・謙譲語を抑える」
      - 「原文のリズムを損わないよう心がけた」
      - 「主語を補った」
      - 「逐語訳では、・・・説明不足なところ」に「物語へのナビゲーションとして（ひかりナビ）をもうける」
      - 「全訳でありながら、原文も随所に配した」
  - 「です・ます」調を基本としつつ、語尾を「人の心を乱してばかり。」「（寵愛<sup>ちよひめ</sup>ぶり。」
- など、本来文中にある助詞をそのまま文末に用いて、会話文的な軽さ（リズム感）をもたらすとともにこれにより敬語を抑えることにも成功している。
- また、カタカナの多様がみられる。
- 「ミカド」
  - 「ブライド」

「バカ」

「タネ」

これにより視覚的なメリハリが生まれ、文章としての軽快さ、つまりリズムミカルな文体が実現することになる。

さらに、随所に直接話法を採用している。

「あのような者が心外な」

「もつと会いたい」

「可哀想に」

「唐土もろこしでもこの手のことがきつかけとなって世も乱れ、ひどいことになったのに」

以上四箇所であるが、すべて心情に関わる部分である。大塚独自の解釈も含まれるが、明快である。

加えて、現代的な文体の中に「あまた」など原文をさりげなく挟み込んでいる点も大塚の工夫点であろう。大塚自身が言うように「原文重視の逐語訳」という特質をもちながら、リズムミカルで分かりやすい現代語訳が実現されていると言えよう。

なお、形式的な特質として、〈ひかりナビ〉がある。〈ひかりナビ〉については、「引き歌の説明やら、登場人物の心理やら、その一節が物語全体でどんな意味をもつか、原文ではどう表現されているか、伏線となるところなど、物語の楽しみを殺がないでいどに解説」している。研究書の引用なども含まれる、やや専門的な解説である。

## 上野榮子

### 一、訳者の略歴

大正一四年四月二七日、福岡県に誕生。熊本県立第一高等女学校高等科卒業。高等女学校を卒業したその年の昭和一九年四月から半年間、同校で国語の講師を務める。翌年一月に結婚。二男をもうける。熊本県立第一高等女学校時代より『源氏物語』の魅力にとりつかれ、親しんできた。昭和五二年師走より、自身での口語訳をはじめ、一八年かけて完成させ、八〇歳の記念に自費出版。それが、出版社の目にとまり、日本経済新聞出版社より刊行された。その後の消息不明。

### 二、書誌

『源氏物語』全八巻。日本経済新聞出版社。

「第一巻」	（桐壺く末摘花）	平成二二年	一月二〇日	三一―一頁
「第二巻」	（紅葉賀く明石）	平成二二年	一月二〇日	三〇―七頁
「第三巻」	（濡標く玉鬘）	平成二二年	一月二〇日	三四―七頁
「第四巻」	（初音く藤裏葉）	平成二二年	一月二〇日	三二―三頁
「第五巻」	（若菜上く柏木）	平成二二年	一月二〇日	三〇―七頁
「第六巻」	（横笛く竹河）	平成二二年	一月二〇日	三一―七頁



「第七巻」 (橋姫く宿木) 平成二二年 一月二〇日 三七五頁  
「第八巻」 (東屋く夢浮橋) 平成二二年 一月二〇日 四〇三頁

### 三、「桐壺」巻頭部

どの帝の御代みかどであつたか。女御にようごや更衣こういが沢山お仕えしていた中に、特に、高貴な身分というほどではないが、一際目立って帝のご寵愛を受けていられる御方があつた。

入内のはじめから、「私こそ帝の御寵愛を得よう」と、確信を持つておられた女御や更衣方は、この更衣の入内を、気にいらぬ侵入者だと思つて、憎んだり軽蔑したりなさる。まして、同じ位や低い身分の更衣たちは尚一層気が気でない日々を送っているのである。更衣は、朝な夕なの宮仕えにつけても、同僚の女御や更衣たちの感情ばかりたかぶらせて、恨みをつたからであらうか、大変、病気が重くなつて、何となく心細く思うようになり、実家に下つている事が多くなつたのを、帝は物足りなく何としてもいしくして仕方がないと、一段とお思ひになつて、人々の誇りや批判などもおかまいにならずに、歴史の上に汚点を残すに違ひない、そんな御慈しみぶりである。

事情を知つた公卿や殿上人なども、面白いはずはなく、横目でにらみながら、「何とていう更衣の大仰な御思われぶりよ。中国でも、確かこのような帝の偏愛が原因で、政治が乱れて世の中が悪くなりましたよ」と憂い、時が経つにつれて、この事がにがしく人々の悩みの種となり、玄宗皇帝の寵妃、楊貴妃の例までも引き合ひに出して、あれやこれや人の噂の渦に巻き込まれるために、更衣の宮仕えは、一層不都合な事が多いけれども、帝の有難い御心ばせを、ただ一つの頼みとして、内裏での交際を続けていた。

### 四、訳文の検討

#### 1、依拠本文

上野は、「日本経済新聞社版 あとがき」に次のように記す。

この訳の底本として山岸徳平校注『源氏物語』(日本古典文学大系、岩波書店刊)を使い、文中の和歌の表記は岩波文庫の『源氏物語』(山岸徳平校注)に従いました。また、校註の多くを訳に使わせていただいております。山岸徳平先生の学恩に深く感謝します。

ここから、上野が依拠したテキストは、山岸徳平校注『日本古典文学大系』源氏物語』全五巻(昭和三三年一月く昭和三八年四月 岩波書店)であることが分かる。

ただし、特に和歌の表記は、山岸徳平校注『源氏物語』全六巻(昭和四〇年六月く昭和四二年一月 岩波書店(岩波文庫))を参考にしたとする。

#### 2、『源氏物語』(以下、『上野訳』と称する)の「桐壺」巻頭部の特質

どの帝の御代であつたか。女御や更衣が沢山お仕えしていた中に、特に、高貴な身分というほどではないが、一際目立って帝のご寵愛を受けていられる御方があつた。

入内のはじめから、「私こそ帝の御寵愛を得よう」と、確信を持っておられた女御や更衣方は、この更衣の入内を、氣にいらぬ侵入者だと思つて、憎んだり軽蔑したりなさる。まして、同じ位や低い身分の更衣たちは尚一層氣が氣でない日々を送っているのである。更衣は、朝な夕な宮仕えにつけても、同僚の女御や更衣たちの感情ばかりたかぶらせて、恨みをかけたからであろうか、大變、病氣が重くなつて、何となく心細く思うようになり、実家に下つている事が多くなつたのを、帝は物足りなく何としてもいしくして仕方がないと、一段とお思ひになつて、人々の誇りや批判などをもおかまいにならずに、歴史の上に汚点を残すに違ひない、そんな御慈しみぶりである。

事情を知つた公卿や殿上人なども、面白いはずはなく、横目でにらみながら、「何と云う更衣の大仰な御思われぶりよ。中国でも、確かこのような帝の偏愛が原因で、政治が乱れて世の中が悪くなりましたよ」と憂い、時が経つにつれて、この事がにがにがしく人々の悩みの種となり、玄宗皇帝の寵妃、楊貴妃の例までも引き合ひに出して、あれやこれや人の噂の渦に巻き込まれるために、更衣の宮仕えは、一層不都合な事が多いけれども、帝の有難い御心ばせを、ただ一つの頼みとして、内裏での交際を続けていた。

#### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かたちめうへ人なともあいななくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとほしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数

『大成』 三八六文字

『上野訳』 五六六文字（句読点四三字を除く）

#### 二、文の数

『大成』 六文

『上野訳』 五文

#### 三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『上野訳』 一八八文字（漢字の占める割合三三％）

#### 四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）  
『上野訳』 一三箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）  
『上野訳』 入れ替えあり。

六、文体

『大成』 （原文のまま）  
『上野訳』 「だ」「である」調

七、『大成』には見られず『上野訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『上野訳』傍線部

八、『大成』にはありながら『上野訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在  
『上野訳』波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『上野訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、主語の加筆、内容を説明する語句の補足など、独自の解釈を施す箇所があるため、文字数が多い。
- 二、文の数は少ない。上野が依拠テキストとしたであろう、山岸徳平校注（日本文学大系）『源氏物語』と同じである。
- 三、敬語は、原文と同じ箇所に使われている。ただし、「我は」とあるところに、「私こそ帝の御寵愛を得よう」と加筆した部分の一箇所に敬語が含まれるため一三箇所となる。
- 四、語句の入れ替えがある。「おとしめ」と「そねみ」を入れ替えている。「いよ／＼」を「おもほして」の直前において訳出している。

依拠テキストであろうと思われる山岸徳平校注『日本古典文学大系』源氏物語』頭注の文言と『上野訳』の訳文との同一箇所を抜き出す。

- 「どの帝みかどの御代であつたか。」  
「気が気でない」  
「病気が重くなつて」  
「実家に下つている事が多」  
「物足りなく」  
「いとしくて」  
「一段と」  
「横目で」  
「御思われ」  
「人（々）の悩みの種」  
「玄宗皇帝の寵妃」

「心ばせ」

「内裏(での)交際」

引用であるかどうかは断定できないが、同一箇所の数からして、参考にしていないことに違いはない。また、段落、読点の位置および文の数も『日本古典文学大系』源氏物語』と同一である。

次に、『上野訳』のみに見られる用語・表現等については、おおよそ次のように分類できる。

◇主語を補う。

「更衣は」「帝は」

◇行為の主体を補う。

「帝の」「二箇所」「更衣の」

◇内容を補足する。

「入内の」「帝のご寵愛を得よう」「この更衣の入内を」「批判なども」「事情を知った」

「と憂い」「玄宗皇帝の寵妃」「更衣の宮仕えは」「ただ一つの」

◇(前の文を受ける語として)文と文や語句をつなぐために補う。

「そんな」

独自の解釈を施す用語・表現等の多くは、その多くは内容を補足するものである。そのほか、「心ほそけ」という、第三者からの視点若しくは、更衣の様子を表わす表現を、「心細く思うようになり」という更衣の気持ちに踏み込んだ表現としている。また、「かゝること」の具体的内容を「確かこのような帝の偏愛が原因で」と表現するなど、自身の解釈がなされる箇所も含まれてはいる。

総じて『上野訳』は、山岸徳平校注『日本古典文学大系』源氏物語』に大きく依拠しつつ、その不足を独自に補おうとした訳出であったと言えるよう。

## 林望

### 一、訳者の略歴

国文学者、書誌学者、作家。沢嶋優のペンネームをもつ。昭和二四年二月二〇日、東京都に誕生。慶応義塾大学大学院博士課程(国文学専攻)修了。その後、東横学園女子短期大学にて教鞭をとる。昭和五九年、ケンブリッジ・オックスフォード両大学訪問研究員、昭和六一年、ケンブリッジ大学客員教授となる。また、全欧州所在日本古籍総目録編纂プロジェクトの主幹も務める。平成三年には、作家として執筆した『イギリスはおいしい』(日本エッセイスト・クラブ賞)を刊行。平成四年『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』(国際交流奨励賞)、平成五年『林望のイギリス観察辞典』(講談社エッセイ賞)、平成二五年『謹訳 源氏物語』(毎日出版文化賞特別賞受賞)。随筆、小説、書誌学関連本など、著書多数。

### 二、書誌

『謹訳 源氏物語 改訂新修』全一〇巻。祥伝社。

「一」	(桐壺く若紫)	平成二九年 九月二〇日	四一〇頁
「二」	(末摘花く花散里)	平成二九年一〇月二〇日	四〇四頁
「三」	(須磨く松風)	平成二九年十一月二〇日	四五三頁
「四」	(薄雲く胡蝶)	平成二九年十二月二〇日	四三六頁
「五」	(蛩く藤裏葉)	平成三〇年 二月二〇日	四五一頁
「六」	(若菜上・若菜下)	平成三〇年 五月二〇日	四三四頁
「七」	(柏木く雲隠)	平成三〇年 八月二〇日	四五三頁
「八」	(匂兵部卿く総角)	令和 元年 五月二〇日	五五四頁
「九」	(早蕨く東屋)	令和 元年 九月二〇日	四〇五頁
「十」	(浮舟く夢浮橋)	令和 元年十一月二〇日	四九一頁

林の訳業は、『謹訳 源氏物語』全一〇巻(平成二三年三月く平成二五年六月 祥伝社)が最初である。その後、「増補修訂」をし、文庫本に形を変え新たに刊行したものが『謹訳 源氏物語 改訂新修』である。推敲を重ねたであろう『謹訳 源氏物語 改訂新修』を林の現代語訳として扱うこととする。

三、「桐壺」巻頭部

さて、もう昔のこと、あれほどの帝の御世であったか……。

宮中には、女御とか更衣とかいう位の妃がたも多かったなかに、とびぬけて高位の家柄の出というのでもなかった桐壺の更衣という人が、他を圧して帝のご寵愛を独占している。そういうことがあった。

女御ならば皇族または大臣家の姫、更衣ならば大納言以下の貴族の娘と決まったものゆえ、その並々ならぬ家柄の女御のかたがたからみれば、我をさしおいて桐壺の更衣ごときがご寵愛をほしいままにするなど、本来まことにけしからぬ話。とんでもない成り上がり者と、あしざまに罵らずにはおられない。

まして、同じくらしい家柄、もしくはそれ以下の出自の更衣たちともなれば、心はいよいよ穏やかではない。

が、帝はそのようなことには頓着されないから、朝に夕に、この桐壺の更衣をお呼びになる。そこで、お仕えるために参上すると、もうその度に、あたりの女たちの

嫉妬心は燃え上がり、満々たる恨みが、その人の一身に積もり積もったのであろうか、

とうとう病がちになり、だんだんと心細い状態になって、とかくは実家のほうに下がって過ごしているということが多くなった。

すると、逢えない分、帝の執心はまさり募って、どうしても逢いたいという寵愛が急になつていくので、周りの人々がどれほどこの更衣を誹謗しているかということまでは斟酌されるゆとりもなかった。まさに、一国の主が女色に迷つて国の乱れを惹起したという歴史上の例話にもなるような惑乱ぶりであった。

上達部、殿上人など、帝を輔佐する高官たちも、まったく困り果て、目引き袖引き、この惑乱ぶりはとても見ていられないと噂しあつたほどの、執心ぶりであった。聞けば、唐国にも、こういう色好みがもとで、ついには内乱沙汰にまでなつたという良からぬことがあるというから、この体たらくではまったく困つたものだとな下の人々はみなこのことを苦にして、かの楊貴妃の例なども引きあいに出されるようになっていった。

桐壺の更衣にとつては、いたたまれないような事が次々と起こつて辛いばかりの日々であつたが、それでも、帝のもつたいないお心のまたとない愛しみ深さばかりを、せめての心のよりどころとして、かろうじて宮中の交わりをしていたのである。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

各巻末に次のように記す。

……本書は、新潮日本古典集成『源氏物語』（新潮社）を一応の底本としたが、諸本校合の上、適宜取捨校訂して解釈した。

##### 2、『源氏物語』（以下、『謹訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからすあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人などもあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

一、文字数

『大成』 三八六文字  
『謹訳』 八六七文字（句読点・記号五九字を除く）

二、文の数

『大成』 六文  
『謹訳』 一一文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字  
『謹訳』 二一九文字（漢字の占める割合二五％）

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）  
『謹訳』 一五箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）  
『謹訳』 入れ替えなし。

六、文体

『大成』 （原文のまま）  
『謹訳』 「だ」「である」調

七、『大成』には見られず『謹訳』のみに見られる用語・表現等の存在

『謹訳』 傍線部

八、『大成』にはありながら『謹訳』に訳出されていない用語・表現等の存在

『大成』 傍線部

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『謹訳』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『謹訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができます。

- 一、文字数は、二倍以上である。
- 二、文の数は、二倍に近い。
- 三、「参上」など漢語的表現がみられ、漢字が多い。

四、『謹訳』のみに見られる用語・表現等が多い。

五、独自の解釈を施す用語・表現等が多い。

以上のように『謹訳』は、文字数が極めて多く文の数も増し原文の様相から離れ、原文に即しながらも独自の解釈で多くを占める訳出方法をとっている。その『謹訳』の本文の特質について、林自身が「訳者のひとこと」に、「凡例めいたこと」と前置きして記している。以下、要点を引用しながら列挙する。

一、まず、第一に、言っておくべきことは、ナレーションの立場の変更ということである。もともと『源氏物語』は、老女房が昔を回想するという立場で書かれており、……ことごとく敬語が使っている。……当時の読者たちは、現在語られているのが、源氏のセリフなのか、女房のセリフなのか、はっきりと聞き分けられた。で、おおかたは主語などを書かないのが当たり前であったが、……現代の日本語には、平安時代の貴族社会に行われていたような敬語の体系はもはや存在せず、これらを正確に現代語に訳すことは事実上不可能に近い。

(中略)

そこで私は、思いきってナレーションを変更することにした。これが謹訳の最大の特徴である。つまり語り手を老女房とするのをやめて、ニュートラルな「小説の語り手」とし、地の文では原則として登場人物への敬語遣いは廃した。ただし、帝にだけは、あまり打ち付けな書き方は却って不自然に聞こえるので、最小限に現代語の敬語を用いて書くことにしたのである。

その一方で、ナレーションの敬語を廃したため、敬語による話者等の表示が出来ないのだから、誰が誰に向かって言っていることなのか、などを明記して、読者が立ち迷わずに読んでいけるよう、配慮した。

ただし、ナレーションを変更したからとて、……私はどこまでも忠実に原典に依拠し、作者の表現意図を変更するようなことは一切していない。

二、老女房の語りとあって、くぐくぐと長く、また挿入句なども非常に多いので、しばしば文脈が辿りにくい。

(中略)

そこで、長文は適宜いくつかの短い文章に切り直し、ときには前後文節を入れ替えるなどして、誤解の生じないように、極力明確に文意が辿れるように配慮した。その意味で謹訳は決して直訳ではないのである。

三、さらに、本書では、頭注・補注などは原則的につけないことにした。それはひとえに読者がすらすらと読んでいけるように、いちいち上の注釈や巻末の補注やらを参照しながら読んだのでは読書の興を殺ぐと考えるからである。ただし、文中に引かれた漢籍などの典拠については、極力古写本に依拠したので、通行の用字や訓読とは違うことがしばしばある。そういうところは……最小限に注記せざるを得なかった。また、文中にごく省略して引用してある和歌、催馬楽、漢詩句などは、原則的にすべて現代語訳を付して明記し、訳文中に溶け込ませることとした。……無粋とは知りながら、いちいち丁寧に引用の典拠を文中に溶け込ませて明記してある。

四、こうした物語は、貴族社会の同じ生活・教養を共有する人たちの間で書かれ、享受された。そこで、言わでも分かることは省いて書かないのが当たり前であった。これを「省筆」という。しかし、省筆されたままの文章をただ現代語に置き換えても、何を



言っているのか、とうてい理解の外である。そこで『謹訳』では、その省略された「共通理解事項」をあえて補綴明記することにした。これは私が創作して付け加えているのではなくて、あくまでも省略されたものを明記したに過ぎぬ。たとえば、「若菜」の下で、女三の宮と柏木が密通する場面など、その具体的な密通行為はもちろん描写などしていない。しかし、

「……わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばや、とまで思ひ乱れぬ。ただいささかまどろむともなき夢に、この手馴らしし猫の、いとらうたげにうち鳴きて来たるを……」

とある原文の、ちようどの「思ひ乱れぬ」のあとに、夢中で関係を結んでしまったことが、自明に共通理解されていて、そのあとの猫の夢を見ることが、すなわち当時の人たちが「獣の夢を見ると懐妊する」という俗信に拠っていることも自明のことであった。これらは自明ゆえ省筆してあるのである。

しかしそれらのことは、書いておかなくては、現代人には分かるまい。そこで謹訳では、

「へ……我が身も、世間当たり前の暮らしなんか捨ててしまつて、いっそ行方をくらましてしまおうか……」と、ただただ我を忘れて、欲望に身を任せたと書いて一行空け、「そのあと……」。いつしか、うとうととまどろんだ刹那に、衛門の督は夢を見た。……あの手に馴らした唐猫が、たいそうかわいらしげに鳴き声を立てながらやって来た……」と訳出して、しばらく後のところに「獣の夢は懐妊の前知らせ、というその夢のことを督は口にすることもなく、急ぎ帰っていく」と言葉を補ってその内意を明記しておいたのであるが、これらは、いずれも私の創作ではなくて、原文で略されているところを明記したにすぎぬ。

これら一から四までの中で、本文の特質であろうと考えられる箇所について、それぞれを簡条書きにて列挙する。

- ◇語り手の変更により、帝以外の登場人物に敬語を排した。
- ◇主語等を補う。
- ◇長文はいくつかの短文に分ける。
- ◇場合によっては文節を入れ替えている。
- ◇頭注・補注などはつけない（最小限の注記あり）。
- ◇和歌、催馬楽、漢詩句などは、現代語訳を付し訳文中に織り込む。
- ◇典拠については、訳文中に織り込む。
- ◇平安朝の読者にとつては、書かれていなくても共通理解事項であった事柄で、現代人にとつてはそうではないものについては、現代人に分かるように明記した。

これらの多くは、文字数を増加させる要因となる。主語を補うばかりか、早々に「桐壺の更衣」という呼び名も明記している。また、頭注・補注をつけない方針により、現代人では理解できない平安朝の生活様式や社会環境について本文中に織り込むことにより、独自の解釈を施す用語・表現等が多くなるのは必然である。

敬語は、帝にのみ使用する方針はあるが、逆に増加している。この理由については、本文中に現代人が理解できるよう織り込んだ結果であろう。例えば、「あさゆふの宮つかへ」を「朝に夕に、この桐壺の更衣をお呼びになる。そこで、お仕えするために参上すると」と

現代人に理解させるための説明を文中に織り込んだ結果、「お仕え」「参上」という帝に対する敬語が発生する。

作家であり研究者である林の現代語訳は、「忠実に原典に依拠し」つつも、自身の考察や豊富な知識により本文に解説的な部分を織り込んだものである。その結果、かえって原文の姿からはなれたものになったのではないだろうか。

また、語り手を本来の姿である老女房ではなく、「小説の語り手」としたこと、短文を多く取り入れたことにより、さばさばした文体になったこと、漢語的表現をもちいたこと、それとあいまって「だ」「である」調であることによつて、男性的な文体であるという特質を持った訳文であると言えるだろう。

なお、形式的な特徴として、小見出しを付していること、帖のはじめにその帖における「源氏」の年齢（「宇治十帖」においては、「薫」の年齢）を記している点が挙げられる。（注1）

注1…小見出しおよび年齢表記は、文庫本『謹訳 源氏物語 改訂新修』になり、新たに加えられたものである。

## 荻原規子

### 一、訳者の略歴

作家。昭和三四年四月二二日、東京都に誕生。早稲田大学教育学部国語国文学科卒業。大学生時代は、日本のファンタジーについて研究。早大児童文学研究会にも所属し、創作活動をはじめ。卒業後、公務員となるが、大学時代の仲間の依頼で児童向け物語『空色勾玉』（平成元年日本児童文学者協会新人賞）を刊行。そのほか、『これは王国のかぎ』（平成六年産経児童出版文化賞）、『風神秘抄』（平成一八年産経児童出版文化賞・JR賞、日本児童文学者協会賞、小学館児童出版文化賞）などの作品がある。『白鳥異伝』、『薄紅天女』は、日本神話を下敷きにしたファンタジー作品として『空色勾玉』と合わせて勾玉三部作と呼ばれる。

### 二、書誌

#### 『源氏物語 紫の結び』全三巻。理論社。

〔一〕 平成二五年 八月（以下、記載なし） 三六七頁

〔二〕 平成二五年一二月（以下、記載なし） 三五一頁

〔三〕 平成二六年 一月（以下、記載なし） 三三五頁

#### 『源氏物語 宇治の結び』全二巻。理論社。

〔上〕 平成二九年 四月（以下、記載なし） 三六六頁

〔下〕 平成二九年 四月（以下、記載なし） 三六〇頁

#### 『源氏物語 つる花の結び』全二巻。理論社。

〔上〕 平成三〇年 六月（以下、記載なし） 三四七頁

〔下〕 平成三〇年 六月（以下、記載なし） 三六七頁

### 三、「桐壺」巻頭部

いつの御代みよのことでしたか、後宮こうきゆうに多くの妃きが集まる中、それほど家柄いえがらが高くないのに、当代とうだいの帝みかどに飛び抜けて愛された妃がいました。

身分の高い「女御にようご」の妃たちは、この人を目障りめざわりにして蔑みさげすました。身分が同じかそれ以下の「更衣こうい」の妃たちは、まして嫉みねたをあらわにしました。朝夕を帝のもとで過くごすたび、人々を苛立いらだたせ、恨みうらを買っていたせいか、この更衣はだんだん病気がちになり、心細げに里帰りをくり返していました。

帝はその様子をますます可憐かれんに思い、非難もかえりみず、前例がないまでただ一人を溺愛できあいします。朝廷ちやうていの高位高官は、目にあまる寵愛ちやうあいぶりに悩み、顔をそむけて「唐国からくにではこういうときに世が乱れた」と言い合いました。天下まのりしとの政せいに関わる問題として、楊貴妃ようきひの例を引き合いに出すまでになっています。当の更衣にとつてはいたたまれないことばかりですが、帝の深い愛情をたのみにして、後宮で暮らしていたのでした。

### 四、訳文の検討

#### 1、依拠本文

『源氏物語 つる花の結び』「上」の「はじめに」に、次のように記す。

本作の原典は、岩波書店『新日本古典文学大系 源氏物語』の原文と校注に基づき、複数の現代語訳本と研究書を参考にさせていただきました。

よって、依拠したテキストは、柳井滋ほか校注『新日本古典文学大系』源氏物語』全五巻（岩波書店 平成五年〜平成九年）と考えられる。

#### 2、『源氏物語 紫の結び』（以下、『紫の結び』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

いつの御代みよのことでしたか、後宮こうきゆうに多くの妃きが集まる中、それほど家柄いえがらが高くないのに、当代とうだいの帝みかどに飛び抜けて愛された妃がいました。

身分の高い「女御」の妃たちは、この人を目障りにして蔑みました。身分が同じかそれ以下の「更衣」の妃たちは、まして嫉みをあらわにしました。朝夕を帝のもとで過ごすたび、人々を苛立たせ、恨みを買っていたせいか、この更衣はだんだん病気がちになり、心細げに里帰りをくり返していました。

帝はその様子をますます可憐に思い、非難もかえりみず、前例がないまでただ一人を溺愛します。朝廷の高位高官は、目にあまる寵愛ぶりに悩み、顔をそむけて「唐国ではこういうときに世が乱れた」と言い合いました。天下の政に関わる問題として、楊貴妃の例を引き合いに出すまでになっています。当の更衣にとつてはいたたまれないことばかりですが、帝の深い愛情をたのみにして、後宮で暮らしていたのでした。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんだちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数

『大成』

三八六文字

#### 二、文の数

『大成』

六文

『紫の結び』

八文

#### 三、漢字の使用

『大成』

三九文字

『紫の結び』

一一〇文字（漢字の占める割合三二％）

#### 四、敬語の使用

『大成』

一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『紫の結び』 一箇所

五、文脈

『大成』 (原文のまま)

『紫の結び』 入れ替えなし。

六、文体

『大成』 (原文のまま)

『紫の結び』 「です」「ます」調

七、『大成』には見られず『紫の結び』のみに見られる用語・表現等の存在

『紫の結び』 傍線部

八、『大成』にはありながら『紫の結び』に訳出されていない用語・表現等の存在

『大成』 傍線部

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『紫の結び』 波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『紫の結び』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができよう。

- 一、『大成』と字数(文字および句読点等を含む)が全く同じである。
- 二、文を短く切っているため、文の数が多い。
- 三、「はしめより我はと思あかり給へる」「そねみ」など、削除されても文意が通じる部分や、回りくどい言い回しの部分について訳出していない。
- 四、現代では通常使用することのない語句について、文中で説明するための加筆がある。例えば、「女御」「更衣」という語句について「妃」であることを明示するため、まず「後宮に多くの妃が集まる中」と一般的に理解できる言葉に言い換えている。その後、「女御」の妃たち、「更衣」の妃たちとその身分の違いであることを説明するために加筆をしている。頭注などを付すことなく文中にて説明を完結させている。
- 五、敬語は、冒頭の「御代」のみである。
- 六、「語り」を意識した「です」「ます」調である。

以上のような特質が見出せる。荻原は、『源氏物語 紫の結び 一』の「はじめに」に訳出方針を示している。引用しながら箇条書きにて記す。

- ◇ 「地の文から敬語を取り払」った。
  - ◇ 「和歌を、意識ですませ」た。
  - ◇ 「文章は訳文を基本として、短く切ったり語句を前後に入れ替えたりし」た。
  - ◇ 「原典がきめ細かいあまりに長引くシーンを、とどころ縮め」た。
- なお、これらの方針は、「原典に似た少ない文字数でスピーディに読み進める工夫」であると記す。

また、『源氏物語 つる花の結び』「上」の「はじめに」には、現代語訳を行うにあたっての姿勢について、「地の文から敬語をはぶき、逐語訳ではありませんが、解釈以上の創作は加えていません」と記す。

比較結果から、原文と字数(文字および句読点等を含む)が合致した。文字数を少なく留めることは、荻原の「スピーディに読み進める工夫」の結果であろう。

先に掲げた四つの訳出方針にそって、その「工夫」点を具体例であげていく。

◇「地の文から敬語を取り払」った。

・「おもほして」を「思い」とするなど、敬語を取り払った。「です・ます」調にすることによりまわりくどくになりがちな敬語を訳出せず、文字数の減少につながった。

◇「和歌を、意識ですませ」た。

・和歌については、「かきりとてわかるゝ道のかなしきにかまほしきはいのちなりけり」(注1)を、「限りとなるお別れの道は悲しい。行きたいのではなく『生きたい』と思う命いのちなのに」とする。和歌は、現代語訳するとかならず文字数は大幅に増加するが、「意識」にすることにより文字数を減少することができた。

◇「文章は訳文を基本として、短く切ったり語句を前後に入れ替えたりし」た。

・「あさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也」という長文を「更衣は」「帝は」とそれぞれについての内容で文章を分けた。これにより、内容を明確にするのと同時に文字数の減少につながった。

・「女御更衣」を「妃」とし、「かんたちめうへ人」を「高位高官」とするなど、官職名などを他の言い方で表現した。

・「おとしめそねみ」という意味の比較的近い言葉をそのまま訳さず「蔑み」とひとつの言葉のみ訳出した。

・「いとまはゆき人の御おほえなり」を「目にあまる寵愛ぶりに悩み、顔をそむけて」と前後を入れ替えた。

◇「原典がきめ細かいあまりに長引くシーンを、とどころ縮め」た。

・「やう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて」を簡潔に「天下の政に関わる問題として」とまとめた。

萩原は、『源氏物語 紫の結び』「一」「はじめに」の冒頭において、「少しでも楽に『源氏物語』を読み進めてほしい、けれども、なるべく原典の良さを知ってほしい」と述べ、「現代語の逐語訳で『源氏物語』を読み進めることは、私から見ても挫折の多い道のりに見えます。逐語訳では一文がさらに冗長になり、そうでなくとも中だるみ感のある原典が、いつその難物になってしまうのです。」としている。「原典の良さ」を残し、読みやすさを追求した結果、このような訳出方法になったと言えるだろう。

また、構成面でも「スピーディに読み進める工夫」が極めて大胆になされている。

それは、『源氏物語』五十四帖を三つの系統に分けて再構成し、現代語訳している点である。これは、大きな特質である。三部作の構成は次のとおり。

一つ目の『源氏物語 紫の結び』は、「メインストーリーとなる光源氏、藤壺の宮、紫の上の一生が一気に読める」ように、次の帖を取り上げている。「桐壺」「若紫」「紅葉賀」「花宴」「葵」「賢木」「花散里」「須磨」「明石」「濤標」「絵合」「松風」「薄雲」「朝顔」「少女」「梅枝」「藤裏葉」「若菜上」「若菜下」「柏木」「横笛」「鈴虫」「御法」「幻」「雲隠」。

二つ目の『源氏物語 宇治の結び』は、「宇治十帖」で知る、源氏の孫たちが主人公となつた新たな恋物語」であるとし、次の帖を取り上げている。「匂宮」「橋姫」「椎本」「総角」「早蕨」「宿木」「東屋」「浮舟」「蜻蛉」「手習」「夢浮橋」。

三つ目の『源氏物語 つる花の結び』は、「中流階級の女人たちとの逢瀬から始まり、玉鬘十帖」へと続く物語」をまとめ、次の帖を取り上げている。「帚木」「空蟬」「夕顔」「末摘花」「蓬生」「関屋」「玉鬘」「初音」「胡蝶」「蛩」「常夏」「篝火」「野分」「行幸」「藤袴」「真木柱」「夕霧」「紅梅」「竹河」。

注1…掲出範囲に和歌がないため原文における初出の和歌を一例としてあげた。

### 小林千草・千草子

#### 一、訳者の略歴

国語学者、作家。千草子は、ペンネーム。昭和二十一年二月二〇日、鹿児島県に誕生。京都府育ち。東京教育大学大学院文学研究科修士課程修了。昭和六〇年、『抄物文献を資料とする中世語法の研究』（佐伯国語学賞）。平成一四年、『中世文献の表現論的研究』（新村出賞）。『ハビアン―藍は藍より出でて』『南蛮屏風の女と岩佐又兵衛』など千草子としての作品も多数。

#### 二、書誌

- 『絵入簡訳 源氏物語』全三巻。平凡社。（注1）
- 「一」（桐壺く少女） 平成二五年一〇月二五日 四〇六頁
- 「二」（玉鬘く人雲隠） 平成二六年 一月二五日 四四三頁
- 「三」（匂宮く夢浮橋） 平成二六年 四月 五日 三九三頁

#### 三、「桐壺」巻頭部

どの帝の御代であつただらうか、ずっと昔の物語です。

桐壺の更衣と呼ばれた方は、女御や更衣が沢山いらした中でも、とりたてて高貴な出ではなかつたけれど、群をぬいて帝の寵愛を一身に集めて輝いていらつしやつた。そのため、まわりの女御・更衣たちのねたみを受けて体調もすぐれず、よく里にさがつておられた。そのことがよけい帝のお心をひきつけ、かの亡国の美女楊貴妃の例も噂と

して流れるほどであった。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文については、「一」の「はじめに」に記されている。

・・・江戸時代にベストセラーとなった山本春正の『絵入源氏物語』の挿絵（東海大学付属図書館桃園文庫蔵本に拠る）を全て入れこみつつ、本文は、私の慣れ親しんだ三条西実隆筆青表紙本（岩波日本古典文学大系『源氏物語』全五巻）をもとに、新たに現代語訳したものを、ここに提供しようと思います。・・・

よって、小林が依拠したテキストは、山岸徳平校注『日本古典文学大系』源氏物語』全五巻（岩波書店 昭和三年～昭和三八年）であることが明らかである。

##### 2、『絵入簡訳 源氏物語』（以下、『簡訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

どの帝の御代であっただろうか、ずっと昔の物語です。

桐壺の更衣と呼ばれた方は、女御や更衣が沢山いらした中でも、とりたてて高貴な物ではなかったけれど、群をぬいて帝の寵愛を一身に集めて輝いていらっしやった。そのため、まわりの女御・更衣たちのねたみを受けて体調もすぐれず、よく里にさがつておられた。そのことがよけい帝のお心をひきつけ、かの亡国の美女楊貴妃の例も噂として流れるほどであった。

#### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよゝあかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえはゝからせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かந்தちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれどやうゝあめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみに



てましらひ給

- 一、文字数  
『大成』 三八六文字  
『簡訳』 一七八文字（句読点一二字を除く）
- 二、文の数  
『大成』 六文  
『簡訳』 四文
- 三、漢字の使用  
『大成』 三九文字  
『簡訳』 五〇文字（漢字の占める割合二八％）
- 四、敬語の使用  
『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）  
『簡訳』 四箇所
- 五、文脈  
『大成』 （原文のまま）  
『簡訳』 （原文のまま）  
入れ替えあり。
- 六、文体  
『大成』 （原文のまま）  
『簡訳』 「だ」「である」調とするが、はじめの一文の一部に「です」「ます」調を採用。
- 七、『大成』には見られず『簡訳』のみに見られる用語・表現等の存在  
『簡訳』傍線部
- 八、『大成』にはありながら『簡訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
『大成』傍線部
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在  
『簡訳』波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『簡訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、大幅な省略部分があるため、文字数は圧倒的に少ない。よって、掲出範囲においては、文の数も少ない。
- 二、独自の解釈により、内容をまとめたり、省略している部分はあるが、大筋の内容に相違はない。
- 三、冒頭一文のち、一行あけて続く。また、この文のみ文末を「です」で括っている（注2）。これらは、この一文を強調する効果がある。なお、「ずっと昔の物語です」は加筆である。
- 四、女主人公の局の名称と、それに依拠して一般的に知られている「桐壺の更衣」という呼称を二文目に持ち出している。『大成』における「御つほねはきりつほ也」は、冒頭より一〇八六字目に現れるので、大幅に改変していると言えよう。

小林は、この現代語訳の特徴について、「一」の「はじめに」で、前引用に引き続いて次

のように記している。

しかも、逐語訳で、ともすれば起こりがちな冗長さや集中力の拡散を防ぐために、すでに山本春正が絵画化している要所要所は全訳（その箇所は、行間の\*から\*と挿絵番号でわかります）、従なる描写部分は、簡約に訳す”というリズムで進むことにしました。

続いて訳出の方法について述べられている。引用しながら簡条書きで記す。

- ◇ 「敬語表現」を省いているところがある。
- ◇ 「時の表現―時制も」「語っていく都合上、原文通りではないところもある」。
- ◇ 会話文は「」（かぎかっこ）で示した。
- ◇ 「和歌については原文表記を生かし」た。

掲出した「桐壺」巻頭部は、『絵入源氏物語』の挿絵部分ではないため「簡訳」である。敬語については、完全に排除せず、「いらっしやった」「お心」など、その表現は残されている。

「ずっと昔の物語です」の加筆や、早々に「桐壺の更衣」であることが訳出されている点は、「語っていく都合上、原文通りではない」ところの例である。しかし、このことにより、読者は「物語」であること、女主人公が「桐壺の更衣」であることが明確になり、読み進めやすくなるであろう。挿絵を入れる点なども含め、読者を飽きさせないように、リズム感を尊重した訳文となっている。

山本春正の『絵入源氏物語』の挿絵をすべて入れ、「挿絵の描く場面は全訳」をし、それ以外は「簡訳」にするという、訳者の大胆な工夫を特質とする現代語訳である。

注1…『絵入簡訳 源氏物語』は、〈抄訳〉的などころもあるが、訳者の意図するところを斟酌し、〈完訳〉として取り上げる。「三」の「はじめに」には、「山本春正の『絵入源氏物語』の挿絵（東海大学付属図書館桃園文庫蔵本に拠る）を全て入れこみつつ、その挿絵の描く場面は全訳の形をとりつつ、リズムミカルに緩急をつけ」て現代語訳し、「編訳者の心の中では、全訳に限りなく近い現代語訳となったという思いがあります」と記している。

注2…全文を通して、草子地部分を「です」「ます」調とする。

## 中野幸一

### 一、訳者の略歴

国文学者。文学博士。昭和七年五月一三日、神奈川県に誕生。早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程修了。早稲田大学名誉教授。平安文学研究の泰斗である。著書には、

『うつほ物語の研究』、『源氏物語の享受資料―調査と発掘―』、『見る・知る・読む源氏物語』など多数。

## 二、書誌

### 『正訳 源氏物語 本文対照』全一〇冊。勉誠出版。

- |                                   |             |      |
|-----------------------------------|-------------|------|
| 「第一冊 桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫」              | 平成二七年一〇月三〇日 | 三五五頁 |
| 「第二冊 末摘花・紅葉賀・花宴・葵・賢木・花散里」         | 平成二八年 一月一五日 | 三四三頁 |
| 「第三冊 須磨・明石・漣標・蓬生・関屋・絵合・松風」        | 平成二八年 二月二〇日 | 三七一頁 |
| 「第四冊 薄雲・朝顔・少女・玉鬘・初音・胡蝶」           | 平成二八年 四月二八日 | 三四六頁 |
| 「第五冊 蛩・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱・梅枝・藤裏葉」 | 平成二八年 六月三〇日 | 三七七頁 |
| 「第六冊 若菜(上)・若菜(下)」                 | 平成二八年一〇月 七日 | 三六五頁 |
| 「第七冊 柏木・横笛・鈴虫・夕霧・御法・幻」            | 平成二八年一二月二〇日 | 三六五頁 |
| 「第八冊 匂宮・紅梅・竹河・橋姫・椎本・総角」           | 平成二九年 二月二五日 | 四四〇頁 |
| 「第九冊 早蕨・宿木・東屋」                    | 平成二九年 四月二五日 | 三四七頁 |
| 「第十冊 浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋」                | 平成二九年 六月三〇日 | 四二四頁 |

## 三、「桐壺」巻頭部

どなたさまの御代でしたでしょうか、女御、更衣と申されるお妃方が、大ぜいお仕えしておられました宮廷に、それほど貴いお家柄の出ではない更衣で、格別に帝のご寵愛をいただいておりますお方がいらつしやいました。

宮仕えにお上りになった当初から、われこそは、と自負しておられた他の后妃方は、この更衣を心外なものに思われ、さげすんだり妬んだりなさいます。このお方と同じぐらいの、あるいはそれより低い身分の更衣方は、なおさら心穏やかではありません。

朝夕の宮仕えをなさるにつけても、周囲の方々の心ばかりをいらさせ、恨みを負うことが積もり積もったせいででしょうか、更衣はひどく病弱になられて、何となく心細そうに、お実家に下つてばかりおいでになりますのを、帝はますます限りなくいいものに思し召されて、他人の非難などおかまいなさらず、世間の語り草にもなりそうなお扱いぶりです。

公卿方や殿上人など、男の方々までが苦々しく目をそむけて、もうまともには見えておられないほどのご熱愛ぶりです。あの唐の国でも、こういうことが原因で、国も乱れ、よくないことが起こったのだと、しだいに世間でも面白からぬことと、人々の悩みの種となつて、楊貴妃のために大乱が起きた唐の例までも引き合いに出しかねないようになってゆきますので、更衣はいたたまれないほどつらいことが多いのですが、ただただ帝のありがたいお情けがこの上なく深いのを頼み申し上げて、宮仕えを続けておいでになります。

(頭注)

女御更衣……いずれも天皇に仕える後宮の夫人。女御は更衣よりも身分が高い。

公卿方(上達部)……三位以上(参議は四位も)の上級官吏。

殿上人(上人)……五位以上(藏人は六位も)の者で昇殿を許された者。

楊貴妃……唐の玄宗皇帝の寵妃。玄宗は楊貴妃を溺愛し、安祿山の乱を招いた。この事件は、白楽天の長詩「長恨歌」に謡われている。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文については、凡例の冒頭に記す。

本書の現代語訳が基とした物語本文は、主に底本に大島本を用い、新編日本古典文学全集(小学館刊)や日本古典文学大系(三条西実隆筆青表紙証本、岩波書店刊)の本文を参照しました。

依拠本文は、青表紙本系を代表し、最も一般的な大島本であり、『新編日本古典文学全集』源氏物語』『日本古典文学大系』源氏物語』を参照している。また、「第一冊 桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫」の『源氏物語』の全訳に当たって」において、次のように記す。

本書の現代語訳に際しましては、多くの先学の注釈や口語訳を参照しました。

ここには具体的書名はあげられていないが、「源氏物語のことばと表現」と題された講演(注1)において、与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子、瀬戸内寂聴の現代語訳について触れており、少なくともこれらの現代語訳を参照していたであろうことがうかがえる。

2、『正訳 源氏物語 本文対照』（以下、『正訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

どなたさまの御代でしたでしょうか、女御、更衣と申されるお妃方が、大ぜいお仕えしておられました宮廷に、それほど貴いお家柄の出ではない更衣で、格別に帝のご寵愛をいただいておりますお方がいらつしやいました。

宮仕えにお上りになった当初から、われこそは、と自負しておられた他の后妃方は、

この更衣を心外なものに思われ、さげすんだり妬んだりなさいます。このお方と同じぐらいの、あるいはそれより低い身分の更衣方は、なおさら心穏やかではありません。

朝夕の宮仕えをなさるにつけても、周囲の方々の心ばかりをいらいらさせ、恨みを負うことが積もり積もったせいでしょうか、更衣はひどく病弱になられて、何となく心細そうに、お実家に下つてばかりおいでになりますのを、帝はますます限りなくいいものに思し召されて、他人の非難などおかまいなさらず、世間の語り草にもなりそうなお扱いぶりです。

公卿方や殿上人など、男の方々までが苦々しく目をそむけて、もうまともには見ておられないほどのご熱愛ぶりです。あつしやいます。あの唐の国でも、こういうことが原因で、国も乱れ、よくないことが起こったのだと、しだいに世間でも面白からぬことと、人々の悩みの種となって、楊貴妃のために大乱が起きた唐の例までも引き合いに出しかねないようになってゆきますので、更衣はいたたまれないほどつらいことが多いのですが、ただただ帝のありがたいお情けがこの上なく深いのをお頼み申し上げて、宮仕えを続けておいでになります。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからすあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物

におもほして人のそしりをもえはゝからせ給はず世のためしにもなりぬへき御もてなし也かたちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれどやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

一、文字数

『大成』 三八六文字

『正訳』 五八七文字（句読点三五字を除く）

二、文の数

『大成』 六文

『正訳』 六文

三、漢字の使用

『大成』 三九文字

『正訳』 一四二文字（漢字の占める割合二四％）

四、敬語の使用

『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）

『正訳』 二三箇所

五、文脈

『大成』 （原文のまま）

『正訳』 入れ替えなし。

六、文体

『大成』 （原文のまま）

『正訳』 「です」「ます」調

七、『大成』には見られず『』のみに見られる用語・表現等の存在

『正訳』 傍線部

八、『大成』にはありながら『』に訳出されていない用語・表現等の存在  
なし

九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在

『正訳』 波線部

右に掲げた九点から、『正訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができるよう。

- 一、主語や場所を補ってはいるが文脈の入れ替えおよび訳出されていない用語・表現も見当たらない。
- 二、敬語は、原文の二倍近くを使用しているため、文字数は原文よりはるかに多い。
- 三、文の数は、同じである。
- 四、「です」「ます」調を採用している。

中野は、「留意」点を『正訳 第一冊』の『源氏物語』の全訳に当たって」の中で、七項目にわたって示している。

- 1 物語の本質である語りの姿勢を活かして、物語の地の文は「ですます」調で訳しました。ただし、心内語や会話文はこの限りではありません。
- 2 物語本文に出来るだけ忠実に訳すように心がけました。古典語と現代語が全く一致する訳などは求むべくもないことですが、少なくともこの部分の訳はこのような本文を訳したということがわかる程度にはしたいと努力しました。そのためあえて訳文と対照させて物語本文を下欄に示しました。上下を合わせるため、本文の行間を空けたり詰めたりしたところもあります。このような本文対照形式の訳は、本書が初めての試みと思えます。
- 3 訳文には表せない引歌の類や、地名・歳事・有職、和歌の技巧などの説明は、上欄に簡明に示しました。
- 4 物語本文は、主語を略することが多く、また登場人物を官職名や、単に女君・姫君などと示すことが少なくありません。その場合は必要最小限に主語を補い、また「右大将（夕霧）」「姫君（玉鬘）」などと、適宜、（ ）内に呼名を示して読解の助けとしました。
- 5 敬語の用法はまことに複雑で、物語本文においてもその使用状況は、場面や対人関係によってさまざまです。本書においてもその場面や人物関係を考慮しながら、適宜敬語を用いて訳しました。
- 6 訳文は、当然のことながら美しく正しい日本語を心がけました。
- 7 訳文には段落を設け、小見出しを付けて内容を簡明に示しました。また巻頭にそれらを「小見出し一覧」としてまとめ、巻の展開を一覧できるようにしました。

以上の内容を、簡条書きでまとめる。

- ◇ 「ですます調」である。
- ◇ 忠実な現代語訳を心がけ、訳文の下に物語本文を対照となるように示した。
- ◇ 頭注を付けた。
- ◇ 必要最小限に主語を補った。また、適宜（ ）内に呼名を示した。
- ◇ 適宜敬語を用いて訳した。
- ◇ 美しく正しい日本語を心がけた。
- ◇ 小見出しを付けた。巻頭に「小見出し一覧」としてまとめた。

これらが、本書の特徴と言えよう。

注目すべきは、「敬語」と「美しく正しい日本語を心がけた」点である。先に見たように、敬語は原文以上に多用されている。これは、「です」「ます」「ます」調を採用し、「正しい日本語を心がけた」ため、「お家柄」など、文末を「です」「ます」とする場合、必然的に「お」をつけることになり、その原則を忠実再現したためであろう。その結果、敬語が原文の二倍以上となった。

また、すべて現代における書き言葉で訳出されている点からも「美しく正しい日本語」を強く意識したことがわかる。『正訳』は、書名にあるとおり原文と訳文を対照できるようになっており、そこからも原文に忠実であることに重点をおき、忠実性ととも現代における正しい日本語訳に実現という特質を持つと言えよう。

また、形式的な特質として、「頭注」、「訳文の下の本文」、「小見出し」、「小見出し一覧」などを付し、巻末に解説や参考資料を掲載していることがあげられる。

注1…早稲田大学国語教育学会（二七二回）大会「源氏物語の魅力を探る」（平成二九年六月二四日、於 早稲田大学）

## 角田光代

### 一、訳者の略歴

作家。昭和四二年三月八日、神奈川県に誕生。早稲田大学第一文学部文芸科卒業。大学在学中、ペンネーム彩河杏で執筆したジュニア小説『お子様ランチ・ロックソース』でコバルト・ノベル賞を受賞。大学卒業の一年後、『幸福な遊戯』で海燕新人文学賞を受賞し、これが小説家角田光代としてのデビュー作となる。『まどろむ夜のJEO』（野間文芸新人賞）、『ぼくはきみのおにいさん』（坪田譲治文学賞）、『キッド・ナツプ・ツアー』（産経児童出版文化賞・フジテレビ賞、路傍の石文学賞）など、児童文学の分野でも活躍している。

芥川賞、直木賞の候補にもなり、平成一七年には、『対岸の彼女』で直木賞を受賞。『ロックク母』（川端康成賞）、『八日目の蝉』（中央公論文芸賞、本屋大賞）、『ツリーハウス』（伊藤整文学賞）、『紙の月』（柴田錬三郎賞）、『かなたの子』（泉鏡花文学賞）、『私のなかの彼女』（河合隼雄物語賞）などのほか、作品多数。

絵本の翻訳なども手がける。川端康成文学賞や松本清張賞などの選考委員も歴任。

### 二、書誌

『源氏物語』全三巻。河出書房新社。

「上」 (桐壺く少女) 平成二九年 九月三〇日 六八九頁

「中」 (玉鬘く幻) 平成三〇年一月三〇日 六六一頁

「下」 (匂兵部卿く夢浮橋) 令和二年 二月二八日 六三七頁

### 三、「桐壺」巻頭部

いつの帝の御時<sup>みかど おんとき</sup>だったでしょうか――。

その昔、帝に深く愛されている女がいた。宮廷では身分の高い者からそうでもない者まで、幾人もの女たちがそれぞれに部屋を与えられ、帝に仕えていた。

帝の深い寵愛<sup>ちやうあい</sup>を受けたこの女は、高い家柄の出身ではなく、自身の位も、女御<sup>にようご</sup>より

劣る更衣<sup>こうい</sup>であった。女に与えられた部屋は桐壺<sup>きりつぼ</sup>という。



帝に仕える女御たちは、当然自分こそが帝の寵愛を受けるのにふさわしいと思っている。なのに桐壺更衣が帝の愛を独り占めしている。女御たちは彼女を目ざわりな者と妬み、蔑んだ。桐壺と同程度、あるいはもつと低い家柄の更衣たちも、なぜあの女が、となおさら気がおさまらない。朝も夕も帝に呼ばれ、その寝室に行き来する桐壺は、ほかの女たちの恨みと憎しみを一身に受けることとなった。

そんな日々が続いたからか、桐壺は病気がちとなり、実家に下がって臥せることも多くなった。すると帝はそんな桐壺をあわれに思い、周囲の非難などもまったく意に介さず、ますます執心する。上達部や殿上人といった朝廷の高官たちは、度の過ぎた帝の執着に眉をひそめ、楊貴妃の例まで出して、唐土でもこんなことから世の中が乱れ、たいへんな事態になったと言いつ合っている。そんなことも聞こえてきて、いたたまれないことが多いけれど、帝の深い愛情をひたすら頼りにして、桐壺は宮仕えを続けている。

#### 四、訳文の検討

##### 1、依拠本文

依拠本文についての明示は見られない。しかし、角田は、各巻の「訳者あとがき」末尾に「主要参考文献」を掲げている。その書誌は次のとおり。

- ・石田譲二ほか校注〈新潮日本古典集成〉『源氏物語』全七巻（新潮社 昭和五一年〜昭和五八年）
- ・阿部秋生ほか校注・訳〈新編日本古典文学全集〉『源氏物語』全六巻（小学館 平成六年〜平成八年）
- ・與謝野晶子『全訳 源氏物語 新装版』全五巻（角川書店 平成二〇年）
- ・大塚ひかり『源氏物語』全六巻（筑摩書房 平成二〇年〜平成二二年）
- ・倉田実編『ビジュアルワイド 平安大事典 図解でわかる「源氏物語」の世界』（朝日新聞出版 平成一五年四月三〇日）

以上から類推するに、角田が依拠したテキストは、『新潮日本古典集成』源氏物語』および『新編日本古典文学全集』源氏物語』であったと考えられる。

##### 2、『源氏物語』（以下、『角田訳』と称する）の「桐壺」巻頭部の特質

いつの帝の御時だったでしょうか――。

その昔、帝に深く愛されている女がいた。宮廷では身分の高い者からそうでもない者まで、幾人も女たちがそれぞれに部屋を与えられ、帝に仕えていた。

帝の深い寵愛を受けたこの女は、高い家柄の出身ではなく、自身の位も、女御より劣る更衣であった。女に与えられた部屋は桐壺という。

帝に仕える女御たちは、当然自分こそが帝の寵愛を受けるのにふさわしいと思っている。なのに桐壺更衣が帝の愛を独り占めしている。女御たちは彼女を目ざわりな者と妬み、蔑んだ。桐壺と同程度、あるいはもっと低い家柄の更衣たちも、なぜあの女が、となおさら気がおさまらない。朝も夕も帝に呼ばれ、その寢室に行き来する桐壺は、ほかの女たちの恨みと憎しみを一身に受けることとなった。

そんな日々が続いたからか、桐壺は病気がちとなり、実家に下がって臥せることも多くなった。すると帝はそんな桐壺をあわれに思い、周囲の非難などもまったく意に介さず、ますます執心する。上達部や殿上人といった朝廷の高官たちは、度の過ぎた帝の執着に眉をひそめ、楊貴妃の例まで出して、唐土でもこんなことから世の中が乱れたいへんな事態になったと言いつけている。そんなことも聞こえてきて、いたたまれないことが多いけれど、帝の深い愛情をひたすら頼りにして、桐壺は宮仕えを続けている。

### 『源氏物語大成』

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからすあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かたちちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれどやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

#### 一、文字数

『大成』

三八六文字

『角田訳』

五二二文字（句読点・記号四〇字を除く）

#### 二、文の数

『大成』

六文

『角田訳』

一四文

#### 三、漢字の使用

『大成』

三九文字

- 『角田訳』 一七一文字（漢字の占める割合三三%）
- 四、敬語の使用  
『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）  
『角田訳』 一箇所
- 五、文脈  
『大成』 （原文のまま）  
『角田訳』 入れ替えあり。
- 六、文体  
『大成』 （原文のまま）  
『角田訳』 基本的に、文末を「だ」「である」調とするが、はじめの一文のみ「です」「ます」調とする。
- 七、『大成』には見られず『角田訳』のみに見られる用語・表現等の存在  
『角田訳』傍線部
- 八、『大成』にはありながら『角田訳』に訳出されていない用語・表現等の存在  
『大成』傍線部
- 九、『大成』本文に即しながらも独自の解釈を施す用語・表現等の存在  
『角田訳』波線部

右に掲げた九点それぞれの相違から、『角田訳』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができる。

- 一、説明を加えていることや、主語の加筆のほか、文脈を入れ替えていることなどにより、文字数は原文よりはるかに多い。
- 二、短い文章が多いことにより、明快であるが、文の数が大幅に増している。
- 三、敬語の省略により、文意が通じやすい。
- 四、大胆な文脈の入れ替えにより、内容が整理され文意が通じやすい。
- 五、当時の生活様式など、現代人には理解できない点を頭注などではなく、内容に織り込んでいく。例えば、「あさゆふの宮つかへ」の内容を具体的に「朝も夕も帝に呼ばれ、その寢室に行き来する」とする。
- 六、女主人公の局の名称と、それに依拠して一般的に知られている「桐壺の更衣」という呼称を早々に持ち出して、「女」の存在性を浮揚させている。当初は、「女」という指示のみであった。『大成』における「御つほねはきりつほ也」は、冒頭より一〇八六字目に現れる。
- 七、基本は「だ」「である」調であり、簡潔な文体としている。ただし、冒頭の一文は例外であり、この物語の語り手が女性であることを暗示している。
- 八、「なのに」、「そんな」など、話し言葉を使用している。親しみやすく、理解の円滑化を助ける。

以上のような特質が見出せる。これらについて、角田自身の考えはどのようなものであったのだろうか。角田は、「訳者あとがき」に、訳出する際の考え方や姿勢を記している。

日本語のゆたかさやうつくしさに留意した訳は、それを愛する人の訳であり、恋愛

の情念と悲哀が全面に見えてくる訳は、やはりその点を書きたい人の訳なのだ。私にはそうした扱ふべき立ち位置がまるでなかったので、そこから見つけていかなければならなかった。これも私はひっくり返して考えるようにした。訳文の正確さ、王朝物語の優雅さ、敬語謙譲語を含む日本語のおもしろさ、恋愛もしくは性を中心としてとらえた物語、平安時代における女性性について、などは、もうとうに書かれていて、私たちはいつだって選べて、読める。ならばそうしたものを私は排除したってかまわないのではないか。そこでまず私が考えたのは読みやすさである。

(中略)

・・・何年もかけて丹念に読むのではなくて(そういう読みかたにはそういう読みかたでしか得られないものがある一方で)、物語世界を駆け抜けるみたいに読んだほうが、つかまえやすいものもきつとある。そんなふうと考えて、読みやすさをまず優先した。敬語や謙譲語の使いかたによって登場人物たちの身分の微妙な差や関係性がわかるという、この作品の特徴的なひとつのおもしろさは、思いきって削ってしまった。ともかくばーつと駆け抜ける。

読みやすさの次に私が考えたのは、作者の声のことだ。自分が書いたものではない小説を、自分の言葉に置き換えるとき、できるだけ私はそこから聞こえてくる声に文章を合わせようと思っている。今回も、作者の声に耳をすませて、それに忠実に書きたいと思った。

引用部分から、訳出方針を箇条書きで抜き出す。

◇「読みやすさ」に重点をおいた。

◇敬語を排除した。

◇原作者の声に自身の文章を合わせた。

先に掲げた、「角田の『源氏物語』における現代語訳の特質」からも「読みやすさ」に重点をおいたこと、敬語を排除したことが顕著にわかる。

角田は、「読みやすさ」の工夫のひとつとして、文の入れ替えを行っている。

「御つほねはきりつほ也」と原文において更衣が桐壺と呼ばれていることが判明するのはのちの場面である。しかし、更衣についての説明を最初におき、「女に与えられた部屋は

桐壺きりつほという。」と早々に訳出している。人・物は、名が与えられて始めてその存在が確定する。

「読みやすさ」を重視した角田の訳出方法の典型といつてよいだろう。

同時に、スピード感をもって読み進めるためには、主語を補うことは必須となる。「この女は」「桐壺更衣が」「桐壺は」「帝は」など、多数の主語が補われている。

さらに、この現代語訳は、「だ」「である」調を採用している。しかし冒頭の一文を「です」「ます」調で訳す。これは、『源氏物語』が、「語り」の作品であることを明確にする訳出方法である。掲出範囲以降も、いわゆる草子地部分において「です」「ます」調を採用している。これは、角田が、「原作者の声に自身の文章を合わせた」箇所と言えよう。この手法により現代の読者は、『源氏物語』構造を知ることができる。スピード感をもって読み進められることの一因となる。

そのほか、スピード感を持って読み進められる要因として、「なのに」、「そんな」など、

現代における話し言葉で綴られている点があげられる。随所に話し言葉が織り交ぜられることにより、堅苦しさがとれ、読者は親しみを持って読み進めていけるであろう。

読みやすさを重点においた訳出方法のため、加筆や独自の解釈、文脈の入れ替えなど、さまざまな工夫が凝らされている。

## 第三章 「桐壺」巻頭部にみる各現代語訳の評価

與謝野晶子

『新譯源氏物語』

『新譯』は、現代語訳の祖である。『新譯』の刊行を期にその後、あまたの現代語訳が現代まで脈々と刊行され続けるのである。その意義は大きい。

決して原文には忠実ではなく、いわば晶子の身体を通過した晶子だけの、言い換えるならば他に置き換えできない、晶子独自の「自由訳」である。短文である点、主語が明確である点などの特質が見出せる。上田敏と森鷗外の「序」をおき、中澤弘光の彩色木版の挿絵という豪華な装丁を施され刊行された『新譯』は、刊行当時から話題になり、多くの読者を獲得したであろうことがうかがえる。そのため、版元を変えながら何度も刊行され、現代においても文庫版で入手可能である。晶子の独自性とその魅力となり、読みやすさもあいまって時代を超えて多くの読者を得ている。文学的喚起力という点において、今もその瑞々しさを失っていない。

『新新譯源氏物語』

原文に忠実な訳出を心がけつつ、理解しにくい箇所について本文中に具体的な説明を織り込んでいく。また、漢語表現を多用しながら、簡潔で明確な表現を用いるという特質を持つ。一般読者に理解しやすい、読み進めやすい訳文である。

古典の叢書や、文学全集に収められているのはこの『新新譯』である。それは、訳文の信頼性によるものである。また、文庫版も版元を変えながら刊行されており、現代まで読み継がれている現代語訳である。原文に忠実である点から、古典や『源氏物語』を学ぼうとする人々の優れた道標としての価値は色褪せることがない。

吉澤義則

『吉澤訳』の最大の特質は、早々に「桐壺の更衣」という呼称を出した点にある。「いつ」「どこで」「だれが」を明確にし、各所において具体的なイメージを読者が持てるよう内容説明や心情を加筆した現代語訳と言える。また、文末に「――」という記号を用い余韻を持たせている点も、読者の想像力をかきたてる効果がある。文章を短く切り、段落も多く用い読みやすい。それとあいまって、四字熟語や、慣用句を用いているからカリズミカルな文体であり、詩的な情緒を漂わせる。

よって、読み進めやすいが、必ずしも逐語訳とは言い難いであろう。大正一四年の刊行当初は叢書のひとつとしてであったが、昭和三年、昭和一二年にそれぞれ単行本として刊行されたことからすれば、当時は、多くの読者層を獲得していたであろうことがうかがえる。しかし、現代においては、その姿を簡単にみることはできない。「門地才貌」「上御一人」などの、現代では縁遠くなった訳語が関係していることも考えられる。

しかしながら、研究者による本格的な現代語訳としての格調は、今も多くの支持を得てい

る。

### 谷崎潤一郎

谷崎潤一郎による三度目の現代語訳である。『新々訳』は、新仮名遣いとし、敬語の削減、最新の研究成果を盛り込むものとなった。

主語や語句の前後を分かりやすくするため補うなどの加筆はみられるが、原文に忠実な訳出である。また、頭注を施し、詳しい説明を加える。一般読者向けに、読みやすい工夫がなされた現代語訳であるが、「伺候」「朋輩」など現代の読者にとっては、一般的でない語句も多くみられ、どちらかと言うと高雅な文体である。原文に忠実であり、頭注を付すなど、研究書的な感もある。古典や『源氏物語』を学びたいと思う読者層には適しているであろう。しかし、現代の一般読者が気軽に手に取るかと言うと、やや疑問が残る。

谷崎の三回にわたる刊行はすべて同一の出版社からであり、それぞれ装丁を変え、幾度も刊行されている。「旧訳」の刊行当時から、その装丁には、趣向がこらされ限定版が刊行され、美術品といっても過言ではない版も多数ある。「谷崎源氏」を応接室の書棚に並べることがステータスであった時代もあった。しかし、その読者層は、真に読むための読者であったかはいささか疑問である。現在も文庫版で刊行され続けていることからすれば、多くの読者を獲得したと言えよう。ただし、その話題性に引きずられながら現代に至っているとも言えなくはない。

谷崎文学との関渉という点からも、その存在意義は晶子訳と双璧をなすと言ってよいだろう。

### 窪田空穂

内容をより具体化するための説明や主語の加筆、難解な長文を直接話法によって表現するなどの工夫がみられる。それらについても最小限の語句で補われており、原文を尊重した逐語訳である。ただし、刊行から七三年後の現代においてすでに一般読者には理解が難しい語句があり、また、歴史的仮名遣いのため当初の刊行本は、現代における一般読者向けとは言い難い(注1)。

『萬葉集評釈』『古今和歌集評釈』『新古今和歌集評釈』にみる、古典和歌評釈の泰斗による現代語訳としての価値は、未だ損われることがない。

注1…のちに角川書店より刊行された『窪田空穂全集』に収載された『現代語譯源氏物語』

は、新仮名遣いに改められている。書誌は、次のとおり。窪田空穂『現代語譯源氏物語 I』昭和四二年一〇月一〇日、窪田空穂『現代語譯源氏物語 II』昭和四二年一二月一〇日。

### 佐成謙太郎

訳文に重きをおいた、原文との対訳である。佐成自身が「一字一句をも損じないように注意して、現代語に復現しよう」と試みた」と記すとおりの逐語訳と言えよう。

特筆すべきは、「訳者が原文以外に文意を補ったもの」については、「( )」で示した点にある。ただし、厳密に言えば、主語などを補っている箇所については、「( )」は使用されていない。とはいうものの、原文が掲載されていることと同時に、加筆部分が明確に示されることは、一般読者にとって原文を知るためにも良い手立てとなろう。

### 玉上琢彌

「原文を味わわんことを望む」と記す『玉上訳』は、そこに重点をおく逐語訳である。よって、加筆も極めて少ない。現代語訳をするにあたって問題となる主語の加筆についても最小限におさめている。冒頭部分において原文では、文脈から女主人公が「更衣」の身分であることは推察できる。しかし、原文にはどこにも「更衣」という記述はない。その点をも加筆することなく忠実に訳出している。また、説明的な加筆がない点も特質と言えるが、これは、本書の前半部分に原文および脚注があることが助けになっているであろう。訳文のみ読み通したい一般読者にとっては、円滑に読み進められるか、やや不安が残る。

吉澤義則と双璧をなすであろう研究者による本格的な現代語訳として、その価値は、極めて高い。

### 円地文子

加筆が多いという特質を持つ。主語や内容説明だけではなく、登場人物の心情なども円地独自の解釈に基づき、加筆している。円地自身は、加筆について「私は、奇を衒ったり、原作を歪曲したりするためにこの加筆を行なったのではない。『源氏』を読んでいる間に、それらの部分に來ると、いつも憑かれたように自分のうちに湧き立ち、溢れたぎり、やがて静かに原文の中に吸収されてゆく情感をそのまま言葉に移して溶かし入れなければならぬままにそうしたのである。」と「序」に記している。これは、「原作への純粋な愛の表現」と述べるとおり、円地が「自分の心で読みとった『源氏物語』」（注1）、つまり、円地の解釈した『源氏物語』を小説家としての円地の言葉で綴った、一言で言うならば、円地の小説風の現代語訳である。古典の現代語訳としての読者層と、(歴史) 小説を好む読者層の両者を取り込むことが可能である。その点からすると、幅広い読者層の獲得が可能であろう。

与謝野晶子と好一對をなす、古典教養に優れた女性作家による、一方では穩当、一方では個性的な現代語訳となっている。

注1・円地文子『源氏物語 卷一』（昭和五五年二月二五日）「序」より引用。

### 今泉忠義

昭和四九年の刊行であるが、歴史的仮名遣いを採用している。



特質のひとつは、訳文に（ ）を用い、加筆部分を明瞭に示す点にある。ただし、すべてにおいて該当するものではなく、それ以外についても加筆や、主体を帝から更衣に変更して訳出するなど、独自の解釈もみられる。

また、訳文に「さうだ」「とか」「もんだ」「なつたんだ」など、話し言葉を用いる。それらの言葉は、どちらかというとも性的である。よって、「だ」「である」調とあいまって、全体が男性的文体となっている。

なお、単行本刊行後、出版社を変えながら文庫本として二度刊行されており、その際には、現代仮名遣いに改められている。

### おのりきぞう

仮名書き、音読を基本とした平安朝文芸の享受法を意識し訳出された現代語訳である。固有名詞も含め、常用漢字を用いることが可能な箇所もあえてひらがな表記し、語句の間にスペースを設けるといった特質を持つ。

平易な言葉を用いる。おのが、「あとがき」で記すよう「やさしい 話しことば」で書かれているが、そのため表現が限定的になるという欠点も必然である。音読するための形式は整えられているが、それによる美しい言葉の響きを得ることができるか、疑問は残る。

完訳ではあるがどちらかというと物語の筋を追う訳出である感が強い。そもそもあらずじを把握したい読者は、全一〇巻の『おの訳』を選択する可能性は低く、一冊で把握できる梗概本を選択するであろう。若い年齢層に絞っての現代語訳ではあるが、「やさしい」言葉を使用するだけでは、かえって若い年齢層を取り込むことは難しいであろう。

### 秋山虔

原文と比較して、訳出されていない語も文の入れ替えなどもなく、最低限とってよい主語や接続詞などの加筆のみで現代語訳する。ただし、最低限の加筆のみで訳出できた一因は本書前半部に原文と脚注をおいているため、説明的、解説的な加筆を必要としないからであろう。

助詞なども厳密に訳出し、研究者らしい逐語訳という特質を持つ。一般読者向けに刊行された本書ではあるが、形式的にも訳文においても専門書に近いものとなっている。古典に興味があり、積極的に学びたい読者層向けである。

現代語訳の標準としての価値が、多くの支持を得ている。

### 中田武司

訳出されていない語句はなく、忠実に現代語訳する。主語や接続詞の加筆も多くは見られず、内容の説明について文中に織り込む際も、短い言葉での加筆となっている。原文を尊重した逐語訳であるが、慣用句の採用や、話し言葉での表現もみられ、読みやすさも配慮されている。「おいでになられる」など、文末二重敬語になる箇所もあり、やや文体に不整合さ

がうかがえる。気軽に読んでみたいと思う読者にとっては、一冊本である点も含め、(重くして)手に取りにくい面もある。幅広い読者層に受け入れられるかは疑問である。

### 中井和子

現代の京ことば訳であるという特質を持つ。この訳出方法によって導き出された効果として、主語を補うことなく訳出できた点があげられる。これによって文字数の増加を抑えることもできた。ただし、京ことばの特徴として、無機物などに「お」や「さん」をつける法則があるためその分に関しては、文字数の増加となる。また、文末が単純化しやすく、同じ言い回しが多くみられる。個性的な訳出方法であり、他に類を見ない。「京ことば」に興味を持った読者層は別にして、この現代語訳を読もうと思う読者は、すでにほか(原文を含む)で『源氏物語』を読んでいる、もしくは、熟知している読者となろう。読者層は限定されようか。

### 瀬戸内寂聴

一文を短く切り、段落も多く取り、主語を補うなど明快さを基本方針においた現代語訳である。主語だけではなく、内容の説明や補足も加えられ、また、瀬戸内自身の読みによる解釈も加えられている。これらによって読み進められやすくなったことに間違いはない。ただし、それらの多くの加筆により、原文から離れていくのも事実である。

また、瀬戸内は、編集部から、三者(与謝野晶子、谷崎潤一郎、円地文子)が使用したことばと同じものは使用してはならないという要求のもと訳業をすすめたことが、三田村雅子氏、河添房江氏、松井健児氏のインタビュ(注1)で明かされている。原文はひとつであり、それにびたりとあっている現代語訳があっても、先人がすでに使用していれば使えないのである。この縛りの中、全訳を成し遂げた瀬戸内の努力は評価に値するであろう。

しかし、現代語訳として見た時には、びたりとくる最善の言葉が使用されていない可能性は十分にあり、これも問題点の一つとなる。原文に忠実に訳することと、明快さとその両者を獲得するには限界があったであろう。そのことを瀬戸内自身も承知していたからこそ「あくまで原文への橋渡しのような感じ」でとし、「おもしろいと思えば原文を読んでちょうだい」と語る(注2)のである。

必ずしも原文に忠実とはなっていない『寂聴訳』ではあるが、明快で読みやすい点から幅広い読者層からの支持を得ている。

注1…三田村雅子ほか編『源氏研究第三号』(平成一〇年四月二〇日 翰林書房)において、

「源氏物語の魅力語る」というテーマで、三田村雅子氏、河添房江氏、松井健児氏のインタビュに答えている。

注2…注1に同じ。

### 尾崎左永子

文脈を大胆に入れ替え、また、「逐語訳の部分と軽く通過する部分」を分けるといふ尾崎独自の工夫が特質である。読者が『源氏物語』を「読み通す」ことに主眼をおいたため、とする。

一方、「軽く通過する」のみでなく、全く訳出されていない部分もある点から、忠実性には欠けている。全体の物語の筋を把握するには適当ではあるが、厳密性を求める読者層にとっては、物足りなさが残る。おおよその内容が知りたい、時間をかけずに詳細が知りたいという読書層にとっては、有益であるかもしれない。

### 大塚ひかり

「です」「ます」調を基本とするが、原文における助詞をそのまま訳出し文末としている。また、カタカナ語を採用し、あえて、漢字表記できるものをカタカナ表記にすることによってリズムカルな現代の会話のような軽快さがみられる訳出である。敬語を控えめにし、登場人物の心情なども適宜加え、大塚が言う「分かる『源氏物語』」にするための工夫がその特質となっている。

また、その一方で、大塚は原文を重視した逐語訳をめざしており、原文をそのまま用いるなど、原文を尊重している点もみられる。補足的な説明として〈ひかりナビ〉と称する解説をおく。

古典エッセイストとしての専門的考察と、現代の読者に受け入れられやすい軽快な文体の、その両者を持ち合わせたことにより、幅広い読者層を獲得している。

### 上野榮子

山岸徳平校注『源氏物語』の頭注等に大きく依拠した訳出だが、登場人物の心情により深く入り込む表現や、内容をより具体的に明示するなど、上野独自の解釈による訳出も少なくみられる。学生時代から愛読していた『源氏物語』を、間違いのない専門家の訳出に従いながら、独自の解釈を織り込んだところが特質と言えよう。主婦であった上野が、ほぼ独学により成し遂げた逐語訳であり、その話題性に関心が寄せられている。

### 林望

作家であり、研究者である林が、厳密な訳出方針を立てた上での現代語訳である。

本来ならば頭注、脚注などに付すような内容が、訳文に織り込まれている。これにより現代人には理解できない生活様式なども、理解できるようになっている。しかし、かえってこのことが原文から離れる一因になったとも言える。

また、男性的な文体であるという特質を持つ。それは、語り手を本来の姿である老女房ではなく、「小説の語り手」としたこと、短文を多く取り入れたことにより、さばさばした文

体になったこと、漢語的表現をもちいたこと、それらとあいまって、「だ」「である」調であることによる。

これらの要因によって、現代の小説を読むように、読み進めやすい現代語訳になっていると言えよう。ただし、男性的な文体については、好みが分かれるところかもしれない。

### 荻原規子

『源氏物語』五十四帖を三つの系統に分けて再構成し、現代語訳している点が特質となる。荻原の訳出方針の根幹は、「原典に似た少ない文字数でスピーディに読み進める」ことであり、全体の再構成のほか、長い文章を短くする、文を入れ替える、長い文を縮小するなどの方法を採用している。「スピーディに読」むことは、現代の読者に歓迎されるであろう。また、二つに分かれていることから、その一つを読んでもそれで完結するという便利さもある。よって、そもそも古典や『源氏物語』にさほど関心がない読者層にも受け入れられやすい。比較的平易な文章で手軽に読める点からも、幅広い読者層が獲得できるであろう。ただし、厳密さを求める読者にとっては、受け入れられない現代語訳である。

### 小林千草・千草子

山本春正による『絵入源氏物語』の挿絵をすべて入れ、「挿絵の描く場面は全訳」をし、それ以外は「簡訳」にするという、訳者の独自性あふれる現代語訳である。『絵入源氏物語』の挿絵がない場面については、大幅な省略がある。また、文の入れ替えも行っており、原文から離れてしまっているのは事実である。山本春正による『絵入源氏物語』の挿絵を楽しみながら読み進められ、「簡訳」であることから、全体の分量は抑えられており、手軽さがある。

しかし、梗概本ではないため、バランスよく全体を把握したい読者には不向きであろう。また、山本春正による『絵入源氏物語』の挿絵自体が専門的である可能性も高い。堅苦しくなく、ある意味手軽ではあるが、『源氏物語』をはじめて手に取る人向けというより、すでにある程度理解している読者層向けと言った方が的確ではないだろうか。幅広い読者層に受け入れられるかは疑問である。

### 中野幸一

原文に忠実であることに重点をおき、敬語をはじめとする正しい日本語で訳出するという方針のもと訳出された、研究者らしい細部にもこだわった厳密さがうかがえる現代語訳である。ただし、敬語については、原文より多く使用され、かえってまわりくどくなっている箇所もある。

また、形式的な特質として、「頭注」、「訳文の下の本文」、「小見出し」、「小見出し一覧」などを付し、巻末には、解説や参考資料を掲載していることがあげられる。訳文と原文の位置が逆ではあるものの、古典の全集本と変わらない体裁ではある。一般読者を対象にしてい

るといふものの、この体裁が、読者の敷居を高くしてはいないだろうか。一般読者の中でも、『源氏物語』を学んでみたいという高い意識を持つ読者層向けと言えようか。

### 角田光代

スピード感を持つて読める、読みやすさを最優先にした現代語訳である。

主語を加筆すること、文脈を入れ替えることなどにより、内容を明確化している。一文を短くし、「だ」「である」調でまとめられているために、滞ることなく読み進められる。一方で、草子地部分を「です」「ます」調にするとという特質を持つ。この手法により、物語の構造が明らかになり、ストーリー展開が把握しやすくなっている。また、現代人の話し言葉を適宜用いることにより、硬さがなくなる。

しかしながら、一方では、随所に原文の語句そのものも織り交ぜ、原文尊重の姿勢は貫かれている。これにより、読者は原文の空気に触れつつ読み進めることができる。

堅苦しくなく、スピード感をもって読み進めることができる『角田訳』は、現代の読者が求める「読みやすい『源氏物語』」と言えようか。

### 【参考文献】

- ・三浦理編『源氏物語 二』(大正三年五月二〇日 有朋堂書店)
- ・三浦理編『源氏物語 三』(大正三年七月一〇日 有朋堂書店)
- ・與謝野晶子『明るみへ』(大正五年一月一日 金尾文淵堂)
- ・塚本哲三編『源氏物語 一』(大正六年四月三〇日 有朋堂書店)
- ・塚本哲三編『源氏物語 四』(大正一〇年九月八日 有朋堂書店)
- ・塚本哲三編『田舎源氏 上』(大正一一年二月二日 有朋堂書店)
- ・塚本哲三編『田舎源氏 下』(大正一二年二月二日 有朋堂書店)
- ・吉沢義則『對校 源氏物語新釈 卷一』(昭和一二年六月一五日 平凡社)
- ・池田亀鑑『《日本古典全書》源氏物語 一』(昭和二年二月一五日 朝日新聞社)
- ・池田亀鑑『《日本古典全書》源氏物語 二』(昭和二年二月二五日 朝日新聞社)
- ・池田亀鑑『《日本古典全書》源氏物語 三』(昭和二年三月三〇日 朝日新聞社)
- ・池田亀鑑『《日本古典全書》源氏物語 四』(昭和二年三月二〇日 朝日新聞社)
- ・池田亀鑑『源氏物語大成 卷一 校異篇』(昭和二八年六月二五日 中央公論社)
- ・池田亀鑑『《日本古典全書》源氏物語五』(昭和二九年一月一〇日 朝日新聞社)
- ・池田亀鑑『《日本古典全書》源氏物語六』(昭和二九年二月一五日 朝日新聞社)
- ・池田亀鑑『《日本古典全書》源氏物語七』(昭和三〇年二月二〇日 朝日新聞社)
- ・玉上琢彌『源氏物語評釈 第一卷』(昭和三九年一〇月一〇日 角川書店)
- ・円地文子ほか『全講和泉式部日記』(昭和四〇年十一月二五日 至文堂)
- ・谷崎潤一郎ほか編『《日本の文学》第二十五卷 谷崎潤一郎(三)』(昭和四二年九月二十五日 中央公論社)
- ・窪田空穂『《窪田空穂全集》第二十七卷 現代語譯源氏物語 I』(昭和四二年一〇月一日 角川書店)

- ・窪田空穂『窪田空穂全集』第二十八巻 現代語譯源氏物語 II (昭和四二年一月一日 角川書店)
- ・折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』第十四巻 ノート編 (昭和四五年一月二〇日 中央公論社)
- ・折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』第十五巻 ノート編 (昭和四六年七月二〇日 中央公論社)
- ・桜田満編『谷崎潤一郎』(昭和四八年九月一日 学習研究社)
- ・谷崎潤一郎『文章読本』(昭和四九年一月二五日 中央公論社)
- ・円地文子『日本の古典物語』四 かぐや姫物語 (昭和五〇年三月二〇日 岩崎書店)
- ・円地文子『日本の古典物語』二十一 近松物語 (昭和五〇年三月二〇日 岩崎書店)
- ・逸見久美『評伝・與謝野鐵幹晶子』(昭和五〇年四月一〇日 八木書店)
- ・清水好子ほか『源氏物語手鏡』(新潮選書) (昭和五〇年四月二五日 新潮社)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 一 (昭和五一年六月一〇日 新潮社)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 二 (昭和五二年七月一〇日 新潮社)
- ・日本近代文学館ほか編『日本近代文学大事典 第一巻』(昭和五二年一月一八日 講談社)
- ・紫式部学会編『源氏物語とその影響 研究と資料―古代文学論叢第六輯―』(昭和五三年三月三十日 武蔵野書院)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 三 (昭和五三年五月一〇日 新潮社)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 四 (昭和五四年二月一〇日 新潮社)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 五 (昭和五五年九月一〇日 新潮社)
- ・與謝野晶子『定本 與謝野晶子全集』(第十九巻 評論 感想集六) (昭和五六年一月一〇日 講談社)
- ・円地文子ほか『古典再入門』(昭和五六年五月一日 鎌倉書房)
- ・円地文子『日本の古典ノベルズ』源氏物語抄 (昭和五七年五月一日 学習研究社)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 六 (昭和五七年五月一〇日 新潮社)
- ・植田安也子・逸見久美編『天眠文庫蔵 与與謝野寛 晶子書簡集』(昭和五八年六月七日 八木書店)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 七 (昭和五八年一月一〇日 新潮社)
- ・田辺聖子『新源氏物語 (下)』(昭和五九年五月二五日 新潮社)
- ・笠原伸夫編『新潮日本文学アルバム』7 谷崎潤一郎 (昭和六〇年一月一五日 新潮社)
- ・石田讓二・清水好子校注『新潮日本古典集成』源氏物語 八 (昭和六〇年四月五日 新潮社)
- ・瀬戸内晴美『私の好きな古典の女たち』(昭和六〇年五月二五日 新潮社)
- ・円地文子『わたしの古典』6 円地文子の源氏物語 卷一 (昭和六〇年一〇月二三日)

- ・ 集英社)
- ・ 円地文子『《わたしの古典》』7 円地文子の源氏物語 卷二(昭和六〇年二月一五日 集英社)
- ・ 円地文子『源氏物語私見』(昭和六一年一月二〇日 新潮社)
- ・ 円地文子『《わたしの古典》』8 円地文子の源氏物語 卷三(昭和六一年二月二四日 集英社)
- ・ 瀬戸内寂聴『女人源氏物語 一』(昭和六三年一月一〇日 小学館)
- ・ 瀬戸内寂聴『女人源氏物語 二』(平成元年二月一〇日 小学館)
- ・ 富家素子『母・円地文子』(平成元年三月二〇日 新潮社)
- ・ 瀬戸内寂聴『女人源氏物語 三』(平成元年四月一〇日 小学館)
- ・ 瀬戸内寂聴『女人源氏物語 四』(平成元年六月一〇日 小学館)
- ・ 瀬戸内寂聴『女人源氏物語 五』(平成元年八月一〇日 小学館)
- ・ 富家素子『童女のごとく(母 円地文子のあしあと)』(平成元年十二月一〇日 海竜社)
- ・ 藤井隆『日本古典書誌学総説』(平成三年四月三〇日 和泉書院)
- ・ 堺市博物館編 没五十年記念特別展『与謝野晶子―その生涯と作品―』(平成三年四月 堺市博物館)
- ・ 今井卓爾ほか編『《源氏物語講座》』第九巻 近代の享受と海外との交流』(平成四年一月二〇日 勉誠社)
- ・ 林望『帰らぬ日遠い昔』(平成四年九月二八日 講談社)
- ・ 瀬戸内寂聴『《少年少女古典文学館》』第五巻 源氏物語 上』(平成四年十二月一九日 講談社)
- ・ 瀬戸内寂聴『《少年少女古典文学館》』第六巻 源氏物語 下』(平成五年一月二八日 講談社)
- ・ 瀬戸内寂聴『わたしの源氏物語』(平成五年六月二五日 集英社)
- ・ 瀬戸内寂聴『十人十色 源氏はおもしろい/寂聴対談』(平成五年十二月一〇日 小学館)
- ・ 伊吹和子『われよりほかに 谷崎潤一郎最後の十二年』(平成六年二月一八日 講談社)
- ・ 阿部秋生ほか校注・訳『《新編日本古典文学全集》』源氏物語 一』(平成六年三月一日 小学館)
- ・ 鈴木重三 校注『修紫田舎源氏 上』(平成七年二月二七日 岩波書店)
- ・ 岡田靖『鶴見大学紀要 第三二号 第四部人文・社会・自然科学編』(平成七年三月一五日 鶴見大学)
- ・ 平子恭子『《年表作家読本》 与謝野晶子』(平成七年四月二五日 河出書房新社)
- ・ 上田博ほか編『与謝野晶子を学ぶ人のために』(平成七年五月二〇日 世界思想社)
- ・ 鈴木重三 校注『修紫田舎源氏 下』(平成七年十二月八日 岩波書店)
- ・ 秋山虔編『《別冊國文學》』No.五〇 新・源氏物語必携』(平成九年五月一〇日 學燈社)
- ・ 水上勉・瀬戸内寂聴『文章修行』(平成九年七月二五日 岩波書店)
- ・ 三田村雅子ほか編『源氏研究 第三号』(平成一〇年四月二〇日 翰林書房)
- ・ 円地文子『《作家の自伝》』七二 円地文子』(平成一〇年四月二五日 日本図書センター)
- ・ 大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』(平成一〇年六月一〇日 明治書院)
- ・ 市川千尋『与謝野晶子と源氏物語』(平成一〇年七月三〇日 国研出版)
- ・ 瀬戸内寂聴『《寂聴対談集》 わかれば『源氏』はおもしろい』(平成一〇年九月二九日 講談社)

- ・呉羽長『《新典社選書》10 源氏物語の受容―現代作家の場合―』(平成一〇年一月三一〇日 新典社)
- ・駒沢女子大学『駒沢女子大学 研究紀要 第五号』(平成一〇年二月二四日 駒沢女子大学)
- ・『國文學 解釈と教材の研究 〈与謝野晶子―自由な精神〉』(平成一一年三月号 (平成一一年三月一〇日 學燈社))
- ・島内景二ほか編『《批評集成・源氏物語》第三卷 近代の批評』(平成一一年五月二五日 ゆまに書房)
- ・島内景二ほか編『《批評集成・源氏物語》第四卷 近代の創見』(平成一一年五月二五日 ゆまに書房)
- ・島内景二ほか編『《批評集成・源氏物語》第五卷 戦時下篇』(平成一一年五月二五日 ゆまに書房)
- ・谷崎潤一郎・渡辺千萬子『谷崎潤一郎―渡辺千萬子 往復書簡』(平成一三年二月七日 中央公論社)
- ・『國文學 解釈と鑑賞』特集 谷崎潤一郎を読む』(平成一三年六月一日 至文堂)
- ・瀬戸内寂聴ほか『源氏物語の愛』(平成一三年一〇月一〇日 講談社)
- ・千葉俊二編『《別冊國文學》(二〇〇一・一一) 改装版 谷崎潤一郎必携』(平成一四年四月二〇日 學燈社)
- ・與謝野晶子『與謝野晶子評論著作集 第二一卷』平成一四年一月一〇日 龍溪書舎)
- ・小島孝之ほか編『異文化理解の視座 世界からみた日本、日本からみた世界』(平成一五年四月二五日 東京大学出版会)
- ・秋山虔・室伏信助『源氏物語の鑑賞と基礎知識 二十九 花散里』(平成一五年六月一〇日 至文堂)
- ・瀬戸内寂聴『痛快! 寂聴源氏塾』(平成一六年三月三十一日 集英社)
- ・小林富久子『《女性作家評伝シリーズ》11 円地文子〈ジェンダーで読む作家の生と作品〉』(平成一七年一月二七日 新典社)
- ・野間佐和子『日本の童話名作選 明治・大正篇』(平成一七年五月一〇日 講談社)
- ・瀬戸内寂聴『すらすら読める源氏物語 上』(平成一七年七月一五日 講談社)
- ・瀬戸内寂聴『すらすら読める源氏物語 中』(平成一七年七月一五日 講談社)
- ・瀬戸内寂聴『すらすら読める源氏物語 下』(平成一七年八月一六日 講談社)
- ・瀬戸内寂聴『寂聴源氏塾』(平成一九年三月三十一日 集英社)
- ・与謝野晶子『与謝野晶子児童文学全集① 童話篇 長編童話 八つの夜』(平成一九年七月二〇日 春陽堂書店)
- ・千葉俊二編『《講座源氏物語研究》第六卷 近代文学における源氏物語』(平成一九年八月二日 おうふう)
- ・河添房江編『《講座源氏物語研究》第十二卷 源氏物語の現代語訳と翻訳』(平成二〇年六月二〇日 おうふう)
- ・上田秋成『《現代語訳》雨月物語 春雨物語』(平成二〇年七月二〇日 河出書房新社)
- ・瀬戸内寂聴『寂聴と読む源氏物語』(平成二〇年一〇月二〇日 講談社)
- ・円地文子『江戸文学問わず語り』(平成二一年一月一〇日 講談社)
- ・瀬戸内寂聴『《シリーズ・古典》瀬戸内寂聴の源氏物語 (全一冊)』(平成二一年九月二一―五日 講談社)



- ・井上健『翻訳文学の視界―近現代日本文化の変容と翻訳―』（平成二四年一月一五日 思文閣出版）
- ・東京大学国語国文学会『国語と国文学』（平成二六年四月一日 明治書院）
- ・林望『謹訳 源氏物語 私抄』（平成二六年四月三〇日 祥伝社）
- ・堺市博物館編 企画展『与謝野晶子―その限りなき挑戦の生涯―』（平成二七年十一月三〇日 堺市博物館）
- ・谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集 第二十四卷』（平成二八年三月一〇日 中央公論新社）
- ・谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集 第二十五卷』（平成二八年九月一〇日 中央公論新社）
- ・堺市博物館編 企画展図録『与謝野晶子と三つの舞台―堺・京都・東京―』（平成二八年一月一日）
- ・『國學院大學紀要 第五十五卷』（平成二九年一月三一日 國學院大學）
- ・『説林 第六五号』平成二九年三月五日 愛知県立大学国文学会
- ・『文学・語学 第二一九号』平成二九年六月二五日 全国大学国語国文学会
- ・『国文学研究』（平成二九年六月一五日 早稲田大学国文学会）
- ・『国文学研究』（平成二九年一〇月一五日 早稲田大学国文学会）
- ・堺市博物館編 堺市博物館所蔵資料調査報告書『与謝野晶子「新新訳源氏物語」桐壺の巻 草稿調査報告書』（令和二年三月二七日）
- ・『文藝 2020夏季号/第59巻 第2号』（令和二年五月一日 河出書房新社）
- ・『短歌研究 第77巻第7号』（令和二年七月一日 短歌研究社）
- ・『短歌研究 第77巻第8号』（令和二年八月一日 短歌研究社）
- ・河添房江「越境する翻訳と現代語訳―ウェイリー訳と与謝野・谷崎源氏―」 講演資料（シンポジウム「海外における源氏物語の世界翻訳と研究」 平成一五年一月二六日 大阪大学）
- ・秋澤互「國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』について」 講演資料
- （谷崎源氏研究会シンポジウム「谷崎源氏を考える」（平成二八年三月五日 國學院大學）
- ・西野厚志「戦時下版「谷崎源氏」成立の背景―編集者宛て新出書簡にふれながら―」 講演資料
- ・谷崎源氏研究会シンポジウム「谷崎源氏を考える」（平成二八年三月五日 國學院大學）
- ・中村ともえ「削除という方法―『潤一郎訳源氏物語』考」 講演資料
- （谷崎源氏研究会シンポジウム「谷崎源氏を考える」（平成二八年三月五日 國學院大學）
- ・大津直子「〈旧訳〉と〈新訳〉との間―新紹介資料「藤壺―賢木の巻補遺」改稿版から考える―」 講演資料
- （谷崎源氏研究会シンポジウム「谷崎源氏を考える」（平成二八年三月五日 國學院大學）
- ・「小林天眠略年譜」（企画展『与謝野晶子と三つの舞台―堺・京都・東京―』資料 平成二八年一月一日〜二月一八日 堺市博物館）
- ・田坂憲二「戦後の与謝野源氏と谷崎源氏―出版文化史の観点から―」 講演資料
- （全国大学国語国文学会第一一四大会 シンポジウム「女性作家と『源氏物語』」 平成二八年一月二三日 大阪樟蔭女子大学）
- ・神野藤昭夫「晶子源氏」誕生秘話」 講演資料

(平成二八年一二月九日 愛知淑徳大学)  
・中野幸一「源氏物語のことばと表現」 講演資料  
(早稲田大学 国語教育学会 (二七二回) 大会「源氏物語の魅力を探る」(平成二九年六月二  
四日 早稲田大学))

第三部 与謝野晶子による『源氏物語』現代語訳

## 第一章 与謝野晶子による二つの現代語訳

### 第一節 『新譯源氏物語』の概要

与謝野晶子の『新譯源氏物語』は、明治四五年に刊行が開始されてから一世紀以上が経過した令和二年現在も、その書名の変化はあるものの私たちが手軽に入手できる作品である。平成二〇年四月二五日に『与謝野晶子の源氏物語』全三巻として角川学芸出版（角川ソフィア文庫）から刊行され、現在も販売中である。

この『与謝野晶子の源氏物語』全三巻は、各巻末の注記により、平成一三年一月三〇日に『与謝野晶子の新訳源氏物語』全二巻として角川書店から刊行されたものの文庫版であることがわかる。さらに、当該書には「本書は、昭和四年河野成光館刊行の再版二冊本を底本にして、原文を新字・新かなづかいに改めたほか、漢字の一部をひらがなに改めた。なお、ひかる源氏編、薫・浮舟編の編名は、今回新たに設けたものである。（編集部）」とある。ここで、『新譯源氏物語』の現在に至るまでの出版の歴史をたどってみたい。（注1）

- 『新譯源氏物語』 全三巻四冊 明治四五年二月〜大正二年一月 金尾文淵堂
- 『新譯源氏物語』 全四巻 大正三年一月 金尾文淵堂
- 『縮刷新譯源氏物語』 全四巻 大正一一年七月 金尾文淵堂
- 『新譯源氏物語』 全二巻 大正一五年二月 大鏡閣
- 『新譯源氏物語』 全二巻 大正一五年四月〜同年七月 金尾文淵堂
- 『新譯源氏物語』 全二巻 昭和四年三月 大鏡閣（河野成光館発売）
- 『新譯源氏物語』 全二巻 昭和七年一月 新興社
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和七年七月 新興社
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和八年五月 新興社
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和八年八月 新興社
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和九年五月 新興社
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和一〇年一月 新興社
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和一〇年九月 新興社
- 『新譯源氏物語』 全四巻 昭和一〇年九月 新興社（富文館発売）
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和一〇年九月 新興社（富文館発売）
- 『新譯源氏物語』 全一卷 昭和一一年一月 新興社
- 『与謝野晶子の新訳源氏物語』 全二巻 平成一三年一月 角川書店
- 『新訳 源氏物語』 全二巻 平成一四年一月 勉誠出版※（鉄幹 晶子 全集）「7」「8」
- 『与謝野晶子の源氏物語』 全三巻 平成二〇年四月 角川学芸出版（角川ソフィア文庫）

現在に至るまで、確認できただけでも一九回にわたり刊行されている。

なお、昭和七年七月から昭和一一年一月二月にかけ全二巻として新興社から刊行されたものは、奥付に再版との記載はなく、加えてそれぞれに挿絵の位置の異同や細部における記載の有無に相違があるので、再版ではなく新たな刊行物として扱った。

また、大正三年一二月に刊行された『新譯源氏物語』全四巻は、初版との本文異同がみら

れる(注2)。その事情は不明であるが、次のように推察される。

大正三年一月に刊行された『新譯源氏物語』全四巻は、扉に「賜天覽 賜台覽」とあり、天皇家に献上されたようである。異同部分に「陛下」に関連する語句および「陛下」に対する敬語の使用方法の変更が多数みられることから、天皇家に献上するためにはふさわしくないとと思われる箇所を変更する必要が生じた可能性は否定できないのではないであろうか。大きな異同の一つを引用する。ルビを削除し、異同部分に傍線を付した。

『新譯源氏物語』「上巻」(明治四五年二月一日)

陛下は二十になるやならずの青年である。

『新譯源氏物語』「第一巻」(大正三年二月一日)

陛下は三十になるやならずの青年である。

「陛下」の年齢を「二十になるやならず」から「三十になるやならず」に変更したのである。もともと、『源氏物語』には、年齢の表記はない。いわば、晶子が読み取った晶子の感覚のなしたものである。それをあえて変更するのはいかにも不自然ではないか。

右に見るとおり、『新譯源氏物語』「第一巻」は大正三年の刊行であり、明治天皇の崩御(明治四五年七月三〇日)から間がない。明治天皇は一六歳(一八六八年)で即位しており、読者が明治天皇(二十になるやならずの青年)を連想する可能性がある。それを払拭するため、あえて「三十になるやならず」に変更したのではないだろうか。金尾文淵堂は、大正元年一〇月三〇日に明治天皇の大葬の写真集である『御大葬記念寫真帖』を刊行している(注3)。天皇家に関することについては敏感に対応していたのではないだろうか。そうすると、修正をしたのが、晶子自身であるかどうかという問題にもかかわってくるが、今はそれを措くこととする。

この『新譯源氏物語』は、昭和二三年に晶子による二つ目の現代語訳『新新譯源氏物語』が刊行されるまでの二六年間、出版社を変え、装丁を変え、刊行され続けたのである。それは、刊行が重ねられるにつれ、挿絵が不鮮明になっていくことからわかる。版木が摩耗するほど使用されたのである。この一点だけでも、当時の需要の高さがうかがえる。さらに、現代の私たちも文庫版で手軽に入手し読むことができるのは、今もなお需要が絶えないからであることは言うまでもない。

## 第二節 『新新譯源氏物語』の概要

各種の文学全集(叢書)に収載されている与謝野晶子訳『源氏物語』は、そのほとんどが昭和一三年に刊行が開始された『新新譯源氏物語』である。

ここで、『新新譯源氏物語』の現在に至るまでの出版の歴史をたどってみたい。(注4)

『新新譯源氏物語』 全六巻 昭和一三年一〇月〜昭和一四年九月 金尾文淵堂

『新々譯源氏物語』 全六巻 昭和二三年一月〜昭和二四年一〇月 日本社(日本文庫)

※《日本文庫 文學篇》「20」「21」「22」「23」「24」「25」

『源氏物語』 全四巻 昭和二四年六月〜同年一〇月 三笠書房

※《世界文學選書》「4」から「7」

『源氏物語』 全二卷 昭和二五年九月〜同年一〇月 三笠書房

『源氏物語』 全七卷 昭和二六年一〇月〜昭和二七年一月 三笠書房（三笠文庫）

『源氏物語』 全九卷 昭和二九年一〇月〜昭和三〇年八月 角川書店（角川文庫）

『源氏物語』 全二卷 昭和三〇年九月〜同年一〇月 河出書房

『源氏物語』 全二卷 昭和三三年七月〜同年八月 河出書房新社

※《日本国民文学全集》「第三卷」「第四卷」

『源氏物語』 全二卷 昭和三五年七月〜同年八月 河出書房新社

※《日本文学全集》「1」「2」

『定本 現代語訳 源氏物語』 全二卷 昭和三六年九月〜同年一〇月 日本書房

『定本 現代語訳 源氏物語』 全二卷 昭和三七年九月〜同年一〇月 日本書房

『源氏物語』 全二卷 昭和三八年八月〜三九年九月 河出書房新社

※《国民の文学》「第三卷」「第四卷」

『定本 現代語訳 源氏物語』 全二卷 昭和三九年三月〜同年四月 日本書房

『源氏物語』 全二卷 昭和四〇年六月〜同年七月 河出書房新社

※《豪華版日本文学全集》「第二卷」「第三卷」

『源氏物語』 全二卷 昭和四二年一月〜同年二月 河出書房新社

※《カラー版 日本文学全集》「1」「2」

『源氏物語』 全三卷 昭和四四年五月〜同年七月 河出書房新社

『源氏物語』 全二卷 昭和四六年二月〜同年三月 河出書房新社

※《日本の古典》「3」「4」

『源氏物語』 全三卷 昭和四六年八月〜昭和四七年二月 角川書店（角川文庫）

『源氏物語』 全三卷 昭和五一年一月 河出書房新社

※《日本古典文庫》「4」「5」「6」

『源氏物語』 全二卷 昭和五四年五月 河出書房新社

※《現代語訳 日本の古典》「3」「4」

『源氏物語』 全三卷 昭和六二年一二月 河出書房新社

※《新装版 日本古典文庫》「4」「5」「6」

『源氏物語』 全一卷 昭和六三年一月 河出書房新社

『全訳 源氏物語 新装版』 全五卷 平成二〇年四月〜同年五月 角川書店（角川文庫）

『新新訳 源氏物語』 全三卷 平成二二年七月〜平成二三年二月 勉誠出版

※《鉄幹 晶子 全集》「28」「29」「30」

晶子の『新新訳源氏物語』の刊行とほぼ時を同じくして、谷崎潤一郎の現代語訳『源氏物語』全二六巻が昭和一四年一月からはじまる（注5）。両者の現代語訳はそれぞれ、競うように平成に入ってから刊行され続けている。谷崎潤一郎が一貫して中央公論社（注6）からの刊行であるのに対し、晶子は出版社を変えながら、単行本、叢書、文庫本を刊行している。（叢書に関しては、河出書房新社の古典叢書を中心に収載されている。）

また、昭和六三年一月に河出書房新社から刊行された『源氏物語』のカバーは、「カラー長篇アニメーション『源氏物語』」が使用され、平成二〇年四月〜同年五月に角川書店から刊行された『全訳 源氏物語 新装版』についても、映画「源氏物語 千年の謎」の写真をカバーに使用するなど、視覚に訴える広告戦略により、今もなお多くの読者に提供されてい

る現代語訳である。

### 第三節 『新譯源氏物語』の意義

『新譯源氏物語』の意義について、社会的評価の観点からみていきたい。  
神野藤氏は、次のように述べている。(注7)

つまり、『新訳源氏物語』は内実だけではなく、その商業的な成功と流布によって、近代における『源氏物語』の広汎な読者層を開拓し、獲得してみせたわけで、それがその後の出版社と作家たちとを突き動かすことに繋がることになる。今日における、日本の国民文学どころか、三十三種類の文字言語に翻訳されて、今や世界文学とも言える『源氏物語』の日本における原点は、この『新訳源氏物語』の出現にある。このように、その意義を高く評価することができよう。

また、同氏は、『源氏物語』を広く大衆に親しいものとする画期的役割を果たしたし、その成功が、その後のさまざまな『源氏物語』翻訳の出現を促すことになったといえよう(注8)とも述べている。

同様に、新聞進一氏も次のように評価している。(注9)

晶子の『新訳』は、源氏五十四帖の全部にわたって、読み物として通読しやすいように、さりとして単なる梗概ではなく、一種の翻案ふうの脚色を施し、原文を現代小説的に書き改めたものであった。(中略)文語文体でも、全部の訳は無かったわけであるから、晶子『新訳』は文語・口語を通じて史上初の訳業ということになる。

両氏による社会的評価としては、次の三点にまとめることができる。

- ◇現代語訳の最初の作品である。
- ◇『源氏物語』を大衆に広めた。
- ◇さまざまな現代語訳を生み出す祖となった。

ほかにも『新譯源氏物語』については、多くの評価がなされている。それぞれ①作家の評価、②国文学研究者の評価としてまとめ列挙する。

#### ①作家の評価

上田敏

『新譯源氏物語』の序文において次のように評価している。

此新譯は、漫に古語を近代化して、一般の讀者に近づき易くする通俗の書と云はむよりも、寧ろ現代の詩人が、古の調を今の節奏に移し合せて、歌ひ出た新曲である。これは所謂童蒙の爲にもならうが、原文の妙を解し得る人々の爲にも、一種の新刺戟となつて、頗る興味あり、且裨益する所多い作品である。・・・予はたをやかな原文の調が、

徒らに柔軟微温の文體に移されず、却つてきびきびした遒勁の口語脈に變じた事を喜ぶ。此新譯は成功である。

森鷗外

「文学博士 森林太郎」として『新譯氏物語』の序文において次のように評価している。

現代の口語に譯した源氏物語がほしいかと、わたくしが問はれることになりますと、わたくしは躊躇せずに、ほしいと申します。……只現代語に譯してある丈で好いと申すではございません。……わたくし個人としての立場からは、現代語の源氏物語を要求してゐます。そしてその要求が此本で十分に充たされたのでございます。……源氏物語の文章は、詞の新古は別としても、兎に角讀み易い文章ではないらう思はれます。……特に源氏物語の譯本がほしいと思つてゐたわたくし、今晶子さんの此本を獲て嬉しがるわたくしと同感だと云ふ人も、世間に少なくないかも知れません。

田地文子

実に気やすい気持ちで、さつさと訳していられて、誤りもあれば思い切つた変え方もしていられる訳なのですが、それでも全体としてつかみ込んでいければいいという自信に満ちた訳になっております。

〔源氏物語は何故訳されるか〕『源氏物語私見』昭和六一年一月二〇日 新潮社

瀬戸内寂聴

読みやすい歯切れのいい文章に案内され、わたしは一気に源氏物語の世界に引き込まれていった。

〔わたしの源氏物語〕平成五年六月二五日 集英社

尾崎左永子

その内容は、晶子自身のいうように、「必ずしも逐語訳の法に由らず、原著の精神を我物として訳者の自由訳を敢えてした」ものであり、むしろ省略や意訳、説明の挿入などを、大胆に行っている点、たしかに「自由訳」というにふさわしい。英訳本を読むに似たわかりやすさがあり、言文一致体の漸く定着しはじめた当時にあつて、まことにすつきりと読みよい現代語訳である。

「晶子と古典」(上田博ほか編『与謝野晶子を学ぶ人のために』平成七年五月二〇日 世界思想社)

## ②国文学研究者の評価

池田亀鑑

與謝野源氏―わたくしはより親しみ深い名をもって晶子源氏と呼びたい―の特色は必ずしも原文の逐語訳という点にあるのではない。むしろ大胆な意訳という点にあると思う。そこに夫人の意図された特色が存するのである。あの源氏の難解な文章は、このような方法によってきわめて理解されやすい近代的な表現に変わった。これはたしかに新しい試みであり、夫人の才能はよくこの試みに成功したのである。

(中略)



晶子源氏の特色の第二は、女人の心をもつて女人の心を見ているという点である。……女性でなければとらえられない繊麗な女性の心が、約一千年の「時」を隔てて近代にのみがえったのである。

晶子源氏の特色の第三は、近代の歌人の心をもつて古代の歌人の心をとらえている点である。夫人は源氏の中から多くの歌ごころを学びとるとともに、またみずからの歌ごころをもつて源氏を身につけることに努め、その企てに成功している。近代日本浪漫主義の中核をなした「明星」の運動は、源氏における古典的精神と、フランスにおける近代象徴主義精神の美しい抱擁の中に展開した。わたくしはそういう意味でも、この晶子源氏の文学史的役割の重要性をおもわざるをえない。

『源氏物語と晶子源氏』（與謝野晶子訳『全訳 源氏物語 上巻』昭和四六年八月一日 角川書店）

秋山虔

与謝野晶子の現代語訳はきわめて分かりがよい名訳との定評があり、私も同感だが、往々にして原文からずいぶん離れて自由に筋を通してしている。

「古文を読み解くことのむずかしさ」（駒沢女子大学『駒沢女子大学 研究紀要 第五号』平成一〇年一月二四日 駒沢女子大学）

河添房江

晶子の『新訳』は、本居宣長や藤岡作太郎をわずかな例外として、『湖月抄』の遺産も近代国文学の成果も認めない地平から紡ぎ出された。みずからの感性を元に、言文一致という男装文体に候文など多様な文体を織り交ぜるといふ実験的な試みをしながら、忠実な現代語訳というより、『源氏物語』の自由自在な翻訳小説をめざしたものであった。

経済的理由によるやっつけ仕事と否定的に取りなされることも多い『新訳』の意義は、当時の文体の流通や、近代国文学が押し出そうとした国民文学としての『源氏物語』のイメージとの交差から読み解くことができる。それはまた、晶子にとっては、作者的カノンであった『源氏物語』を言文一致体という男装文体を基調とすることで、読者のカノンとしても、普及していこうとする試みであった。晶子の『新訳』と後の『新新訳』、そして谷崎の訳を比べたものでは、英文学者の日高八郎が「新新訳源氏にも谷崎源氏にもみられない男性的な彼女の源氏を珍重し敬重したいのである」という批評が、『新訳』の男装文体についての射た批評といえるだろう。

実際、『新訳』は、好評をもつて受け入れられ、金尾種次郎の回想に拠れば、上流階級をはじめ、至るところで愛読され再版、三版と版を重ねたという。また、縮刷版の見返し裏のところに、「賜天覧賜台覧」とあるように、大正三年一月に天皇・皇后（新聞説によれば、これは明治天皇・昭憲皇太后）に献上されたことも記されている。もとよりこれは、出版元の自画自賛の面をふくむので、額面通り受け取れないが、おおむね好評であったことは否定できないであろう。

「現代語訳と近代文学―与謝野晶子と谷崎潤一郎の場合―」（河添房江編『講座源氏物語研究』第十二巻 源氏物語の現代語訳と翻訳』平成二〇年六月二〇日 おうふう）

これらの評価を集約し簡単にまとめる。

◇きびきびとした歯切れのよい文体。

◇近代的な表現法である。

◇読みやすく、理解しやすい。

◇どちらかと言うと意識的であり、原文とは異なる部分もあるが、晶子の心でとらえたものを自由自在に表現している。

◇『源氏物語』の現代語訳の要求に十二分に答えた現代語訳。

『新譯源氏物語』の最大の意義は、やはり口語体による『源氏物語』現代語訳の嚆矢であったということである。多くの一般読者を獲得し、その後のさまざまな現代語訳に与えた影響は大きい。

多くの一般読者を獲得できた理由は、近代的な表現方法によるその読みやすさにあろう。古典の現代語訳というものが全くなかった状態で、晶子はどのようにこの一大ブームの火付け役となる『新譯源氏物語』を執筆することになったのだろうか。また、晶子の身体を通じた晶子だけの、言い換えるならば他に置き換えのできない、晶子独自の「自由訳」はどのようにして誕生したのであろうか。

次章において考察したい。

### 【注】

注1…書名、巻数、刊行年月、出版社の順に記した。なお、※は、叢書に組み込まれたもので、その叢書名とその叢書における巻数を示した。

注2…本文異同については、すでに神野藤昭夫氏(『与謝野晶子の新訳源氏物語』(平成一三年一月三〇日 角川書店))および片桐洋一氏(『源氏物語以前』(平成一三年一〇月三〇日))が指摘している。

注3…橋爪紳也『明治天皇大葬儀写真 縮刷複製版』(平成二四年七月三〇日 新潮社)

注4…注1に同じ。

注5…谷崎潤一郎は、〈旧訳〉〈新訳〉〈新々訳〉の三回、現代語訳をしている。

注6…現在の社名は中央公論新社。

注7…「晶子・源氏・パリ」(『国文学研究』平成二九年六月一五日 早稲田大学国文学会)

注8…「与謝野晶子『新訳源氏物語』成立事情と本文の性格」(『東京大学国語国文学会』『国語と国文学』平成二六年四月一日 明治書院)

注9…「与謝野晶子と「源氏物語」」(紫式部学会編『源氏物語とその影響 研究と資料―古代文学論叢第六輯―』昭和五三年三月三〇日 武蔵野書院)

## 第二章 『新譯源氏物語』の刊行

### 第一節 『新譯源氏物語』の出版の動機および経緯

『新譯源氏物語』の出版の動機および経緯はいかなるものであったろうか。神野藤氏は出版元である金尾種次郎の回想録を引用している。(注1)

何時であつたか忘れたが、あの『新訳源氏物語』上巻が出たのが明治四十五年二月日から二、三年前のことであつたと思ふ。内田魯庵先生を訪問して、いろいろ出版上の御話を承つてゐるうちに、

「君の方で与謝野晶子さんに源氏を訳して貰つて出したら何うだ。屹度立派なものが出来ると思ふ。全く適任だよ。」

と教へて頂いたのが、此源氏出版の動機である。全く此出版は魯庵先生の御蔭である。私は直ぐその儘、晶子夫人の許に参つて、

「今内田先生からかういふお話を承りました。ゼヒやつて頂きたい。」

とお願ひした。夫人も内田先生が仰言つしやるならやつて見ませう。併しどの位の分量にしたらよからんとのことで、最初は菊判千頁位の予算でかゝつて頂くことにした。

(金尾種次郎「晶子夫人と源氏物語」『読書と文献』第二卷第八号 昭和一七年八月号)

これにより、内田魯庵の推薦により、金尾種次郎が晶子に依頼し、晶子は内田先生がおつしやるならということ、現代語訳に取り掛かることを承諾したことがわかる。しかし、晶子はその時すでに小林天眠(注2)の依頼をうけ、「源氏物語講義」(注3)を執筆していた。この点について、神野藤氏は、「源氏物語講義」の執筆経緯を、次のように述べている(注4)。

晶子の没後になつて、天眠は「私が同家の厨房費を補助するために思い付いて依頼した」ものであると明かしている(小林政治『毛布五十年』私家版 昭和十九)。与謝野家の経済を一定程度安定的なものにするこの依頼に、晶子はただちに応じて執筆を開始したとみられる。

その当時多くの作家は、生活費を稼ぐために子ども向けのいわゆる童話を手掛けていた。晶子もまた、『金魚のお使』、『八つの夜』など、今も読み継がれている童話を多く残している。

子だくさんであつた晶子(注5)の家庭は生活費を工面するのも並大抵ではなかつたと思われる。さらに、夫、寛の渡仏の話が持ちあがるのである(注6)。このことについて神野藤氏は、次のように述べている。

天眠からの『源氏物語講義』執筆による収入は、生活の安定を図るためには大きな援助となつたが、それで寛の渡仏まで現実化するわけではない。それには、さらなる収入の確保が必要である。そういう状況のところに金尾の話が来たと考えられる。

以上のことから、生活費を稼ぐため、そして寛の渡仏費用（注7）に充てるため、現代語訳の仕事を引き受けたということに間違いはなさそうである。

無論それだけではあるまい。晶子自身が『新譯源氏物語』下巻の二「新譯源氏物語の後に」において、「自分は十二歳頃からもっていた原著の興味」「源氏物語は我が国の古典の中で自分が最も愛読した書である。」と記している。生活費捻出等の経済的事情だけではなく、晶子が少女時代から愛してやまない『源氏物語』を自身の手で現代語訳することに対する、純粹に文学的な意欲が背景にあったことは間違いのないであろう。

## 第二節 『新譯源氏物語』の訳出文字数の量的比較

『新譯源氏物語』は、晶子独自の「自由訳」であり、決して原文に忠実ではないという特質を持つ。原文に対して『新譯源氏物語』の訳出量からもそれらのことは見出せる。

神野藤氏は、『新譯源氏物語』と『新新譯源氏物語』とを、池田亀鑑『源氏物語大成』（注8）を基準にして、その量的比較を行っている（注9）。

### ① 『新譯源氏物語』全巻での比較

〈原文に対する訳出分量〉

『源氏物語大成』 四百字詰原稿用紙 二一九一枚

『新譯源氏物語』 四百字詰原稿用紙 一七〇三枚

（原文に対して 七七・七% 〇・八倍）

『新新譯源氏物語』 四百字詰原稿用紙 三二二七枚

（原文に対して一四七・八% 一・五倍）

『新譯源氏物語』は、原文に対して訳出量が少ないことがわかる。

### ② 『新譯源氏物語』「上巻」・「中巻」・「下巻の一」・「下巻の二」それぞれの比較

神野藤氏は、『新譯源氏物語』の四巻についても、それぞれの訳出文字量を割り出している。

〈原文に対する各巻の訳出割合〉

上巻 (桐壺く乙女) 五七・三%

中巻 (玉鬘く夕霧) 六〇・八%

下巻の一 (御法く寄生) 九三・五%

下巻の二 (東屋く夢の浮橋) 一四〇・二%

「上巻」から進むにつれ、訳出割合が増えている。それについて、晶子は『新譯源氏物語』の「新譯源氏物語の後に」において、「この書の中巻以後は原著を読むことを煩わしがる人々

のために意を用ひて、殆ど全訳の法を取ったのである。」と記しており、晶子の意図したとおりの結果ではあろう。

しかし、ここで注意しなければならないのは「下巻の二」である。原文に対して訳出量が少ない特徴を持つ『新譯源氏物語』である。だが、「下巻の二」の訳出割合に関しては原文をはるかに超えているのである。

### 第三節 『新譯源氏物語』「下巻の二」の訳出割合増加の意味

「下巻の二」の訳出割合増加の理由について神野藤氏は、「この書の中巻以後は原著を読むことを煩はしがる人人のために意を用ひて、殆ど全訳の法を取ったのである。」という晶子の言葉を引用し、「一見、読者の要望があつて、それに応えたかのごとくに装っているが、そこにはそうするだけの晶子の積極的な意志が働いていることにまちがいない。」とし、次の二点をあげている（注10）。

・「金尾ともはかつて『新訳』を二冊に分量を増やすことで、収入増をはかったのではないか。」

・「経済的にはとどまらない、心の底で晶子を突き動かす何物かがあったのではないか。この間のパリ体験こそが、『新訳』を増殖、飛躍させる力として潜んでいた、と言ってみることはできないか。」

「パリ体験」（注11）が晶子にとってさまざまな影響を及ぼし、作家としての晶子を成長させたことには異論をさし挟む余地はあるまい。しかし、「心の底で晶子を突き動かす何物か」は、「パリ体験」のみであつただろうか。晶子は、少女のころからすでに何度も繰り返し『源氏物語』を読み、「原著の精神を我が物とし」ていたのである。

「新譯源氏物語の後に」には、次の一節がある。（ルビは、私により省いた。）

源氏物語の結構は光の君と紫の君とを主人公とする部分と、薫の君と浮舟の君とを主人公とする部分とに二大別せられる。前段に於いて絢爛と洗練とを極めた妙文が、後段の宇治十帖に到つて、その描寫が簡淨となると共に、更に清新の氣を加へて、若返つた風のあるのは、紫式部の常に潑刺として居た天才に由ることと唯だ驚歎する計りである。源氏物語を讀んで最後の宇治十帖におよばない人があるなら、紫式部を全讀した人とは云はれない。

ここから、晶子が「宇治十帖」をぜひとも讀んでもらいたいの気持ちを読み取れる。それは、晶子が「宇治十帖」のおもしろさを自身が体験していたからであつた。

ここで、晶子の『源氏物語』作者についての認識について触れておきたい。晶子自身が、昭和十四年九月一日に刊行された『新新譯源氏物語』第六卷「あとがき」に詳しく述べている。（ルビは、私により省いた。）

私は源氏物語を前後二人の作者の手になつたものと認めて居るが、(中略) 新新譯にかかる數年前から私は源氏の作者が二人であることを知るやうになつた。前の作者の筆は藤のうら葉で終り、總てがめでたくなり、源氏が太上天皇に上つた後のことは金色で塗りつぶしたのであつたが、大膽な後の作者は衰運に向つた源氏を書き出した。最愛の夫人紫の上の死もそれである。女三の宮の物の紛れもそれである。後の主人公薫大將の出生のために朱雀院の御在位中の後宮のことが突然語り出され、帝の女三の宮内親王への御溺愛に由つて、薫の富を用意した小説の構成の巧みさは前者に超えてゐる。

(中略)

若菜に於て文章も叙述の方法も拙かつた作者は柏木になり、夕霧になり立派なものになつて來た。内容に天才的な豊かなものが盛られてゐるからである。東屋以後は技巧も内容に伴つて素晴らしいものになつた。前篇の紫式部は小説作家として歌人としていみじき作者であつて、後篇を書いた大貳の三位は偉大なる文學者だと私は思つてゐる。

晶子は、『源氏物語』の作者を紫式部と大貳三位(紫式部の娘)の二人であると見てゐるのである。そして、晶子が「後の作者」について称賛していることもわかる。

また、『新新譯源氏物語』の「あとがき」から、作者が二人であろうと気づいたとされる時期が推察できる。「あとがき」の前半部には「今から七年前の秋、どんなにもして時を作り、源氏を改譯する責めを果さうと」思い立ち「直ぐに書き初め」たと、その執筆開始時期について記している。そして「新新譯にかかる數年前から私は源氏の作者が二人であることを知るやうになつた」とあることから昭和の初め頃であろう。そのことを裏付ける一文がある。昭和三年二月二十七日に不老閣書房から刊行された藤田徳太郎『源氏物語綱要』の「源氏物語綱要序」である。佐佐木信綱とともに晶子は序文を記している。その序文を次のように結び「昭和三年正月」と記す。

最後に附記する。私は紫式部の死を長和四年頃とする。従つてまた、「源氏物語」を前後二篇に分ち、「藤の末葉」の巻までを前編として、紫式部は此の前編までを書き、以下の後編は他人の筆として、その作者を紫式部の唯一の女子で、關白頼通の宇治の別苑に出入した大貳三位に擬する者である。是れは藤田先生と見方を異にする所であるが、此の作者の一人か二人かと云ふことは「源氏」本文の鑑賞に大して關係するものない。

『新新譯源氏物語』の「あとがき」から推察される時期と符合する。他人の著書の序文の最後に「附記」するところからしても、まさにこの時期に晶子は確信をもつたのであろう。『新譯源氏物語』の執筆以前から晶子は「前段」と「後段」の文体の違いに気づいていた。そして「宇治十帖」を魅力的に感じていたのである。先の引用傍線部分からわかるように、晶子は「東屋」巻(下巻の二)以降を絶賛するのである。

「東屋」巻以降が、晶子にとつてはとても魅力的に感じられたと考えられる。読者にその魅力を伝えるため筆にも力が入り、訳出割合が増えたのではないだろうか。

神野藤氏のいう「心の底で晶子を突き動かす何物か」は「宇治十帖」の「小説」としての構成のおもしろさ、さらに、「東屋」巻以降にみる高度な文芸的達成だったのでないだろ

うか。

【注】

注1…「晶子・源氏・パリ」(『国文学研究』平成二九年六月一五日 早稲田大学国文学会)

注2…小林天眠(政治)は明治一〇年七月二七日兵庫県に生まれる。明治三〇年に浪華青年文学会を結成、機関誌『よしあし草』創刊。明治三二年、寛と知り合う。晶子とは明治三四年に初対面。寛・晶子とは生涯に渡り、親交を深める。明治三六年に出版社天佑社設立趣意書を『明星』に発表。大正七年、天佑社設立。翌八年、大阪変圧器株式会社を設立。昭和三一年九月一六日没。

以上、小林天眠の経歴は、企画展「与謝野晶子と三つの舞台―堺・京都・東京―」(さかい利晶の杜 平成二八年二月一日から同年二月一八日)における配布資料、並びに、神野藤昭夫氏の「解説 『新訳源氏物語』と幻の『源氏物語講義』」(与謝野晶子『与謝野晶子の新訳源氏物語 薫・浮舟編』平成一三年一月三〇日 角川学芸出版)を参照した。

注3…小林天眠設立の天佑社の処女出版作品とするため、明治四二年頃、天眠が晶子に執筆を委嘱した。百カ月で完成させる約束であった。しかし、予定通りには進まなかった。大正一二年九月一日の東京大震災により、保管してあった文化学院が焼け、原稿は焼失。

以上は、神野藤昭夫氏の「解説 『新訳源氏物語』と幻の『源氏物語講義』」(与謝野晶子『与謝野晶子の新訳源氏物語 薫・浮舟編』平成一三年一月三〇日 角川学芸出版)を要約したものである。

注4…「与謝野晶子『新訳源氏物語』成立事情と本文の性格」(東京大学国語国文学会『国語と国文学』平成二六年四月一日 明治書院)

注5…晶子は生涯において六男六女をもうける。『新訳源氏物語』の執筆に入る前のこの時点においては三男三女の計六人の子どもがあり、執筆中に二度出産している。一度目は双子を出産したが、うち一人は死産であった。また、六男については生後二日で死去している。(堺市博物館編「企画展『与謝野晶子―その限りなき挑戦の生涯―』平成二七年一〇月三〇日 堺市博物館」)

注6…注4に同じ。

注7…寛の渡仏理由については、神野藤昭夫氏が「与謝野晶子『新訳源氏物語』成立事情と本文の性格」(東京大学国語国文学会『国語と国文学』平成二六年四月一日 明治書院)で記している。その部分を以下に引用する。

『明星』終刊号巻頭の「感謝の辞」で、『明星』廃刊の理由として、「経費の償わざること」と「予が之に要する心労を自己の修養に移さむとすること」の二点をあげている。寛の「修養」は、やがて語学を学び、渡仏することによって、詩人としてみずからを刷新し、おのれの劣勢を挽回しようという考えを導いたのであろう。

注8…「校異篇」三冊、「索引篇」二冊、「資料・研究篇」一冊の全六冊からなる(昭和二八年 中央公論社)。

注9…「解説 『新訳源氏物語』と幻の『源氏物語講義』」(与謝野晶子『与謝野晶子の新訳源氏物語 薫・浮舟編』平成一三年一月三〇日 角川学芸出版)

注一〇：「晶子・源氏・パリ」『国文学研究』平成二九年六月一五日 早稲田大学国文学会  
注一一：明治四四年一〇月に、夫である寛がフランスに留学のため渡欧した。それを追って、  
明治四五年五月に晶子はシベリア経由で渡欧。パリで寛と共にアパートで生活した。  
同年、一〇月に単身海路で帰国するまでの約半年間のパリでの生活における実生活  
者としての体験。



## 第二章 『新譯源氏物語』の文体の成立

### 第一節 はじめに

『源氏物語』は、日露戦争と第一次世界大戦に挟まれた時期、すなわち一九一二年から翌年にかけて、与謝野晶子（注1）の手により、初めて口語体による現代語訳がなされた。

『新譯源氏物語』全三巻四冊。金尾文淵堂。

「上巻」	（桐壺く乙女）	明治四五年	二月一日	四六一頁
「中巻」	（玉鬘く夕霧）	明治四五年	六月二五日	九二二頁
「下巻の一」	（御法く寄生）	大正二年	八月二一日	一三五八頁
「下巻の二」	（東屋く夢の浮橋）	大正二年	一月三日	一八一九頁（通し）

この晶子による『新譯源氏物語』は、版元を替えるなどしながら昭和十一年までに（注2）単行本だけで一三種以上が出版されている。その後は、晶子自身による二度目の現代語訳である『新新譯源氏物語』（昭和十三年一〇月く昭和十四年九月、全六巻、金尾文淵堂）が、やはり版元を替えながら陸続と刊行されることになるのだが、平成十三年一月には、『与謝野晶子の新訳源氏物語』（全三巻、角川書店）が刊行されるなど、『新新譯』（以下、『新新譯源氏物語』は『新新譯』と称する）はそれと並行して、人々に読み継がれてきたのである。

『源氏物語』の現代語訳は、晶子以後も吉沢義則、谷崎潤一郎、窪田空穂、玉上琢弥、円地文子、今泉忠義、瀬戸内寂聴、大塚ひかり、林望、中野幸一、角田光代などによって、それぞれの個性を生かした試みが現代に至るまで不断に続けられている。そのような状況の中で、晶子の『新譯』は、古典文学叢書（全集）に繰り返し収載され（三笠書店、河出書房、河出書房新社、勉誠出版など）、また、最新のものとして『与謝野晶子の源氏物語』（全三巻、角川ソフィア文庫）が平成二〇年に刊行されていて、現代の読者が身近に入手し得るものである。初版刊行以来現代に及ぶまで読み継がれている『新譯』の特質は、いかなるものであったのか。

まずは、晶子自身のことばに耳を傾けてみたい。『新譯源氏物語』（下巻の二）末尾に、「新譯源氏物語の後に」と題する、次の述懐が収められている。（ルビは、私により省いた。）

源氏物語は我國の古典の中で自分が最も愛讀した書である。正直に云へば、この小説を味解する點に就いては自分は一家の抜き難い自信を有つて居る。

この書の譯述の態度としては、畫壇の新しい人人が前代の傑作を臨摹するのに自由摸寫を敢てする如く、自分は現代の生活と遠ざかつて、共鳴なく、興味なく、徒らに煩瑣を厭はしめるやうな細個條を省略し、主として直ちに原著の精神を現代語の樂器に浮き出させようと努めた。細心に、また大膽に努めた。必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語譯の法に由らず、原著の精神を我物として譯者の自由譯を敢てしたのである。

晶子は、自らの現代語訳について、次の四点を方法として採用したと述べている。

- ・煩わしい細部を省略した。
- ・細心かつ大胆に訳した。
- ・作者の表現法を踏襲しない。
- ・逐語訳をしない。

これらをまとめ、原著の精神を我物とし「た上での「譯者の自由譯を敢てした」と言っている。『新譯』は、必ずしも原文に忠実ではないのである。

すなわち、『新譯』はいわば晶子の身体を通過した晶子だけの、言い換えるならば他に置き換えのできない、晶子独自の「自由訳」だった。あまたある現代語訳の中でも、その文学的喚起力において『新譯』が最もすぐれていると感じるのは、私一人ではあるまい。そして、その理由の根源が、「この小説を味解する點に就いては自分は一家の抜き難い自信を有つて居る」と自らが言うように、晶子自身の文学者としての強烈な個性に依拠していることは歪み得ない事実であろう。

しかしながら、後に『新新譯』で逐語訳の方針に転換した晶子の、『新譯』における文体の成立が、すべて文学者晶子の独自性によるものであったのだろうか。本稿では、この点につき、同時代の作者たちとの比較を通して改めて考えてみたい。

## 第二節 『新譯』の「桐壺」巻頭部の特質

何時の時代であつたか、帝の後宮に多くの妃嬪達があつた。この中に一人陛下の勝

れた寵を受けて居る人がある。この人は極めて權門の出身と云ふのでもなく、また

今の地位が後宮においてさまで高いものでもなかつた。多くの女性の嫉妬がこの人の

身邊に集るのは云ふまでもない。この人よりも位置の高い人はもとより、それ以下の

人の嫉妬は甚しいものであつたから、この人は苦しい、悲しい日を宮中で送つて居

た。その上よくよと物思ひばかりをする結果病身にさへなつた。陛下は二十になる

やならずの青年である。戀のためには百官の批難も意に介せられない、いよいよ

寵愛はこの人一人に集るさまである。この人も百方嫉視の中に陛下の愛一つをたよ

りにして生きて居る。

この訳文の特質を明らかにするにあたり、比較の基準として『源氏物語大成』（池田亀鑑『源氏物語大成』巻一「校異篇」昭和二十八年六月二十五日 中央公論社）を、次に掲げる。今、仮にこれを原文として扱うこととする。（注3）

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなきはにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方へめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからずあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよ／＼あかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは／＼からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かんとちめうへ人なともあいなくめをそはめつゝいとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやう／＼あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給

両者の比較をとおして、大きく次の九点が相違として確認できる。以下、『源氏物語大成』は『大成』と称する。

- 一、文字数  
『大成』 三八六文字  
『新譯』 二九三文字（句読点一五字を除く）
- 二、文の数  
『大成』 六文  
『新譯』 九文
- 三、漢字の使用  
『大成』 三九文字  
『新譯』 一〇一文字
- 四、敬語の使用  
『大成』 一二箇所（尊敬の動詞1、尊敬の補助動詞6、尊敬の接頭語5）  
『新譯』 なし
- 五、文脈  
『大成』 （原文のまま）  
『新譯』 文末を「だ」「である」の常体とする。
- 六、文体  
『大成』 （原文のまま）  
『新譯』 入れ替えあり。
- 七、『大成』には見られず、『新譯』のみに見られる用語・表現等の存在。  
『新譯』傍線部
- 八、『大成』にはありながら『新譯』に訳出されていない用語・表現等の存在。  
『大成』傍線部
- 九、『大成』本文に即しながらも、独自の解釈を施す用語・表現等の存在。

右に掲げた九点それぞれの相違から、晶子の『新譯』における現代語訳の特質を次のようにまとめることができよう。

- 一、逐語訳ではなく内容が圧縮された要約である。
- 二、原文の六つの文を九つの文に分解・再構成することにより、文意が明快。
- 三、表意文字である漢字の多用により、文意が明快。  
特に二字熟語の多用(何時・時代・後宮・妃嬪・一人・陛下・權門・出身・地位・女性・嫉妬・身邊・位置・以下・宮中・結果・病身・二十・青年・百官・批難・寵愛・百方・嫉視)は、大きな特徴と言える。
- 四、敬語の省略により、文意が通じやすい。  
原文は、主語が明示されずとも敬語により主語が明らかになるのだが、敬語を省略した一方で、『新譯』は九文中八文において主語を明示している。
- 五、文脈を前後入れ替えることにより、文意がたどりやすい。  
例えば、「いとやむことなき」にはあらぬかすくれて時めき給ありけり(『大成』)という一文について、内容を二分割し前後を入れ替え、二つの文に分けて「この中に一人陛下の勝れた寵を受けて居る人がある。この人は極めて權門の出身と云ふのでもなく、また今の地位が後宮においてさまで高いものでもなかつた。」(『新譯』)とするが、これにより「寵を受けて居る人」の存在(根幹)がまず提示され、次に、その身分(枝葉)という付帯要件が後者におかれることになる。この配置により、文意が明快。
- 六、文末を常体(「だ」「である」調)で括ることにより、簡潔かつ緊張感のある文体とされている。(注4)
- 七、晶子独自の解釈による補足が行われ、文意が通じやすい。「陛下は二十になるやならずの青年である」は、原文には全く存在せず、訳者の読みおよび考察の結果、導き出されたものである。さらに、「云ふまでもない」という表現は、正に訳者自身が解釈した結果の記述でもある。
- 八、原文の文言の省略、または概括により、文意が通じやすい。  
大きな省略箇所としては、「楊貴妃」の逸話を削除している点が挙げられる。これは、本筋には関係なく、結果のみを記述すれば、無くても文意は通じるであろう。また、「妃嬪達」「百官」「百方嫉視」のように漢語を使用し、文意をさほど変えることなく、簡潔に表現している。さらに、「あめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて」と「いとほしたなきことおほかれ」という二つの内容を一つの漢語(「百方嫉視の中」)に短縮、簡潔な表現としている。
- 九、晶子独自の解釈による補足等が行われ、文意が通じやすい。「苦しい」「悲しい」「くよくよと物思ひばかりをする」など、女性の心情をこまやかに表現し、明快にしている。また、「はしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給」を「多くの女性の嫉妬がこの人の身邊に集るのは云ふまでもない」と訳すことにより、「めさましき」感情が「嫉妬」であることを明快に示している。

右に見るとおり、晶子『新譯』は、原典である『源氏物語』を自家薬籠中の物として取り

込み、さらに換骨奪胎し、自由闊達に（当時の）現代語に翻訳した「自由訳」であったことが改めて確認できるのである。

しかし、ここで敢えてその訳文の内容ではなく、形式に着目した時に、さらにどのような特質が導き出させるだろうか。右にあげた九つのうち、特に「二」「三」「六」を取り上げて検討してみたい。

### 第三節 同時代の文学作品との文体比較

#### 一、比較対象

ここで晶子の『新譯』の文体について、前節で挙げた特質のうち、きわめて分かりやすい視覚の観点（「二」、「三」および「六」）から、次の点を立項して同時代の文学作品と比較してみることとする。

1. 漢字の字数 一〇一字（33%）
2. 熟語（固有名詞は除く。）の語数 二四語（重複は除く。）
3. 文の数 九文
4. 文末表現 「だ」「である」調

比較対象は、作品始発箇所から三〇八字（前掲『新譯』「桐壺」巻頭部の、句読点を含んだ字数）までの冒頭部とする。字数の統一の観点から段落を取り払い、見やすさを優先するためルビを取り払った。また、漢字の熟語（固有名詞を除く）に傍線を付した。

対象作品は、明治十一年二月七日に誕生している与謝野晶子と生年月日が近い作家（同世代）のもので、明治四五年から大正二年にかけて刊行された『新譯源氏物語』と刊行年月日が近いものとした。

#### 二、女性作家

##### ①長谷川時雨（注5）

「雲」（注6）

誠二が都を出たのは、春は根に歸つて、熱烈な夏の生活に入らうとしながら、床しかつた昨日の、見果ぬ夢を慕うて煩悶して居る、四月の末の雨の日であつた。雨にかゝると埋れて居た花の塵が、蒸れてにほふインバネスを引かけて、上野驛を出發した夕暮、本郷臺から山下へ突きると、不忍池の附近では、氣の早い初裕の瀟洒な蛇の目傘にも行きあつた。見捨てゝゆく忍が岡は、新緑の装になつて、生々した女の何處かに濕つた面影がある。誠二の父親は、株式界の方の人であつたのに、其中でも豪放といつた性なので、其生存のうちは、玄關も中の口も、まして勝手口は訪來る人が絶なかつた。廣い水口に敷詰た御影石は乾いた事がなかつた。ぬぎすてた上草履の鼻緒にも、襷の配

1. 漢字の字数 一二三字 (40%)
2. 熟語の語数 二四語
3. 文の数 五文
4. 文末表現 「だ」「である」調

② 森しげ (注7)

「おはま」(注8)

世田ヶ谷村の別荘に八重子は寂しい月日を送つてゐる。別荘は頃日落成したばかりである。最初座敷の格天井に、父が好みて画工に誂へて、金地に花鳥を極彩色でかかせたところが、どう間違つたか、二三枚足らないで、穴になつてゐた。八重子はその一枚に、面の先生に勧められて、蓮の花をかいた。父がそれを見て、蓮は実の多いものでめでたいと云つた。丁度八重子の縁談の纏まり掛かつた時であつたので、さう言つたのである。併しそれは空頼みであつた。そのうち落成した別荘の、今八重子がゐる間の次の間には、新しい箆筒長持、塗り立ての衣桁、櫛台手箱、文箱など、皆光るやうに新しいものばかりが置いてある。併しこれは未来を夢みてゐる道具ではなくて、過去を語

1. 漢字の字数 一一六字 (38%)
2. 熟語の語数 二四語
3. 文の数 八文
4. 文末表現 「だ」「である」調

漢字の字数については、『新譯』本文の漢字字数の多さに、現代を生きる我々は等しく一驚するところだろうが、この比較によれば、同時代の女性作家二人はいずれも晶子の漢字使用数において勝つてゐるのである。また、三作品は熟語の数が全く同じである。

一方、文末が常体である点は、三者に共通する。

文の数については、晶子が幾分多いということになり、あえて言えばこのあたりに晶子の独自性を見ることができそうでもある。

三、男性作家

① 永井荷風 (注9)

「すみだ川」(注10)

何かの用事で今年の盆にはとう／＼行かずにしまつた處から、俳諧師の松風庵蘿月は今戸で常盤津の師匠をして居る實の妹をたづねて見たいと毎日さう思つてゐた。けれども流石日ざかりの暑さには家を出かねて、夕方の來るのを待つ。夕方になると竹垣へ朝顔をからました勝手口で行水をつかつた後其のまゝ眞裸躰で晩酌を傾け、やつとの事で膳を離れるので、七月の黄昏も家々で焚く蚊遣りの烟と共にいつか夜になつて、盆裁を並べて簾をかけた窓外の往來に下駄の音、職人の鼻歌、人の話聲が賑に聞え出す。蘿月は其から直ぐに今戸へ行くつもりで格子戸を出るけれど、其の邊の涼臺から聲をかけられるがまゝに腰を下すと、一杯機嫌の話好きに、いつも極つて八時か九時の時計

1. 漢字の字数 一二六字 (41%)
2. 熟語の語数 二九語
3. 文の数 三文
4. 文末表現 「だ」「である」調

②有島武郎(注11)

「幻想」(注12)

彼れは或る大望を持つてゐた。生れてから十三年の無覺醒な時代を除いては、春秋を迎へ送つてゐる中に、その不思議な心の誘惑は、元來人なつくく出來た彼れを引きずつて、段々思ひもよらぬ孤獨の道に這入りこま<sup>(マ)</sup>した。ふと身のまはりを見返る時、自分ながら驚いたり、懼れたりするやうな事が起つてゐるのを發見した。今のこの生活——この生活一つが彼れの生くべき唯一の生活であると思ふと、大望に引きまはされて、移り變つて行く己れ自身を危ぶんで見ないではゐられないやうな事もあつた。根も葉もない幻想の翫弄物になつて腐り果てる自分ではないか。生活の不充實から來る倦怠を辛うじて逃げる卑劣な手段として、自分でも氣付かずに、何時の間にか我れから案じ

1. 漢字の字数 一一三字 (37%)
2. 熟語の語数 二二語 (重複は除く)
3. 文の数 五文
4. 文末表現 「だ」「である」調

有島武郎については、各項目とも同世代の女性作家と大差はない。永井荷風については、その文の数が少ないことならびに熟語の多いことに気づかされる。

しかし、四つの比較項目全体を俯瞰するなら、同世代の男女間において、明らかな差異は見出し難いということである。つまり、晶子も、この時代の潮流と無縁ではなかったということが確かめられよう。漢字の頻出、熟語の多用、常体による文末は、必ずしも晶子の独創ではなかったのである。

#### 第四節 明治期の翻訳文学作品との文体比較

##### 一、比較対象

次に、晶子が読むことが可能であつたであろう翻訳文学作品と『新譯』の文体とを比較したい。

対象作品は、『新譯』刊行以前に、他言語作品を翻訳した小説とする。

比較の範囲は、同じく作品冒頭から三〇八字までとし、前節と同じ処理を施した。

##### 二、女性による翻訳作品

①若松賤子（注13）

「ローレンス」（注14）

自分は彼の嬢に愛されて居ないと承知しては居り升たが、戀仇がありと知らぬ中は起居安穩やかに、戀愛が苦痛とは化しませんでした。性質は極く謙遜で、自ら敬虔の風が備はり、尤も開闊、豪毅で、物事に屈し臆する處なく、天地の樂しき方面を見るたちでした。それ故始めて彼の嬢に出逢ひ升た時一度かふと觀察を下して、あとは甚だ敷心に恥ぢ升たどうぞもつと立派な人間になり度と思ふにつけ、既往に拭ひ消し度ことなどが多く出來升た。これは塵に穢れぬ純白な姫百合の美しさ、可愛らしさが壮年の理想を高めて、清く尊きことを慕ひ、渴望する様に且つ一方より己が歩まねばならぬ世の塵穢なるを思ふて隠かに恥らう様に導きたい故でした。嬢の如き潔きものには世の塵穢

1. 漢字の字数 一二三字（40%）
2. 熟語の語数 二八語
3. 文の数 四文
4. 文末表現 「です」「ます」調

②瀬沼夏葉（注15）

「六號室」（注16）

町立病院の庭の内、午房、葎草、野麻などの簇り茂つてゐる邊に、小やかなる別室の一棟がある。屋根のブリキ板は錆びて、烟突は半破れ、玄關の階段は粉聖が剥がれて、朽ちて、雑草さへのびくと。正面は本院に向ひ、後方は茫廣とした野良に臨んで、釘を立てた鼠色の塀が取繞されてゐる。此の尖端を上に向けてゐる釘と、塀、さては又此の別室、こは露西亞に於て、たゞ病院と、監獄とにのみ見る、儂き、哀な、寂しい建物。葎草に掩はれたる細道を行けば直ぐ別室の入口の戸で、戸を開けば玄關である。壁際や、暖爐の周邊にて病院のさまざまの雑具、古寐臺、汚れた病院服ぼろぼろの股引下、青い綿の洗浚しのシャツ、破れた古靴と云つたやうな物が、こたくさと、山のやう

1. 漢字の字数 一二八字（42%）
2. 熟語の語数 三一語（重複は除く）
3. 文の数 五文
4. 文末表現 「だ」「である」調

両者は、「同世代の女性作家」および晶子に比して、熟語の語数がやや多い程度であり、漢字の字数および文の数については、同世代の女性作家とほぼ差異は認められない。つまり、女性翻訳者の文体との比較においても、晶子の独自性は認め難いのである。なお、若松賤子は、「です」「ます」調を採用しているのが他に相違する。

三、男性による翻訳作品との比較



①森鷗外（注 17）

「いつか君は歸ります」（注 18）

一群の鷗が丁度足許から立つて、鋭い、貧るやうな聲で鳴きながら、忙しく湖水を超えて、よろめくやうに飛んで行った。空氣は雪を孕んでゐて、英風園の木立の上を雲が喘ぐ。風は憎みを以つてぶつつかるやうに顔を吹く。どうして道を歩いて居るんだか、我ながら不思議なやうに思はれる。心は鈍い驚きに満されて居る。ふと自分で自分の歩く足の數をかぞへ、又路ばたの木立の木の數をかぞへて居るのに氣がつく。木は一本々々ゆつくり通り過ぎる。十五、十六、十七。もう殆んど歩けないと思ふ時、腰掛があつた。腰を掛けると旋律が耳に響く。優しい、哀れげな旋律である。さうして其旋律はまたと耳を離れない。旋律は靜に自ら押へるやうな調子に響いて來る、人を眠らせ

1. 漢字の字数 一〇八字（35%）
2. 熟語の語数 一五語（重複は除く）
3. 文の数 一一文
4. 文末表現 「だ」「である」調

②上田敏（注 19）

「クサカ」（注 20）

誰のでも無い、名も付いてゐない、寒さの強い永い冬を何處で過すのやら、何を食べて生きてゐるのだから。空腹じい事は同じでも、主人持を自慢にして威張つてゐる他の犬どもは、此犬を暖かい藁屋に寄付けなかつた。饑に迫つたり、又は自づと類を求め心に驅られて、街へ出て行くと、子供達には石を投げられる、大人は勢宜く呼んで呉れるが其長く曳張つた口笛の怕ろしさ。犬は度切粉して路の兩側を彼方此方、垣根には突當る、往來の人には衝突かる。いつも終は村端の廣い庭の奥でよく知つてゐる隅へ逃げて行く。其處で傷痕や怪我の處を舐めながら、じつとして居ると恐怖と、憎悪とは心頭に萃つて來る。唯一遍、可愛がつて呉れた人があつた。酒舗から出て來た泥酔の

1. 漢字の字数 一二四字（40%）
2. 熟語の語数 一一語（重複は除く）
3. 文の数 七文
4. 文末表現 「だ」「である」調

二人の文体の共通点は、熟語の数が少ないということであるが、それぞれに即してやや詳細に見るなら、次のような特徴が見いだせよう。

森鷗外は、漢字の字数が少なく、それに伴つて熟語の語数も減少していることに気づかされる。一方、文の数が他の作家に比して突出して多い。

上田敏は、漢字の字数がやや多めであるが、一方で熟語の語数はやや少ない。

第五節 翻訳と『新譯』の文体

## 一、九人の比較結果

晶子を含む九人の文体の比較から、次のことが明らかとなった。

漢字を多用しているという印象を与える『新譯』であったが、むしろ同世代の作家や翻訳家と比較すると、意外にも最も少ない数値を示しているという事実が確認できる。やはり、漢字の字数の多い場合は、熟語の数もそれに伴い多くなる傾向がある。ただし、上田敏は、例外である。

「だ」「である」調を用いて訳出されている『新譯』であるが、これは、例外ではなく当時の主流であったことも確認できる。

熟語の数は、晶子を含む女性作家が全く同数であり、『新譯』も当時の女性作家として例外ではなかったのである。熟語の数という観点から言えば、男性翻訳作家の二人が少ない点が挙げられる。中でも、上田敏の場合は、他の作家たちと異質な傾向がみられる。他の作家たちの場合、漢字の字数の多い場合は、熟語の数もそれに伴い多くなる傾向があるが、それに反した結果となっている。また、漢字の字数の多い作家は文の数が少ない傾向にあるが、それも反している。

また、それぞれ作家たちの文の数をみてきたが、それを多い順に挙げるなら、森鷗外（一）、晶子（九）、森しげ（八）、上田敏（七）、長谷川時雨（五）、有島武郎（五）、瀬沼夏葉（五）、若松賤子（四）、永井荷風（三）となる。同時代の作品で比較すると、どちらかというと女性作家の方が、文の数が多くなる傾向にあると言えようが、翻訳作品においては、明らかに男性翻訳作品の方が文の数が多し。

先に確認したとおり、晶子の漢字の字数は、比較対象の九人のうち最も少ない。次に少ないのは、森鷗外である。このことから漢字の字数が少なく、文の数が多いという結果は、晶子と森鷗外に共通するのである。

『新譯源氏物語』の文の数が多しという特質は、晶子が現代語訳をするにあたって、外国文学の「翻訳」作品を強く意識したことによるものではないであろうか。また、「翻訳」を意識したときにどのような方法をとるべきかの基準をおいたのが、男性の翻訳作品であったのではないだろうか。特に、身近に相談できる間柄であったであろう、森鷗外と上田敏の影響が大きかったのではないか。

## 二、森鷗外と上田敏

『新譯』の「序」を記した森鷗外と上田敏であるが、晶子にとって両氏はどのような存在であったのだろうか。

明治四四年七月二〇日に金尾文淵堂から刊行された晶子最初の随筆集『一隅より』から、関連する文章をひろってみたい。（引用文は、私により適宜旧漢字を改め、ルビをはずした。なお、（ ）は、その随筆に付されたタイトルである）

・何時か上田（敏）博士の御話に、欧州で第一流の・・・

（「歌を詠む心持」）

・文学物では脚本と小説、殊に森先生などの御訳しになる翻訳を読み耽ります。

（「歌を詠む心持」）

・床を二階へ移してその傍でスバルの森先生の小説を読んで私は泣いて居た。(中略)  
森先生のお宅の歌会に行つた夫は十一時過ぎに平野様と一緒に帰つて来た。

(「日記の断片」)

・此度文学博士が新しく出来ました中で、森先生久米先生などは疾くの昔に博士と御成りなさるべき方であると存じます。(中略) 此両先生の御筆に成つた物は十二三の時分から絶えず拝見して居ります。

(「雑記帳」)

・私は鷗外先生や上田敏先生などの御話を承る度に、よく其御斟酌が見えるので(中略)  
此両先生は申す迄も無く学問其他社会の多方面に通じて居られて、其上会話が御上手ですから、……

(「雑記帳」)

・新しく出た森鷗外先生の御夫人の小説「あだ花」を一般の御夫人にお薦めしたい。

(「雑記帳」)

・之に答へて、先づ上田敏先生の新著「渦巻」を御覧になる様にとお勧め致します。

(「雑記帳」)

両者との親昵の間柄、そして両者への深い敬意がうかがえるのである。

例えば、晶子は大正五年八月一日に同月七月九日に没した上田敏について「故文学博士上田敏先生」と題し、弔辞を記している。そこには、大きな悲しみとその親交の深さ、深い尊敬の念が綴られている。(大正六年一月一日刊行、随筆集『我等何を求むるか』収載。引用は、平成一七年三月三十一日刊行与謝野鉄幹ほか著『鉄幹 晶子 全集 17』による)

……先生がまだ大学生時代に「読売新聞」で募集した坪内先生の「桐一葉」の批評に御当選になつて、大学服の先生のお写真と共に其御批評が新聞に出ました時、十八歳ばかりの田舎娘であつたわたくしの直覚は、文壇で第二の鷗外先生となられるのは屹度この若々しい大学生の方であるうと感じました。それ以来わたくしは雑誌「文学界」に由つて先生のラフワエル前派其他の御紹介を読み、また雑誌「帝国文学」に由つて先生の「細心精緻の学風」を御奨励になつた文章や、其他、後に「文芸論集」と「みをつくし」とにお収めになつたいろいろの御論文と御創作とを拝見して、常に人知れず尊敬の情を懐きながら、わたくしの蒙を啓いて頂いて居りました。

先生、早くから斯様な御感化を陰ながら先生に受けて居りましたわたくしが、後にわたくしの第一歌集「みだれ髪」を出しました時、何人よりも先に先生がわたくしの存在をお認め下さいまして、雑誌「明星」の上で御厚意に満ちた御批評を公にして頂きましたことは、その想ひがけない過去の光栄にわたくしの胸がどんなに激しく鼓動しましたこととせう。(中略) さうして、わたくしの一切の作物は拙劣ながらも、常に公には先づ先生の御覧に供へ得るやうにと云ふことを今日まで心掛けて居りました。

ここから次のことがわかる。

- ・交流が始まる前から上田敏に注目し、上田の刊行物などを読み尊敬していたこと。
- ・上田に感化され、影響をうけていたこと。
- ・晶子は、完成した作品の読者として、まず上田を意識していたこと。

晶子にとって森鷗外と上田敏は、深く尊敬する対象であると同時に、両者の著作の最も熱心な読者であった。両者は、晶子にとって文学者としての目標に近い存在だったのではないか。

### 三、晶子の創作姿勢

前掲の随筆集『一隅より』からには、さらに興味深い記述を見ることが出来る。「歌を詠む心持」には、歌の制作に対する姿勢として、模倣の長所と短所、歌を制作するための「素養」の重要性、そのために他者の話を聞くなどして情報を得ること、また本を読むことなどが必要であることを述べている。関連部分を引用する。(引用文は、私によりルビをはずした上、傍線および波線を付した。)

・・・歌を詠み初めた計りの人は見當の分らぬ事が多く、其れが歌として發言せねばならぬ情想であるか何うか、又何う云ふ具合に言ひ廻せば感じた通の情想が調子よく出せるか、斯う云ふ内容や技巧に就いて中自信がない。其れで已むを得ず他人の作を讀んで其遣口を模倣し、模倣し乍ら少しづつ自分の感じた事を出さうとする。習作の手段として此模倣と云ふ事は誰も一度通過する事の様<sup>3</sup>に思ひます。

併し悪くすると模倣が癖になつて、何時迄も他人の作物の影響を受け他人の後塵を拝して計りある弊害がある。・・・例へば他人の手本で習字をするのは模倣であり、其習字の目的は自己の立派な書體を作るにある如く、歌の模倣も目的たる自己の歌を完全に製作する迄の稽古である事を忘れてはなりません。

(中略)

・・・私は男の方の様に旅行などで見聞を擴める具合にも行かぬ。又外國の詩歌小説が一行でも讀めるのでは無い。其れで自分の内心を豊富にする為には、力めて宅へ來られる先輩や友人方の御話を注意して聴く。氣を付けてみると不用意な御話の中にも私の胸<sup>5</sup>に思ひ當る事が少なくないので大變に得をします。

(中略)

私はどちらかと云ふと、幼い時から歴史に關した書物が第一の嗜好です。其れで自然早くから日本の古文學にも親みましたが、只今では動植物の書物でも如何なる雑書でも手当たり次第に読みます。文學物では脚本と小説、殊に森先生などの御譯しになる翻譯を讀み耽ります。

ここから読み取れることと、推察できることを列挙する。

1. 詠歌に際し、初めは模倣でもかまわない。
2. しかし、模倣は、自身の作品を確立するための稽古である。

3. 見聞を広める旅は女の身では困難である。
4. 外国語は読めない。
5. 男たちの会話の中から知識を吸収する。
6. 耳学問により、自らの正統性を確かめる。

晶子の制作姿勢は、一言で言えば、他者(所)からの吸収であり、創作初心者の段階では模倣も厭わないということであろう。

#### 四、『新譯源氏物語』の文体

「二」、「三」での検証により、晶子にとって森鷗外と上田敏が大きく影響していることと晶子の創作姿勢とを明らかにした。

ここでは、前掲の波線部「殊に森先生などの御譯しになる翻譯を讀み耽ります」という事実注目しながら、晶子の『源氏物語』現代語訳の訳出姿勢について考えたい。

晶子は、自身が全く読めない海外の文学作品を翻訳によって読んでいる。これをそのまま『源氏物語』原典と現代語訳の関係に置き換えてみることは、決して不可能なことはあるまいか。その際、その文体については、読みなれた森鷗外や上田敏の翻訳作品のそれを「模倣」することになるのは、きわめて自然な流れであると言つてよいだろう。前人未到の口語訳なのであるのだから、「模倣」することにためらいはなかったであろう。森鷗外および上田敏は、『新譯源氏物語』の序を記しているのである。

晶子の二回目の訳業である、二七年後に刊行された『新新譯源氏物語』の「あとがき」には、次のような記述がある。

・・・森林太郎、上田敏二博士の序文と、中澤弘光畫伯の繪が添つて居た。その三先生に對して粗雑な解と譯文をした罪を爾來二十幾年の間私は恥ぢ續けて來た。いつかは三先輩に對する謝意に代へて完全なものに書き變へたいと願つてゐたのであるが・・・

晶子の論理によれば、初めは「模倣」でも構わない。究極的には自身による文体確立が実現されればよいのである。晶子の訳業は、まさに「模倣」から始まったといえなくもあるまい。

塚原孝氏は、「上田敏とアンドレーエフ——その翻訳を中心に——」(川戸道昭ほか編『明治翻訳文学全集』《翻訳家編》17 上田敏集』平成一五年七月一七日 大空社)で、上田敏の翻訳の特質について言及しているの、それを要約する。

一つ目の特徴は、会話文である。「・・・地の文からその次の会話、次の地の文からその次の会話、さらに最後の地の文から次の会話が、読点で接続されている。」「・・・会話文の直前の地の文とそれに続く会話文を、ある場合には地の文にあつた動詞をまったく取り除いてしまつて連続させる・・・」という特徴がある。

二つ目として、「原文およびフランス語訳とこの上田敏では、文の数が異なっている」ことを挙げ、アンドレーエフ作『沈黙』の一部分を上田、原文、宮原晃一郎(逐語訳)と比較し訳出方法に特徴があるとしている。上田の訳出方法について論じられた部分を引用する。

上田敏のこの訳は、文章の頭から順に訳出し、いわゆる句読点に関しては比較的自由的

裁量の下に置かれた結果であるといつてほぼ差し支えないと思われる。つまり、上田敏の訳は、文の語彙、前後の脈略は大きく変えられていない一方で、細部にわたつての正確さあるいは原文への忠実度という点ではむしろ再編し直された訳出であるといえるのであるが、このような箇所もまた、明らかにそこに訳者である上田敏の意図が感かんられると同時に、ごく限られた箇所というよりは、至る所に見られる表現として、その訳文の特徴を成す要素となっているのである。

塚原氏の指摘する上田敏の訳出方法は、そのまま晶子の『新譯』に見る方法にびたりと符合していると言つてよいだろう。

文脈を大きく変えることなく、自らの裁量により敬語を取り払い、まわりくどい長文を適宜区切り、文脈上取り払つても差し支えない部分を取り払いつつ再編された晶子の現代語訳は、鷗外や上田の訳に慣れ親しんでいた彼女にとつては、ごく自然なものだったのである。また、森鷗外は、『現代二十名家文章作法講話』（大正三年一月、東京萬巻堂）において、「翻譯に就いて」と題し、次のように述べている。

小説脚本の翻譯は博言學的研究とは違ふ。一字一字に譯して、それを排列したからと云つて、それで能事畢ると云ふわけではない。故らに足した語を原文にないと云つて難じたり、わざと除いた語を原文にあると云つて責めたりしても、こつちでは痛癢を感じない。

つまり、文学作品の翻譯は、一言一句の直訳を必要としないということである。

晶子を金尾種次郎に推薦した翻譯家でもある内田魯庵は、『文章俱樂部 第三卷第二號』（大正七年四月五日）に「翻譯文に就いて」という文章を寄せている。（内田魯庵『内田魯庵全集』補卷3』から引用）

・・・直譯體のものが續出し流行したのは、四五年前のやうに思ふ。私は元來直譯などをやる人は、日本文がよく書けないからだと思つてゐる。（中略）ある英國人の著した「翻譯論」の中に、一つの翻譯書の善惡を見るには、まづ第一にそれが立派な自國の文章になつてゐるかどうかを見なければならぬ、と書いてある。全く翻譯は一の創作である。そして、自ら原文とは別箇のものである。

大正二、三年頃は直訳體の翻譯が流行していたのである。しかし、内田の考える翻譯は、「一の創作である」ということである。

先の鷗外の「翻譯に就いて」の書かれた時期と、内田のいう「四五年前」は同時期と考えられ、明治末期から大正初期の翻譯は直訳に類するものが主流であり、むしろ上田や鷗外の訳出方法は少数派であつたのではないだろうか。

『源氏物語』の現代語訳については、明治二十一年、増田于信による『新編紫史 一名通俗源氏物語』が文語體（通俗語）で刊行されているものの、口語體においては晶子が初の試みとなるのである。自身が読んだ『源氏物語』を口語體で訳出するにあたり、当時盛んにおこなわれていた外国文学の翻譯を参考にしたことは十分に考えられるのではないか。そして、なかでも自身が愛読し、尊敬してやまない上田敏と森鷗外の翻譯方法を「模倣」しながら、

現代語訳をすすめたのではないだろうか。いや、両氏に背中を押されその翻訳方法を自信をもって取り入れ、『源氏物語』を自家葉籠中の物として取り込み、さらに換骨奪胎し、自由闊達に(当時の)現代語に翻訳したと言えるのではないか。さらに、翻訳家である内田魯庵は、晶子その精神を見抜いた上で、金尾種次郎に推薦したのではなかっただろうか。

『新譯源氏物語』にみられる独自の文体すなわち晶子の「自由訳」は、他に置換できない文学者晶子の強烈な個性に基づきつつ、もう一方では、同時代の男女を問わない文学者たちの潮流と、同時に直訳型ではない新しい翻訳者たちの文体とがあいまって成立した、といえるのではないだろうか。

【注】

注1…明治十一年(一八七八年)二月七日、大阪府堺市にて誕生。

小林天眠の依頼によりすでに「源氏物語講義」の執筆中であつたが、金尾種次郎からの依頼により『源氏物語』の現代語訳に取り組み、『新訳源氏物語』を刊行。その後、関東大震災により「源氏物語講義」の原稿の大半を焼失。しかし、再度現代語訳に取り組み、『新新訳源氏物語』を刊行する。昭和十七年(一九四二年)五月二十九日没(六五歳)。

注2…佐藤由佳「与謝野晶子訳『源氏物語』書誌集成(上)」(愛知淑徳大学国文学会『愛知淑徳大学国語国文』令和二年三月一七日 愛知淑徳大学)

注3…晶子が現代語訳を行うにあつての依拠本文について、晶子は、それを明示していない。それを一つに確定することは難しいものの、最も愛読したのが「絵入源氏物語」無刊記小本(江戸初期)である可能性が高い。(以上、神野藤昭夫氏のご教示による(平成二十八年二月九日、愛知淑徳大学における「晶子源氏」誕生秘話」と題する講演)。

注4…中野幸一氏は、元来が「語り」であることを重視して、文末を「です」「ます」で括る。『正訳 源氏物語』(全一〇巻)(平成二十七年一〇月〜同二十九年六月 勉誠出版)

注5…長谷川時雨は、明治十二年(一八七九年)一〇月一日に東京市に誕生。青春時代には、祖母や母にかくれて草双紙や古典を読みふけたという逸話を持つ。また、佐佐木信綱の竹柏園に通い、古典を学んだ。一九歳で結婚。二三歳の時、はじめて『女學世界』に「うづみ火」を投稿。その後も諸誌に投稿。これがきっかけとなり離婚。戯曲、脚本などを発表。小説「雲」は、明治四一年九月に『文藝倶楽部』に発表されたものである。昭和十六年(一九四一年)八月二二日没(六三歳)。

注6…瀬沼夏葉『明治文學全集』82 明治女流文學集(二)(昭和四〇年一月一日〜日 筑摩書房)による。

注7…森しげは、明治十三年(一八八〇年)五月三日に佐賀県に誕生。学習院女子部を卒業。大財閥の渡辺治右衛門の息子、勝太郎と結婚するも、一カ月弱で離婚。明治三五年二一歳の時、森鷗外の後妻として再婚。『青鞥』『スバル』『三越』などの雑誌に寄稿している。「おはま」は、明治四四年八月一日に『新小説』に発表された作品である。昭和十一年(一九三六年)四月十八日没(五九歳)。

注8…大塚楠緒子『新編』日本女性文学全集 第三卷(平成三〇年一月二十七日 菁柿堂)による。

注 9 : 永井荷風は、明治一二年（一八七九年）一二月三日に東京市に誕生。高等師範学校附属尋常中学校時代に病氣になり、一時休学。病氣療養中に伝奇小説などをよみふける。中学卒業後、上海に旅行。帰国後の明治三年に『上海紀行』を発表。明治三六年、渡米。フランス語を習得。明治四三年、慶應義塾大学の教授となる。『すみだ川』は、明治四四年靱山書店から刊行された。昭和三四年（一九五九年）四月三〇日没（八一歳）。

注 10 : 永井荷風『明治文學全集』73 永井荷風集（昭和四四年一二月二五日 筑摩書房）による。

注 11 : 有島武郎は、明治一二年（一八七八年）三月四日に東京市にて誕生。札幌農学校に進学。明治三六年に渡米。ハバフォード大学院およびハーバード大学に学ぶ。帰国後、東北帝国大学の英語講師となる。同人誌『白樺』に参加。「幻想」は、大正三年八月に『白樺』にて発表された。『婦人公論』記者で人妻であった波多野秋子と恋仲になり、軽井沢の別荘にて心中。大正一二年（一九二三年）六月九日没（四六歳）。

注 12 : 有島武郎『有島武郎全集 第一巻』（大正一三年四月五日 叢文閣）による。

注 13 : 若松賤子は、元治元年（一八六四年）三月一日に現在の会津若松市に誕生。現在のフェリス女学院のもととなった英語塾で教育を受ける。明治一五年に母校の教師となる。『女学雑誌』を主宰する巖本善治と結婚。『女学雑誌』に投稿。翻訳では、『小公子』が有名。英文誌にも執筆。院ジロー作、小説『ローレンス』は、明治二六年に『女学雑誌』に掲載された作品である。明治二九年（一八九六年）二月一〇日没（三三歳）。

注 14 : 川戸道昭ほか編『復刻版 明治の女流文学』 翻訳編 第一巻 若松賤子集』（平成一二年七月二八日 五月書房）による。

注 15 : 瀬沼夏葉は、明治八年（一八七五年）一二月一日に現在の群馬県高崎市にて誕生。明治二五年、全寮制の女子神学校を卒業。同校の教師となる。雑誌への投稿を続けながら、ロシア語を習得。瀬沼恪三郎と結婚。同時に教師を辞める。尾崎紅葉に師事。紅葉と共同でトルストイの『アンナ・カレーニナ』などを発表。チェーホフ作品を多数翻訳している。「六號室」は、明治二九年に『文藝界』に発表されたものである。大正四年（一九一五年）二月二八日没（四一歳）。

注 16 : 川戸道昭ほか編『復刻版 明治の女流文学』 翻訳編 第二巻 瀬沼夏葉集』（平成一二年九月二八日 五月書房）による。

注 17 : 森鷗外は、文久二年（一八六二年）一月一九日に、現在の島根県津和野町にて誕生。現在の東京大学医学部を卒業後、軍医となる。陸軍軍医としてドイツに留学。外国文学の翻訳、翻訳戯曲や翻訳詩、評論なども手掛けた。『新譯源氏物語』の序文を記す。また、渡仏中の晶子に代わって『新譯源氏物語』の校正を手伝ったとされる。ルスト著『いつか君は歸ります』は、与謝野鉄幹主宰の雑誌『明星』に明治四一年に発表された作品である。大正一一年（一九二二年）七月九日没（六一歳）。

注 18 : 川戸道昭ほか編『明治翻訳文学全集（翻訳家編）』9 森鷗外集Ⅱ』（平成一四年六月二三日 大空社）による。

注 19 : 上田敏は、明治七年（一八七四年）一〇月三〇に東京市にて誕生。東京帝国大学英文学科を卒業。東京帝国大学、明治大学、などで、教鞭をとる。明治四一年、ヨーロッパに留学。その後、京都帝国大学の教授となる。与謝野鉄幹主宰の雑誌『明



星』にも作品を発表。『新譯源氏物語』の序文を記す。アンドレーエフ著小説『クサカ』は、明治四二年『新小説』に発表された作品である。大正五年（一九一六年）七月九日没（四三歳）。

注 20：川戸道昭ほか編『明治翻訳文学全集（翻訳家編）』17 上田敏集』（平成一五年七月一七日 大空社）による。

【参考文献】

- ・ 與謝野晶子『一隅より』（明治四四年七月二〇日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 上巻』（明治四五年二月一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 中巻』（明治四五年六月二五日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 下巻の一』（大正二年八月二一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 下巻の二』（大正二年十一月三日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 第一巻』（大正三年二月一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 第二巻』（大正三年二月二日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 第三巻』（大正三年二月二〇日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 第四巻』（大正三年二月三一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『明るみへ』（大正五年一月一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『縮刷新譯源氏物語 第一巻』（大正一一年七月一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『縮刷新譯源氏物語 第二巻』（大正一一年七月一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『縮刷新譯源氏物語 第三巻』（大正一一年七月一日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『縮刷新譯源氏物語 第四巻』（大正一一年七月一日 金尾文淵堂）
- ・ 有島武郎『有島武郎全集 第一巻』（大正一三年四月五日 叢文閣）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 上』（大正一五年二月一〇日 大鏡閣）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 下』（大正一五年二月二〇日 大鏡閣）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 上』（大正一五年四月二九日 金尾文淵堂）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 下』（大正一五年七月二七日 金尾文淵堂）
- ・ 藤田徳太郎『源氏物語綱要』（昭和三年二月二七日 不老閣書房）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 上』（昭和四年三月五日 河野成光館）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 下』（昭和四年三月五日 河野成光館）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 上』（昭和七年一月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 下』（昭和七年一月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語』（昭和七年七月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語』（昭和八年五月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語』（昭和八年八月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語』（昭和九年五月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語』（昭和一〇年一月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語』（昭和一〇年九月五日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 第一巻』（昭和一〇年九月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 第二巻』（昭和一〇年九月八日 新興社）
- ・ 與謝野晶子『新譯源氏物語 第三巻』（昭和一〇年九月八日 新興社）

- ・與謝野晶子『新譯源氏物語 第四卷』(昭和一〇年九月八日 新興社)
- ・與謝野晶子『新譯源氏物語』(昭和一〇年九月八日 新興社)
- ・與謝野晶子『新譯源氏物語』(昭和一一一年二月五日 新興社)
- ・與謝野晶子『新新譯源氏物語 第一卷』(昭和一三年一〇月二二日 金尾文淵堂)
- ・與謝野晶子『新新譯源氏物語 第二卷』(昭和一三年一月二二日 金尾文淵堂)
- ・與謝野晶子『新新譯源氏物語 第三卷』(昭和一三年二月二二日 金尾文淵堂)
- ・與謝野晶子『新新譯源氏物語 第四卷』(昭和一四年二月一日 金尾文淵堂)
- ・與謝野晶子『新新譯源氏物語 第五卷』(昭和一四年六月三〇日 金尾文淵堂)
- ・與謝野晶子『新新譯源氏物語 第六卷』(昭和一四年九月一二日 金尾文淵堂)
- ・與謝野晶子『日本文庫 文學篇』新々譯源氏物語 第一卷』(昭和二三年一月五日 本社)
- ・與謝野晶子『日本文庫 文學篇』新々譯源氏物語 第二卷』(昭和二三年一月一五日 日本社)
- ・與謝野晶子『日本文庫 文學篇』新々譯源氏物語 第三卷』(昭和二三年一月二五日 日本社)
- ・與謝野晶子『日本文庫 文學篇』新々譯源氏物語 第四卷』(昭和二四年六月一〇日 日本社)
- ・與謝野晶子『日本文庫 文學篇』新々譯源氏物語 第五卷』(昭和二四年七月一日 日本社)
- ・與謝野晶子『世界文學選書』源氏物語 第一卷』(昭和二四年六月一〇日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『世界文學選書』源氏物語 第二卷』(昭和二四年八月五日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『世界文學選書』源氏物語 第三卷』(昭和二四年九月二五日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『日本文庫 文學篇』新々譯源氏物語 第六卷』(昭和二四年一〇月一日 日本社)
- ・與謝野晶子『世界文學選書』源氏物語 第四卷』(昭和二四年一〇月五日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 上卷』(昭和二五年九月五日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 下卷』(昭和二五年一〇月二二日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 (一)』(昭和二六年一〇月一九日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 (二)』(昭和二六年一〇月三〇日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 (三)』(昭和二六年十一月一五日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 (四)』(昭和二六年十二月一日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 (五)』(昭和二六年十二月一五日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 (六)』(昭和二七年一月一〇日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 (七)』(昭和二七年一月一五日 三笠書房)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第一卷』(昭和二九年一〇月一〇日 角川書店)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第二卷』(昭和二九年一〇月一五日 角川書店)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第三卷』(昭和二九年一〇月一五日 角川書店)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第四卷』(昭和三〇年五月二〇日 角川書店)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第五卷』(昭和三〇年五月三〇日 角川書店)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第六卷』(昭和三〇年六月三〇日 角川書店)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第七卷』(昭和三〇年八月五日 角川書店)
- ・與謝野晶子『源氏物語 第八卷』(昭和三〇年八月一〇日 角川書店)

- ・與謝野晶子『源氏物語 第九卷』（昭和三〇年八月二〇日 角川書店）
- ・與謝野晶子『《日本国民文学全集》源氏物語 上』（昭和三〇年九月二五日 河出書房）
- ・與謝野晶子『《日本国民文学全集》源氏物語 下』（昭和三〇年一〇月二五日 河出書房）
- ・與謝野晶子『《日本国民文学全集》源氏物語（上）』（昭和三三年七月一〇日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《日本国民文学全集》源氏物語（下）』（昭和三三年八月一〇日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《日本文学全集》源氏物語 上』（昭和三五年七月五日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《日本文学全集》源氏物語 下』（昭和三五年八月一八日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『定本 現代語訳 源氏物語 上卷』（昭和三六年九月三〇日 日本書房）
- ・與謝野晶子『定本 現代語訳 源氏物語 下卷』（昭和三六年一〇月三〇日 日本書房）
- ・與謝野晶子『定本 現代語訳 源氏物語 上卷』（昭和三七年九月二〇日 日本書房）
- ・與謝野晶子『定本 現代語訳 源氏物語 下卷』（昭和三七年一〇月二二日 日本書房）
- ・與謝野晶子『《国民の文学》源氏物語（上）』（昭和三八年八月二〇日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『定本 現代語訳 源氏物語 上卷』（昭和三九年三月二〇日 日本書房）
- ・與謝野晶子『定本 現代語訳 源氏物語 下卷』（昭和三九年四月二〇日 日本書房）
- ・與謝野晶子『《国民の文学》源氏物語（下）』（昭和三九年九月二三日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《国民の文学》源氏物語（下）』（昭和三九年九月二三日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《豪華版 日本文学全集》源氏物語 上卷』（昭和四〇年六月三日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《豪華版 日本文学全集》源氏物語 下卷』（昭和四〇年七月三日 河出書房新社）
- ・瀨沼夏葉『《明治文学全集》 82 明治女流文学集（二）』（昭和四〇年一二月一〇日 筑摩書房）
- ・上田敏『《明治文学全集》 上田敏集 31』（昭和四一年四月一〇日 筑摩書房）
- ・與謝野晶子『《カラ―版日本文学全集》源氏物語 上卷』（昭和四二年一月一〇日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《カラ―版日本文学全集》源氏物語 下卷』（昭和四二年二月一八日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『源氏物語 上』（昭和四四年五月二五日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『源氏物語 中』（昭和四四年六月二五日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『源氏物語 下』（昭和四四年七月一〇日 河出書房新社）
- ・永井荷風『《明治文学全集》 73 永井荷風集』（昭和四四年一二月二五日 筑摩書房）
- ・與謝野晶子『《日本の古典》源氏物語 上卷』（昭和四六年二月五日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《日本の古典》源氏物語 下卷』（昭和四六年三月一五日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『全訳 源氏物語 上卷』（昭和四六年八月一〇日 角川書店）
- ・與謝野晶子『全訳 源氏物語 中卷』（昭和四六年十一月三〇日 角川書店）
- ・與謝野晶子『全訳 源氏物語 下卷』（昭和四七年二月二五日 角川書店）
- ・森林太郎『鷗外全集 第二六卷』（昭和四八年一二月二二日 岩波書店）
- ・與謝野晶子『《日本古典文庫》源氏物語 上』（昭和五一年一月三〇日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《日本古典文庫》源氏物語 中』（昭和五一年一月三〇日 河出書房新社）
- ・與謝野晶子『《日本古典文庫》源氏物語 下』（昭和五一年一月三〇日 河出書房新社）

- ・与謝野晶子『《現代語訳 日本の古典》源氏物語 上』(昭和五四年五月一日 河出書房新社)
- ・与謝野晶子『《現代語訳 日本の古典》源氏物語 下』(昭和五四年五月一日 河出書房新社)
- ・内田魯庵『《内田魯庵全集》補卷3』(昭和六二年九月二十五日 ゆまに書房)
- ・与謝野晶子『《新装版 日本古典文庫》源氏物語 上』(昭和六二年二月一日 河出書房新社)
- ・与謝野晶子『《新装版 日本古典文庫》源氏物語 中』(昭和六二年二月一日 河出書房新社)
- ・与謝野晶子『《新装版 日本古典文庫》源氏物語 下』(昭和六二年二月一日 河出書房新社)
- ・柳井滋ほか校注『《新日本古典文学大系》源氏物語 一』(平成五年一月二〇日 岩波書店)
- ・阿部秋生ほか校注・訳『《新編日本古典文学全集》源氏物語 ①』(平成六年三月一日 小学館)
- ・平子恭子編『《年表作家読本》与謝野晶子』(平成七年四月二十五日 河出書房新社)
- ・川戸道昭ほか編『《復刻版 明治の女流文学》 翻訳編 第一卷 若松賤子集』(平成二二年七月二十八日 五月書房)
- ・川戸道昭ほか編『《復刻版 明治の女流文学》 翻訳編 第二卷 瀬沼夏葉集』(平成二二年九月二十八日 五月書房)
- ・坪内祐三ほか編『《明治の文学》第14巻 森鷗外』(平成二二年一〇月一日 筑摩書房)
- ・与謝野晶子『与謝野晶子の新訳源氏物語 ひかる源氏編』(平成一三年一月三〇日 角川書店)
- ・与謝野晶子『与謝野晶子の新訳源氏物語 薫・浮舟編』(平成一三年一月三〇日 角川書店)
- ・与謝野晶子『《鉄幹 晶子 全集》7 新訳 源氏物語』(平成一四年一月一日 勉誠出版)
- ・与謝野晶子『《鉄幹 晶子 全集》8 新訳 源氏物語』(平成一四年一月一日 勉誠出版)
- ・川戸道昭ほか編『《明治翻訳文学全集》《翻訳家編》9 森鷗外集Ⅱ』(平成一四年六月二三日 大空社)
- ・与謝野晶子『與謝野晶子評論著作集 第二一卷』(平成一四年一月一日 龍溪書舎)
- ・川戸道昭ほか編『《明治翻訳文学全集》《翻訳家編》17 上田敏集』(平成一五年七月七日 大空社)
- ・石塚純一『《金尾文淵堂をめぐる人びと》』(平成一七年二月二十八日 新宿書房)
- ・与謝野鉄幹ほか『《鉄幹 晶子 全集》17』(平成一七年三月三十一日 勉誠出版)
- ・与謝野晶子『与謝野晶子の源氏物語 上 光源氏の栄華』(平成二〇年四月二十五日 角川学芸出版)
- ・与謝野晶子『与謝野晶子の源氏物語 中 六条院の四季』(平成二〇年四月二十五日 角川学芸出版)
- ・与謝野晶子『与謝野晶子の源氏物語 下 宇治の姫君たち』(平成二〇年四月二十五日 角川学芸出版)
- ・与謝野晶子『全訳 源氏物語 新装版 一』(平成二〇年四月二十五日 角川書店)

- ・与謝野晶子『全訳 源氏物語 新装版 二』(平成二〇年四月二五日 角川書店)
- ・与謝野晶子『全訳 源氏物語 新装版 三』(平成二〇年四月二五日 角川書店)
- ・与謝野晶子『全訳 源氏物語 新装版 四』(平成二〇年五月二五日 角川書店)
- ・与謝野晶子『全訳 源氏物語 新装版 五』(平成二〇年五月二五日 角川書店)
- ・河添房江編『『講座源氏物語研究』第十二巻 源氏物語の現代語訳と翻訳』(平成二〇年六月二〇日 おうふう)
- ・与謝野晶子『『鉄幹 晶子 全集』28 新新訳源氏物語』(平成二二年七月二〇日日 勉誠出版)
- ・与謝野晶子『『鉄幹 晶子 全集』29 新新訳源氏物語』(平成二二年一月二〇日日 勉誠出版)
- ・与謝野晶子『『鉄幹 晶子 全集』30 新新訳源氏物語』(平成二二年二月二〇日日 勉誠出版)
- ・東京大学国語国文学会『国語と国文学』(平成二六年四月一日 明治書院)
- ・堺市博物館編 企画展『与謝野晶子―その限りなき挑戦の生涯―』図録 (平成二七年一〇月三〇日 堺市博物館)
- ・中野幸一『正訳 源氏物語 本文対照 第一冊』(平成二七年一〇月三〇日 勉誠出版)
- ・堺市博物館編 企画展図録『与謝野晶子と三つの舞台―堺・京都・東京―』(平成二八年一月一日)
- ・神野藤昭夫「晶子源氏」誕生秘話」講演資料(平成二八年一月二九日 愛知淑徳大学)
- ・大塚楠緒子『『新編』日本女性文学全集』第三巻』(平成三〇年一月二七日 青柿堂)
- ・寺田澄江ほか『二〇一七年パリ・シンポジウム 源氏物語を書きかえる 翻訳・注釈・翻案』(平成三〇年一月一〇日 青蘭舎)
- ・神奈川文学振興会編『生誕140年与謝野晶子展 こよひ逢ふ人みなうつくしき』図録 (平成三〇年三月一七日 神奈川近代文学館・神奈川文学振興会)
- ・文京区立森鷗外記念館編『文京区立森鷗外記念館 平成三十(二〇一九)年特別展 一葉、晶子、らいてう―鷗外と女性文学者たち』図録(平成三一年四月六日 文京区立森鷗外記念館)

第四部

『源氏物語』

現代語訳の限界と可能性

— まとめに代えて —

## 第一章 『源氏物語』現代語訳の限界

明治四五年、与謝野晶子によって口語体による『源氏物語』の現代語訳が刊行され、それから一〇八年が経過した。

本年（令和二年）二月には、角田光代による『源氏物語』現代語訳の刊行が完結した。また、昨年（令和元年）七月には、毬矢まりえ・森山恵姉妹によるアーサー・ウェイリーの英訳初版本の日本語全訳版が刊行されもした。このように、現在もなお『源氏物語』は人々の強い関心のもと、現代語訳により愛読者を集めている。

一〇八年の間には、（完訳）（注1）だけでも二人の人々により訳業がなされている。その性別をみると、男性一人、女性九人である。どちらかの性に偏ることもなく現代語訳が試みられている。また、訳者の主たる職業もさまざまである。歌人、小説家、国文学者、国語学者にとどまらず、主婦や高校教員までがその訳業に取り組んでいる。

与謝野晶子をはじめその多くは、『源氏物語』に対して強い興味関心をもっていた。例外的に角田光代のように『源氏物語』を、あるいは、光君をはじめ登場人物たちを、好きだとも嫌いだとも思ったことがなく、この物語自体に思うところも何もなかった（注2）という訳者もいるが、二人すべてに共通するのは、言語の壁を越え読者に『源氏物語』を現代の言葉で確かに伝えたいという思いである。

そのために各訳者は、さまざまな基準や方針を立て、それぞれ工夫を凝らし取り組んできたのである。それは、ひとりでも多くの読者を獲得することを望んでの試みである。その意味においては、刊行から一〇八年たった令和の現代でも、手軽に入手できる与謝野晶子の『新譯源氏物語』は、時代を超えて多くの読者を獲得したといえるであろう。ただし、谷崎潤一郎や円地文子についても同様のことがいえるであろうが、歴史的文学者による訳業であることが、現代に残る一因であることは否定できない。

一方、大正末期から昭和の時代には研究者による一般読者向けの優れた現代語訳が数多く刊行された。ところが、残念なことにそれらは現代の一般読者が知るところにない。吉澤義則による『源氏物語』（大正二三年から大正一五年）についても、短文を用い、段落も多く取るなど、読みやすさに加え、内容の説明や人物の心情なども加筆しつつ現代語訳し、数度にわたり単行本化されその人気がうかがえるのだが、現代では一般読者が手に取ることがない。

また、現代においてもなお、玉上琢彌や今泉忠義の現代語訳は、文庫版により一般読者も手に取ることが可能であるが、どちらかというと、古典の学習や、『源氏物語』を学ぼうとする人々の手引書の様相を呈している。両者はもはや、一般読者向けとは言い難いと思われる。

結局のところ、すべての読者にとつての決定版ともよべる『源氏物語』の現代語訳は存在しないのではないか。近年、日本社会の成熟にもなつて、個性が尊重され、多様性が広く認められる状況の中で、個々人のきめ細かい要求にこたえることが求められるようになってきた。それら社会の要求に添うように、平成の時代になつたところから、次第に『源氏物語』の現代語訳についても個性的なものが登場するようになる。正統的な現代語訳を行うのではなく、特徴をもった独自の現代語訳が登場しつつあるのである。

- ・中井和子『現代京ことば訳 源氏物語』・・・京ことばでの現代語訳。(平成三年)
- ・荻原規子『源氏物語 紫の結び』『源氏物語 宇治の結び』『源氏物語 つる花の結び』・・・五十四帖を三系統に分け、再構成して現代語訳。(平成二五年から平成三〇年)
- ・小林千草・千草子『絵入簡訳 源氏物語』・・・山本春正による「絵入源氏物語」の挿絵に添って、その挿絵がある部分は忠実に現代語訳し、それ以外は簡略に現代語訳する。(平成二五年から平成二六年)

これらの現代語訳については、必ずしもすべての一般読者に受け入れられるものではない。『源氏物語』をオーソドックスな現代語訳で読んでみたいという一般読者には、敬遠される可能性さえ持ち合わせている。だが、一〇〇〇年の時間差はあるが、同じ土地で生きている人々のことは、すなわち「京ことば」に興味がある、または、絵画とともに物語を楽しみたい、というような、『源氏物語』本文自体から派生する諸要素に焦点を当てた独自の訳出は、『源氏物語』の世界をさらに拡大する可能性を孕んでいるのではないだろうか。荻原規子の、原作の構造(巻序)を再編するという前代未聞の措置は、その主題把握にとってきわめて有益であるだろう。このように、すべての一般読者に向けての現代語訳ではなく、潜在的な読者の需要に応じた特殊な現代語訳は、この現代において最も必要とされているのではないだろうか。

今後は、読者をきめ細かく絞り込み、対象を明確にした『源氏物語』の現代語訳が必要になると考える。そこで、さしあたって誰からみても明確である「年齢」によって区分し、現代語訳を試みたい。その区分した年齢層にとってふさわしいであろう現代語訳を行ってみる。次の第二章において、具体的には一一歳から一二歳という少年少女を読者対象として、『源氏物語』「御法」巻の現代語訳を試みることにする。

【注】

注1…本稿の第一部第一章〈完訳〉編参照。

注2…角田光代『池澤夏樹Ⅱ個人編集 日本文学全集』04 源氏物語 上』(平成二九年九月三〇日 河出書房新社)「訳者あとがき」より引用。



## 第二章 『源氏物語』現代語訳の限界と可能性

### ―新たな現代語訳（「御法」巻）の実践―

#### 第一節 〈試み〉の意図および方法

『源氏物語』が広く一般の人々に読み継がれることとなったのは、与謝野晶子の口語体による現代語訳が明治四五年に刊行されてからであり、それに続く、さまざまな現代語訳によって、その読者層は拡大していった。基本的には、わかりやすい現代語訳が、『源氏物語』ひいては古典の普及に貢献してきたのである。

そこで、特にこれからの若い世代に『源氏物語』を読む機会を提供することは、決して無意味なことではあるまい。読者対象は、古典について義務教育で学びはじめる小学校第五、第六学年、すなわち一歳から一二歳の少年少女とした。平成二九年三月三十一日に告示され、平成三二年四月一日（令和二年四月一日）に施行された小学校学習指導要領（注1）「国語」『第五学年及び第六学年』は、「1. 目標」に続き「2. 内容」を掲げているが、その第（3）項目は、次のとおりである。

（3） 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。

イ 古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったりすることを通して、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言の違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。

これからも当該年齢層は、古典について学びはじめるにふさわしい時機とされるのである。

また、与謝野晶子は一二歳（注2）で、田地文子は小学校高学年（注3）で、瀬戸内寂聴は一三歳（注4）で、『源氏物語』の読者となったことがわかっている。さらに、時代はさかのぼるが、『更級日記』の作者である菅原孝標女も『源氏物語』に興味を持ち、それらを読んでみたいと強い願望を抱いた年齢が一三歳（注5）であった。

一一、二歳（数え年では一二、三歳）は、自らも古典に興味を持ちはじめる年齢層と言えるであろう。私も小学五年生の時、塩田良平『古典文学全集』4 源氏物語（昭和四〇年六月三〇日 ポプラ社）を手に取ったことを記憶している。

当該年齢層向けの古典の既刊本としては、瀬戸内寂聴『少年少女古典文学館』第五巻 源氏物語 上（平成四年二月一九日 講談社）及び、『少年少女古典文学館』第六巻 源氏物語 下（平成五年一月二八日 講談社）などがある。しかしながら、これらは全訳ではない。

当該年齢層向けの全訳の『源氏物語』が必要である。そのような理由から、自身での現

代語訳を試みることにしたのである。その取りかかりとして、『源氏物語』「御法」巻の現代語訳を試みることにする。

読者対象を細分化するにあたっては、その対象を明確に示す必要がある。そもそも訳者がどういう意図をもって訳しているのか、どのようなところに注目しているのか、また、訳出の基準とするものは何であるのかを読者が事前に知る必要がある。それらをあらかじめ知るにより、読者は、訳者の意図に沿って円滑に読み進めることができるのである。その結果として、内容の理解にもつながっていくであろう。

今回『源氏物語』「御法」巻を現代語訳するにあたっては、読者の年齢層を極めて細かく限定した。特に凡例もしくはそれに準ずるものが必要である。また、当該年齢層は、古典の原文そのものがどのようなものであるかも知らない可能性も高い。以上のことからしても、ある程度の説明を前置きする必要がある。そして何よりも、この現代語訳がどのような基準で行われたかなどは丁寧に記載すべきであろう。

今回の〈試み〉においては、訳者の意図をも含めた内容を盛り込んだ「まえがき」という、凡例にかわるものをはじめに記すことにする。

#### 【注】

注1…「小学校学習指導要領」(平成二九年三月改正 文部科学省)〈文部科学省告示第六三号〉

注2…与謝野晶子著『新訳源氏物語』のあとがきである「新訳源氏物語の後に」において、「しかし自分は十二歳頃からもっていた原著の興味にひかれながら、・・・」と記している。

注3…円地文子著『わたしの古典』円地文子の源氏物語 巻一』の中の「わたしと『源氏物語』において、『源氏物語』を読み始めたのは小学校の高学年の頃であつたらうか。」と記している。

注4…瀬戸内寂聴著『わたしの源氏物語』の中の「出逢い」において、「昭和十年(一九三五)、わたしは十三歳で、(中略)「源氏物語 与謝野晶子訳」という文字が、わたしの目を引きよせた。(中略)読みやすい歯切れのいい文章に案内され、わたしは一気に源氏物語の世界に引きこまれていった。」と記している。

注5『更級日記』には、「世の中に物語といふもののあるなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、とどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでおぼえ語らむ。いみじく心もときままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、・・・」(犬養廉校注・訳『新編日本古典文学全集』更級日記)と記されている。

## 第二節 「御法」巻の現代語訳

### 御法

#### まえがき

『源氏物語』は、平安時代中期の十一世紀初め頃に書かれました。作者は、この頃の天皇である一条帝の彰子皇后に仕えていた、紫式部と呼ばれる宮仕え女房であると言われていいます。『源氏物語』は全部で五十四巻からなる、長編物語です。ここでは、その四十番目にあたる「御法」の巻全文の現代語訳を行ないました。

千年も前に書かれたこの物語の文章は、現代の私たちが使っている言葉とはずいぶん違っています。原文をそのまま読んでもすぐには理解できないでしょうから、皆さんが理解できるように現代の言葉に移し換えました。

また、住居や衣服など生活環境もまったく違います。千年前の言葉を現代の言葉に移し換えただけでは、当時の生活環境が理解できるものではありません。しかし、人間の心はどうでしょうか。悲しい気持ち、うれしい気持ちなどの心の動きは今も昔も変わらないでしょう。また、問題にぶつかったときにどのようにして物事を処理していくか、どのようにして苦しい気持ちから抜け出すのかなどの心のあり方は、昔の人たちの考え方もヒントになるはずです。そういったところに注意しながら読み進めてみてください。

この「御法」の巻は、主人公の光源氏の最愛の女性であった紫の上の死の場面を描いています。愛する家族の死は、必ずやってきます。避けては通れない、とても悲しいつらい別れなのです。死期が近づいていることがわかっていて紫の上は、自分が死んでいくというこの悲しさ以外にもう一つ、残された光源氏を悲しませることがつらくてなりません。また、紫の上がいなくなることなど考えられない光源氏は、深い悲しみの中にいます。そうした、死んでいく人と残される人との心を描いているのがこの巻なのです。

そしてもう一つ。光源氏には、夕霧という子どもがあります。彼は、少年の頃から、継母である紫の上に恋心に似た気持ちをもっていました。おとなになった夕霧が今もなお、ひそ

かに抱き続けている、思慕しぼの感情が表現された場面でもあります。

登場人物の「大切な人」への思いを読み取ってもらえるように、できる限り原文を尊重して現代語訳しました。しかし、一言一句いちごんいっく違わないように訳すと、かえって意味のわかりにくいところがでてきてしまいます。そこで、わかりやすい現代語訳にするために次のような基準を設けました。

一、作品本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳（新編日本古典文学全集）『源氏物語』（四）に依拠しました。その他にも、既刊の注釈書や現代語訳を参照しています。参照した書籍については、【参考文献】として一覧にしてあります。

一、この物語が成立した当時の読書は、音読が基本でした。その雰囲気を少しでも味わえるよう、音読にふさわしい文章にしました。そのため、適宜、長い文章などを区切つて、いくつかの文章に改めました。

一、特に長文についてですが、語句の順序を変えることによつて意味が通りやすい場合は、語句の順序を入れ替えました。また、内容をスムーズに理解し、読み進められると判断したところでは、文そのものの順序も入れかえました。

一、原文においては、主語がない文章が多く、そのままでは誰が発言している言葉なのかからなくなってしまう可能性があるのです。適宜、主語を補つて誰の言動であるかわかりやすくしました。

一、この物語は、女房にようぼうが語っているという形式で物語が進んでいきます。よつて、語りかけるときの言葉としてふさわしいと思われる「です・ます」調にしました。

一、物語の語り手が、登場人物の心情を語っている場面があります。それらについては、その登場人物の心内語しんないごとして、へくでくくりました。

一、『源氏物語』の中では、和歌が詠よまれます。和歌は、登場人物の心情を五、七、五、七、七の平仮名ひらがな三十一文字により表現したものです。その和歌を和歌としてそのまま現代語訳すると、そこでストーリーが途切れてしまいがちになります。スムーズに読み進めるために、和歌はあえて和歌として訳していません。会話文同様、その内容を登場人物が発言したという形式にし、本文に織り込みました。そこで、和歌なのか通常の会話文なのかを

判別できるようにするために、和歌については『』でくくり表現しました。

一、当時の經典（きんげん）の名称や舞樂（ぶがく）の名称など、説明を要するような言葉もありますが、途切れることなくスムーズに読み進めるために、解説を付け加えたりなどはしていません。ただし、本文中に何の名称であるのかという程度の説明は加えておきました。

一、この現代語訳には、まだ学習していないやや難解な語句なども含まれます。それらについても意味等の補足はつけてありません。前後の言葉からおおよその意味は理解できると思いますが。詳しく知りたいときは、辞典などで調べてください。

一、『源氏物語』においては、物語中で年月の経過とともに登場人物の呼称が変化していきます。この現代語訳を行うにあたり、基本的には一般に広く知られている呼び名で記しました。ただし、主人公の光源氏については、あえて原文どおりの「院」を用いました。以下、「御法」巻に登場する人物紹介とともに、この巻の原文ではどのような呼称であったかもあわせて記しておきます。

院いん……『源氏物語』の主人公である光源氏。准太上天皇じゆんだいじょうてんのう。五十一歳。この「御法」の巻においては、「院」と記されています。この「院」という呼称は、当時の天皇およびそれに準ずる人についての呼び名です。光源氏は、准太上天皇じゆんだいじょうてんのうの立場にあり、住まいが六条院むくじょういんというところだったため、「六条院」や「院」と呼ばれていました。

紫の上むらさきのうへ……光源氏の妻の一人であり、最愛の女性。四十三歳。光源氏と長年夫婦として暮らしていますが、二人の間に子どもはいません。光源氏と明石あかしの君きみの間に生まれた娘むすめ（明石の中宮あかしのちゆうぐう）を養育し、またその子どもである匂宮におのみやなどの養育もしています。

夕霧ゆづきりの君きみ……父は光源氏、母は葵あおいの上うへ（光源氏の最初の正妻せいさいで、夕霧の出産と同時に亡くなっています）。三十歳。この「御法」の巻においては、「大将だいしょうの君きみ」と記されています。「大将」というのは官職名くわんしやくめいです。当時、男性の場合は、官職名で呼ばれることが多く、昇進しょうしんすることによって呼称が変化していきます。

明石あかしの中宮ちゆうぐう……父は光源氏、母は明石の君。二十三歳。天皇と結婚し皇后こうごうとなりました。当時の皇后は「中宮」、天皇は「帝みかど」「内裏うち」などと呼ばれていました。

匂宮におのみや……父は天皇、母は明石の中宮。五歳。この「御法」の巻においては、「三さんの宮みや」

と記されています。「宮」は天皇の子どもであること、「三」は三番目に生まれた男の子という意味を持っています。

明石の君……光源氏の妻の一人。明石の中宮の実母。四十二歳。

花散里……光源氏の妻の一人。夕霧の育ての母。

頭の中將……光源氏の古くからの親友。葵の上の兄。五十六、七歳か。この「御法」

の巻においては、「致仕の大臣」と記されています。「致仕」は官職についていたけれ

ども、それを辞めた人を指します。この人物は、「太政大臣」を務めていました。

秋好の中宮……一世代前の皇后。四十二歳。光源氏と紫の上が親代わりを務めています。

ます。この「御法」の巻においては、「冷泉院の後の宮」と記されています。

以上が、現代語訳にあたっての基準です。

この現代語訳は、スムーズかつリズムカルに読みすすめられるように心がけて現代語訳しました。つまり、音読した場合のことを念頭においています。よって、読み聞かせにもふさわしいものと考えます。対象年齢を十一歳から十二歳と設定していますが、読み聞かせであれば、対象年齢よりいくぶん低年齢層にも適していると考えます。

## 御法

### 出家を願う重病の紫の上

紫の上は、四年前に大病をされてからというもの、たいそう弱ってしまわれました。はつきりと、どこが悪いということでもないので、何かしら気分がすぐれない日々が続いていらっしやいます。そんな状態がもうずいぶんと長く続いておいでになり、どうも快復の見込みはたちそうもなく、日に日に弱っていかれる一方なりました。その様子をご覧になり、夫の院はたいそう心配なさっておいでです。そして、

〈紫の上が先に亡くなるなんて、この上なく耐え難いことだ。自分も高齢のこととて、いずれこの人の後を追うことになるだろう、それまでの時間が、ほんのわずかなものであったとしても。この世にひとり取り残される辛さには耐えられない〉  
と思われるのです。

一方、紫の上は、

〈もう、この世に望むものは何もありません。気になければいけない子どももないこの身の。もう、無理に生きながらえようと思う命でもあるまい。ただ、私が先にあの世に行ってしまったならば、院はどんなにかお悲しみになるだろう。そのことだけがどうにもつらくてならない〉

と、ひとり心の中で悲しく思われているのです。

そして、あの世でのしあわせを願ってあれこれの仏事をお営みになるとともに、

〈この世に命があるうちに、仏道修行に専念したい。そのために何とか出家をしてしまいたい〉  
と

思っ

とお気持ち、以前から院にお伝えしていましたが、これまで院は、それを決してお許しにはならなかったのです。しかし、院自身が以前から出家を望む思いをお持ちだったので、紫の上がこうも熱心に願っ

おうか)

と、心が揺れ動くのでした。そして、

〈修行のかがいがあったあの世に行つたならば、仏さまのお側そばでともに仲良く過すごすことができるかもしれない。でも、一度出家してしまえば、この世での修行は別々のところに住んで行わなければならないまい。そうなれば、二度とこの世で顔を合わせる事ができなくなるだろう。それでは、いよいよ衰弱していかにも頼りなさそうにしている紫の上を見捨てるように、そんなことはとてもできない。こんなにも迷いが多くては、無心になって、修行に打ち込むことなどできないだろう〉

などと考え、なかなか踏み切ることができずに過すごしていらつしやいます。

また紫の上は、

〈院のお許しなしで、勝手に出家してしまうことは世間体せけんていがよくあるまい。それよりなにより、身勝手なふるまいは、院に寄り添いながら生きてきた自分の気持ちきもちが許さない。どうか院がひとことお許しをくださればよいものを〉

と、恨めしくも思われる一方、

〈思うように出家もできないのは、私のこの世で犯おかした罪が重いせいなのだろうか〉と気に病んでおいでなのでした。

### 法要の準備をする紫の上

紫の上は、ご自身の出家の準備として、最も尊とつといとされる法華経ほけきようを千部とこのも整え、急いでお寺にお納めになろうとなさいます。そのための行事は、院とともに過すごした愛着のある二条院にじょういんでとり行うこととしました。紫の上は、その法要ほうようをつとめる僧そうたちの法服ほうふくもそれぞれその身分にふさわしいものをお与えになります。そのお色いろ合あいやお仕立てなどのたいそう素晴らしいことは、この上もごごさいません。何もかもがおおごそかで、ご立派な法要となることとでしよう。

院は、この法要がそれほど大がかりなものとはお聞きになつていらつしやらなかったの



で、あれこれご指示などはなさいませんでした。それにもかかわらず、紫の上ご自身が立派にご準備されたご様子をご覧になり、

「紫の上というお方は、なんと仏道の儀式にまで精通していらっしゃる、万事に優れたお方なのだなあ」

と、つくづく感心されて、ごく一部のご準備をお手伝いなさるぐらいなのでした。

雅楽の奏者や、舞踊の舞人については、院の御子の夕霧の君が中心となってご準備されます。

帝や第一の皇子でいらっしゃる春宮や秋好の前の中宮、そして紫の上がお育てになった明石の中宮をはじめとして、縁の深い女君の方々からも、たくさんのお供え物などが届けられます。また、法要が近づくにつれ、そのご準備に加わる人々の数も増していきます。

紫の上がもう長い間、出家を願っていらしたということが、このご準備のようすからもうくうかがえるのでした。

### 春景色の中の法要

三月十日が、法要の日でございます。

花散里と呼ばれるお方や、明石の中宮の実母でいらっしゃる明石の君などもおいでになります。どちらも、院の愛情を受けていらっしゃる方々です。

紫の上は、南と東の戸をあけ放たれてお座りになっていらっしゃいます。そこは、寢殿の西側のお部屋なのです。女君の方々のお席は、北側の細長いお部屋をふすまで仕切っております。用意してあります。

桜の花盛りで、春のうらかな空もようも風情があり、きっと仏さまのいらつしやるころもこんな感じなのではないでしょうか。それほど信心深くない人であっても、罪が洗われるような気分になることでしょう。

僧の唱えるお経が、あたりにとどろいております。お集まりになった大勢の方々のお声も、それに加わってなんともぎやかです。やがて、僧の声がぴたりと止み、すつと静寂が

訪れる瞬間があります。それは、紫の上にとっては死を予感し、いつその心細さを痛感する瞬間でもありました。

紫の上は、明石の中宮の御子の匂宮をお使いに仕立てて、明石の君に、『もはやこの世になんの未練もない私の身ではありません。』

いよいよこれで寿命が尽きると思うと、それはたいそう悲しいものです』

と、その心細いお気持ちを申しあげます。明石の君は、こちらからも心細いお返事をしては、かえってよろしくないとお考えになり、

『法華経のご法要をなさるのは今日が初めてのこと。』

これからもこの世でのご法要は続くことでしょうから、末永きご寿命となりましょう』と、あたり障りのないお返事をなさいます。

僧の声に合わせて打ち鳴らす鼓の音が、春の夜に絶え間なく響き渡っています。空はほんのりと明けはじめ、かすかに霞のあいだから見え始めた桜の花たちが、春が一番ですよねと、言っているかのように咲き満ちています。笛の音に負けないように鳴いているのでしょうか、耳を傾けると、百千鳥のさえずる声が聞こえてきます。

お庭に設えられた舞台では、陵王の舞が、舞われています。舞の終わりが近づくと、急に音楽が早くなり、さらに華やかさを増すのでした。

見物の人々は、その見事な舞に感動して、ご自分たちがお召しになっているものを脱いで、無人にお与えになります。色とりどりの着物が宙を舞う様子もまた、華やかで美しいのです。演奏は、親王の方々や上達部の位の人たちの中でも、音楽に秀でている人たちが行います。その家々に代々伝わっている演奏の秘技を、惜しみなく披露なさっているのです。その時ばかりは、身分の上下は関係ありません。みな、音楽を心から楽しんでいらっしやるのでした。その様子をご覧になるにつけても、紫の上は、

〈なんてすばらしいのでしょう、この世の中は〉

と、しみじみと思われるのです。それは、ご自分の残り少ない寿命をお悟りになっしやるからのごとなのでしょう。

紫の上は、いつになく起きてお過ごしになられたお疲れのためか、ご気分が悪く床に伏していらっしやいます。

〈行事があるごとに、いつも集まって音楽を奏かなでくださる人々のお顔やお姿を見るのも、これが最後。すばらしい琴や笛ねの音を耳にするのも、これが最後〉とお思いになり、日ごろは目にもとまらない人々のお顔まで、ひとりひとり丁寧に見渡しなさるのでした。

まして、日ごろから親交のある女君の方々ともなれば、季節ごとの音楽の催もてしなどでも、これまでそれとなくお互いに張り合っていたことを思い出し、  
〈この世の中に永遠に生き続ける人などいますまい。でも、この中で私ひとりだけがもうすぐあの世に旅立つことになるとは〉  
と心の底から悲しくなられるのです。

### 名残を惜しむ紫の上

法要が終わって、紫の上と親交のある女君の方々もお帰りの仕度したくを始められます。紫の上にとっては、これが永遠の別れのように思われて、とても名残惜なごりおしいのです。そして、

『これが私のこの世での最後の法要となるでしょう。』

こうして結ばれたあなたとのこの世のご縁は、この先もずっと永遠のものでございましょう』

と、花散里はなちりにおっしゃいます。それに対して花散里は、

『このようにすばらしい法要にお招きいただけただけを、大変うれしく思っております。』

この仏事によって結ばれた私たちの縁が、今後絶えることなどございませぬのですかと、お答えになるのでした。

紫の上は、千部の法華経をお納めする法要に引き続いて、あれこれの尊い仏事をお営みにあります。

一方、病氣平癒へいゆのご祈祷については、効果も現れぬままだ日だけが空しく過ぎてしまいました。しかし、引き続きあちらこちらのお寺で、ご祈祷を続けさせています。今ではそれが日常となってしまっているのをごいせいました。

## 紫の上、明石の中宮と過ごされる夏

夏がきました。

紫の上は、夏の暑さに耐えられず、気を失ってしまわれそうな時がしばしばございます。重症ではございませんが、夏の暑さと、長く患っていらつしやることが重なって、日ごとに衰弱していかれます。お仕えしている侍女たちも、

「へいつたいどうなってしまうられるのだろう」

と、不安と悲しみでいっぱいになりながら、お世話なさっているのです。

明石の中宮が、養母である紫の上のご病状をお聞きになって、二条院にお里帰りになります。その間は、二条院の東の別棟べっばにご滞在になります。紫の上は、自身のいらつしやる西の別棟から、東の別棟にごあいさつのためお渡りになります。

明石の中宮が、ご到着になりました。付き添いの人々が入ってくるときに名を名乗る儀式は、いつもとなら変わりはありません。しかし、紫の上にとっては、もうこれが聞き納めかと思われて、その声に耳をそばだてられるのです。

「ああ、あの人、ああ、この人もいらつしやる。なんと、たくさんの方々がお供してこられたことでしょう」

と、一人ひとりのお姿を、思い浮かべられるのです。

明石の中宮とは、ずいぶんと長い間お会いになっていらつしやいませんでした。たいそううれしく、積もる話をなさっておいでです。

そこへふと、院が入っていらつしやって、「楽しそうですね。今夜は私の居場所はないようだ。巢に入れない鳥のようだ。邪魔者はさつさと帰って寝ることにいたしましょう」

とはほえんで、お戻りになってしまいました。院は、紫の上が起きていらつしやるということだけでも、どんなにかうれしく思われるのです。

紫の上は、

「それぞれ別棟にわかれておりましては、さみしゅうございます。しかし、もうこのからだでは、こうして参上することも難しい状態となってしまいました。だからと申しまして、中宮というお立場の方に、私の西の別棟にいらしていただくなどということは、到底できません」

とおっしゃって、しばらくは東の別棟に滞在なさることとなりました。

そこへ、明石の君がおいでになり、しんみりとさまざまなお話を静かになさいます。

紫の上には、ご自身の死後について、あれこれ思いめぐらすことがおありになるのですが、それらのことを口にしたならば、人々が悲しむことだろうと思って、何もおっしゃいません。ただ、世間話を、それとなくしみじみとお話されるだけなのでした。

こうして気丈きじょうにふるまってはいらっしゃいますが、やはりそのお顔は何とも心細そうなのでした。

明石の中宮のお子さま方がたをご覧になるにつけても、

「お子たちのご成長を見守っていくことを楽しみにしておりましたのに、もうここまでの命なのかと、残念でなりません」

とおっしゃって涙ぐまれるのです。この時はかなげなお顔ですら、なんとも言いようのない美しさなのです。

その様子をご覧になって、明石の中宮は、

「なんとも気弱なことばかりお考えになって」

と、ただただお涙されるのでした。

紫の上は、遺言ゆいごんめいたことを申し上げると不吉ふきつに思われるだろうからお気づかいになり、何かのついでにそれとなく、

「長年ながねん、私に仕えてくださった侍女たちの中にも、頼れる親族のいない者もおります。そう、この人…。ああ、それにあの人も…。これらの人たちについて、これからもずっとお気を配ってあげてくださいね」

とだけ、さり気なくおっしゃるのです。

明石の中宮が主催される、季節ごとの法要があります。その定例の法要がこれからはじまるということなので、紫の上は、ご自分の西の別棟にお戻りになります。

## 匂宮に遺言する紫の上

大勢いらつしやる明石の中宮のお子さま方がたの中でも、まだお小さい匂宮は、まことにわかいらしく歩きまわっていらつしやいます。紫の上は、ご気分きぶんのよい時に匂宮をお膝ひざに座らせて、

「この私がいなくなりましたら、思い出していただけるかしら」

と、ほかの人の耳に入らないところで、こっそりとおつしやいます。

「きつと、恋しくて恋しくてなりません。だって、ぼくはお父さまよりも、お母さまよりもおばあさまが一番好きなのですから。いらつしやらなくなったら、きつとしょんぼりしてしまうことでしょう」

と、おつしやいながら、涙が出そうな目をこすってまぎらわしていらつしやいます。それもまた、まことにかわいらしいのです。そのお姿をご覧になり、またも涙がこぼれる紫の上なのです。そして、

「おとなにおなりになったら、この二条院にお住まいになっていただけるかしら。このお部屋まへぢやうの前庭まへぢやうにある紅梅こうばいと桜を、春には気にかけて、愛めでてくださいまし。その花を手折たおって仏さまにもお供えくださいませ」

と、おつしやると、匂宮はこっくりとうなずいて、じつと紫の上のお顔を見つめていらつしやいます。そうしているうちにも、匂宮のほほには涙が伝つたいそうになるのです。お小さいながらも、その姿を見られまいとして匂宮は、そのまま立たっていつてしまわれました。

紫の上は、この匂宮と女おんな一いちの宮みやとを、とりわけ目をかけてお育てになったものですから、ご成人されるまでお世話できないことが、残念でたまらなく悲しく思われるのでした。

## 別れがたい秋の日

ようやく、待ちかねていた秋がきました。

いくぶん涼しくなり、紫の上はご気分もいくらか楽になる時もありますが、それでもやはり体調の優れない日々が続いています。冷たい秋風が吹くというほどではありませんが、ふつと感じる風は、すでに秋のものです。秋の気配を感じて、どこかさみしく、涙がちな日々を過ごしていらいっしやいます。

明石の中宮が、宮中にお帰りになろうとなさるのを、

へもう少しだけ、おそばにおいでいただけませんかでしょうか

と、紫の上はおっしやりたいお気持ちなのです。しかし、帝からのお帰りを促す使いの者がしきりと来ているようです。それに、立場上、明石の中宮にそのようなことを申し上げることはできませんので、遠慮なさっているのです。

そのような折りに、明石の中宮が紫の上のお部屋においでになりました。なんとも恐れ多いことではございますが、せっかくこうまでして面会にいらしてくださいだったので、急いでお迎えする準備を整えられます。

明石の中宮は、紫の上のおやつれになった姿をご覧になって、

「同じ花でも、今は弱々しくも可憐に咲く花という感じ。ふつくらされていたころより、かえって上品で優美な感じが際立っています。女ざかりのころは、あまりに色香に満ちていて、まさに、この世の花という感じでいらした。そう、咲きこぼれんばかりの美しい凜とした花のように…。ああ、このままこの世からいなくなってしまうのだらうか」と、ただただ無性に悲しく思われるのです。

## 最期するとき

秋の風が、ぞっとするほどの悲しく吹く夕暮れのことです。

紫の上は、お庭をご覧になろうとしてひじ掛けに身を預けていらいっしやいます。そこへ院がおいでになり、

「今日は、珍しく起きていらいっしやるのですね。明石の中宮がいらいっしやると、ご気分もす

「つかり晴ればれとされるようですね」

と、うれしそうにおっしゃいます。

紫の上は、

「こうして、からだを起こしているというだけのことでも、院はこんなにお喜びになる。その様子を拝見するにつけても、なんと悲しいことか。いよいよとなってしまったならば、どんなに取り乱されることか。そのお姿を想像すると悲しくて、悲しくて」と、お思いになるのです。そして、お庭の風に吹かれて折れかえっている萩の枝の風情になぞらえて、こう申し上げるのです。

『こうして起きているのはつかの間のごとでございます。』

萩の葉に宿った露もひとたび秋風が吹けばさらわれていってしまいますでしょう。私の命も同じです』

院は、その様子をご覧になってこらえきれず、

『先を争うように消えてゆく露などにたとえないでください。』

それならば、一緒に消えてしまいたい。置いて行かないでください』

とおっしゃいながら、ぬぐいきれないほどの涙をお流しになるのです。

傍らでお聞きになっていた明石の中宮は、

『命というものは、しよせん秋風に吹かれて消える露のようなものです。』

私たちも、みな同じように消えてゆくばかりなのです』

と、おっしゃいます。

院は、このお二人のたとえようもないほどの美しいお姿をご覧になって、

「ああ、このまま千年も過ごしたいものよ。かなわぬ夢なのだろうか」

とお思いになり、紫の上の命をこの世にとどめるすべがないことをもどかしく思われるのです。

その時です。紫の上が、

「もう、お引き取りくださいませ。ああ、苦しい。苦しくなっていました。このように衰えた身だからと申しましたが、これではあまりに見苦しゅうございます」

と、身みを隠すためについたてをお引きよせになり、床とこに臥ふされます。



そのご様子は、いつもとは全く違います。

明石の中宮は、紫の上の手をお取りになり、

「どのような気分でいらっしやいますか」

と、涙ながらにご覧になります。

それは、まさに秋風に吹かれる露のように、息を引き取られようとしている瞬間ではありませんか。

お部屋のまわりには、祈祷きせうの僧を呼ぶ声や、それらをせかす叫びさけ声が響きわたります。以前、死霊しりょうに取り憑かれたときは、このようになられてからも、息を吹きかえされたことがございました。今回もまた、死霊の仕業しわざかもしれないと、一晩中、祈祷など、できる限りのことをなさいました。しかし、そのかいてもなく紫の上は、夜があけるころ息をお引き取りになってしまいました。

明石の中宮は、

「急いで宮中に戻らなくてよかった。こうして最期さいしの時を一緒にできた。これはやはり、本当の親子と同じぐらいの固い絆きずながあったからだろう。生きとし生けるもの、だれもが経験する別れ。わかってはいるけれども、でも、あきらめきれない。ああ、夢であってほしい」と、この場にいられたことをよかったと思うと同時に、割り切れない気持ちでいっぱいです。たいそう取り乱しておいでです。

二条院の中には、冷静でいられる方かたはひとりもいらっしやいません。おそばにお仕えする侍女なども、ただただ取り乱すばかりなのでした。

まして院は、狂わんばかりに取り乱していらっしやいます。そこへ、急を聞きつけて、夕霧の君が参上されました。院は、紫の上の眠る床のそばのついたての近くまで、お呼び寄せになって、

「もう、これまで。ついにお亡くなりになってしまった。長年ながねん出家をお望みでいらしたにもかかわらず、かなえてやれなかった。こうなってみると、望みをかなえてやれなかったことが悔やまれてならない。加持祈祷かじきとらの僧侶そうりよや、読経よきょうを続けていた僧なども、声が聞こえぬところをみると帰ってしまったようだが、それでも少しは残っている者もあろう。その中に、出家のための剃髪ていはつのできる僧はいないものか。いまさら髪をおろしても、無意味であろうとは

思うが、せめて、せめて極楽浄土への道しるべになるくらいの効果はあるものよ」  
と、気持ちを強く持つて正気を保とうとなさりながらお話しなさいませ。しかし、そのお顔色は普段と全く違います。あふれ続ける涙をどうすることもできずにいらつしやる院のお姿を拝見して、夕霧の君は、

「父君が、悲しみのあまりこうなるであろうとは思っていただけども、これほどまでとは」と思われ、なお一層、悲しみがつのるばかりです。そして、

「死霊の仕業で、一時的に紫の上の息をお止めしているというのであれば…、そういうこともあるようです…：それならば、お望みをかなえて髪をおろして差し上げることにも意味がございませう。そうであれば、それがたとえ一日、いや一晩でもその効果はありませう。しかし、本当にもう息をお引き取りになったのちならば、髪をおおろしても、あの世のための功德にはならないというものです。効果などございませぬ。髪をおろされたお姿を拝見するにつけ、あとに残ったものの悲しみがまさるばかりとなりませう」と、進言なさいませ。

夕霧の君は、葬儀にたずさわるために残っている僧たちをお呼び寄せになり、これからのことをご相談になります。葬儀の一切は、この夕霧の君が取り仕切られるのでした。

### 紫の上の亡骸を見る夕霧の君

夕霧の君は、少年だった秋の嵐の日に、偶然拝見した紫の上のお姿がまぶたに焼き付いているのです。それは、義理の母であり、父の最愛の人であることは承知の上のことです。ごさいませ。

「へいつかまた、あの時のようにお姿を拝見できるのではないか、少しでもお声を耳にできるのではないか。そう思い抱いていたのだが、とうとうお声を拝聴することは、かなわぬ夢と消えてしまった。もう、一度とお声を発することのない亡骸となられてしまったのだ。亡骸ではあるけれども、そのお姿を拝見する機会は今、もうこの時しかない」

と、夕霧の君はお思いになると、狂おしいほどの悲しみに襲われ、あふれんばかりに涙を流

されるのです。そして、

「ああ、お静かに。しばらく」

と、居合わせた侍女たちが取り乱しているところを制止なさるふりをして、院と紫の上をおおつていたついたてを手で押しつけて、中をご覧になるのです。

そこには、ほのぼのと明けゆく夜明けの光がまだ少し心もとないので、明かりを近づけて紫の上のお顔を見つめていらっしやる院のお姿があります。

それと同時に、

「ああ、なんとおかわいらしい。まるで、まだ生きておられるかのようだ。気高く美しいこと、この上ないお姿でいらっしやる」

と、夕霧の君は、紫の上のこの上ない美しさに目を奪われるのです。

院は、日ごろ夕霧の君に紫の上の姿を見られないよう、注意を払っていらっしやいました。しかし、そのことすら気にかけることができないほど、今は混乱されているのです。夕霧の君が、こうしてのぞいてご覧になっているのに、それを無理に隠そうともなさらないのです。

### 院、夕霧の君それぞれの悲しみ

「このとおり、ただ眠っておいになるようなお顔でいらっしやるが、もう二度とお目を開けてはくたさらない。もう二度と…」

と、おっしやりながら、院は、袖を固くお顔に押し当てておいです。

夕霧の君は、あふれる涙でよく見えなくなった目を無理に開いてご覧になり、

「へいつかまた、お姿を拝見したいと願ってきた。その時が、永遠の別れの時とは。こんなに悲しいことがあるだろうか」

と、心みだれるばかりです。

生前とまったく変わらない紫の上の髪が、枕元に流れるように投げ出されています。その髪は、つやつやと黒く、少しの乱れもなくそこにあるのです。病に苦しまれた方の髪とは思えぬ美しさ…。また、灯されたあかりがたいそう明るいので、そのお顔の色は、白く輝いて

いるように見えるのです。

生前、たしなみ深くきれいにお化粧して取りつくろっていらした時より、ただ無心に目を閉じていらつしやる今のお姿の方が、全く非のうちどころがなくお美しいのです。

今さら、そんなことを思っても何がどうなるものでもございません。それにもかかわらず、夕霧の君は、

〈並みたいていの美しさならまだしも、まったくほかにとえようもないほどの美しさだ。まだこの辺りに浮遊ふゆうしているはずであろう魂たましいよ、もう一度この亡骸に戻っていらしてはいただけないか〉

と、願われるのです。

しかし、そんな奇跡がおこるはずもないのでございます。

### 悲しみにくれる二条院

紫の上のお側そばに常にお仕えしていた侍女で、正気しょうきでいられる者は一人もおりません。

院自身も当然のことながら、冷静に物事をおし進めることのできる状態ではないのです。しかし、

〈こんなことではいけない。愛する人のためにできる最後のこと。それは立派に葬儀とを執り行うこと〉

と、お考えになり、静めようもないお気持ちをあえて静めて、ご葬儀についてあれこれと指示をはじめられます。そして、

〈あとにも先にもこんな悲しい思いをすることはなからうと、悲嘆ひたんにくれてもおおいでです。

院は、今までに、たくさん身近な人々と死別していらつしやいます。しかし、こうしてご自身が中心となってご葬儀の指示をなさらなくてはならないという経験は、これまでおありではありませんでした。

## 葬儀

やがて朝が近づいてきました。その日のうちに、ご葬儀を営まれます。

いつまでも亡骸を見ながら過ごすわけにもいきません。それが世の中の決まり事なのでした。

ご葬儀をなさる場所は、はるかかなたまで広がる野原にあります。その広い野原いっぱい

にたくさんの牛車ぎしが立て込んでいて、たいそう盛大で、しかもおごそかなお式です。

やがて、紫の上は、まことにはかない煙けむりとなつて空にのぼつていかれるのです。一筋の煙ひとすじが、空にのぼつていく様子は、なんとも悲しいものでございました。

院は、空中を歩むようにふらふらとして、ご自身ではとてもお歩きにもなれず、人の手をお借りになつていらつしやいます。

そのお姿をご覧になつた人々は、  
へあれほど威厳いげんのある立派なお方かたが、あのようなお姿になられて

と、涙を流したものです。世間の常識もわからないであろう下働きしたはたひの者どもでさえ、そう思うぐらいなのです。

ご葬儀に付き添つた侍女たちは、院にもまして、夢か現実なのかもわからないような気持になつています。気が動転してふらふらしている侍女たちが、牛車ぎしからころげ落ちそうにさえなるのです。それは、牛車をひいている者が、こまり果てるほどでした。

院は、かつての妻である葵あおいの上うへがお亡くなりになつた昔のことを思い出されます。

へああ、あの時も夜が明けようとしていたころであつた。しかし、あの時は、ものの分別ぶんべつはつけられた。月をはつきりと見た覚えがある。今はただただ悲しくて月の姿もわからないと、悲嘆にくれるばかりです。

十四日にお亡くなりになつて、これは十五日の夜が明けようとしている時のことでした。

朝日がきらきらとさしてきて、広い野原一面の草木くさきの上の朝露あさつゆを余すことなく照らしてしています。

院は、この露のようにはかない命となられた紫の上のことを思うと、いよいよこの世で

うしていることがいやになり、

〈ひとりぼっちで生きていてもしかたがない。ただ、悲しいだけだ。出家してしまおうか。ずっとそう考えていたのだから〉

とお考えになるのでした。

しかし、世間せけんから、紫の上を亡くして悲しみに耐えられず出家したと噂されるのがいやで、

〈少しばかり時間をおこう〉

と、お考えを改められるのです。

耐えがたい悲しみで胸がいっぱいなのですが、それをいやすものはもうどこにもござい  
ませんでした。

### 夕霧の君の秘めた想い…そして悲しみ

夕霧の君も、静かに死者を悼いたむ期間として、外出を控えておいでです。自邸にもお帰りに  
ならず、一日中いちにち院のお側そばにお付き添いになります。痛々しいばかりに打ちひしがれた院の  
ご様子をご覧になり、

〈ごもつともなことだ〉

と、お察しし、いろいろとお慰なぐさめ申し上げるのです。

昔、少しばかり紫の上のお姿をご覧になったあの日と同じ、台風のように風が強く吹く夕  
暮れのことです。

夕霧の君は、

〈ああ、あの時もこのような風が吹き渡っていて、ほのかにあの方かたのお姿を拝見したもの  
を〉

と、恋しく思わずにはいらっしやれません。

そして、

〈ご臨終りんじゆうの折りの美しいお姿を拝見したときは、夢をみているような気がしたことだ〉  
などと思いつづけていらっしやると、こらえきれないほどの悲しみがおそってくるのです。そ

のお気持ち、決してほかの人に気づかれませんように包み隠しながら、

「阿弥陀仏、阿弥陀仏」

と、唱えられるのです。しかし、涙なしでは唱えられません。そこで、いくぶんでも、気をそらすことができ、涙をごまかせるであろうと、「阿弥陀仏」を唱えられることに、お数珠じゆずの玉を一つずつ指先で繰くっていかれるのです。

そして常に、あの美しいお姿が頭からはなれず、

『あの秋の夕暮れ時にほのかにお見受けしてから、いつかもう一度あの美しいお姿を拝見したいと、ずっと恋しく思っておりました。』

それなのに再び拝見することができたのは、すでに息を引き取られた後のあの明け方だったとは』

と、ひとりごとをつぶやかれるのです。

また、位くゐの高い僧をそばに控くわえさせて、お定まりの念仏ねんぶつを唱なえさせておいですが、あの法華経ほけきょうも唱なえさせていらっしやるのです。

### 人生を振り返る院

院は、寝ても覚めても涙が乾くときがなく、あふれ出る涙のせいで、目の前が霧きりでふさがるような毎日を過ごしておいでです。

悲嘆ひたんにくれる日々の中、院は、幼いころからの自身の人生を振り返られるのです。

〈鏡かがみに映るこの顔かたちをはじめとして、さまざまなことにつけ、普通の人よりは優すぐれているたわが身ではあった。しかし、人生というものは悲しいことも多く、はかなく無常むじやうでもある。そのことを、幼いころから仏さまが教えお導みちびき下さっていた。それなのに、仏さまの教えを気にもとめず、強つよがって生きてきてしまった。そのあげくの果はてに、あとにも先にもこの上ないほどの、ひどく悲しい目にあってしまったのだ。今はもう、この世になんの未練みれんも残のこってはいない。仏さまの弟子でしとなり、ひたすら仏道修行ぶつどうしゆぎやうをしよう。なんの障害しやうがいとなるものもないのだから。

ただ、このように心が乱れてしまつて、正気を取り戻すことができない今の心持ちでは、仏道修行に入ることも難しいのではないだろうか。どうしたらよいものだろうか」と、思案され、

「ああ、どうかこの悲しみを少しでも忘れさせてください」と、「阿弥陀仏」を念じ申し上げていらつしやるのでした。

### 出家を決心する院

帝をはじめとして、あちらこちらの方々から、たいそうお心のこもつたお見舞いのお言葉やお品物が、次々に届けられます。

しかし、出家を決心した院にとつては、もう何も、目にも耳にもお入りになるご様子ではございません。そして、今となつては何ひとつ出家のさまたげになるようなことはないはずなのです。それなのに、

〈紫の上を亡くして、すっかりぼうつとした人になつてしまわれた。今さらいい歳をして、この世を捨てて出家されるとは。みつともないほど気弱になられたことだ〉  
などと、世間の人に思われ、はずかしいうわさが流れるのを恐れていらつしやいます。

そうした心のままに行動できないご自分について、もどかしくも嘆いていらつしやるのでした。

### 頭の中將からのお見舞い

少年の頃から親しく付き合ひのある頭の中將という人は、もともと形式や礼儀を重んじられる方なのですが、それに加えて、

〈この世の中に、ふたりとしていらつしやらないような方であつた紫の上が、あつけなくお亡くなりになつてしまわれて残念でならない〉



と、同情なさって、まめに何度もお見舞いをお寄せになっていらつしやいます。

そして、

〈その昔、夕霧の母上が亡くなったのもこの季節であったな〉

と、思いだされ、本当にもの悲しいお気持ちになり、

〈あの時、妹が亡くなったことを悲しんでくださった方々も、今ではたくさんお亡くなりになってしまった。我々は同じ時を生きているのだから、亡くなる時もそんなに時間の差があるものではない。みな同じようなものなのだ。この世はなんと、はかないものなのか〉  
と、しみりした夕暮れ時を過ごしていらつしやるのです。

ふと、外をご覧になると悲しみを誘うような空もようです。そこで、院へのお見舞いのお手紙をしたため、息子である蔵人の少将くわうじやうにお届けさせになります。

そこには、しみじみとしたお見舞いのお言葉が心こまやかにつづられ、その端には、  
『妹が亡くなった昔のことが、今のような気がします。』

紫の上がお亡くなりになったことで流した涙で濡らした袖そでに、また露つゆを置くかのように涙で袖を濡らしています。悲しみの上に悲しみがかさなります』  
としたためられています。

その手紙をお受け取りになった院は、

〈ただただ悲しくてならない素直な気持ちをそのまましたためたならば、そのお手紙をお読みになって、私の心の弱いことをお見抜きになられることだろう。頭の中將はそういう方だ〉

と、お考えになり、

「たびたびのお心のこもったお見舞いをちようだいいたしましたして、かさねがさね感謝いたします」

と、体裁ていざいを整えられたお礼の言葉を添えられた上で、

『露を置くように涙で袖を濡らすのは今も昔も変わりはしません。』

ただ、秋の夜というのが、そういう気持ちにさせるのです』

と、したためられました。

院は、葵の上がお亡くなりになった時、薄墨色うすずみいろの喪服もふくをお召しでした。今は、その時より

濃い色の喪服をお召しです。

### 紫の上の死をいたむ世の人々

人というものは、幸運に恵まれ申し分なくすばらしい人であっても、そのことがかえって世間でねたまれたりもするものです。また、身分が高ければ高いで、いばったりするので、周囲の人が迷惑に思うことでしょう。

紫の上は、不思議なほど、関わりのない人にも評判がよく、ちよつとしたことをなさつても、何事においても、世間からほめたたえられる方かただったので。そして、奥ゆかしくて、何かにつけて行き届いた心づかいがおできになるといふ、だれもまねできないたいそう優れたお人柄ひとがらなのでした。

このようなお人柄だったため、それほどお付き合いがなかった方かたまでもが、秋風の音おとや、虫の音ねを聞くにつけても、紫の上がお亡くなりになったこの秋には、涙を流されるのです。ましてや、少しでもお付き合いがあった人は、悲しみの慰めようもないほどの日々を送っていらつしやいます。

さらに、長年おそばでお仕えして慣れ親しんでこられた人々にいたっては、しばらくの間でも、紫の上より長く生き残ってしまったことをなげいています。そして、中には今までの生活を捨てて尼あまになって、山寺などに住まうことを思い立つ人もいたほどなのでした。

### 秋好の中宮からのお見舞い

院と紫の上が親代わりをつとめられている秋好あきこのむの前の中宮なかみやからも、お心のこもったお手紙が絶え間なく届けられます。

『悲しみが尽きることはありません。』

亡き方は、草木が枯れ果てた景色がお好きではございませんでした』

というお歌に続けて、

「今、こうして悲しみがつのる秋となつてみて、はじめて気づきました。紫の上が、秋より春を好まれたことを」

と、したためられていました。それを拝見した院は、

〈ごもつともだ〉

とお思いになって、そのお手紙をお手元から離すことなく、くり返し、くり返しご覧になるのです。

〈お文を交<sup>か</sup>わして心がなごむのは、この方<sup>かた</sup>だけなのだ。こうしていると、少しは悲しみがまぎれることよ〉

そうお思いになるにつけても、涙がこぼれ、袖の乾<sup>かわ</sup>く間もごさいません。

やつとのごとで、

『煙となつて空高くのぼつてしまわれた方よ、どうか私を雲の上からご覧になって下さい。』

この秋の果てに、私はもう生きる力を失つてしまいました』

と、お書きになり、そのお手紙を手にしたまま、またぼんやりと秋の空を見つめていらつしやるのでした。

### 仏さまに手を合わせる院

院は、すっかり元気をなくされてしまいました。

ご自身でも放心状態であると、思い知られることが多くおありなのです。そうした気持ちを少しでもまぎらわそうと、気楽にふるまえることのできる侍女たちのお部屋にいらつしやうては、時を過<sup>ご</sup>されます。

仏さまがいらつしやるお部屋にはあまり人をお近づけにならず、ひとり心静かに手を合わせて、ただひたすら、

〈千年も共に過<sup>ご</sup>そうと誓ったのに、別れはやつてきてしまった。なんと悲しいことか。今はただ、極<sup>ごく</sup>楽では同じ蓮<sup>はす</sup>の葉の上で過<sup>ご</sup>したい〉

と、願っていらっしやいます。

「あの世では、今のようない思ひはしたくない。そのためにも早く出家して、そのことを一心に願わなくてはならない」

とお思になるのです。

そうは言うものの、やはり世間体ばかり気にされるのです。これは、なんとも愚かしいことなのでした。

### 残されたものの悲しみの日々

「ご法事ほうじのことなどは、院がお取り決めになれない状態なので、代わって夕霧の君がお取り決めになり、ご準備されました。

院のお気持ちはどうと、

「今日こそは、出家しよう」

と、決心なさることも多いのです。しかし月日はただ流れ、夢を見ているようなぼうつとした心地のままお過ごしになっておいでです。

明石の中宮も、亡き紫の上をかたときもお忘れになることはございません。在りし日を思い出されて、懐かしんでいらっしやいます。

### 【参考文献】

- ・三浦理編『源氏物語 三』（大正三年七月一〇日 有朋堂文庫）
- ・有川武彦校訂『増註 源氏物語湖月抄 下巻』（昭和三年一〇月一五日 弘文社）
- ・窪田空穂『源氏物語』（昭和三七年三月二〇日 春秋社）
- ・谷崎潤一郎『新々訳源氏物語 巻七』（昭和四〇年六月二〇日 中央公論社）
- ・塩田良平『古典文学全集』4 『源氏物語』（昭和四〇年六月三〇日 ポプラ社）
- ・玉上琢弥『源氏物語評釈 第九卷』（昭和四二年七月三〇日 角川書店）
- ・山岸徳平『古典と現代語訳』（阿部秋生ほか校注・訳『日本古典文学全集』13 源氏物語 二）月報（昭和四七年一月二五日 小学館）

- ・ 円地文子『源氏物語 卷七』(昭和四八年三月二〇日 新潮社)
- ・ 石田譲二・清水好子校注『新編日本古典集成』源氏物語 六』(昭和五七年五月一〇日 新潮社)
- ・ 田辺聖子『新源氏物語(下)』(昭和五九年五月二五日 新潮社)
- ・ 円地文子『わたしの古典』6 円地文子の源氏物語 卷一』(昭和六〇年一〇月二三日 集英社)
- ・ 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳『完訳 日本の古典』第二十卷 源氏物語』(平成元年四月一日 小学館)
- ・ 大和和紀『講談社コミックスミミ』二六九卷 あさきゆめみし 十』(平成二年一月一三日 講談社)
- ・ 永井和子『源氏物語の現代語訳』(今井卓爾ほか編『源氏物語講座』第九卷 近代と海外との交流』(平成四年一月二〇日 勉誠社)
- ・ 瀬戸内寂聴『少年少女古典文学館』第五卷 源氏物語 上』(平成四年一月一九日 講談社)
- ・ 瀬戸内寂聴『少年少女古典文学館』第六卷 源氏物語 下』(平成五年一月二八日 講談社)
- ・ 瀬戸内寂聴『わたしの源氏物語』(平成五年六月二五日 集英社)
- ・ 大養廉ほか校注・訳『新編日本古典文学全集』26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讚岐典侍日記』(平成六年九月二〇日 小学館)
- ・ 秋山虔『源氏物語』現代語訳の方法―三度目の挑戦から―(室伏信助編『いま「源氏物語」をどう読むか』(平成七年六月三〇日 おうふう))
- ・ 柳井滋ほか校注『新日本古典文学大系』22 源氏物語 四』(平成八年三月二八日 岩波書店)
- ・ 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳『新編日本古典文学全集』源氏物語 四』(平成八年一月一〇日 小学館)
- ・ 瀬戸内寂聴『源氏物語 卷七』(平成九年一〇月三〇日 講談社)
- ・ 畠中光享・石井睦『《京の絵本》桐壺源氏物語より』(平成一一年一〇月一日 『今日の絵本』刊行委員会)
- ・ 秋山虔『源氏物語の現代語訳―その限界をどう考えるか―』(秋山虔編『国文学解釈と鑑賞別冊』源氏物語の鑑賞と基礎知識 29 花散里』(平成一五年六月一〇日 至文堂))
- ・ 与謝野晶子『与謝野晶子の源氏物語 中 六条院の四季』(平成二〇年四月二五日 角川学芸出版)
- ・ 与謝野晶子『与謝野晶子の源氏物語 下 宇治の姫君たち』(平成二〇年四月二五日 角川学芸出版)
- ・ 大塚ひかり『源氏物語 第五卷』(平成二二年九月一〇日 筑摩書房)
- ・ 林望『謹訳 源氏物語 七』(平成二三年二月一〇日 祥伝社)
- ・ 室城秀之ほか『源氏物語』「蓬生」の巻現代語訳試案(一)』(『言語・文学研究論集 第十四号』(平成二六年三月 白百合女子大学言語・文学研究センター))
- ・ 大塚ひかり『誰のための現代語訳か』(『レポート笠間 59号』(平成二七年一月二十日 笠間書院))
- ・ 中野幸一『正訳 源氏物語 本文対照 第七冊』(平成二八年一月二〇日 勉誠出版)
- ・ 北村結花『千年の時をかける少年少女―児童書における『源氏物語』の現在―』(『文学・

語学 第219号』(平成二九年六月二五日 全国大学国語国文学会)  
・ 文部科学省「小学校学習指導要領」(文部科学省告示第六十三号)(平成二九年三月  
三一日改正)

跋

本論文は、一〇〇〇年以上にわたり読み継がれてきた『源氏物語』を、今後も変わらず読み継いでゆくためのより良い方策の一案を提示するために試みたものである。

第一部は、『源氏物語』現代語訳の書誌を集成した。

『源氏物語』五十四帖すべてを現代語訳したもの（完訳）のみならず、すべてを訳す予定であったが諸事情によって断念し、中途となったもの（全訳）、一部分に限定し訳されたもの（抄訳）、原文の一字一句にとらわれることなく、訳者の解釈と鑑賞とを自在に駆使し訳されたもの（意訳）、原文の面影を十分にとどめている二次的創作作品（翻案）、原文を英訳したものを再度日本語訳にしたものなどで先の五分類に該当しないが見逃すことのできない作品（その他）、以上の六分類によって構成される。

『源氏物語』に関する書誌について、古くは、藤田徳太郎『古書研究叢書』古刊源氏物語書目（昭和九年四月二八日 駿南社）、武笠正雄『源氏物語書史』（昭和九年七月一日 平原社）などがあり、近年においては、伊藤鉄也氏による『源氏物語電子資料館』などがある。それらに対し、本稿は『源氏物語』の現代語訳に特化した書誌となっているが、刊行年月などの詳細な基礎情報はもとより、その書籍についての解説および限定ではあるが書影を掲載している点にその特徴を持つ。

しかしながら、膨大な『源氏物語』に関する書籍の中から、完璧に該当書籍を拾いあげることができたとは思えない。また、基本方針として現物にあたるという作業をおこなったが、残念ながら、現物を手にすることができなかったもの、経年による補修が施されたものや付属品（函、帯など）のないものなども多くみられ、完璧な書誌にはなっておらず、一部課題を残すこととなった。今後さらなる調査を続行するつもりである。

第二部では、〈完訳〉を対象として二人の現代語訳の比較検討をおこなった。その際、これまでほとんど触れられることのなかった、それぞれの訳者が使用したであろう依拠本文（テキスト）に言及した。なお、テキストについて明記がないものについては、周辺情報からの特定を試みた。また、それぞれの訳文の特質を明らかにした。さらに、「桐壺」巻頭部について比較をおこない、各現代語訳の特質からみる評価を示した。今回は「桐壺」巻頭部での検証であったが、今後はその範囲を拡大させるべき必要性を感じた。今後の課題としたい。

第三部では、与謝野晶子の二つの現代語訳に着目した。特に『新譯源氏物語』は、口語体によるはじめての現代語訳であり、晶子がどのようにこの『新譯源氏物語』を訳出したのかを、文体の特質から考察した。その結果、当時の翻訳文学作品の影響をうけている可能性について言及することができた。

第四部では、第一部から第三部にわたる調査および考察により見えてきた一般読者向けの『源氏物語』現代語訳には、限界があることを指摘した。一般読者向けのそれぞれの現代語訳には、完璧なものではなく、それぞれ長所、短所がある。そこで、読者対象をだれからみても明確となる年齢によって絞り込んだ現代語訳の試みを実践した。その読者対象は、一歳から一二歳の少年少女とした。

「序」で述べたとおり、ほとんどの読者は、古典文学作品を今後も現代語訳で読むこととなる。『源氏物語』をはじめ古典文学作品が将来にわたって生き続けるためには、今後も古典文学作品を愛読する読者をひとりでも多く獲得することが必要であろう。そのためには、その時代時代に応じた、それでいて原文の良さを的確に伝えることのできる現代語訳が求められる。



そのためには、まず若い世代への良質な現代語訳が求められるであろう。